

灰方窯跡・灰方の塚跡・
南春日町片山遺跡・勝持寺旧境内

灰方窯跡・灰方の塚跡・南春日町片山遺跡・勝持寺旧境内

2010 年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

灰方窯跡・灰方の塚跡・
南春日町片山遺跡・勝持寺旧境内

2010 年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

序 文

歴史都市京都は、平安京建設以来の永くそして由緒ある歴史を蓄積しており、さらに平安京以前に遡るはるかなむかしの、貴重な文化財も今なお多く地下に埋もれています。

財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、昭和 51 年（1976）設立以来、これまでに市内に点在する数多くの遺跡の発掘調査を実施し、地中に埋もれていた京都の過去の姿を多く明らかにしてきました。

これらの調査成果は現地説明会、京都市考古資料館での展示、写真展あるいはホームページを通じて広く公開し、市民の皆様に京都の歴史に対し、関心を深めていただけるよう努めております。

このたび、道路建設に伴う灰方窯跡・灰方の塚跡・南春日町片山遺跡・勝持寺旧境内の発掘調査成果をここに報告いたします。本報告書の内容につきまして御意見、御批評をお聞かせいただけますようお願い申し上げます。

末尾ではありますが、当遺跡の調査に際して御協力ならびに御支援たまわりました関係各位に厚く感謝し、御礼申し上げます。

平成 22 年 10 月

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

所 長 川 上 貢

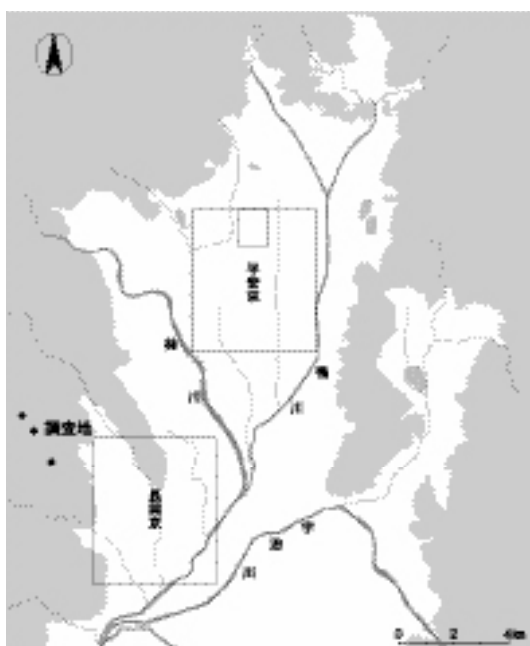
例 言

- 1 遺 跡 名 灰方窯跡・灰方の塚跡・南春日町片山遺跡・勝持寺旧境内
- 2 調査所在地 京都市西京区大原野灰方町地内、大原野南春日町地内
- 3 委 託 者 国土交通省近畿地方整備局京都国道事務所
- 4 調査期間 2009年12月14日～2010年4月9日（灰方町・南春日町地区）
2010年7月23日～2010年9月3日（勝持寺地区）
- 5 調査面積 灰方町地区（灰方窯跡・灰方の塚跡）：4,486 m²
南春日町地区（南春日町片山遺跡）：1,856 m²
勝持寺地区（勝持寺旧境内）：158 m²
- 6 調査担当者 南 孝雄・丸川義広・津々池惣一・近藤奈央・長戸満男・辻 裕司
- 7 使用地図 京都市発行の都市計画基本図（縮尺1：2,500）「岡新田」「大原野」「小塩」を参考にし、作成した。
- 8 使用測地系 世界測地系 平面直角座標系VI（ただし、単位（m）を省略した）
- 9 使用標高 T.P.：東京湾平均海面高度
- 10 使用土色名 農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』に準じた。
- 11 自然科学分析 今回の調査では、パリノサーヴェィ株式会社に放射性炭素年代測定・花粉分析・植物珪酸体分析・樹種同定・胎土分析を委託して行った。また、灰方窯跡と洛北の尼吹ノ谷窯跡・栗栖野3号窯跡出土土器の蛍光X線分析を胎土分析研究会の三辻利一氏のご協力により行った。記して感謝致します。
- 12 遺構番号 遺跡ごとに通し番号を付し遺構の種類を前に付けた。なお、灰方窯2号窯は、調査時には3号窯としていた。これは、報告書の中で述べる、灰方地区2調査区の土坑102を当初は土器窯の可能性を考え2号窯、2号窯を3号窯としていたが、調査の結果、土器窯でない事が判明した。この為、土器窯の検出数を理解しやすくする為、調査時の3号窯を2号窯として報告する。
- 13 遺物番号 通し番号を付し、写真番号も同一とした。
- 14 本書作成 南 孝雄・津々池惣一
- 15 執筆分担 南 孝雄（第1・3～6章）、津々池惣一（第2章）
付章1：三辻利一（胎土分析研究会）
付章2：パリノサーヴェィ株式会社
- 16 備 考 上記以外に調査・整理ならびに本書作成には、資料業務職員および調査業務職員があたった。

17 協 力 者

調査および報告書作成にあたり下記の方々のご協力を得た。記して感謝いたします。(五十音順、敬称略)

石井清司、市川 創、市来真澄、岩崎 誠、梅本康弘、大木 要、尾野善裕、河内一浩、菊井佳弥、木立雅朗、木村恭彦、國下多美樹、高 正 龍、佐藤 隆、鈴木久男、信田真美世、玉井 功、高橋克壽、中井 均、中井和志、中塚 良、中村真容、浜中有紀、幡 信道、平尾政幸、降矢哲男、三好孝一、宮岡昌宣、森島康雄、吉田綾子



(調査地点図)

目 次

第1章 調査経過	1
第2章 位置と環境	7
1. 地理的環境	7
2. 歴史的環境	8
3. 周辺の調査	10
第3章 灰方1・2号窯、灰方の塚跡（灰方町地区）	13
1. 遺構	13
(1) 基本層序	13
(2) 1区（灰方1号窯）	14
(3) 2区	17
(4) 3区（灰方2号窯）	17
(5) 灰方の塚跡	20
2. 遺物	22
(1) 緑釉陶器素地の細部の特徴と分類	22
(2) 1号窯出土遺物	24
(3) 2号窯出土遺物	30
3. 小結	43
第4章 南春日町片山遺跡（南春日町地区）	44
1. 遺構	44
(1) 基本層序	45
(2) 1区	45
(3) 2区	47
(4) 3区	49
(5) 4区	50
2. 遺物	53
3. 小結	58
第5章 勝持寺旧境内（勝持寺地区）	59
1. 遺構	60
(1) 基本層序	60
(2) 遺構	60
2. 遺物	63
3. 小結	64

第6章 ま と め	65
1. 灰方1・2号窯	65
2. 灰方の塚跡	72
3. 南春日町片山遺跡	73
4. 勝持寺旧境内	75
付章1 蛍光X線分析による洛北、洛西の窯跡出土緑釉陶器の相互識別	78
付章2 南春日町片山遺跡・灰方窯跡の自然化学分析	85

図 版 目 次

巻頭図版1 遺構 灰方1号窯全景（北東から）	
巻頭図版2 遺構 灰方1号窯燃焼部右側断割り（東から） 灰方1号窯焼成部右側断割り（東から）	
巻頭図版3 遺構 灰方2号窯全景（北から）	
巻頭図版4 遺構 灰方2号窯燃焼部断割り（北西から） 灰方2号窯焼成部断割り（北東から）	
図版1 遺構 灰方町地区 全体平面図（1：800）	
図版2 遺構 灰方町地区 1区（灰方1号窯）平面図（1：100）	
図版3 遺構 灰方町地区 1区南壁・東壁断面図（1：50）	
図版4 遺構 灰方町地区 1号窯実測図（1：40）	
図版5 遺構 灰方町地区 1号窯縦軸・横軸セクション図（1：20）	
図版6 遺構 灰方町地区 1区土坑1・平坦面5、3区土坑2実測図（1：60）、3区焼土坑3実測図（1：30）	
図版7 遺構 灰方町地区 2区平面図（1：100）	
図版8 遺構 灰方町地区 3区（灰方2号窯）平面図（1：100）	
図版9 遺構 灰方町地区 3区断面図（1：40）	
図版10 遺構 灰方町地区 2号窯実測図（1：40）	
図版11 遺構 灰方町地区 2号窯縦軸・横軸セクション図（1：20）	
図版12 遺構 灰方町地区 堰堤1から1区平面図（1：300）	
図版13 遺構 南春日町地区 1～4区第1面平面図（1：500）	
図版14 遺構 南春日町地区 1区平面図（1：200）	
図版15 遺構 南春日町地区 2-2区第1面実測図（1：250）	
図版16 遺構 南春日町地区 2-2区第2面平面図（1：250）	

- 図版 17 遺構 南春日町地区 3区第1・2面実測図 (1:250)
- 図版 18 遺構 南春日町地区 4区第1・2面実測図 (1:250)
- 図版 19 遺構 灰方町地区 1 1号窯・灰原遺物出土状況 (北東から)
2 1号窯遺物出土状況 (北東から)
- 図版 20 遺構 灰方町地区 1 1号窯窯体内 (北東から)
2 1号窯断割り (北東から)
3 1号窯燃焼部断割り (東から)
4 1号窯燃焼部右側断割り (東から)
- 図版 21 遺構 灰方町地区 1 1号窯完掘状況 (北東から)
2 1号窯完掘状況 (東から)
- 図版 22 遺構 灰方町地区 1 1号窯窯体構築杭 (東から)
2 1号窯窯体構築杭窯尻付近 (北東から)
3 平坦面5 (南から)
4 土坑1 (北から)
5 1号窯灰原断面 (北西から)
6 1号窯灰原断面 (北西から)
- 図版 23 遺構 灰方町地区 1 2号窯・灰原遺物出土状況 (北から)
2 2号窯遺物出土状況 (北西から)
- 図版 24 遺構 灰方町地区 1 2号窯断面 (北東から)
2 2号窯焼成部下方横軸セクション断面 (北西から)
3 2号窯焼成部上方横軸セクション断面 (北西から)
- 図版 25 遺構 灰方町地区 1 2号窯完掘状況 (北から)
2 2号窯完掘状況 (北西から)
- 図版 26 遺構 灰方町地区 1 2号窯遠景 (北から)
2 2号窯窯尻付近 (北東から)
- 図版 27 遺構 灰方町地区 1 2号窯焚口付近断割り (北西から)
2 2号窯燃焼部断割り (北東から)
3 土坑2 (北西から)
4 2号窯灰原 (東から)
- 図版 28 遺構 灰方町地区 1 1区東壁断面 (西から)
2 2区全景 (北から)
3 2区土坑102 (南から)
- 図版 29 遺構 灰方町地区 1 堰堤1全景 (北から)
2 堰堤1断面 (南西から)
3 堰堤1細部 (北西から)

		4	1区沈砂池（北西から）
図版 30	遺構 南春日町地区	1	1区全景（北東から）
		2	1区南西半部（南東から）
図版 31	遺構 南春日町地区	1	2区第1面全景（北から）
		2	2区第2面全景（北から）
		3	3区第1面全景（北東から）
図版 32	遺構 南春日町地区	1	4区第2面全景（南東から）
		2	4区第1面全景（南西から）
		3	4区溝66（南から）
図版 33	遺構 勝持寺地区	1	3-2区全景（北から）
		2	溝2（北から）
		3	地業3（北から）
図版 34	遺物 灰方町地区		1・2号窯出土須恵器
図版 35	遺物 灰方町地区		1号窯出土緑釉陶器素地椀
図版 36	遺物 灰方町地区		1号窯出土緑釉陶器素地皿
図版 37	遺物 灰方町地区		2号窯出土緑釉陶器素地椀
図版 38	遺物 灰方町地区		2号窯出土緑釉陶器素地皿・その他
図版 39	遺物 灰方町地区		2号窯出土陰刻文緑釉陶器素地
図版 40	遺物 灰方町地区		2号窯出土ヘラ記号緑釉陶器素地
図版 41	遺物 灰方町地区	1	2号窯出土緑釉陶器（施釉）
		2	1号窯出土焼台（馬爪形）
		3	高台諸形態
図版 42	遺物 南春日町地区		土器・瓦・石製品・陶棺

挿 図 目 次

図 1	調査位置図（1：50,000）	1
図 2	灰方町地区 調査地位置図（1：5,000）	2
図 3	南春日町地区 調査地位置図（1：5,000）	2
図 4	勝持寺地区 調査地位置図（1：5,000）	3
図 5	灰方町地区 調査前全景	4
図 6	灰方町地区 調査風景	4
図 7	南春日町地区 調査前全景	4

図8	南春日町地区 調査風景	4
図9	勝持寺地区 調査前全景	4
図10	勝持寺地区 調査風景	4
図11	地形分類図 (1 : 50,000)	7
図12	周辺遺跡位置図 (1 : 20,000)	9
図13	周辺調査地位置図 (1 : 6,000)	11
図14	灰方町地区 断面柱状図 (1 : 50)	13
図15	1号窯出土土器位置図 (1 : 40)	14
図16	1号窯窯体構築杭実測図 (1 : 40)	15
図17	1号窯灰原断面図 (1 : 40)	16
図18	1号窯灰原地区割図 (1 : 200)	16
図19	2区土坑102実測図 (1 : 40)	17
図20	2号窯出土土器位置図 (1 : 40)	18
図21	2号窯灰原断面図 (1 : 40)	19
図22	2号窯灰原地区割図 (1 : 200)	19
図23	堰堤1平面図・立面図 (1 : 50)	20
図24	堰堤1断面図 (1 : 50)	21
図25	緑釉陶器素地椀の口縁形態分類図	22
図26	緑釉陶器素地皿の口縁形態分類図	22
図27	緑釉陶器素地椀・皿類の高台形態分類図	23
図28	陰刻文分類図	24
図29	1号窯窯体内出土須恵器・緑釉陶器素地実測図 (1 : 4)	26
図30	1号窯灰原出土須恵器実測図 (1 : 4)	28
図31	1号窯灰原出土緑釉陶器素地実測図 (1 : 4)	29
図32	1号窯灰原出土ヘラ記号緑釉陶器素地実測図 (1 : 4)	30
図33	2号窯窯体内出土緑釉陶器素地実測図 (1 : 4)	32
図34	2号窯灰原出土須恵器実測図 (1 : 4)	33
図35	2号窯灰原出土土錘実測図 (1 : 2)	34
図36	2号窯灰原出土緑釉陶器素地実測図1 (1 : 4)	35
図37	2号窯灰原出土緑釉陶器素地実測図2 (1 : 4)	36
図38	2号窯灰原出土陰刻文緑釉陶器素地実測図 (1 : 4)	37
図39	2号窯灰原出土ヘラ記号緑釉陶器素地実測図1 (1 : 4)	38
図40	2号窯灰原出土ヘラ記号緑釉陶器素地実測図2 (1 : 4)	40
図41	2号窯灰原出土ヘラ記号緑釉陶器素地実測図3 (1 : 4)	41
図42	南春日町片山遺跡 断面柱状図 (1 : 50)	44

図 43	1～3区断面図（1：50）	46
図 44	1区溝 77 断面図（1：50）	47
図 45	2-1区実測図（1：200）	48
図 46	2-2区土坑 4 実測図（1：40）	48
図 47	2-2区溝 1・5・11 断面図（1：40）	49
図 48	2-2区 Y=-31,204 ラインセクション断面図（1：50）	49
図 49	3区溝 77～79、土坑 80、畔畦 105、ピット 83・84・90 断面図（1：40）	50
図 50	4区南東壁断面図（1：60）	51
図 51	4区集石 63・護岸 64 実測図（1：30）	52
図 52	4区溝 66 断面図（1：50）	53
図 53	2区・3区出土土器実測図（1：4）	54
図 54	4区出土土器実測図（1：4）	55
図 55	4区出土瓦拓影・実測図（1：3）	56
図 56	4区出土陶棺実測図（1：3）	57
図 57	4区出土石器実測図（1：2）	58
図 58	勝持寺地区 地形測量図（1：500）	59
図 59	3-2区西壁断面図（1：40）	60
図 60	3-2区実測図（1：150）	61
図 61	3-2区北部平面図（1：50）	62
図 62	溝 2・地業 3・土坑 6 断面図（1：40）	62
図 63	出土土器実測図（1：4）	63
図 64	出土石製品実測図（1：4）	63
図 65	出土銭貨拓影（1：2）	63
図 66	須恵器杯 A 法量分布図	67
図 67	緑釉陶器素地椀口径分布図	69
図 68	緑釉陶器素地皿口径分布図	69
図 69	緑釉陶器素地椀法量分布図	69
図 70	窯跡分布図（1：10,000）	70
図 71	周辺調査位置図（圃場整備前、1：6,000）	74
図 72	「勝持寺境内図」（寛永元年）	75
図 73	勝持寺子院推定位置図（1：2,500）	76
図 74	灰方 1・2号窯跡出土須恵器の両分布図	82
図 75	灰方 1号窯跡出土緑釉素地の両分布図	82
図 76	灰方 2号窯跡出土緑釉素地の両分布図	82
図 77	尼吹ノ谷 1・2号窯跡出土須恵器の両分布図	83

図 78	尼吹ノ谷 1・2号窯跡出土緑釉素地の両分布図	83
図 79	灰方群と尼吹ノ谷群の相互識別	83
図 80	Fe 因子の比較	83
図 81	南春日町片山遺跡 調査地点の模式柱状図および試料採取位置	86
図 82	南春日町片山遺跡 4区 花粉化石群集の層位分布	88
図 83	南春日町片山遺跡 植物珪酸体含量の層位分布	89
図 84	灰方窯跡 各粒度階における鉱物・岩石出現頻度	97
図 85	灰方窯跡 胎土中の砂の粒径組成	97
図 86	灰方窯跡 碎屑物・基質・孔隙の割合	97
図 87	南春日町片山遺跡の花粉化石	100
図 88	南春日町片山遺跡の植物珪酸体・炭化材	101
図 89	南春日町片山遺跡の木材	102
図 90	南春日町片山遺跡の大型植物遺体	103
図 91	灰方窯跡の炭化材	104
図 92	灰方窯跡の胎土薄片	105

表 目 次

表 1	遺構概要表	6
表 2	遺物概要表	6
表 3	周辺調査一覧表	12
表 4	1号窯出土緑釉陶器素地碗の口径・口縁形態集計表	25
表 5	1号窯出土緑釉陶器素地皿の口径・口縁形態集計表	25
表 6	1号窯出土緑釉陶器素地碗の高台・口縁形態集計表	25
表 7	1号窯出土緑釉陶器素地皿の高台・口縁形態集計表	25
表 8	2号窯出土緑釉陶器素地碗の口径・口縁形態集計表	31
表 9	2号窯出土緑釉陶器素地皿の口径・口縁形態集計表	31
表 10	2号窯出土緑釉陶器素地碗の高台・口縁形態集計表	31
表 11	2号窯出土緑釉陶器素地皿の高台・口縁形態集計表	31
表 12	器形別ヘラ記号集計表	39
表 13	2号窯出土ヘラ記号碗の口径・口縁形態集計表	39
表 14	2号窯出土ヘラ記号皿の口径・口縁形態集計表	39
表 15	緑釉陶器底部比率表	71

表 16	胎土分析成分一覧表	80
表 17	南春日町片山遺跡 2 - 2 区 放射性炭素年代測定および暦年較正結果	85
表 18	南春日町片山遺跡 大型植物化石分析結果	90
表 19	大型植物化石の形態学的特徴	91
表 20	南春日町片山遺跡 樹種同定結果	92
表 21	木材化石の解剖的特徴	92
表 22	焼土坑 3 出土炭化材の放射性炭素年代測定および暦年較正結果	95
表 23	灰方窯跡出土炭化材同定結果	96
表 24	灰方窯跡 2 号窯出土土器胎土薄片観察結果	98

付 表 目 次

付表 1	灰方窯出土遺物観察表	106
付表 2	南春日町片山遺跡出土遺物観察表	119
付表 3	勝持寺旧境内出土遺物観察表	123

灰方窯跡・灰方の塚跡・ 南春日町片山遺跡・勝持寺旧境内

第1章 調査経過

今回の調査は、京都市の京都第二外環状線の建設に伴い実施されたものである。京都第二外環状線は、久御山町から京都市大枝間を繋ぎ、南北に長い京都府域の交流促進・道路ネットワークの完成を目指して計画されたものである。本報告は、この道路計画地内の埋蔵文化財包含地の埋蔵文化財発掘調査を、国土交通省近畿地方整備局京都国道事務所の委託を受け、京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課の指導の下に行われた発掘調査の成果を記したものである。

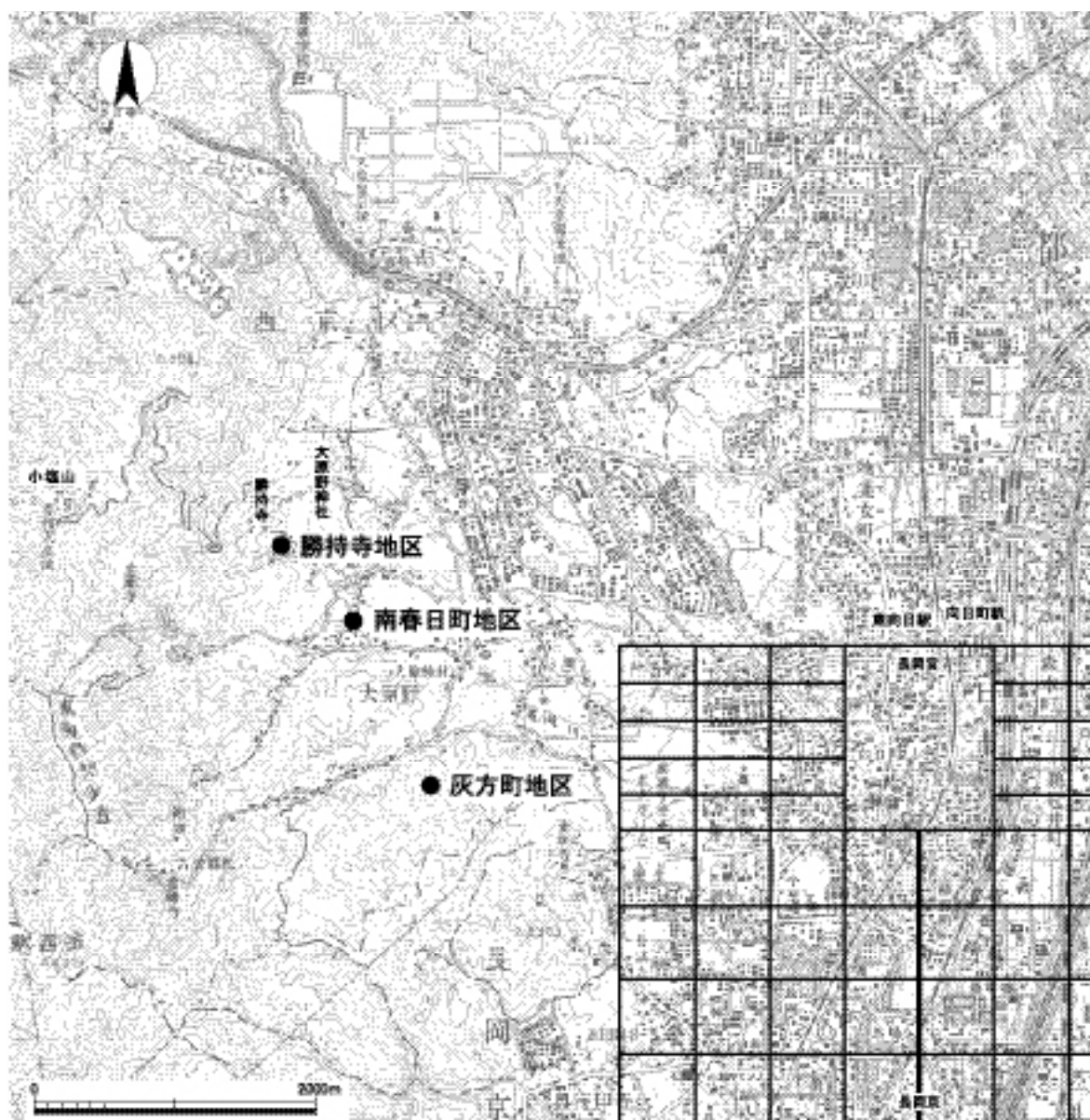


図1 調査位置図 (1 : 50,000)

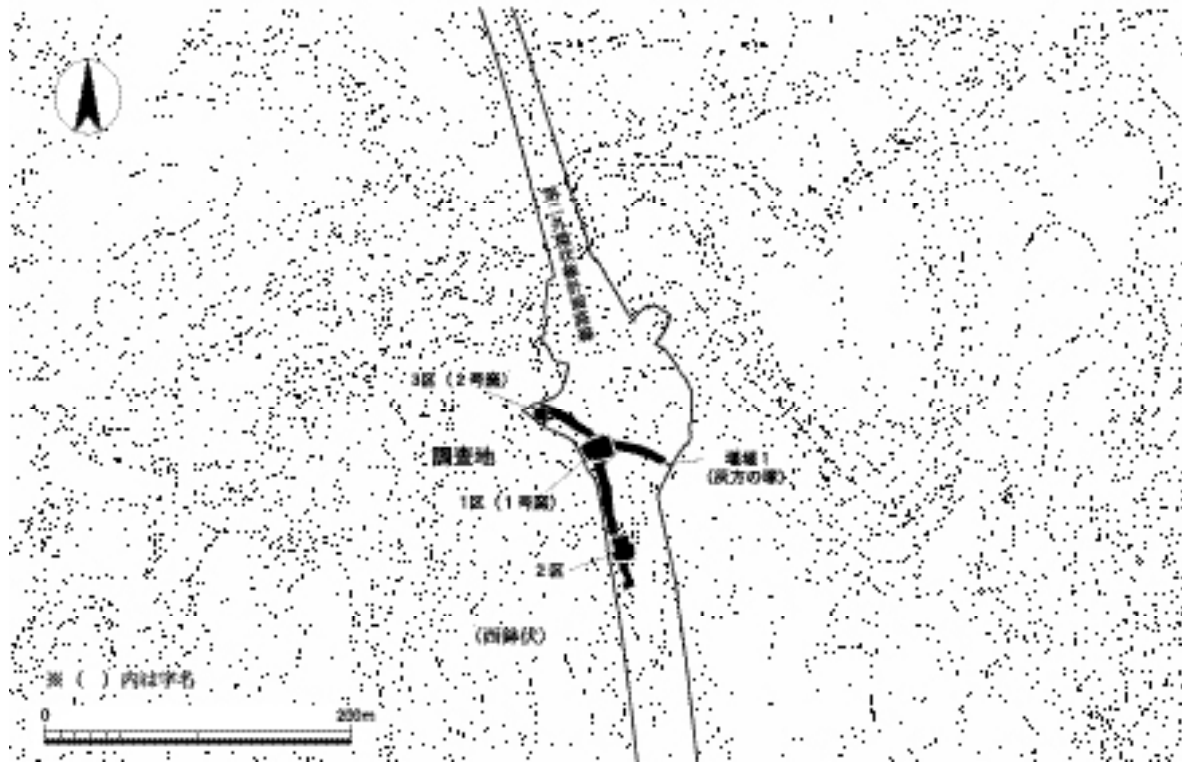


図2 灰方町地区 調査地位置図 (1 : 5,000)

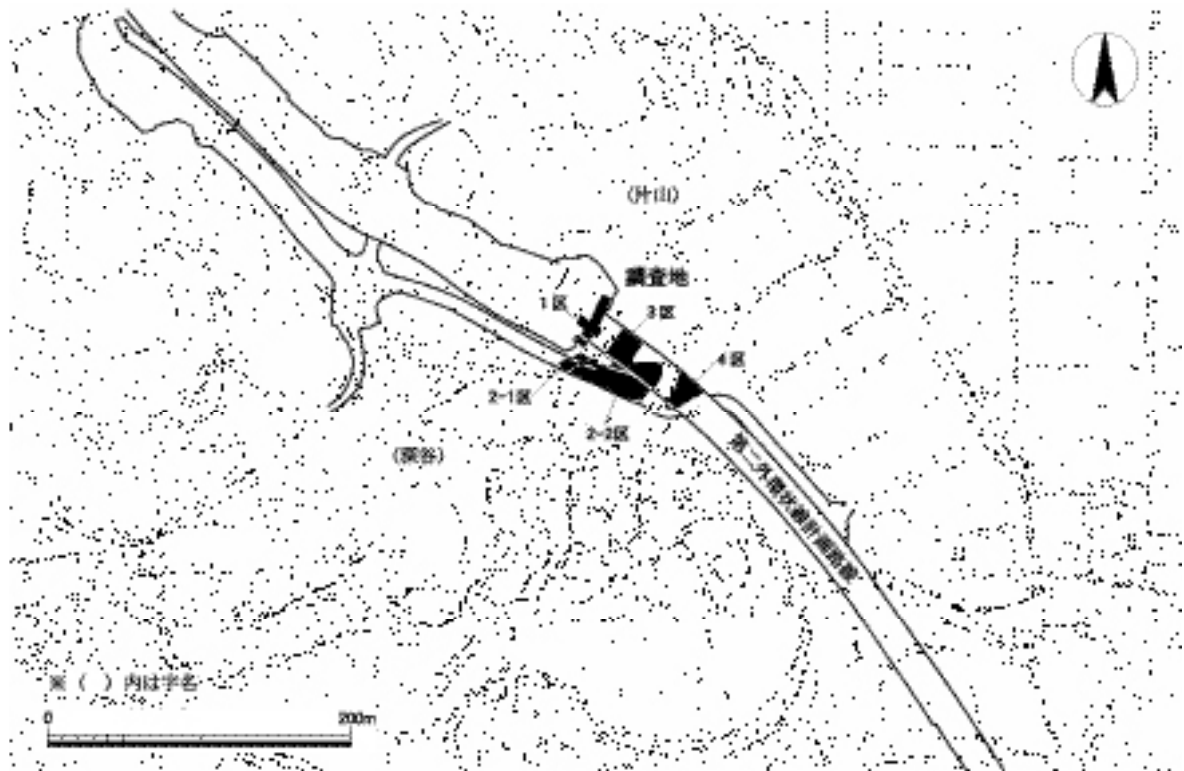


図3 南春日町地区 調査地位置図 (1 : 5,000)

調査は南北に約4km離れて所在する3つの地点、西京区灰方町、南春日町、勝持寺旧境内で実施された。南側の調査地になる灰方町地区では、山中に所在する灰方窯および堀堤（遺跡名：灰方の塚跡）の調査を行った。中央の調査地になる南春日町地区では、南春日町片山遺跡の調査を

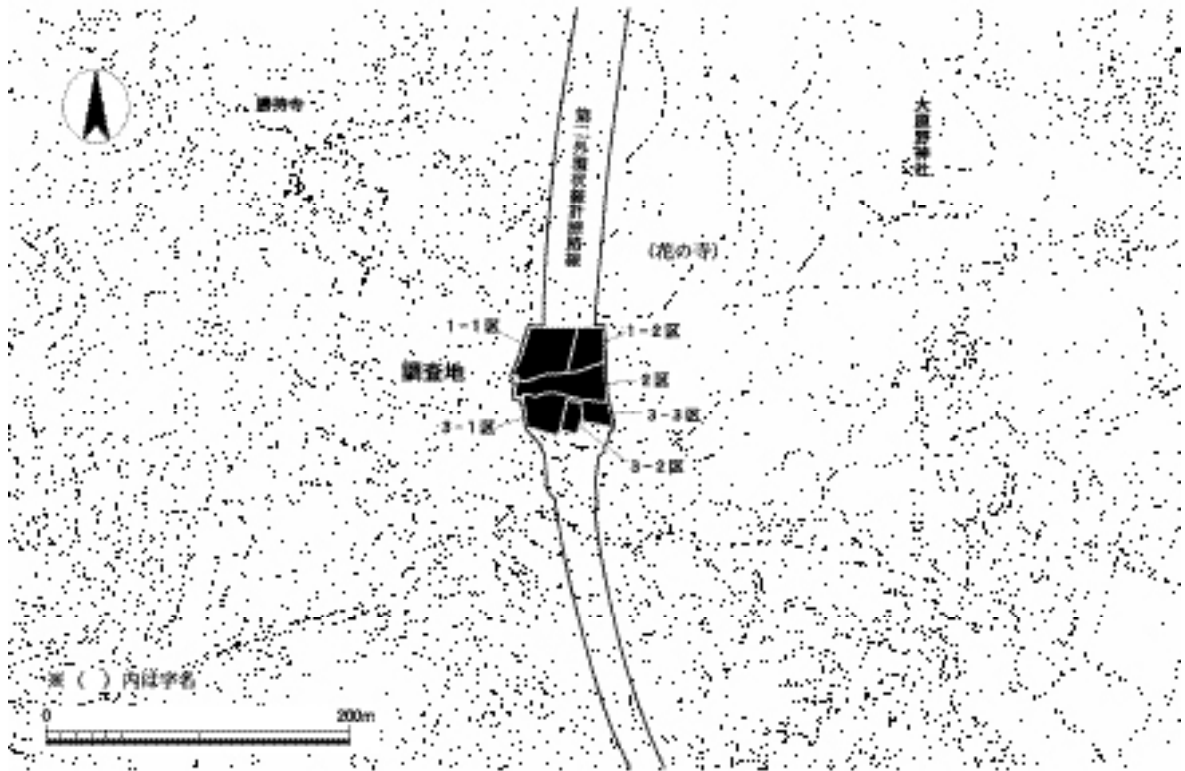


図4 勝持寺地区 調査地位置図 (1 : 5,000)

行い、北側の調査地になる勝持寺地区では、勝持寺旧境内の調査を行った。発掘調査は、灰方町地区と南春日町地区の調査を併行して実施し、これらの調査終了後に勝持寺地区の調査を行った。

灰方町地区の調査地は、府道向日・善峰線の南側、よしみねゴルフクラブの西側の山中で行われた。この地区の調査は、当初、標高約120mの山中にある灰方の塚跡を調査対象として開始した。これは平成19年度に実施された分布調査¹⁾で確認された遺跡で、山の西斜面に、人頭大の石を4m四方の範囲に約1m程の高さに積んだ遺構である。表面観察からは、塚状に見えることから遺跡台帳には「灰方の塚跡」として登録された。この石積み遺構は、調査の結果、谷の侵食を防ぐ為に近代以降作られた堰堤であることが判明し、約40m離れた谷底で堰堤とセットとなる土坑状の沈砂地も確認された。

灰方窯は、この堰堤の沈砂地の表面観察を行っていた際に、今回新たに発見された平安時代の緑釉陶器素地と須恵器を焼成した窯跡である。発見の経緯は、沈砂池の底部で9世紀代の緑釉陶器素地片を採取、さらに沈砂池断面で灰原層を確認し、周辺に平安時代の窯跡が存在する事が確認されるに至った。沈砂池は東西方向の小さな谷と南北方向の大きな谷の交差点に位置するが、この南北方向の谷地形に沿う西側斜面に窯の存在が予想された。この斜面の裾部には南北方向の林道があり、これによって切り通された部分で、後に1号窯と呼称する事になる窯体の断面(燃燒部)を確認した。さらに周辺にも窯跡が存在する事が推測された為、同一斜面で確認作業を行った結果、この1号窯から南側へ約70mの地点で炭層が、北西側へ約40mの地点では土器散布地が確認された。最初に窯体を確認された窯を1号窯、南側の炭層確認地点を2号窯、北西側の土器散布地を3号窯とした。この3箇所の地点では、窯体および灰原、また工房の存在などを明ら



図5 灰方町地区 調査前全景



図6 灰方町地区 調査風景



図7 南春日町地区 調査前全景



図8 南春日町地区 調査風景



図9 勝持寺地区 調査前全景



図10 勝持寺地区 調査風景

かにする為、窯および炭層・土器の散布が確認された地点を中心に調査区を設定し、1号窯を1区、2号窯を2区、3号窯を3区として調査を行った。調査面積は4,486 m²である。発掘調査の結果、1号窯および3号窯は平安時代の緑釉陶器素地と須恵器を焼成した窯、2号窯は炭窯の残欠である事が明らかとなった。本報告では、検出した窯の数を明確にする為、調査時に2号窯としていた遺構を土坑102とし、調査時の3号窯を2号窯とする。なお、これらの窯跡は、2010年に灰方窯跡1・2号窯として新たに京都府遺跡地図、京都市遺跡地図に登録された。²⁾

南春日町片山遺跡の調査地は、調査前には水田や竹林として利用されていた。調査地の周辺では、圃場整備事業に伴う発掘調査が1980年代から90年代前半にかけて行われており、古墳や平

安時代から室町時代の集落跡などが、現代の水田の下より検出されていた。この事から、今回の調査でも関連する遺構・遺物が出土する事が予測された。調査面積は1,856㎡である。調査の結果、平安時代後期以降に水田耕作地として利用されていることが明らかとなった。調査は、廃土置き場などの関係から1～4区の調査区に分け、2区、4区、1区、3区の順番で行った。

勝持寺地区の調査は、2箇年にわたって行われる予定の1年目のものである。調査対象地は約3,700㎡、全体を6つの調査区に分ける予定で、今回行ったのは3-2区の約158㎡の調査である。3区全体の調査前の現況地形は東西約50m、南北20m、高さ3mを測る東西方向に延びる尾根上の高まりとなっているが、調査の結果、これは近年の造成に伴う盛土である事が判明し、室町時代の遺構面が現地表下約3mで確認された。盛土掘削のために用意していた重機は、搬入路の関係からミニコンボであった為、その除去には多大な労力を要する事となった。調査作業は現況地形測量、重機掘削、人力による遺構検出・掘り下げの後、実測・写真撮影による記録保存などを行った。調査によって検出された遺構は、ピット、根石、土坑、溝などである。根石は礎石建物を構成する一部であるが、調査区が狭く建物規模を復元する事はできなかった。根石群は、平成22年度調査予定地に広がる事が考えられる事から、断割りなどの掘下げは行わず検出に留めた。

調査期間は、灰方町地区および南春日町地区では、平成21年12月14日から開始し、竹林の伐採、続いて重機による表土の掘削、人力による遺構の検出、掘下げを行い、写真撮影・レーザー測量などによる記録作業を行った後、調査の終了した調査区から順に埋め戻し、平成22年4月9日に終了した。勝持寺地区の調査は、平成22年7月23日から開始し、写真撮影・遺構実測・現況地形測量などの作業を行い9月3日に終了した。

註

- 1) 『京都市内遺跡分布調査報告 平成19年度』京都市文化市民局 2008年
- 2) 窯が検出された地点の大字名は「西鉢伏」であるが、「西鉢伏窯」の名称は灰方窯とは谷を一つ隔てて位置する窯跡で、遺跡名として既に使用されていた。灰方窯のある南北方向の谷筋は、地元の方から「行者場谷」と呼ばれるとも聞いたが、確証を得るに至らなかった。この為、広範囲の地名ではあるが、遺跡名は「灰方窯」と決定された。

表1 遺構概要表

地 区	時 代	遺 構
灰方町地区	平安時代	窯、灰原、土坑、溝
	近代	堰堤
	時期不明	土坑（炭窯）
南春日町地区	平安時代	溝、ピット、土坑、護岸、水田、流路
	鎌倉時代	土坑、柱穴、水田
	安土桃山時代 ～江戸時代	水田
勝持寺地区	室町時代	根石、ピット、土坑、地蔵、溝

表2 遺物概要表

時 代	内 容	コンテナ 箱数	Aランク点数	Bランク 箱数	Cランク 箱数
縄文時代	石製品		石製品4点（時代不明1点含む）	0箱	0箱
古墳時代 ～飛鳥時代	須恵器、陶棺		陶棺5点	0箱	0箱
平安時代	土師器、須恵器、黒色土器、瓦器、製塩土器、緑釉陶器、緑釉陶器素地、灰釉陶器、白磁、青磁、軒瓦、平瓦、焼き台		土師器27点、須恵器60点、黒色土器1点、瓦器20点、製塩土器1点、緑釉陶器3点、緑釉陶器素地259点、灰釉陶器1点、白磁4点、青磁1点、軒丸瓦1点、平瓦1点、焼き台1点	20箱	82箱
鎌倉時代 ～室町時代	土師器、瓦器、須恵器、焼締陶器、施釉陶器、陶器、白磁、青磁、石製品、銭貨		土師器8点、瓦器2点、須恵器2点、焼締陶器4点、施釉陶器1点、陶器1点、白磁1点、青磁2点、石製品1点	0箱	2箱
安土桃山時代 ～江戸時代	土師器、銭貨		銭貨1点	0箱	0箱
合 計		125箱	412点（21種）	20箱	84箱

※ コンテナ箱数の合計は、整理後、遺物を抽出したため、出土時より41箱多くなっている。

第2章 位置と環境

1. 地理的環境 (図 11)

調査地のある西京区大原野地域は、京都市の南西部に位置している。大原野地域の西方には丹波高原に連なる小塩山など西山山地がそびえている。西山山地は丹波層群と呼ばれる硬い基盤岩で、主成分はチャート・頁岩・粘板岩・砂岩などから形成される。この山地の東裾部には、大阪

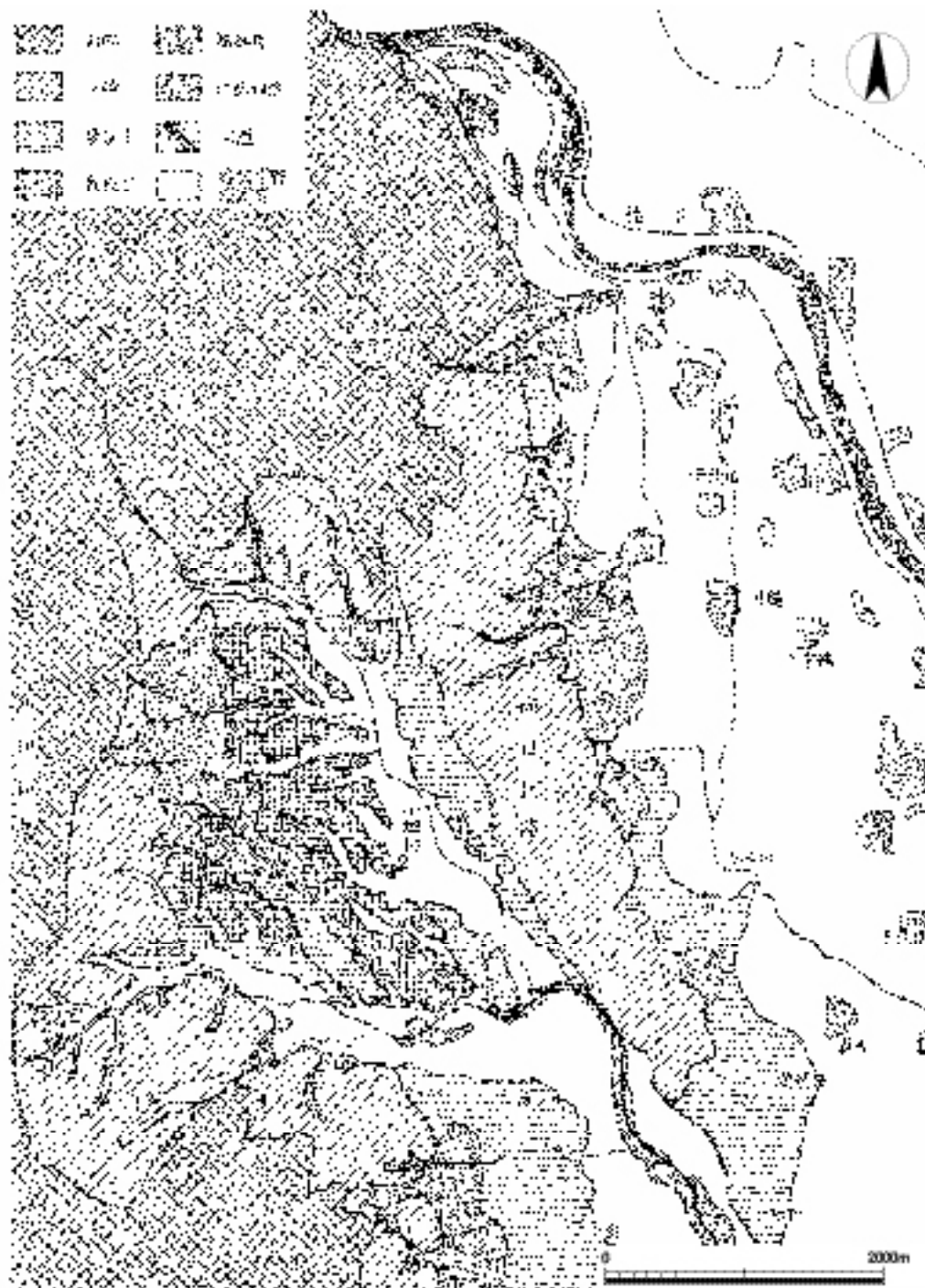


図 11 地形分類図 (1 : 50,000、『土地分類基本調査』1972 年による)

層群からなる西山丘陵が南北方向に延びている。一方、北には大枝山、東は北西から南東にかけて向日丘陵が張り出して、大原野は盆地状の地形となっている。善峯川などの小河川が小畑川に向かって流れ込んでおり、それらの河川によって形成された高位段丘（図11－段丘2）・低位段丘（図11－段丘1）が多く見られる。宅地化は、丘陵や山の裾部までは進んでおらず、現在は水田や畑あるいは竹林が広がっている。

2. 歴史的環境（図12）

大原野地域ではこれまでに旧石器時代から中世まで多くの遺跡が確認されている。調査地周辺の歴史的環境について、『京都市遺跡地図台帳』を基に概ね大原野春日町周辺と小塩・石作町周辺に分けて概観する。本文中（ ）内の数字は遺跡地図の登録番号であり、図12の番号と対応する。

大原野春日町周辺 旧石器時代から中世の遺跡が見られる。小塩山の東山裾に立地する大原野神社遺跡（1022）は境内で旧石器が採取されている。

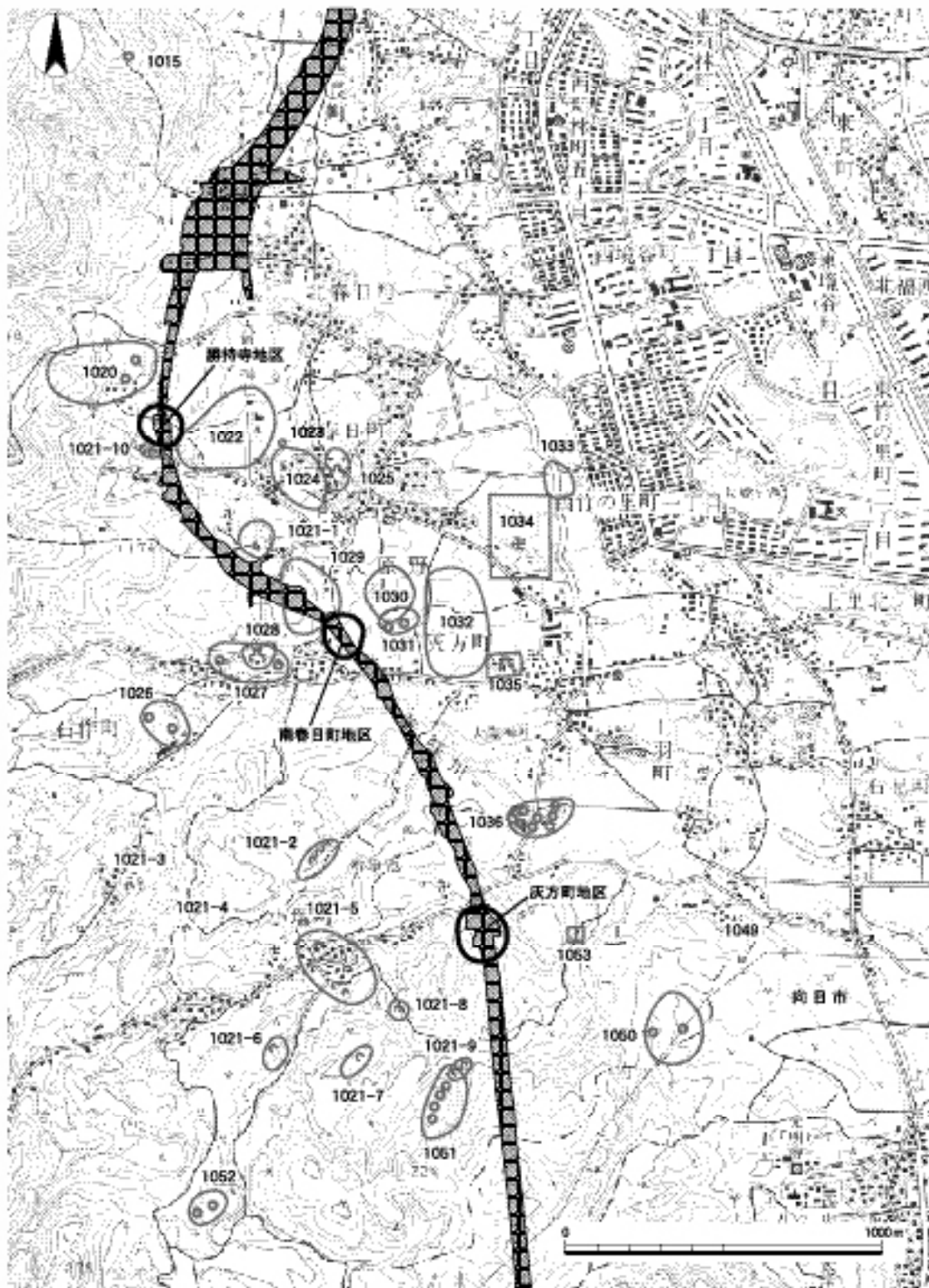
縄文時代から弥生時代の周辺の様相は明らかではないが、古墳時代から飛鳥時代にかけて、周辺では多くの古墳が築造される。小塩山中腹の標高315mには大暑山古墳（1015）、大原野神社東の竹林には横穴式石室の石材が露出する大原野神社東方古墳（1023）がある。また、神社西方には勝持寺古墳群（1020）があり、境内や裏山には円墳が点在する。さらに南春日町地区の調査地東側250～300mでは、水田の下から下西代古墳群（1031）が発掘調査によって発見されている。

奈良時代では須恵器の窯跡がいくつか確認されている。南春日町地区の調査地北西側400m付近、社家川右岸の竹林東斜面には、須恵器窯跡である南春日町窯跡（1021-1）がある。一方、これと小丘陵を隔てて窯跡の南東側、南春日町片山遺跡（1029）では、1984年の調査において奈良時代の竪穴住居跡を検出し、多量の須恵器が出土した。この中には焼け歪みの激しいものもあり、窯跡と近接するという位置関係からも両者の関連が注目される。また、勝持寺南方の斜面において実態は不明であるが、南春日町花寺窯跡（1021-10）が発見されている。

平安時代後期から室町時代にかけては集落跡が確認されている。南春日町下西代遺跡（1030）では鎌倉時代の東西5間×南北4間の総柱建物、室町時代の堀と建物を検出している。また、大原野神社の南東側にあたる安岡遺跡（1024）では室町時代の建物跡が検出されている。さらに室町時代の遺跡として、西迎寺を含む周辺には大原野野田城跡（1025）、府道袖原・向日線の沿線には灰方城跡（1035）や長峰城跡（1028）の存在が推定されている。

大原野石作・小塩町周辺 古墳時代から平安時代の遺跡がみられる。古墳時代後期の古墳には、石見町西側の向鉢伏古墳（1049）、その南側に位置する向山古墳群（1050）、その西側に狐谷古墳群（1052）などがある。

また、一帯は平安時代の緑釉陶器の窯跡が集中する地域でもある。標高約150mの高所に石作1・2号窯（1021-9）が最も早く操業を開始する。ついで、この北西側の山中に大向2号窯と呼ばれる西鉢伏窯跡（1021-8）と大向1号窯と呼ばれる前山窯跡（1021-7）がある。併行して、小



遺跡範囲・番号は京都市遺跡地図台帳に準拠した。
 網掛け部は京都第二外環状線予定地。

図12 周辺遺跡位置図（1：20,000）

塩川流域に小塩4・5号窯(1021-5)がある。続いてその西側の天仏講池窯(1021-6)、小塩1号窯(1021-5)へと変遷する。また、このほかにも実態は明らかではないが明治池窯跡群(1021-2)、花ノ戸窯跡(1021-3)、井谷窯跡(1021-4)などが小塩川の北側に存在する。また、善峰寺、十輪寺など平安時代からの山岳寺院も周辺にはあり、これに関連すると思われる経塚も散在する。石作町山稜には平安時代後期の石作経塚(1053)が、善峰寺境内には善峰寺経塚がある。

3. 周辺の調査(図13、表3)

今回の調査地の周辺では約30回にわたる調査が行われている。多くは、圃場整備事業に伴う試掘調査および発掘調査である。検出された遺構は、古墳時代後期の古墳、奈良時代の建物群、奈良時代から平安時代の須恵器や緑釉陶器の窯跡、大原野神社の社家関連施設と想定されている建物や井戸など、多岐に及んでいる。以下に、時代別に概観する。なお、()内数字は大原野地域の調査次数を表し、図13と表3に対応する。

古墳時代 南春日町地区の調査地から、南西側約500m付近の、西山から南東に延びる丘陵の南腹部には、古墳時代後期の円山古墳群(8次)がある。2基の円墳のうち1基では発掘調査によって、石室の基底部を検出している。また、調査地東側約250mの水田の下では、古墳時代後期から飛鳥時代にかけての下西代古墳1号墳(16・17次)と2号墳(18・20次)が発見されており、周辺にはさらに古墳が存在した事を窺わせる。

奈良時代 南春日町遺跡(29・30次)では奈良時代の総柱建物4棟を含む14棟の大規模建物群を検出している。南春日町廃寺(1・5～7次)では奈良時代の塔跡基壇や掘立柱建物などが検出されている。

平安時代から鎌倉・室町時代 南春日町地区の調査地から、東北東側約300～400m付近の南春日町下西代遺跡(13～16・19・21・22次)では、平安時代中期の柱穴群・溝・焼土坑が検出されている。また、平安時代後期から鎌倉時代にかけての掘立柱建物・溝・井戸・土坑などが検出され、この中には大溝によって区画される屋敷地も確認されている。南春日町遺跡(28次)でも室町時代の建物と井戸を検出している。建物は溝によって区画されている。この付近は地元では『下社家』と呼称されており、大原野神社の社家関連施設が考えられる。

また、小塩窯跡群(2次)では灰原2箇所と窯体の一部、緑釉陶器や窯道具が検出されている。



図 13 周辺調査地位置図 (1 : 6,000)

表3 周辺調査一覧表

調査 回数	遺跡名	調査期間	調査 面積	種類	調査概要	報告書等
1	南春日町院寺	1980/12/23 ～12/30 1981/01/19 ～03/19	294 900	試験 発掘	石列、溝、瓦を多量に含む包含層検出。 奈良の寺院跡検出。塔基、建物跡、多量の瓦出土。	『昭和55年度南春日町遺跡発掘調査概要』 京都市埋蔵文化財調査センター 1981年
2	小堀塚跡 南春日町遺跡	1983/01/24 ～03/30	1000	試験	大原野塚跡では北面2箇所検出。全体片、瓦、多量の 無形陶器、須恵器、瓦葺瓦など出土。	『昭和57年度 京都市埋蔵文化財調査概要』 京都市埋蔵文化財研究所 1986年
3	南春日町遺跡 南春日町院寺	1983/12/03 ～84/03/31	2053	試験	北半部で奈良・中世の遺構、南半部では平安の遺物を 多量に含む東西道路・建物跡を検出。	『昭和58年度 京都市埋蔵文化財調査概要』 京都市埋蔵文化財研究所 1985年
4	南春日町 片山遺跡	1984/11/01 ～85/04/03	1458	試験	北西部で奈良・中世の遺構、西半部で奈良の聖六住居・ 鎌倉～室町の遺構群。東半部で平安～鎌倉の遺構群を 確認。	『昭和59年度 京都市埋蔵文化財調査概要』 京都市埋蔵文化財研究所 1987年
5	南春日町院寺	1985/04/01 ～06/06	180	発掘	平安前期～中期の遺物を多量に含む東西道路。	『大原野の遺跡 発掘調査成果発表会資料』 京都市埋蔵文化財研究所 1991年
6	南春日町院寺	1985/05/06 ～06/06	200	発掘	平安前期～中期の獨立柱建物・石列・溝を検出。	『大原野の遺跡 発掘調査成果発表会資料』 京都市埋蔵文化財研究所 1991年
7	南春日町院寺	1985/10/05 ～10/19	120	発掘	5次調査で検出した道路の南西側東西約80m確認。道 路内から平安前期の遺物多量出土。	『大原野の遺跡 発掘調査成果発表会資料』 京都市埋蔵文化財研究所 1991年
8	円山古墳	1985/11/08 ～11/14	18	確認	横穴石室の西側石の基礎部を確認。	『昭和60年度 京都市埋蔵文化財調査概要』 京都市埋蔵文化財研究所 1987年
9	八幡宮古墳群 駒込地	1985/11/15 ～12/03	200	発掘	中型の小柱穴・土坑検出。	『大原野の遺跡 発掘調査成果発表会資料』 京都市埋蔵文化財研究所 1991年
10	南春日町下西代 遺跡	1985/12/04 ～86/02/07	500	発掘	鎌倉～室町の築高塔検出。	『大原野の遺跡 発掘調査成果発表会資料』 京都市埋蔵文化財研究所 1991年
11	南春日町下西代 遺跡	1986/02/07 ～03/01	100	発掘	奈良の柱穴・土坑。	『大原野の遺跡 発掘調査成果発表会資料』 京都市埋蔵文化財研究所 1991年
12	南春日町下西代 遺跡	1986/10/01 ～10/05	100	発掘	奈良の柱穴・土坑・溝・焼土坑検出。	『大原野の遺跡 発掘調査成果発表会資料』 京都市埋蔵文化財研究所 1991年
13	南春日町下西代 遺跡	1987/02/23 ～03/26	400	発掘	平安中期の柱穴部・溝・焼土坑検出。	『昭和61年度 京都市埋蔵文化財調査概要』 京都市埋蔵文化財研究所 1989年
14	南春日町下西代 遺跡	1988/02/21 ～03/31	600	発掘	平安後期の獨立柱建物4棟・溝・土坑検出。	『昭和62年度 京都市埋蔵文化財調査概要』 京都市埋蔵文化財研究所 1991年
15	南春日町下西代 遺跡	1988/11/07 ～89/01/30	800	発掘	平安後期～鎌倉の柱穴多数・溝・土坑・南北方向の古 道の一部検出。	『昭和63年度 京都市埋蔵文化財調査概要』 京都市埋蔵文化財研究所 1993年
16	南春日町下西代 遺跡	1989/01/18 ～03/03	500	発掘	平安後期～室町の柱穴多数・溝・土坑・井戸検出。南 北東区で古墳石室の基礎部を確認。	『昭和63年度 京都市埋蔵文化財調査概要』 京都市埋蔵文化財研究所 1993年
17	下西代古墳群	1989/06/05 ～08/11	500	発掘	16次調査で確認した石室の調査。径18mの円墳で、 主体部は横穴石室。1号墳と命名。	『平成元年度 京都市埋蔵文化財調査概要』 京都市埋蔵文化財研究所 1994年
18	下西代古墳群	1989/10/20 ～10/30	100	確認	古墳確認のため10地点を確認調査。1号墳東50m地 点で石室石材を確認。	『平成元年度 京都市埋蔵文化財調査概要』 京都市埋蔵文化財研究所 1994年
19	南春日町下西代 遺跡	1989/11/01 ～90/02/07	800	発掘	鎌倉～室町の柱穴多数・溝・土坑・井戸・堀・溝溝を 伴う石組遺構検出。	『平成元年度 京都市埋蔵文化財調査概要』 京都市埋蔵文化財研究所 1994年
20	下西代古墳群	1990/07/02 ～10/10	500	発掘	18次調査の本調査。古墳後期の横穴石室を検出。衣 冠部に小石室を持つ古墳であることが判明。	『平成2年度 京都市埋蔵文化財調査概要』 京都市埋蔵文化財研究所 1994年
21	南春日町下西代 遺跡	1990/11/08 ～91/02/28	1500	発掘	鎌倉～室町の柱穴多数・溝・土坑・堀跡・井戸。堀跡 は19次調査と一体のものであることが判明。	『平成2年度 京都市埋蔵文化財調査概要』 京都市埋蔵文化財研究所 1994年
22	南春日町下西代 遺跡	1991/04/22 ～07/05	700	発掘	平安末の獨立柱建物1棟・建物列溝1条を検出。さら に西側で大規模な石敷遺構を検出。	『平成3年度 京都市埋蔵文化財調査概要』 京都市埋蔵文化財研究所 1995年
23	下西代古墳群	1991/09/24 ～12/26	500	発掘	下西代古墳群移築のための解体調査。2号墳は南159 mに造成予定の公園内に移築。1号墳は残存状態の良 好な石材を選択移築展示の方法が採用。	『平成3年度 京都市埋蔵文化財調査概要』 京都市埋蔵文化財研究所 1995年
24	南春日町下西代 遺跡	1991/12/17 ～92/03/16	800	発掘	奈良～鎌倉の池状遺構を検出。調査区の東外に伸びる。 遺構内からの出土遺物は奈良の須恵器が主体。	『平成3年度 京都市埋蔵文化財調査概要』 京都市埋蔵文化財研究所 1995年
25	南春日町下西代 遺跡	1992/03/16 ～/04/17	1500	発掘	平安中期の土坑。時期不明の河跡。平安～中世の遺物 包含層を検出。	『平成4年度 京都市埋蔵文化財調査概要』 京都市埋蔵文化財研究所 1995年
26	南春日町下西代 遺跡	1992/10/07 ～11/26	800	発掘	1994年度検出の聖六住居以外は、中世の柱穴・土坑・ 溝など。	『平成4年度 京都市埋蔵文化財調査概要』 京都市埋蔵文化財研究所 1995年
27	下西代古墳移築	1993/01/08 ～03/03		復元	1992年3月、下西代古墳群の移築復元は完了。公園 （大原野古墳公園）の整備が実施されることになった。	『平成4年度 京都市埋蔵文化財調査概要』 京都市埋蔵文化財研究所 1995年
28	南春日町遺跡	1993/07/14 ～09/03	1500	発掘	室町の建物2棟を検出。それぞれに井戸が付属し、両 者を囲する溝があり、獨立した建物。	『平成5年度 京都市埋蔵文化財調査概要』 京都市埋蔵文化財研究所 1995年
29	南春日町遺跡	1996/01/05 ～03/31	280000	試験	沢方地区を南東に流れる経川と横ノ木川の中間に位置 する台地に、奈良の聖高遺構を確認。	『平成7年度 京都市埋蔵文化財調査概要』 京都市埋蔵文化財研究所 1997年
30	南春日町遺跡	1996/03/31 ～05/31	2500	発掘	奈良の建物14棟（3間×9間の建物・竪柱建物4棟を 含む）を検出。その根井戸1基と土坑遺構を検出。	『平成7年度 京都市埋蔵文化財調査概要』 京都市埋蔵文化財研究所 1997年

第3章 灰方1・2号窯、灰方の塚跡（灰方町地区）

1. 遺構（図版1）

調査地は、西山山地の東麓、標高200m前後の西山丘陵の山中に位置する。丘陵を西から東へ流れる善峰川につながる南北方向の谷があり、調査はこの谷を挟む東西両側の斜面で行われた。灰方1・2号窯は谷の西側に、灰方の塚跡は東側に立地する。調査前、南北方向の谷の東側には竹林が広がり、西側は雑木林となっていた。

（1）基本層序（図14）

基本層序は、窯の存在する南北方向の谷の西側斜面では、地表下約0.2mまでの第1層が腐植土を主とする表土。地表下約0.4mまでが第2層の明黄褐色粘質細砂で、これは地山を構成する大阪層群が、雨水などと共に流れて堆積したものである。これ以下が、窯の検出面となる地山の黄褐色粘質細砂となる。以上のように、窯跡検出面である地山の上層には約0.4mの堆積土があり、地表面での観察からは窯跡は全く確認できなかった。谷の東側の基本層序は、表土から地山面までの1～8層はすべて竹林造成に伴う盛土である。この造成土は、第2層以下が厚さ8～15cmであるが、第1・2層はそれぞれ0.3m以上と厚く、機械力を使用した近年のものである可能性が考えられる。地山は黄褐色粘質細砂である。

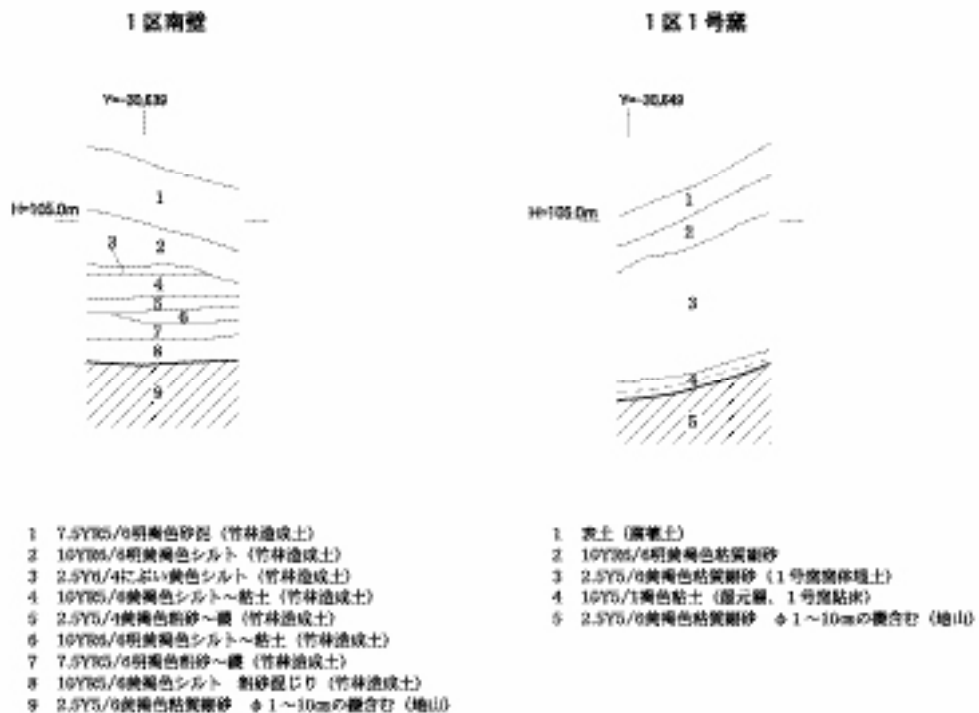


図14 灰方町地区 断面柱状図（1：50）

(2) 1区(灰方1号窯)(図版2・3)

灰方1号窯(巻頭図版1・2、図版4・5・19～22、図15・16)1号窯は地上式の窰窯。南北方向の尾根筋の東斜面に位置し、小さく東に張り出して傾斜が周辺よりも緩やかな場所に築かれている。窯体の検出高は残存する燃焼部の最低部で標高104.85mである。残存長は4.03m(実長4.85m)を測る。主軸方位はN-24度-Wを測る。一部は、現在の林道によって失われているが、燃焼部の遺存状況などから、破壊されているのは焚口部と燃焼部のごく一部とみられる。地山を溝状に掘り下げ、床面と側壁に粘土を貼って構築されている。全体に掘形の掘削深度は浅く、構造としては地上構築部分大きいと考えられる。ただし、地上式窯によくみられる窯体掘形外側の盛土は、窯体主軸と直交して断割りを行ったが確認されなかった。また、燃焼部と焼成部の境は明確ではないが、床面の傾斜角度の変化点で分けた¹⁾。

燃焼部 燃焼部は、残存長1.05m(実長1.2m)、床面最大幅1.2m、側壁の残存高は燃焼部中央で0.44m、床面の傾斜角度は12度を測る。東端から約0.6mの地点で、床面幅はやや幅が

狭くなる。断面形は、右側壁がやや右側に開きながら直角に近い角度で立ち上がる。左側壁は内湾しながら立ち上がっているが、これは操業当時のものとは考えがたく、土圧や地震など何らかの作用によって後世に変形したものと考えられる。床面および側壁は修復が行われており2面ある。最終床面は厚さ4cmの灰色に焼け締まった粘土層、この下層に厚さ2cmの明褐色に焼け締まった粘土層がある。この補修は焼成部にはなく、傷みやすい燃焼部にのみ行われたようである。床面からは多数の土器が出土するが、床面直上ではなく、うすい堆積土の上で検出される。軟質に焼きあがっているものが多く、焼成部から出土する土器と接合されるものもある。これらの事から、これらの土器は最終操業後に窯体内に取り残されたものが、ある段階で焼成部から燃焼部に滑落してきたものと考えられる。

焼成部 焼成部は、全長2.98m(実長3.65m)、床面最大幅0.98mを測る。側壁の残存高は、焼成部中央で0.42mを測り、窯尻に向かって徐々に浅くなり、窯尻付近では床面の焼結面が確認できるのみとなる。床面の傾斜角度は33度を

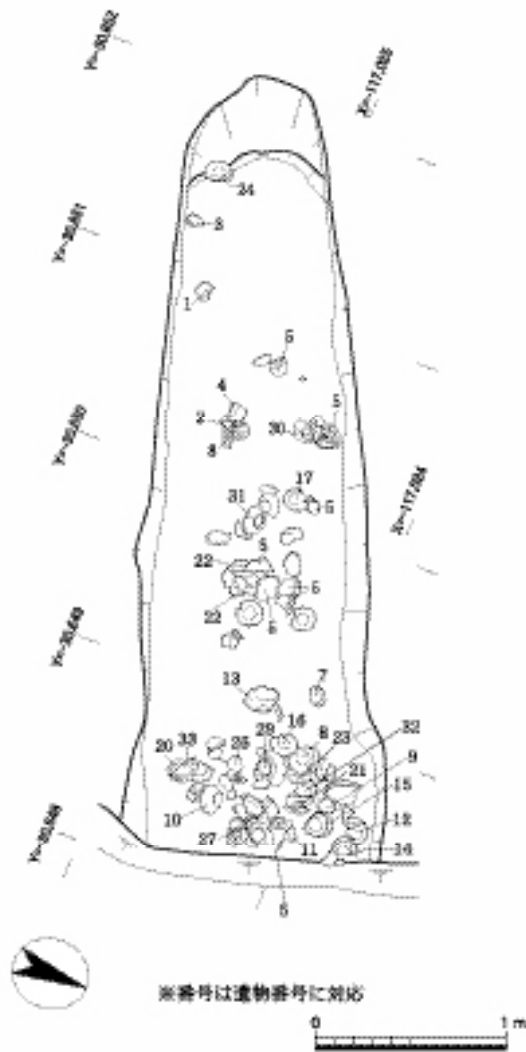


図15 1号窯出土土器位置図(1:40)

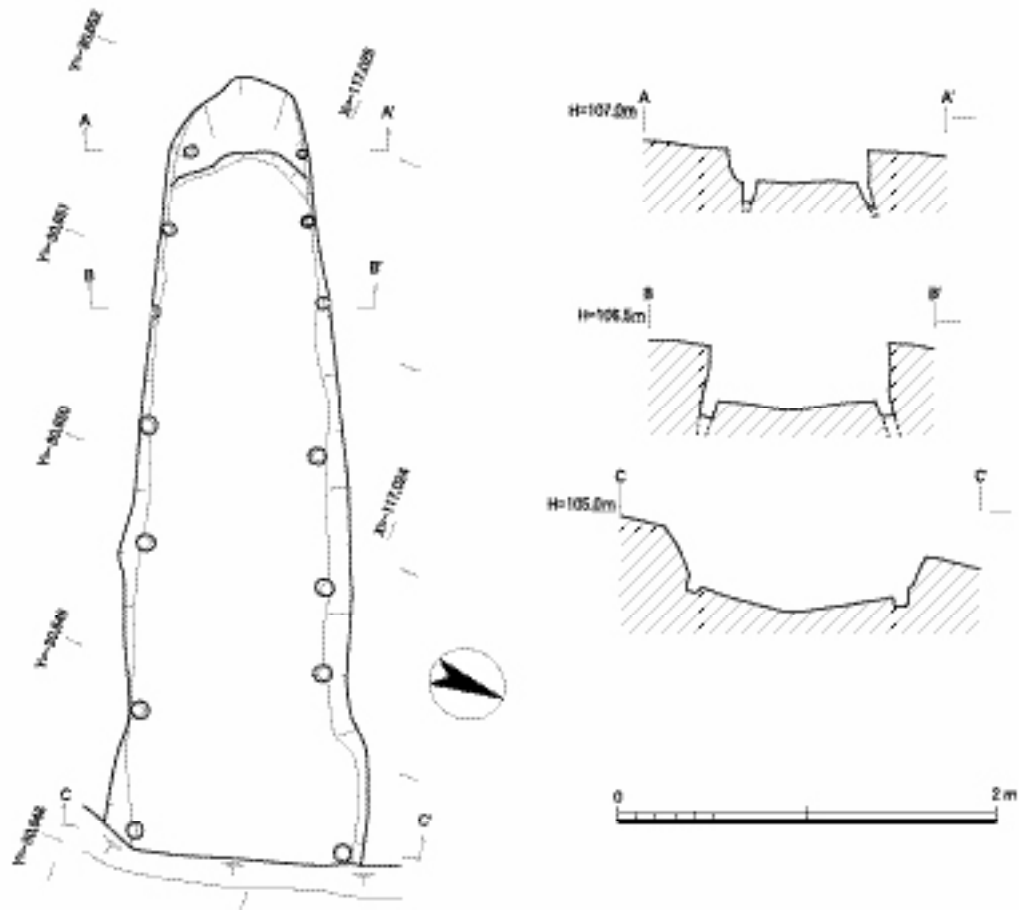


図 16 1号窯窯体構築杭実測図（1：40）

測る。左右の側壁は、外側にわずかに開きながら立ち上がるがほぼ直角で、断面形は箱型に近い。床面は、剥落している部分が多く、焼成部に比べて遺存状況は悪い。床面の貼り土は厚さ4cmを測り、灰色に焼け締まる粘土層である。窯尻は直角に近い角度で立ち上がり、貼り土は他の部分に比べてやや厚く12cmを測り、灰色に固く焼け締まっている。また、窯尻の0.3m手前で床面に比高差5cmの小さな段があるが、これは窯尻に向かって床面角度を上げるために、貼り床を厚くした部分の一部が剥落して、段状になったものと思われる。

調査の最終段階で、貼り土の焼け締まった粘土層を掘り下げ、窯の掘形底面において窯体構築杭の痕跡を窯の内側の側壁に沿って左右両側に7個、計14個を検出した。直径は手前8個がやや太く8～10cm、奥の6個が6～8cmとやや細い。深さは焼成部側が約10cmを測る。焼成部側の杭跡は20cm以上あり、底を確認するに至らなかった。また、手前の8個の杭跡は左右に対応せず、ほぼ真直ぐ打ち込まれているのに対し、奥側6個の杭跡は左右対応で、斜めに打ち込まれている。

1号窯灰原（図版19・22、図17・18）灰原は窯前面の南北方向の谷斜面に形成されている。南北6.5m、東西4.5mの範囲で検出された。灰原東部は後世の谷の侵食などによって失われている。窯の操業に伴う堆積は基本的には1層で、土器を多く含むが炭化物は極めて少ない。また、窯の前面には、締まりの弱い粘質細砂が堆積しており、構築時の掘削土でもって谷斜面の一部を埋め、前庭部としていた可能性もある。ただし、周辺の地山の土と明確な差がなく、確証を得る

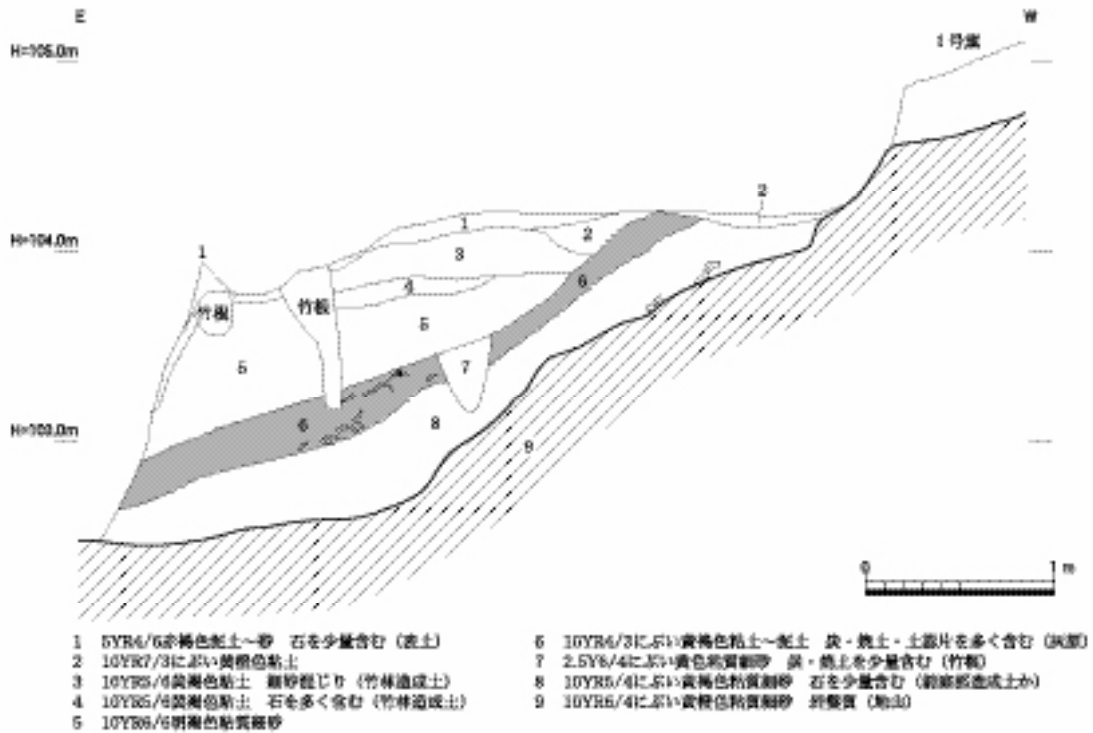


図17 1号窯灰原断面図(1:40)

には至らなかった。なお、灰原出土遺物の取り上げは、基本的には1mの方形区画を設けて行った。

土坑1(図版6・22) 1号窯の北側に位置する土坑。南北2.9m、東西3.3m、深さ1.0mを測る。平面形は方形に近いが、南東側で階段状に1段下がる。底面で土師質の緑釉陶器素地が出土しており、窯と同時期の遺構と考えられる。窯操業に伴う作業場、燃料置き場などの性格が考えられる。

平坦面5(図版6・22) 窯背後に位置する南北に長いテラス状遺構。南北5.1m、東西1.5m、深さ0.8mを測る。底面で土師質の緑釉陶器素地の小片を検出する。窯の排煙調整などを行う

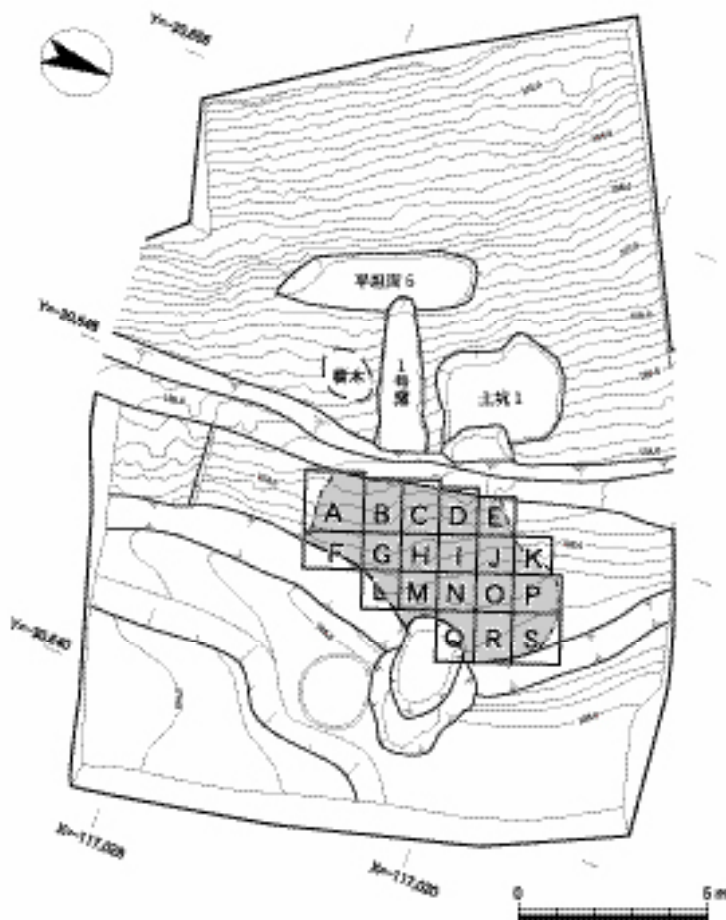


図18 1号窯灰原地区割図(1:200)

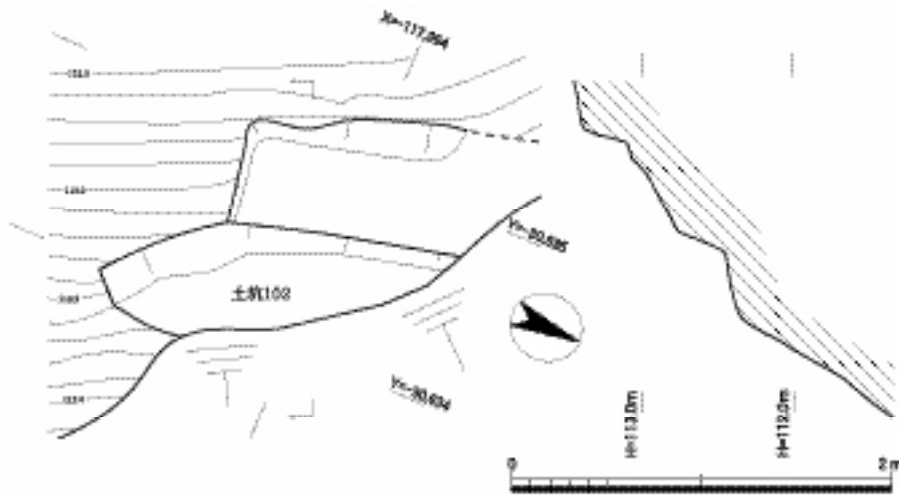


図19 2区土坑102実測図(1:40)

為の作業スペースと考えられる。

谷地形8(図版3・28) 1区の北東部で検出された東西方向の谷地形。幅約5m、深さ1m以上を測る。調査区東壁・南壁の断面では、近代の竹林造成に伴いこの谷が埋められていった過程が確認できる。

(3) 2区(図版7・28)

土坑102(図版28、図19) 南北1.8m、東西0.5m、深さ0.5mを測る土坑状の遺構。検出当初、上面で炭層が検出され土器窯の可能性が考えられた。しかし、調査の結果、土器窯ではないことが判明。傾斜面の途中にある小さな平坦面に作られた、簡易な炭窯の可能性が高い。

(4) 3区(灰方2号窯)(図版8・9)

灰方2号窯(巻頭図版3・4、図版10・11・23～27、図20) 2号窯は地上式の窯。1号窯から北西へ約40m、1号窯が構築されたのと同じ尾根筋の先端部、北斜面に位置する。窯体の検出高は焚口付近の最低部で標高101.30mである。全長は5.1mを測る。主軸方位はN-112度-Wを測る。1号窯と同様に地山を掘り下げて、床面と側壁に粘土を貼って構築されている。全体に掘形の掘削深度は浅く、構造としては地上構築部分が多いと考えられる。窯体掘形外側の盛土は、窯体主軸と直交して検出面の断割りを行ったが、1号窯と同様に確認されなかった。

焼成部の直上に存在した樹木を残して調査を行った為、窯尻の確認は調査の最終段階となった。また、窯の焚口の手前の樹木を残して調査を開始した為、灰原の断面観察用畦の設定位置が変則的になった。窯の前面に通る林道の保持と廃土置き場のスペースなどの関係から、灰原の調査は順次拡張しながら行う事になったが、灰原北端を確認するには至らなかった。

前庭部 前庭部は2段で構成される。窯前面に位置する上段部は南北0.7m、東西1.2m、深さ0.3mを測る。埋土は炭層である。下段の前庭部は南北1m、東西2.5m、深さ0.5mを測る。東半部で長軸0.4m、短軸0.2m長方形の自然石が出土するが、窯の操業に関連するものかどうかは

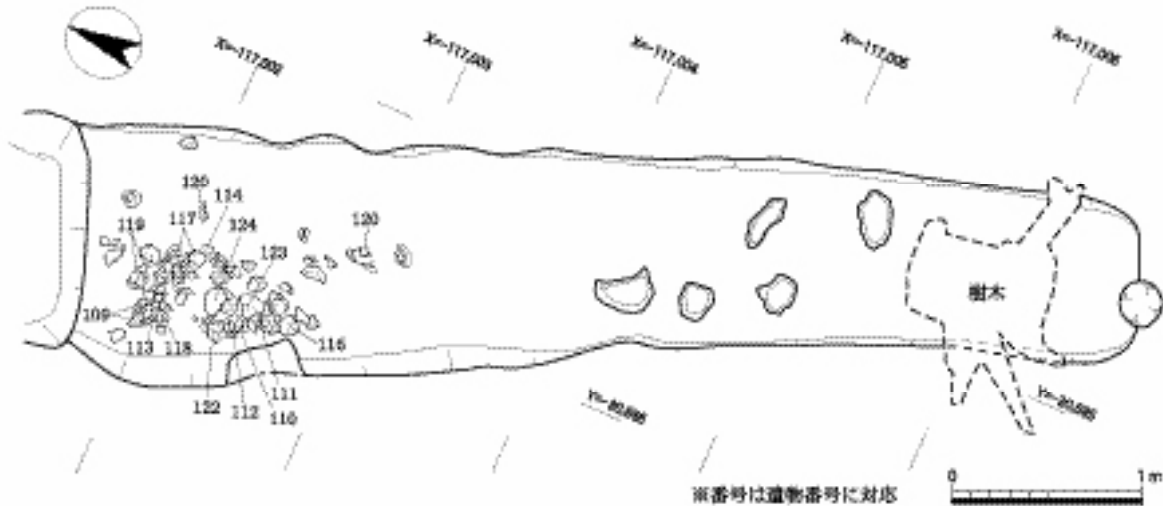


図20 2号窯出土土器位置図(1:40)

明らかでない。

燃烧部 燃烧部は、全長 0.9 m (実長 0.9 m)、床面最大幅 1.15 m、側壁の残存高は最大 0.5 m で、床面の傾斜角度は 5 度と緩やかである。断面形は、上半が補修粘土により厚くなっており、フラスコの底状を呈する。床面は 2 面ある。最終床面は厚さ 2 cm の褐灰色に焼け締まった粘土層、この下層に厚さ 5 cm の黄褐色に焼け締まった粘土層がある。窯体内から出土する土器は、1 号窯に比べて量は少なく緑釉陶器素地の小型の椀が多くを占める。

焼成部 焼成部は、全長 4.2 m (実長 5.5 m)、床面最大幅 1.1 m を測る。側壁の残存高は、焼成部中央で 0.42 m を測り、窯尻に向かって徐々に浅くなり、窯尻付近では床面の焼結面が確認できるのみとなる。床面の傾斜角度は 33 度を測る。左右の側壁はほぼ直角に立ち上がり、断面形は箱型を呈する。床面および側壁の遺存状況は全体に 1 号窯に比べて良好で、剥落している部分は少ないが、南半部では床面に径 0.2 ~ 0.3 m、深さ約 3 cm の小さな窪みがいくつか見られる。床面および側壁の粘土は厚さ 2 cm で 1 面のみ。褐灰色を呈し、よく焼け締まる。

2号窯灰原 (図版 23・27、図 21・22) 窯前面の南から北側に下がる斜面に形成されている。南北 6 m、東西 8 m の範囲で検出された。2 区北壁断面の観察によれば、灰原の堆積は大きく 2 層に分かれる。上層の堆積土には葉理が観察されることから、窯操業停止後の 2 次堆積の可能性が高い。下層はいくつかに分けることは可能であるが、炭層などの間層はなく基本的には 1 層である。土器や窯壁は多く含むが炭化物は少ない。遺物の出土量は、地形的に低くなる前庭部北東側に多くなる。灰原出土遺物の取り上げは基本的には 1 m の方形区画を設けて行った。

土坑 2 (図版 6・27) 2 号窯の東側に位置する土坑。南北 1.5 m、東西 2.1 m 以上、深さ 0.45 m を測る。平面形は楕円形に近い。埋土には炭化物を少量含み、底面から緑釉陶器素地椀が出土しており、窯と同時期の遺構と考えられる。窯操業に伴う作業場、燃料置き場などの性格が考えられる。

焼土坑 3 (図版 6) 2 号窯の西側に位置する土坑。長軸 0.85 m、短軸 0.65 m、深さ 0.3 m を測る。

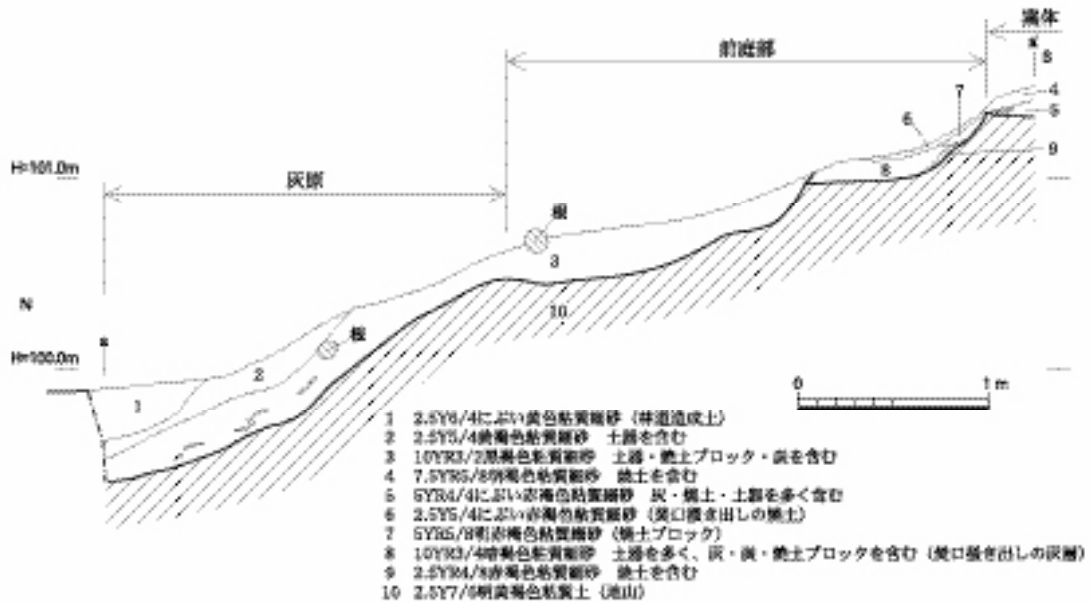


図 21 2号窯灰原断面図 (1 : 40)

平面形は方形に近い。土坑壁面および底面の一部が赤く焼け締まっている。埋土は上層に緑釉陶器素地と拳大の石を含み、その下層、床面直上に炭層が堆積する。検出状況から簡易な炭窯であると考えられる。同様の遺構は各地で検出されているが²⁾、篠窯跡群では土器焼成との関連も指摘されている³⁾。下層から出土したマツ属の炭化物の¹⁴C放射性炭素年代測定を行った結果、8世紀前半から9世紀中頃の年代が得られている。この結果からは2号窯と同時併存したかどうかは不明である。

溝4 土坑2に繋がるように検出された南北方向の溝。幅0.4m、深さ0.1mと浅く細い溝状の遺構である。埋土には焼土をわずかに含む。南半で窯寄りに向きを変えながら、窯背面の平坦面7に続く。排水溝としては深度が浅い為、窯背面に至る作業通路の可能性も考えられる。

平坦面7 窯背後に位置する人工的に掘削された平坦面。窯尻に続く部分では焼土が検出された。平坦面は南側の調査区外へ続くため規模は明らかではないが、1号窯の平坦面5と同様に窯の排煙調整などを行う為の作業スペースと考えられる。

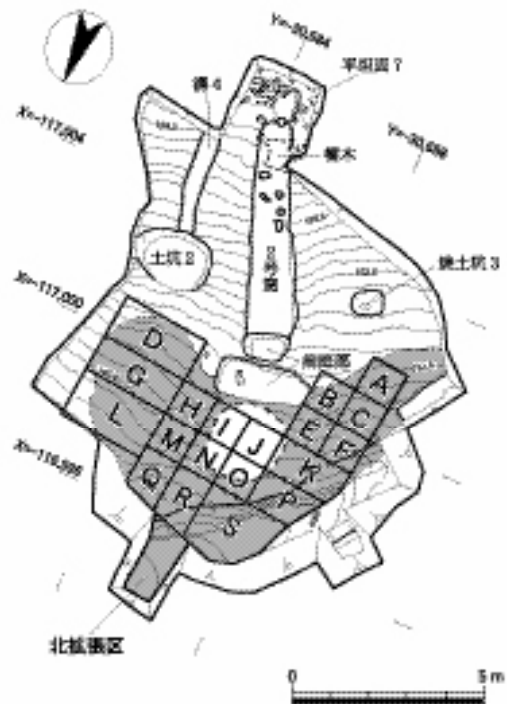


図 22 2号窯灰原地区割図 (1 : 200)

(5) 灰方の塚跡 (図版 12・29)

1号窯とは南北方向の谷を挟んだ反対側の東斜面、標高120m付近に位置する。平成19年度の分布調査で確認され、性格不明の遺構、「灰方の塚跡」として『京都市遺跡地図』に登録された。調査の結果、砂防機能をもった堰堤であることが明らかとなった為、ここでは堰堤1として述べる。

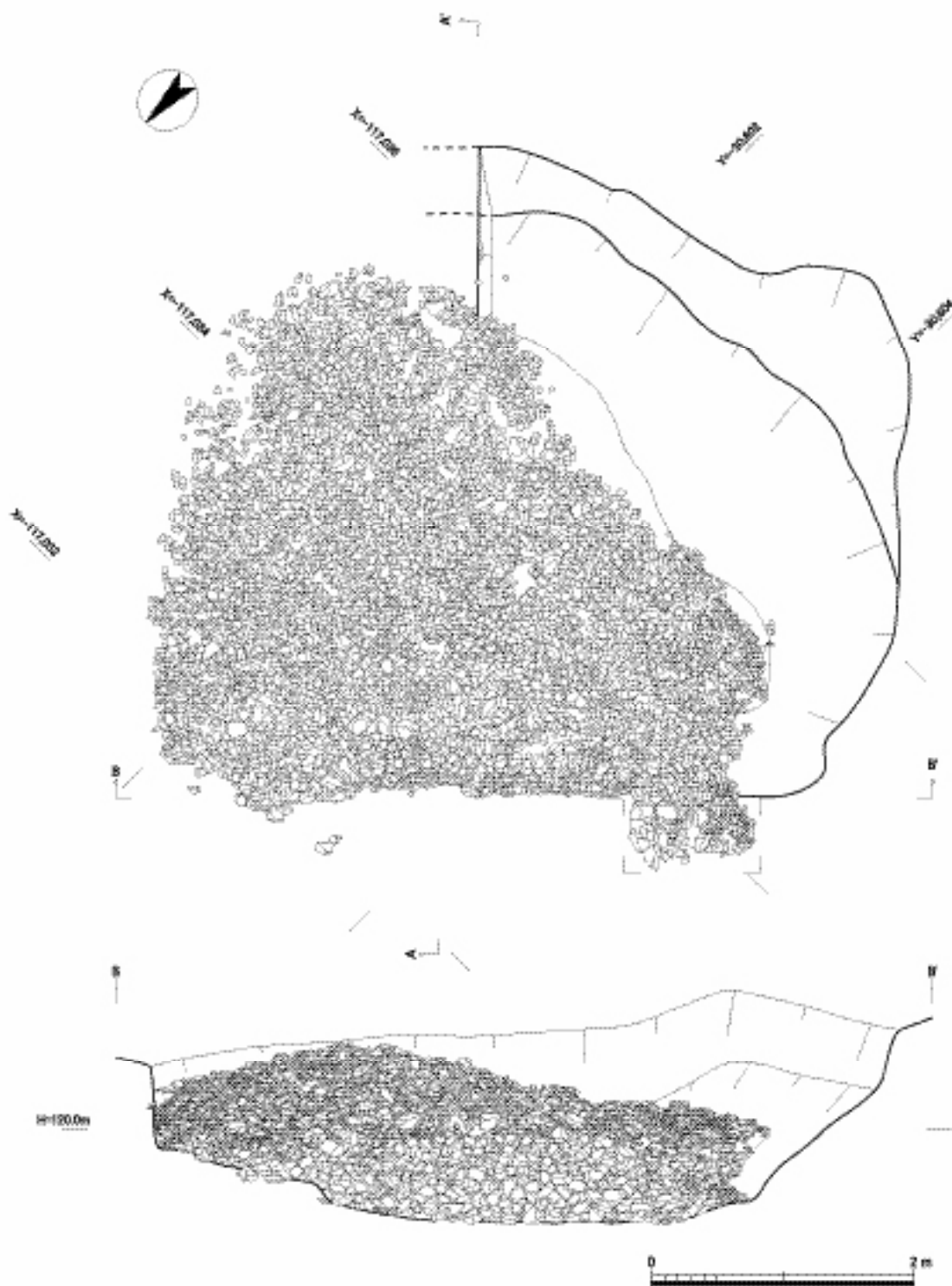


図 23 堰堤1平面図・立面図 (1:50)

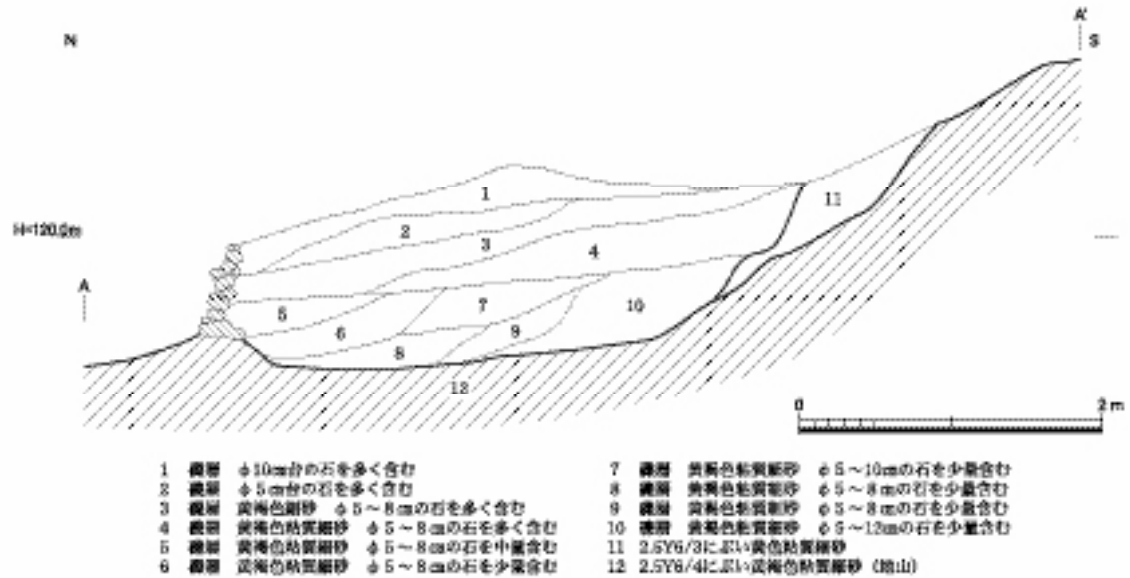


図 24 堰堤 1 断面図 (1 : 50)

堰堤 1 (図版 29、図 23・24) 1 区で検出された谷地形 8 は、現況地形でも、南東から北西方向の浅い谷地形として認められる。堰堤 1 は、この谷頭付近、谷地形の中央部に構築されている。径 10 ~ 30 cm の角のない石を積み上げている。石を積み上げた範囲の平面形は三角形を呈し、長軸 4.5 m、短軸 3.9 m を測る。

構造は、まず石積みの範囲よりも一回り大きく、斜面下側が開口する土坑が掘られる。斜面下方側には石を高さ 0.7 m まで石垣状に積み、その背面の掘形内に石を盛り上げるように積んでいる。石の堆積は大きく上下の 2 層に分かれ、上層は石のみであるのに対し下層は粘質細砂が含まれており、下半部は構造を強固にするため、上半部は透水性を持たせる為に作り分けられたものと思われる。

遺物は、小片の為に図示していないが、掘形の底部からガラス瓶とプリント施文の瀬戸産磁器の大徳利破片が各 1 点出土している。瀬戸産の大徳利は明治時代のものであり、堰堤 1 の築造はこれ以降となる。

また、堰堤 1 の左右両側の背面には人工的なカット面と、その裾部に小さなテラス面が確認できる。石積み遺構に対する土砂などの流入を緩和する目的で行われたものと思われる。

このような立地と遺構の構造から、平成 19 年度に「灰方の塚跡」として、遺跡地図に登録された遺構は、谷の侵食を防ぐ為の堰堤であることが判明した。また、1 区の谷地形 8 に接して現地表面に 3 基の土坑群がある。素掘りまたはコンクリート製で径 1.5 ~ 2.0 m を測る。これらは堰堤 1 とセットになる沈砂池と考えられる。

2. 遺物

灰原町地区の調査で出土した遺物は、1・2号窯からのものがほとんどである。窯体内・灰原を含めて遺物整理箱で約70箱が出土しており、1号窯と2号窯の比率は約4：6である。土器類には須恵器と緑釉陶器素地がある。器形には、須恵器では杯A・B、蓋、鉢D、壺L・M・N、水瓶、円面硯、風字硯、土錘などがあり、緑釉陶器素地では椀、稜椀、皿、段皿、耳皿、香炉、香炉蓋、取手付瓶、唾壺、三足盤、鉢Aなどがある。三足盤の出土は、平安京近郊窯からは初めてである。1号窯と2号窯出土の土器類の器形構成に大きな違いはない。1号窯からしか出土しないものに須恵器の硯類・水瓶があり、2号窯からのみ出土するものには、須恵器の土錘、緑釉陶器素地の香炉、香炉蓋、取手付瓶、唾壺、鉢Aなどやや特殊な器形に限られる。また、陰刻文を施す椀・皿類は少数であるが、1・2号窯から共に出土する。緑釉陶器素地の焼成は軟質・やや軟質・硬質と分かれるが、硬質のものが多数を占める。緑釉が施釉された土器は、2号窯灰原から小片が数点出土するのみで、サヤ・三叉トチンなどの窯道具はない。大小の椀・皿類の多くには内面底部に重ね焼痕が残る。

(1) 緑釉陶器素地の細部の特徴と分類

出土遺物の多くを占める緑釉陶器素地の椀・皿類は、口縁や高台など細部の特徴がいくつかに分かれる。各遺構出土の遺物について述べる前に、それぞれの分類基準を明らかにする。

口縁形態(図25・26) 緑釉陶器素地の中で多くを占める器形は、椀と皿である。これらは口縁部の特徴から、椀ではⅠ～Ⅳ類に、皿ではⅠ～Ⅴ類に分類する事ができる。

Ⅰ～Ⅲ類は椀・皿共に共通し、Ⅳ・Ⅴ類は椀と皿で異なる。Ⅰ類は口縁部が外反しないもの。わずかに外反気味になるものも含むが、同一個体でも部位によって両者の形態をもつものがあり、

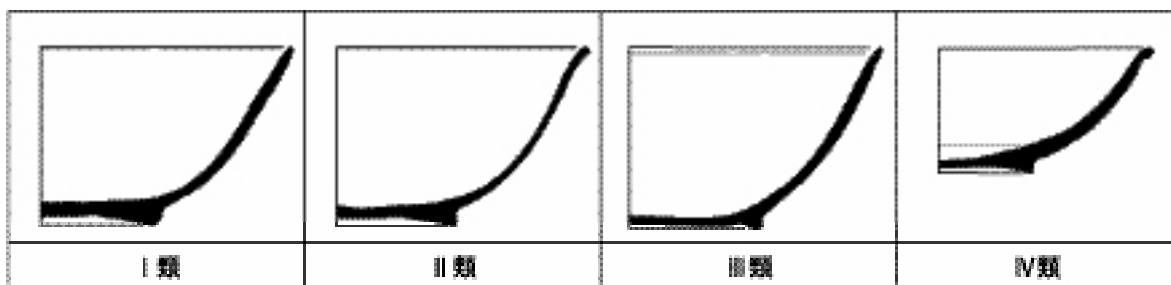


図25 緑釉陶器素地椀の口縁形態分類図

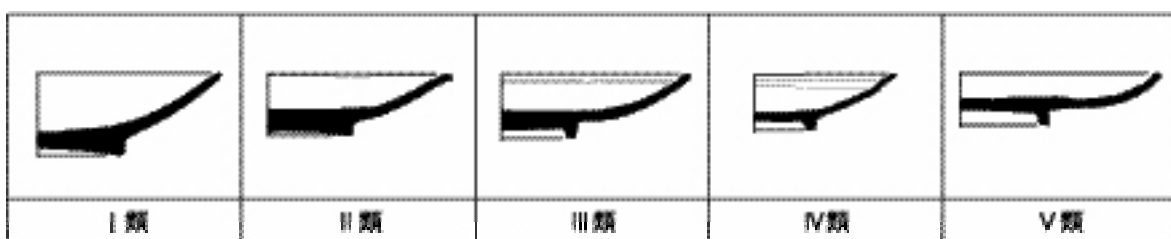


図26 緑釉陶器素地皿の口縁形態分類図



図 27 緑釉陶器素地碗・皿類の高台形態分類図

合わせてⅠ類とした。Ⅱ類は口縁端部が外反するもの。外反部分が短いものと長いものがある。外反部分が短いものはⅠ類の外反気味のものと区別が難しいものもある。Ⅲ類は内面口縁端部直下に浅い沈線をもつもの。碗のⅣ類は口縁部が強く外反するもの。出土点数は少ない。皿のⅣ類は口縁部が屈曲するもの。皿のⅤ類は口縁部が短く外反し端部が小さく肥厚するもの。2号窯灰原から1点出土した。

高台形態(図版41、図27) 碗・皿類の高台形態には平高台、輪高台、蛇の目高台があり、製作技法はいずれも削り出しである。平高台には、断面形が平坦な平高台a類と底部外面を強く削り込み断面形が窪む平高台b類があり、平高台a類には回転ヘラケズリが浅く、回転糸切り痕を残すものもある。輪高台には、高台幅が狭い輪高台a類と幅の広い輪高台b類がある。輪高台a類は高台の内側と外側で削り込みの深さが異なっており、内側は浅い。輪高台b類は2号窯から1点出土するのみである。蛇の目高台は、外面底部中央部分の平坦面が小さく、一見幅の広い輪高台のように見えるものが多い。量的には1・2号窯ともに平高台が最も多いが、1号窯では次に輪高台、蛇の目高台は最も少なく、2号窯では蛇の目高台、輪高台の順になる。

陰刻文(図28) 陰刻文は、緑釉陶器素地の碗、稜碗、皿、耳皿、香炉蓋などに施される。点数としては極めて少なく、1号窯からは2点のみ、2号窯からは破片数で152点出土するが、ほとんどが小片である。碗類では、口縁形態Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ類または稜碗に施され、稜碗またはⅢ類に多い。皿では口縁形態Ⅲ類のみである。陰刻文の施される碗・皿類の高台形態はすべて輪高台である。陰刻文の施文部位は、香炉蓋は天井部、碗・皿類は内面に施される。文様は、宝相華文をモチーフにしたと考えられる花文A類～F類と蝶文の計7つに分かれる。花文B類はいわゆる飛雲文である。花文A類・B類・C類は2号窯からのみの出土で、花文E類・F類は1号窯から各1点出土するのみである。

ヘラミガキ ヘラミガキの密度は、粗い・やや粗い・密の概ね3段階に分かれる。香炉、三足盤、唾壺、鉢Aなどや、陰刻文の施される碗・皿類は、密度が高く丁寧である。碗・皿類では、ヘラミガキの疎密は高台の形態と一定の対応関係が見られる。平高台では粗いものも多く、ほとんど施されないものもある。輪高台のものをもっとも丁寧で、ほとんど隙間なくヘラミガキが施されるものが多い。蛇の目高台はやや粗いものが多い。ヘラミガキの密度が粗いものとやや粗いものは、全体を同じ調子でヘラミガキするのではなく、碗は外面下半よりも上半を比較的丁寧に、皿は外面上半よりも下半の高台付近を比較的密に施すものが多い。外面底部をヘラミガキするものは、輪高台の一部に限られる。ヘラミガキを施す方法は、手持ちによるものとロクロ回転を用いるものがある。回転ヘラミガキは外面に施され、手持ちヘラミガキと併用されるものと単独で施

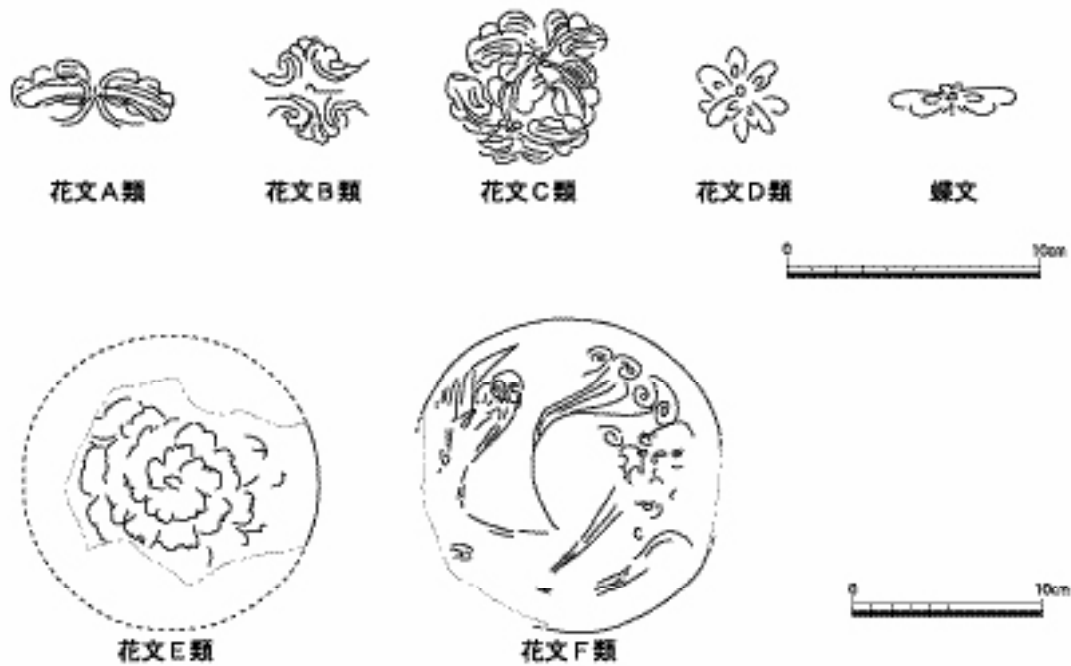


図 28 陰刻文分類図

されるものがあり、回転ヘラミガキのみのものは、椀・皿類共に口径 15 cm 以下のものである。また、この口径 15 cm 以下の椀・皿類では、内面底部のヘラミガキの工具の単位が明瞭にわかるものも多く、一方でほとんど施さないものもある。

以下では、これらの特徴に留意しながら、1号窯窯体内・灰原、2号窯窯体内・灰原と4つの出土地点ごとに述べる。また、器種・器形・口縁類型などによって点数を記す場合は、接合作業を経て口縁残存率が1/4以上になったものである。高台形態については、底部の中心部付近まで遺存していて形態が確実に判明するものについて述べる。以下の本文中で述べるように、緑釉陶器素地の椀類よりも皿類の点数が多くなっている。これには皿類が割れても小片になりやすく、接合作業の際にも接合されやすいという形態的な特徴の影響も考えられ、必ずしも生産の実態を反映していない可能性もある。

(2) 1号窯出土遺物 (図版 34～36・41、図 29～32、表 4～7)

1号窯窯体内および灰原から出土する土器類には、須恵器と緑釉陶器素地がある。須恵器では、杯A・B、鉢D、壺L・M、水瓶、円面硯、風字硯などがある。また、窯体内から馬爪形焼台 (図版 41 - 412) も出土している。緑釉陶器素地では、椀、稜椀、皿、段皿、耳皿、三足盤などがあり、椀・皿には内面に陰刻文を施すものもある。

口縁部残存率が1/4以上になるものを対象にして、須恵器と緑釉陶器素地の出土比率をみると、須恵器が17% (35点)、緑釉陶器素地が83% (167点) である。これらを器種・器形別にみると、須恵器では杯Aが60% (21点) で過半を占め、次に鉢Dが17% (6点)、その他の器形が23% (8点) となる。須恵器杯Bは図示していないが小片は出土しており、杯類の口縁部残存率1/4以下を

表4 1号窯出土緑釉陶器素地椀の口径・口縁形態集計表

口径(cm) 口縁形態	8.5 ~ 9.9		10.0 ~ 10.9		11.0 ~ 11.9		12.0 ~ 12.9		13.0 ~ 13.9		14.0 ~ 14.9		15.0 ~ 15.9		16.0 ~ 16.9		17.0 ~ 17.9		18.0 ~ 18.9		19.0 ~ 19.9		合計	比率
椀Ⅰ類	1	0	0	0	0	3	2	0	0	0	1	2	0	0	0	1	2	0	0	0	0	0	9	19.6%
椀Ⅱ類	0	0	0	0	3	6	4	2	4	6	0	1	26	56.5%										
椀Ⅲ類	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	2	1	5	10.9%										
椀Ⅳ類	0	0	0	0	1	0	0	2	1	1	0	6	10.9%											
破椀	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1	2.2%											
合計	1	0	0	3	12	7	2	6	7	4	4	46	100.0%											
比率	2.2%	0.0%	0.0%	6.5%	26.1%	15.2%	4.3%	13.0%	15.2%	8.7%	8.7%	100.0%												

※ 高台形態不明分含む

表5 1号窯出土緑釉陶器素地皿の口径・口縁形態集計表

口径(cm) 口縁形態	10.0 ~ 10.9		11.0 ~ 11.9		12.0 ~ 12.9		13.0 ~ 13.9		14.0 ~ 14.9		15.0 ~ 15.9		16.0 ~ 16.9		17.0 ~ 17.9		18.0 ~ 18.9		19.0 ~ 19.9		20.0 以上		合計	比率
皿Ⅰ類	0	0	0	21	34	9	0	0	0	0	0	64	54.7%											
皿Ⅱ類	0	0	0	7	23	4	0	0	0	0	0	34	29.1%											
皿Ⅲ類	0	0	0	0	0	4	7	2	0	0	0	13	11.1%											
皿Ⅳ類	0	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	2	1.7%											
皿Ⅴ類	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0.0%											
段皿	0	0	0	0	0	2	1	0	0	0	1	4	3.4%											
合計	0	0	0	28	57	20	9	2	0	0	1	117	100.0%											
比率	0.0%	0.0%	0.0%	23.9%	48.7%	17.1%	7.7%	1.7%	0.0%	0.0%	0.8%	100.0%												

※ 高台形態不明分含む

含めた出土破片点数は、杯Aが53点、杯Bが6点である。

緑釉陶器素地では、椀類が28% (46点)、皿類が70% (117点)、他が2% (4点)で、椀・皿が大半を占める。椀・皿を口径別に出土比率をみると、椀類では13cm代のもの、皿類では14cm代のものが最も多い。

口縁形態と高台形態の組み合わせを口径不明分のものを含めてみると、多数を占める椀口縁形態Ⅱ類と皿口縁形態Ⅰ類・Ⅱ類は、これも多数を占める平高台をもつものが多いが、椀・皿口縁形態Ⅲ類は輪高台をもつものが多い。

ヘア記号を施す緑釉陶器素地は、

表6 1号窯出土緑釉陶器素地椀の高台・口縁形態集計表

高台形態 口縁形態	高台形態					合計	比率
	平	輪	蛇の目	糸切	不明		
椀Ⅰ類	4	1	1	0	0	6	11.5%
椀Ⅱ類	20	4	2	0	1	27	51.9%
椀Ⅲ類	3	5	5	0	3	16	30.8%
椀Ⅳ類	0	2	0	0	0	2	3.8%
破椀	0	1	0	0	0	1	1.9%
合計	27	13	8	0	4	52	100.0%
比率	51.9%	25.0%	15.4%	0.0%	7.7%	100.0%	

※ 口径不明分含む

表7 1号窯出土緑釉陶器素地皿の高台・口縁形態集計表

高台形態 口縁形態	高台形態					合計	比率
	平	輪	蛇の目	糸切	不明		
皿Ⅰ類	64	0	0	0	7	71	61.7%
皿Ⅱ類	34	1	0	0	1	36	31.3%
皿Ⅲ類	1	5	0	0	0	6	5.2%
皿Ⅳ類	0	1	0	0	0	1	0.9%
皿Ⅴ類	0	0	0	0	0	0	0.0%
段皿	0	1	0	0	0	1	0.9%
合計	99	8	0	0	8	115	100.0%
比率	86.1%	7.0%	0.0%	0.0%	7.0%	100.0%	

※ 口径不明分含む

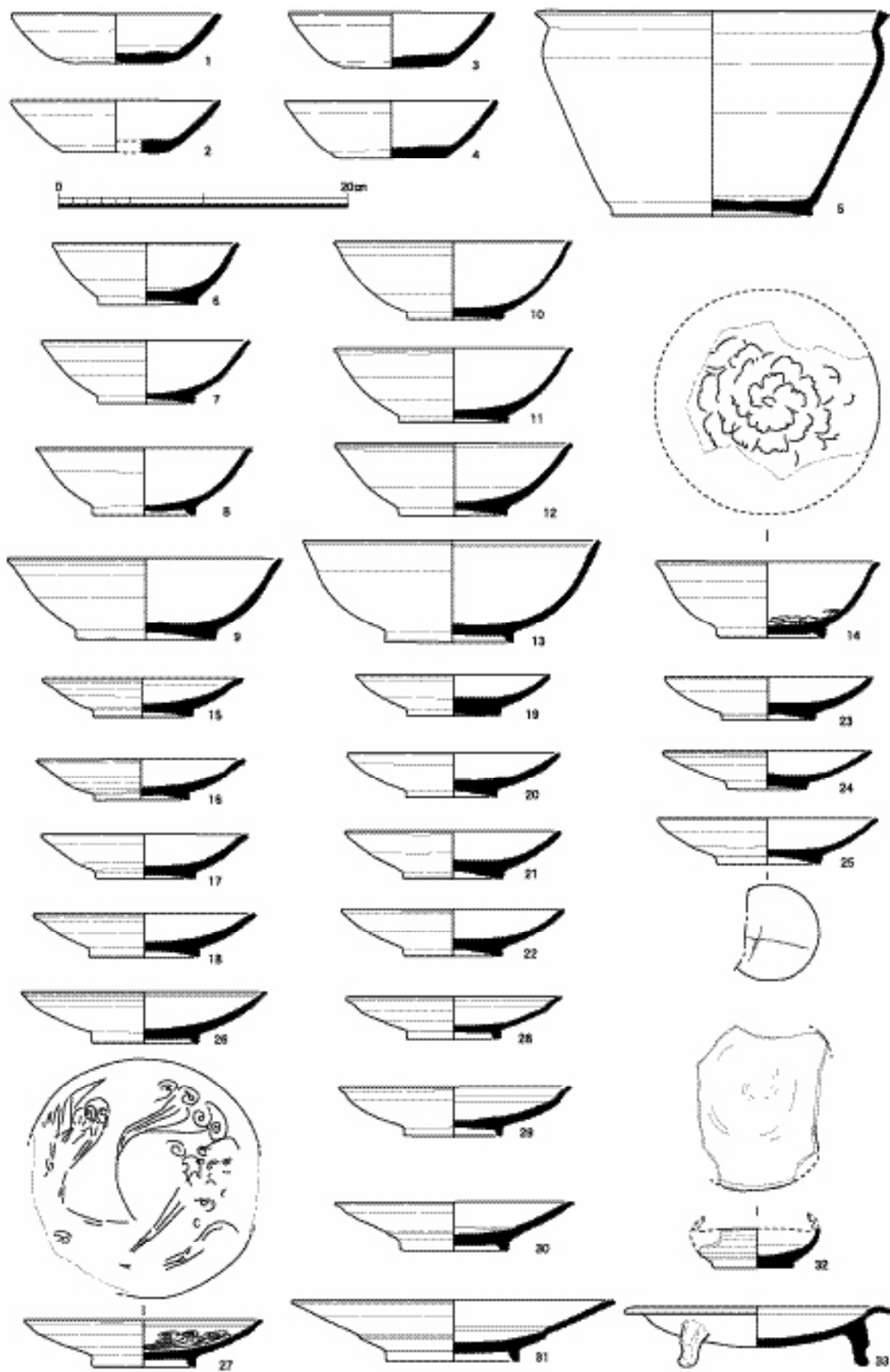


图 29 1号窯体内出土須恵器・緑釉陶器素地実測図（1：4）

小片を含めて5点のみである。ヘラ記号を施す須恵器は出土していない。

1号窯窯体内出土遺物(図29) 須恵器、緑釉陶器素地がある。いずれも焼成は土師質あるいは瓦質のみで、須恵質のものはない。

1～5は須恵器である。1～4は杯A。いずれも口径は14.0cm、底部はヘラ切り未調整である。

5は鉢D。口縁部は強く屈曲し端部は面をなす。底部は回転糸切り未調整である。

6～33は緑釉陶器素地である。6～14は椀。口径別にみると13.0～14.5cmの6～8、15.5～16.2cmの10～12・14、19.0～20.0cmの9・13の3つに分かれる。口縁形態別では、I類は6・7・9、II類は8・10～12・14、III類は13である。高台形態別では、8・13・14は輪高台で、これ以外は平高台である。輪高台のものはヘラミガキが丁寧で外面を高台際まで磨くものが多いが、平高台のものは口径の大小に関係なくヘラミガキが粗く、外面下半にはヘラケズリが顕著に残るものが多い。14の内面底部には陰刻花文E類を施す。陰刻花文E類は1・2号窯を通じてこの1点のみである。

15～29は皿。口縁形態別では、I類は19～25、II類は15～18、III類は26・27、IV類は28・29になる。高台形態別では、口縁形態I類・II類はいずれも平高台である。外面底部中央に向かって深く削り込み窪むb類が多いが、19のように平らなa類もある。口縁形態III類・IV類はいずれも輪高台である。ヘラミガキは、口径の大小に関係なく高台形態と相関関係があり、平高台のものは全体に粗いものが多く、輪高台のものは外面底部を除き密に施す。27は内面に陰刻花文F類を施す。陰刻花文F類は1・2号窯を通じてこの1点のみである。25は外面底部に「×」印のヘラ記号が刻まれる。

30・31は段皿。31は外面の段が顕著である。高台はいずれも輪高台、ヘラミガキは外面底部を除き密に施す。

32は耳皿。底部外面は回転糸切り未調整である。33は三足盤。底部は丸みを帯び、獣足の面取りは丁寧に施されている。ヘラミガキは屈曲の強い外面口縁部を除いて全面に極めて密に施されている。

1号窯灰原出土遺物(図30～32) 須恵器、緑釉陶器素地がある。焼成はほとんどが須恵質である。

34～52は須恵器である。34～41は杯A。口径からは、13.5cm前後の34～36と15cm前後の37～41に分かれる。

42は壺M。底部は回転糸切り未調整。43は壺Lの口縁部。44は水瓶の頸部で浅い沈線を数条巡らせる。水瓶の出土は1・2号窯を通じてこの1点のみである。

45は脚部と思われるが、器形・用途ともに不明である。

46～49は鉢D。口縁部が直立気味に立ち上がり、端部が丸く収まる46と口縁部が屈曲して端部が外側につまみ出すようにして面をなす47～49がある。46・47は48・49に比べてやや口径が小さい。いずれも底部は回転糸切り未調整。

50は風字硯。風字硯の出土はこの1点のみである。51・52は円面硯。ともに陸部がやや膨ら

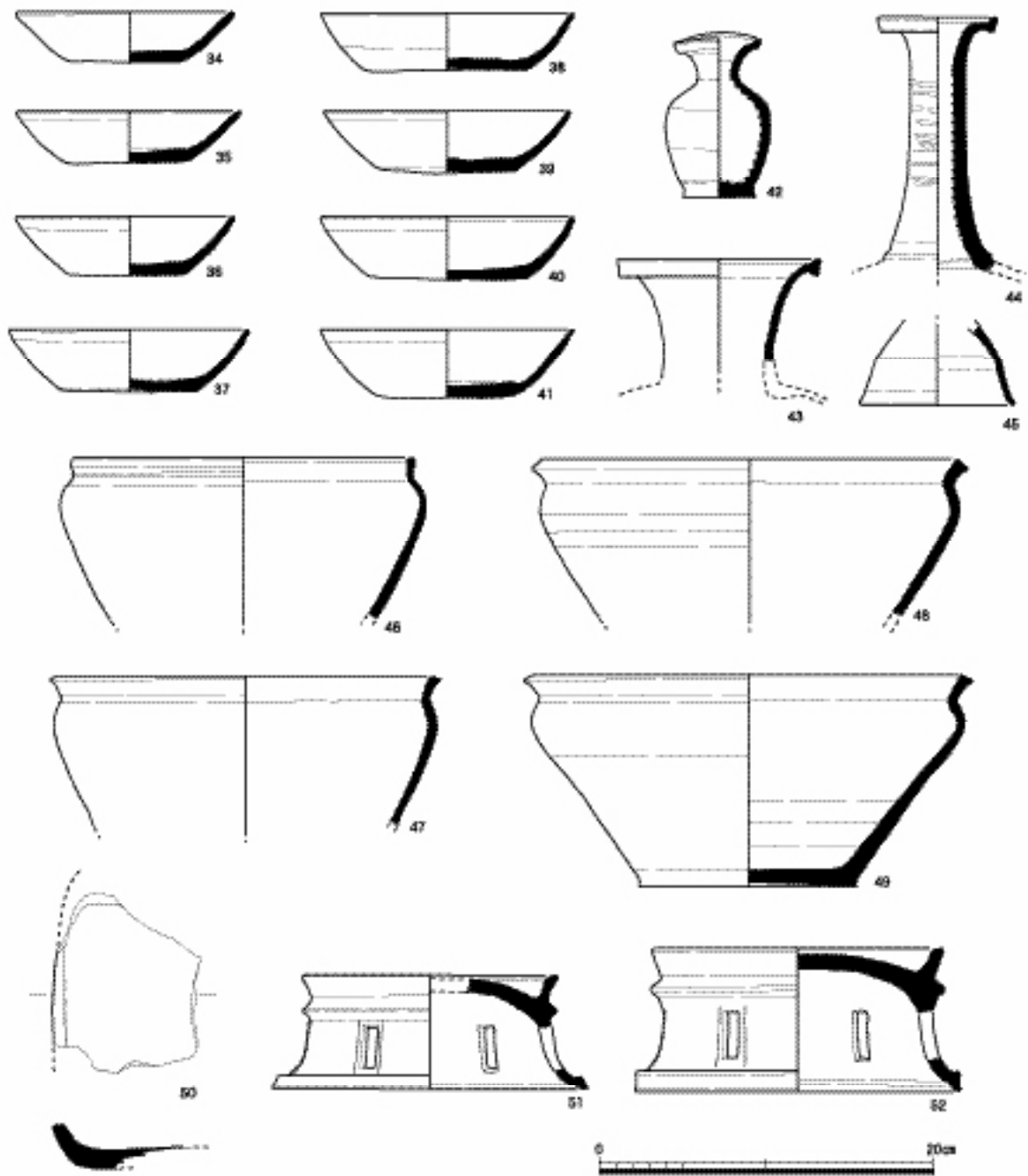


図30 1号窯灰原出土須恵器実測図（1：4）

むのが特徴的である。

53～104は緑釉陶器素地である。53～61・63～73は椀。口径別にみると、約9.0cmの53、12.0～14.5cmの54～61・63・65、17.0～20.0cmの64・66～73の3つに分かれる。形態は、それぞれの口径サイズごとに類似するものが多いが、体部の立ち上がりが急な54、器高に対して口径の大きい63・64などやや異なるものもある。口縁形態別では、Ⅰ類は53～56・66・67、Ⅱ類は57～61・63・64・68～70、Ⅲ類は65・71～73である。高台形態別では、平高台は54～61・63・68で、53は回転糸切り未調整である。輪高台は64～66・73、蛇の目高台は67・69～72の口径の大きいものにある。ヘラミガキは、口径の大小に関係なく高台形態と相

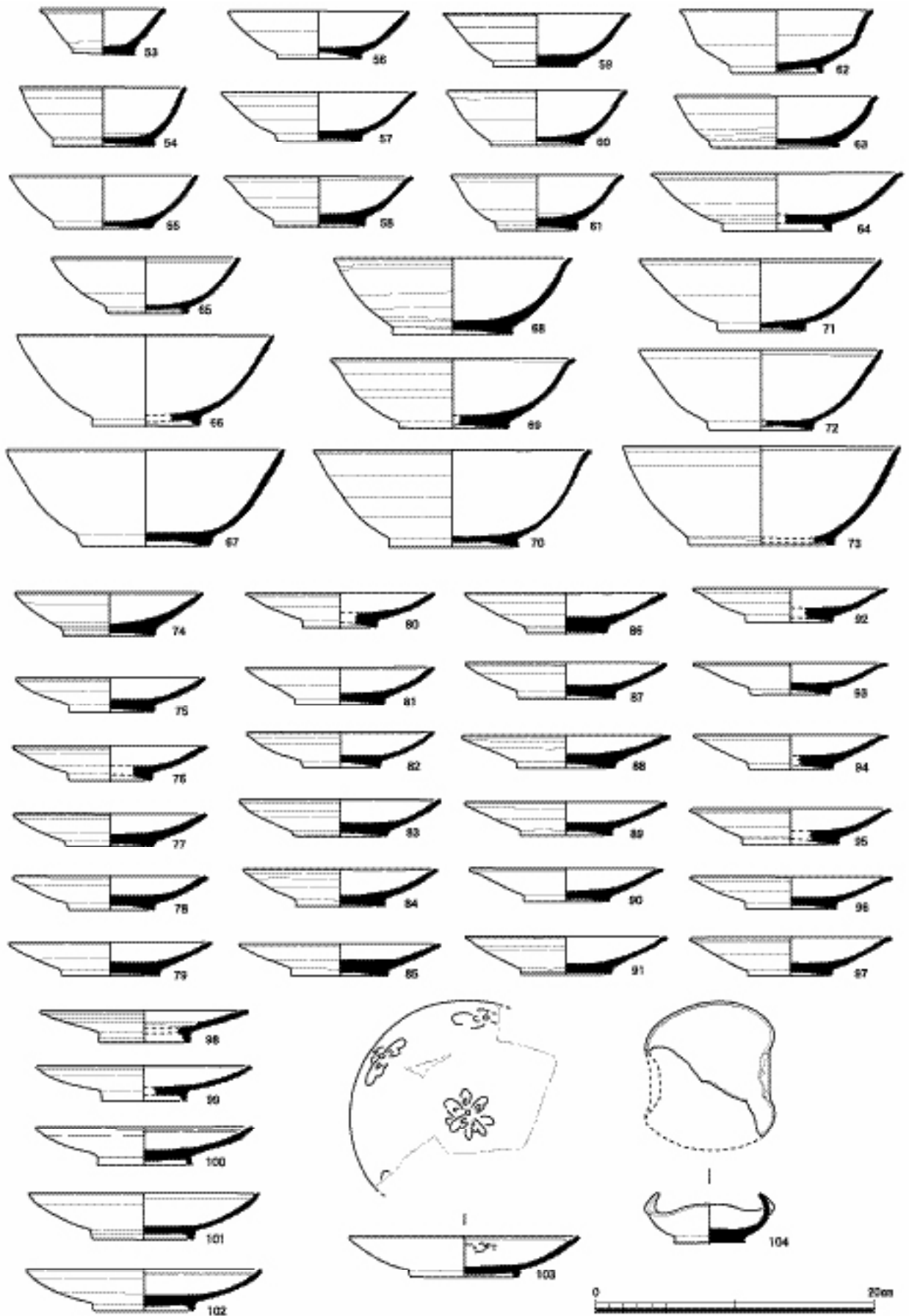


図 31 1号窯灰原出土緑釉陶器素地実測図 (1 : 4)

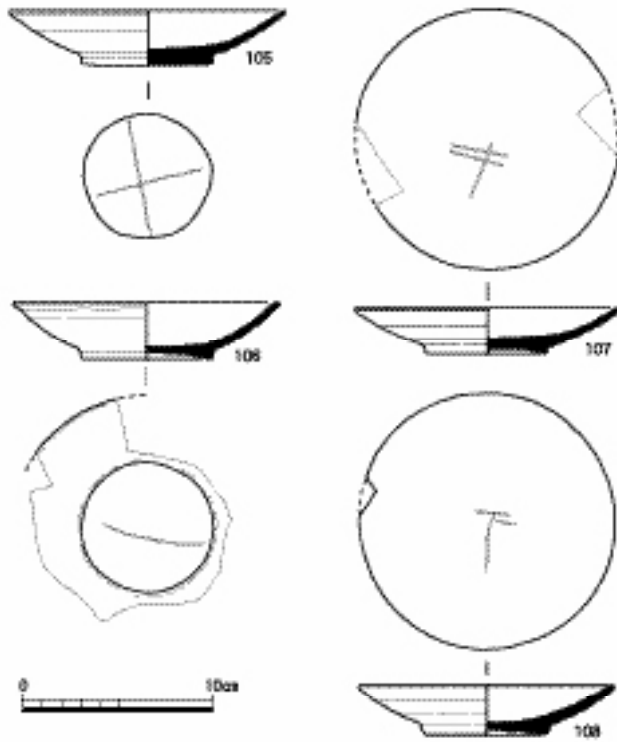


図 32 1号窯灰原出土ヘラ記号緑釉陶器素地実測図（1：4）

ある。高台形態別では、平高台は74～97・105～108で、平高台b類が多い。輪高台は99～103である。蛇の目高台の皿はない。口縁形態Ⅲ類の皿はいずれも高台は輪高台である。ヘラミガキは、口径の大小に関係なく高台形態と相関関係があり、平高台の皿は全体に粗いものが多いが、口縁形態Ⅰ類のほうがⅡ類よりも比較的密に施す。輪高台の皿は内外面共に隙間なく密に施す。103は内面中央に陰刻花纹D類、口縁部には陰刻蝶文を施す。105～108は内面底部または外面底部に「×」・「一」・「キ」・「下」の字形などのヘラ記号が刻まれる。1号窯から出土するヘラ記号の施された土器は少なく、図示したものの他には小片が1点あるのみである。

98は段皿。高台は輪高台である。ヘラミガキは密に施す。

104は耳皿。外面底部は回転糸切り未調整である。ヘラミガキは外面のみに粗く施す。

（3）2号窯出土遺物（図版37～41、図33～41、表8～11）

2号窯窯体内および灰原から出土する土器類には、須恵器、緑釉陶器素地、緑釉陶器がある。須恵器では、杯A・B、鉢D、壺L・M・N、土錘などがある。硯類は2号窯からは出土しない。緑釉陶器素地では、椀、稜椀、皿、段皿、耳皿、香炉、香炉蓋、鉢A、三足盤などがあり、椀・皿類には内面に陰刻文を施すものもある。また、施釉された緑釉陶器は、灰原から小片が数点であるが出土している（図版41～411）。

口縁部残存率が1/4以上になるものを対象にして、須恵器と緑釉陶器素地の出土比率をみると、須恵器が10%（70点）、緑釉陶器素地が90%（636点）である。これらを器種・器形別にみると、須恵器では、杯Aが50%（35点）、壺類が34%（24点）、鉢Dは4%（3点）、その他が11%

関関係があり、平高台の椀は全体に粗いものが多いが、口径の大きい68は比較的密に施す。輪高台の椀はヘラミガキを内外面共に隙間なく密に施す。蛇の目高台の椀も密に施すが、輪高台の椀と比べるとやや粗い。

62は稜椀。口縁部は外反する。高台形態は輪高台で、ヘラミガキは外面底部を除き密に施す。

74～97・99～103・105～108は皿。口径別にみると、13.5～15.0cm未満の74～97・105～108、15.5cmの99・100、16.5～17.0cmの101～103の3つに分かれる。口縁形態別では、Ⅰ類は74～89・105～108、Ⅱ類は90～97、Ⅲ類は99～103で

表8 2号窯出土緑釉陶器素地椀の口径・口縁形態集計表

口径 (cm) \ 口縁形態	8.5		10.0		11.0		12.0		13.0		14.0		15.0		16.0		17.0		18.0		19.0		合計	比率
	~	9.9	~	10.9	~	11.9	~	12.9	~	13.9	~	14.9	~	15.9	~	16.9	~	17.9	~	18.9	~	19.9		
椀Ⅰ類	27		2		1		4		9		2		4		6		1		2		3		61	30.5%
椀Ⅱ類	4		10		2		10		41		12		7		18		16		2		0		122	61.0%
椀Ⅲ類	0		1		0		0		1		1		5		2		0		1		0		11	5.5%
椀Ⅳ類	0		0		0		0		0		0		0		2		1		0		0		3	1.5%
破椀	0		0		0		0		0		0		1		1		0		0		1		3	1.5%
合計	31		13		3		14		51		15		17		29		18		5		4		200	100.0%
比率	15.5%		6.5%		1.5%		7.0%		25.5%		7.5%		8.5%		14.5%		9.0%		2.5%		2.0%		100.0%	

※ 高台形態不明分含む

表9 2号窯出土緑釉陶器素地皿の口径・口縁形態集計表

口径 (cm) \ 口縁形態	10.0		11.0		12.0		13.0		14.0		15.0		16.0		17.0		18.0		19.0		20.0以上		合計	比率
	~	10.9	~	11.9	~	12.9	~	13.9	~	14.9	~	15.9	~	16.9	~	17.9	~	18.9	~	19.9				
皿Ⅰ類	0		0		1		82		229		42		6		0		0		0		0		360	86.3%
皿Ⅱ類	0		0		1		4		14		3		1		0		0		0		0		23	5.5%
皿Ⅲ類	0		0		0		0		5		15		5		2		0		0		0		27	6.5%
皿Ⅳ類	0		0		0		0		0		1		0		0		0		0		0		1	0.2%
皿Ⅴ類	0		0		0		0		0		1		0		0		0		0		0		1	0.2%
段皿	0		0		0		0		0		4		1		0		0		0		0		5	1.2%
合計	0		0		2		86		248		66		13		2		0		0		0		417	100.0%
比率	0.0%		0.0%		0.5%		20.6%		59.5%		15.8%		3.1%		0.5%		0.0%		0.0%		0.0%		100.0%	

※ 高台形態不明分含む

(8点)となる。須恵器杯Bは図示していないが小片は出土しており、杯類の口縁部残存率1/4以下を含めた出土破片点数は、杯Aが501点、杯Bが5点である。

緑釉陶器素地では、椀類が31% (200点)、皿類が66% (417点)、その他の器形が3% (19点)で、椀・皿類が大半を占める。椀・皿を口径別に出土比率をみると、椀類では13cm代のもの、皿類では14cm代のものが最も多い。稜椀は灰原から3点、段皿は灰原から5点が出土する。

口縁形態と高台形態の組み合わせを口径不明分のものを含めてみると、椀口縁形態Ⅱ類と皿口縁形

表10 2号窯出土緑釉陶器素地椀の高台・口縁形態集計表

高台形態 \ 口縁形態	高台形態					合計	比率
	平	輪	蛇の目	糸切	不明		
椀Ⅰ類	13	1	0	1	0	15	5.7%
椀Ⅱ類	140	15	10	12	19	196	74.0%
椀Ⅲ類	2	10	2	1	10	25	9.4%
椀Ⅳ類	0	0	1	26	1	28	10.6%
破椀	0	1	0	0	0	1	0.4%
合計	155	27	13	40	30	265	100.0%
比率	58.5%	10.2%	4.9%	15.1%	11.3%	100.0%	

※ 口径不明分含む

表11 2号窯出土緑釉陶器素地皿の高台・口縁形態集計表

高台形態 \ 口縁形態	高台形態					合計	比率
	平	輪	蛇の目	糸切	不明		
皿Ⅰ類	447	15	0	0	77	539	91.4%
皿Ⅱ類	2	0	0	1	1	4	0.7%
皿Ⅲ類	5	23	2	0	8	38	6.4%
皿Ⅳ類	1	2	0	0	2	5	0.8%
皿Ⅴ類	0	1	0	0	0	1	0.2%
段皿	0	3	0	0	0	3	0.5%
合計	455	44	2	1	88	590	100.0%
比率	77.1%	7.5%	0.3%	0.2%	14.9%	100.0%	

※ 口径不明分含む

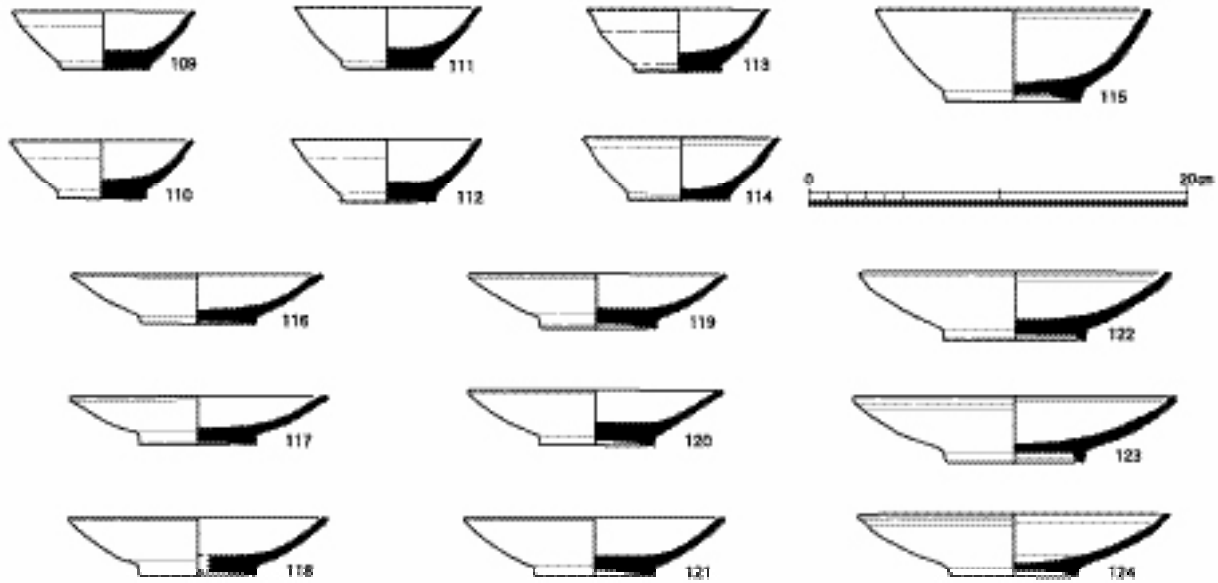


図 33 2号窯窯体内出土緑釉陶器素地実測図（1：4）

態Ⅰ類が多数を占め、これも多数を占める平高台をもつものが多いが、椀・皿口縁形態Ⅲ類は輪高台をもつものがほとんどである。

ヘラ記号を施す緑釉陶器素地は、1号窯と比べて多数出土しており、小片を含めて332点ある。ヘラ記号を施す須恵器は出土していない。

2号窯窯体内出土遺物（図33）緑釉陶器素地のみである。焼成はほとんどが須恵質である。

109～115は椀。口径9.5～10.0cmの小型のものが多い。口縁形態別では、Ⅰ類は109～113、Ⅲ類は114である。高台形態別では、いずれも底部は回転糸切り未調整で器面にヘラミガキは施さない。115は中型の口縁形態がⅢ類の椀で、高台形態は蛇の目高台である。

116～124は皿。口径別にみると、13.5cm前後の116～121と16.0～17.0cmの122～124に分かれる。口縁形態別では、Ⅰ類は118～121、Ⅱ類は116・117、Ⅲ類は122・123、Ⅳ類は124である。高台形態別では、平高台は116～121で、ヘラミガキは粗い。輪高台は122～124で、ヘラミガキは外面底部を除く全面に密に施す。

2号窯灰原出土遺物（図34～37）須恵器、緑釉陶器素地、緑釉陶器がある。焼成は土師質・須恵質・瓦質があるが、須恵質のものが多い。

125～144は須恵器である。125～132は杯A。内面口縁部に弱い稜線を持つ129～132と稜線を持たない125～128がある。126は他に比べて器高がやや低い。底部はいずれもヘラ起こし。133は杯B底部。火膨れにより底部が厚くなっている。

134は大型の蓋。緑釉陶器素地で輪高台状のつまみを持つ蓋の可能性もあるが、ヘラミガキが認められないことから須恵器とした。

135・136は鉢D。口縁端部は外側につまみ出すようにして面を成す。外面底部は回転糸切り未調整。136は外面底部から口縁部まで降灰が掛かる。

137～139は壺M。いずれも底部は回転糸切り未調整。140・141は壺L。142～144は壺N。

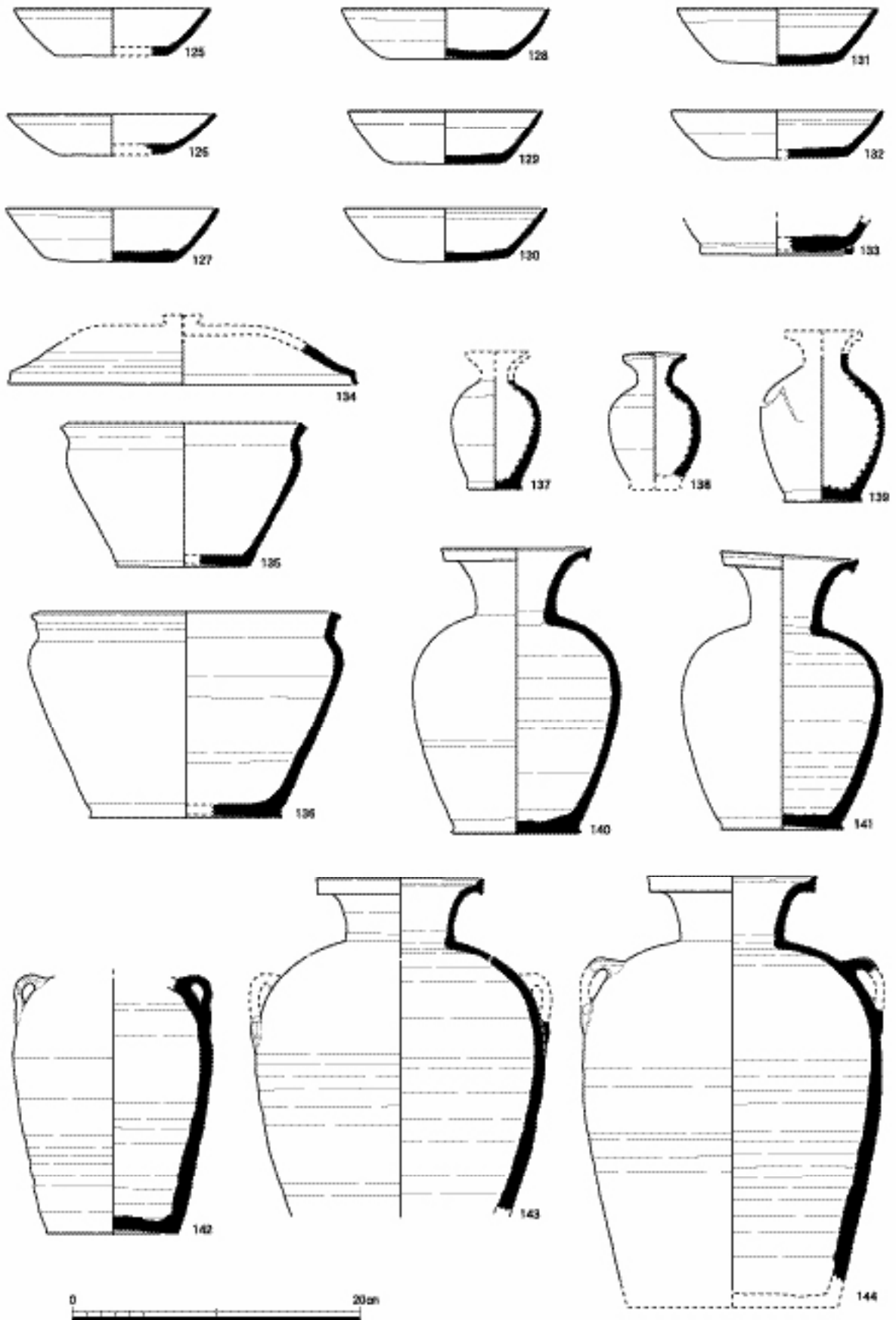


图 34 2号窑灰原出土须惠器实测图 (1:4)

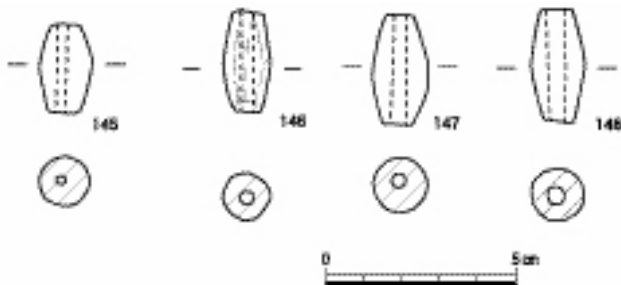


図 35 2号窯灰原出土土錘実測図(1:2)

いずれも底部は回転糸切り未調整である。

145～148は土錘。長さから2種類に分かれる。やや短い145は2.4 cm、146は2.6 cm、やや長い147・148は3.0 cmである。重量は145が3.9 g、146は4.3 g、147は5.7 g、148は5.8 gを測る。146のみヘラケズリによって面取りを行う。

う。

149～299は緑釉陶器素地である。149～183は椀。口径別にみると、9.0～11.4 cmの149～152、量的に最も多い12.5～14.5 cmの153～164・172・176、15.5～16.0 cmの165～171・173～175、17.0～20.0 cmの177～183の4つに分かれ、口径が20 cmを超える椀はない。口縁形態別では、Ⅰ類は149～151・165～169・177・178・180～183、Ⅱ類は152～156・158～162・164・170～174、Ⅲ類は163・175・176、Ⅳ類は157・179である。高台形態別では、平高台は153～160・165～171・177～180、輪高台は152・164・173～176・181・182、蛇の目高台は161～163・172・183である。149～151は回転糸切り未調整である。口縁形態Ⅲ類の椀は、高台は輪高台が多いが、163は蛇の目高台で少数である。ヘラミガキは小型の椀の149～151には施さない。これ以外は口径の大小に関係なく高台形態と相関関係があり、平高台のものはヘラミガキが全体に粗く、輪高台の椀は内外面共に隙間なく密に施す。蛇の目高台の椀も密に施すが、輪高台の椀と比べるとやや粗い。

184は稜椀。高台は輪高台で、ヘラミガキはやや粗く施す。体部下半に「×」印のヘラ記号がある。

185～219は皿。口径別にみると、13.5～14.5 cmの185～213と15.0～16.0 cmの214～219に分かれる。口縁形態別では、197～212はⅠ類、185～196はⅡ類、213～218はⅢ類、219はⅤ類である。Ⅰ類が量的には多い。高台形態別では、平高台は185～213、輪高台は215～219、蛇の目高台は214である。口縁形態Ⅲ類の皿の高台はほとんどが輪高台であるが、例外的に213が平高台、214は蛇の目高台である。口縁形態Ⅲ類の皿で平高台はこの1点のみ、蛇の目高台はこの他にもう1点出土するのみである。ヘラミガキの粗密は、口径の大小に関係なく高台形態と相関関係があり、平高台の皿のものは粗く、輪高台のものは隙間なく施しているものが多い。

220は狭縁段皿、221・222は段皿。222は外側にも段が付く。いずれも高台は輪高台で、221・222は他の輪高台よりも内側の削り込みが深い。ヘラミガキは外面底部を除き密に施す。221高台端部はヘラケズリ後にナデてやや丸みをおびる。

223は香炉蓋。透かし孔がなく、合子蓋の可能性もある。224・225は香炉。いずれも外面に丁寧なヘラミガキを施す。224は外面底部から体部にまで降灰が掛かる。

226は三足盤。ヘラミガキは内面のみに施し、密度も1号窯出土の三足盤と比べるとやや粗く、外面底部には降灰が掛かる。227・228は耳皿。228の方がやや大きい。いずれもヘラミガキは施さない。外面底部は回転糸切り未調整。

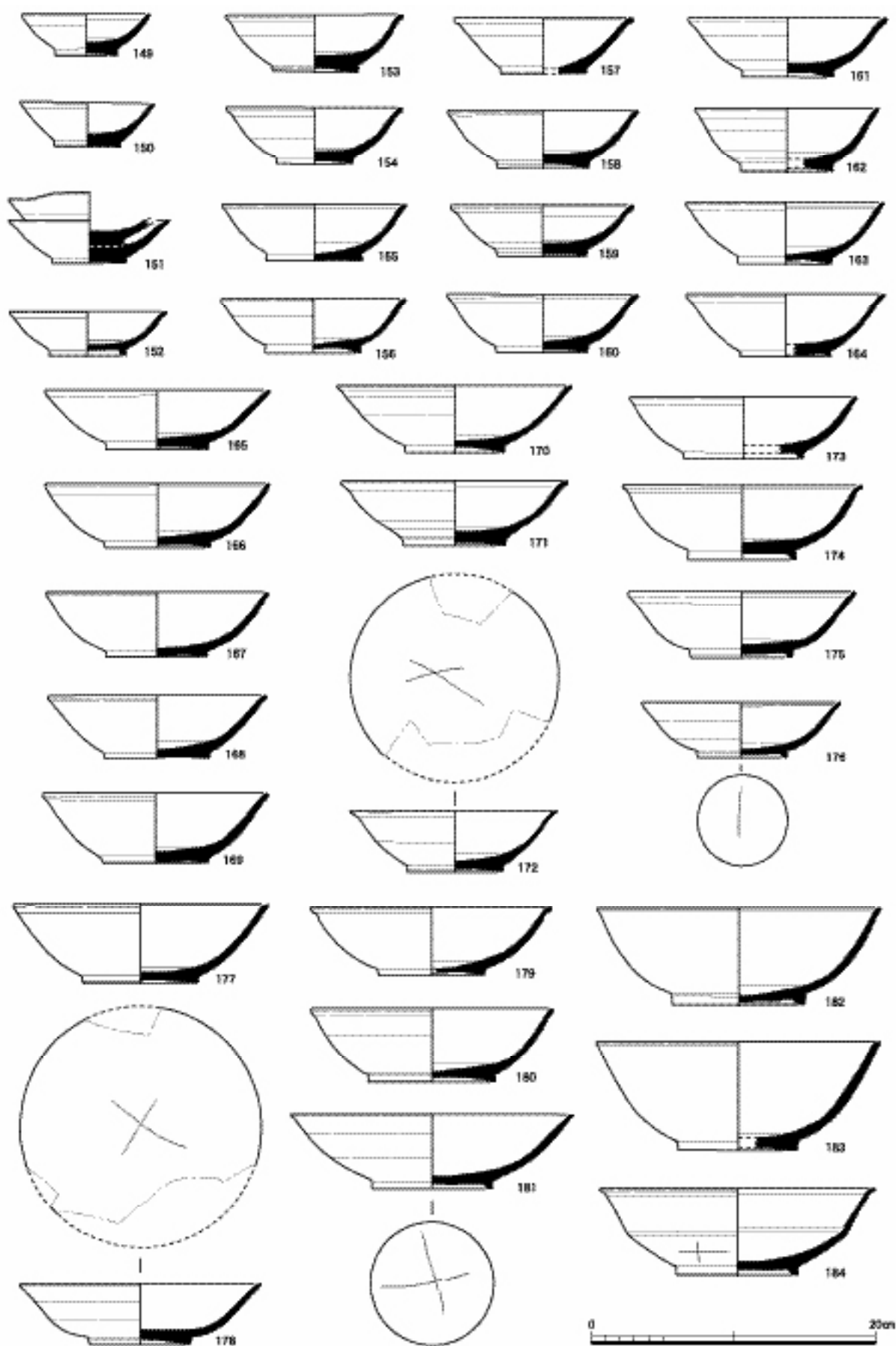


図36 2号窯灰原出土緑釉陶器素地実測図1 (1:4)

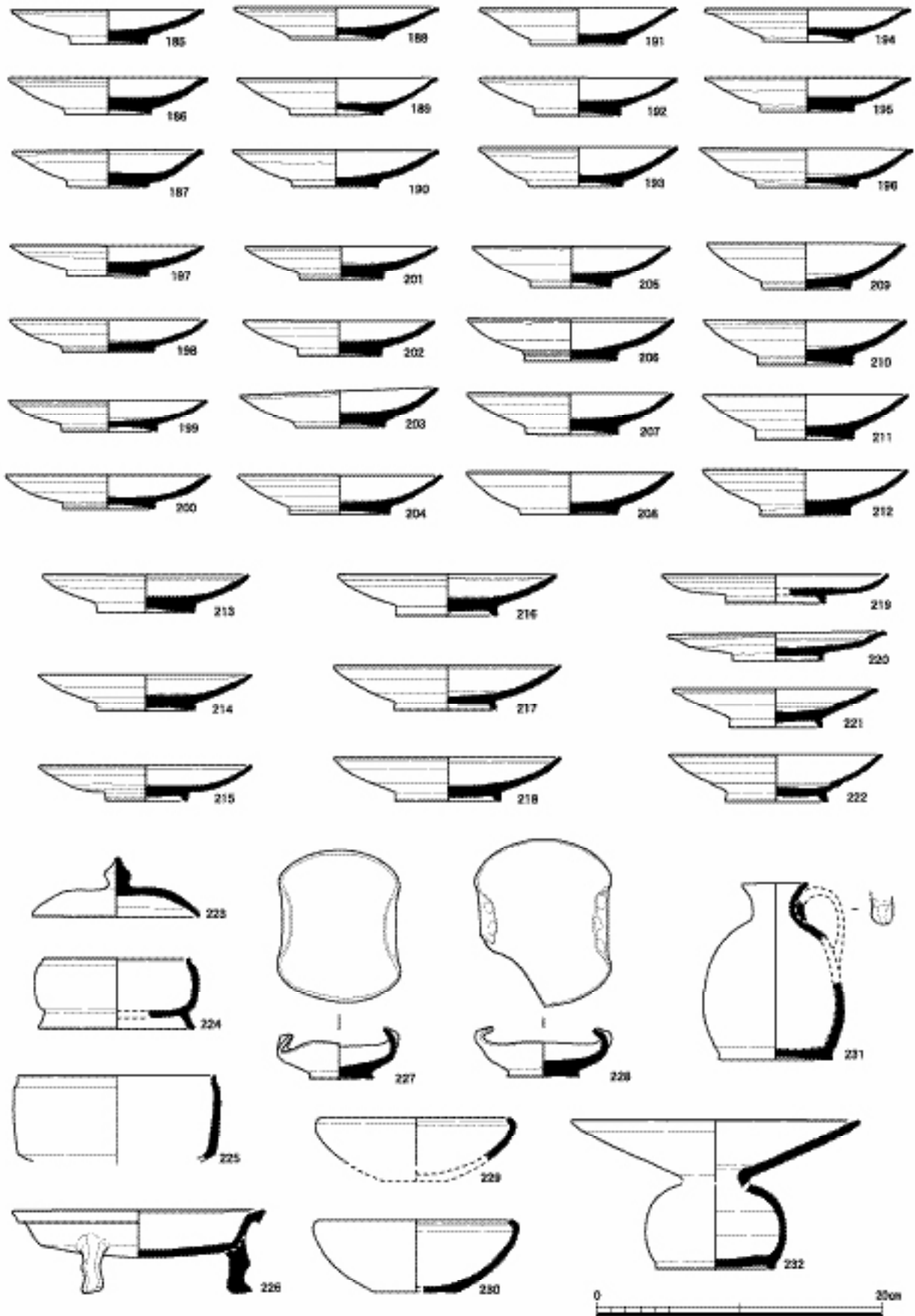


図 37 2号窯灰原出土緑釉陶器素地実測図2 (1:4)

229・230 は鉢 A。230 は外面底部を除く全面に丁寧なヘラミガキを施す。いずれも内面に降灰が掛かる。

231 は取手付瓶。底部を除く外面に比較的丁寧なヘラミガキを施す。外面底部は回転糸切り未調整。232 は唾壺。口縁部内外面と外面体部に丁寧なヘラミガキを施す。口縁部内面に降灰が掛かる。

2号窯灰原出土の陰刻文緑釉陶器素地（図版 39、図 38） 2号窯の灰原からは数種類の陰刻文を施した緑釉陶器素地が出土している。器形には香炉蓋、稜椀、皿、耳皿、椀がある。椀・皿の口縁形態は小型の椀 244 を除き、すべてⅢ類。高台形態はすべて輪高台。ヘラミガキはいずれも丁寧に施す。出土点数は小片まで含めて 152 点で全体の出土量と比べると極めて少ない。

233 は香炉蓋。天井部に花文 B 類と蝶文を施す。

234～237 は稜椀。内面口縁部に蝶文を施す。

238～240 は口縁形態Ⅲ類の皿。内面口縁部に蝶文を施す。241・242 がこれらの底部になると思われ、内面底部に花文 D 類を施す。

243 は耳皿。内面口縁部に花文 A 類、底部に花文 B 類を施す。

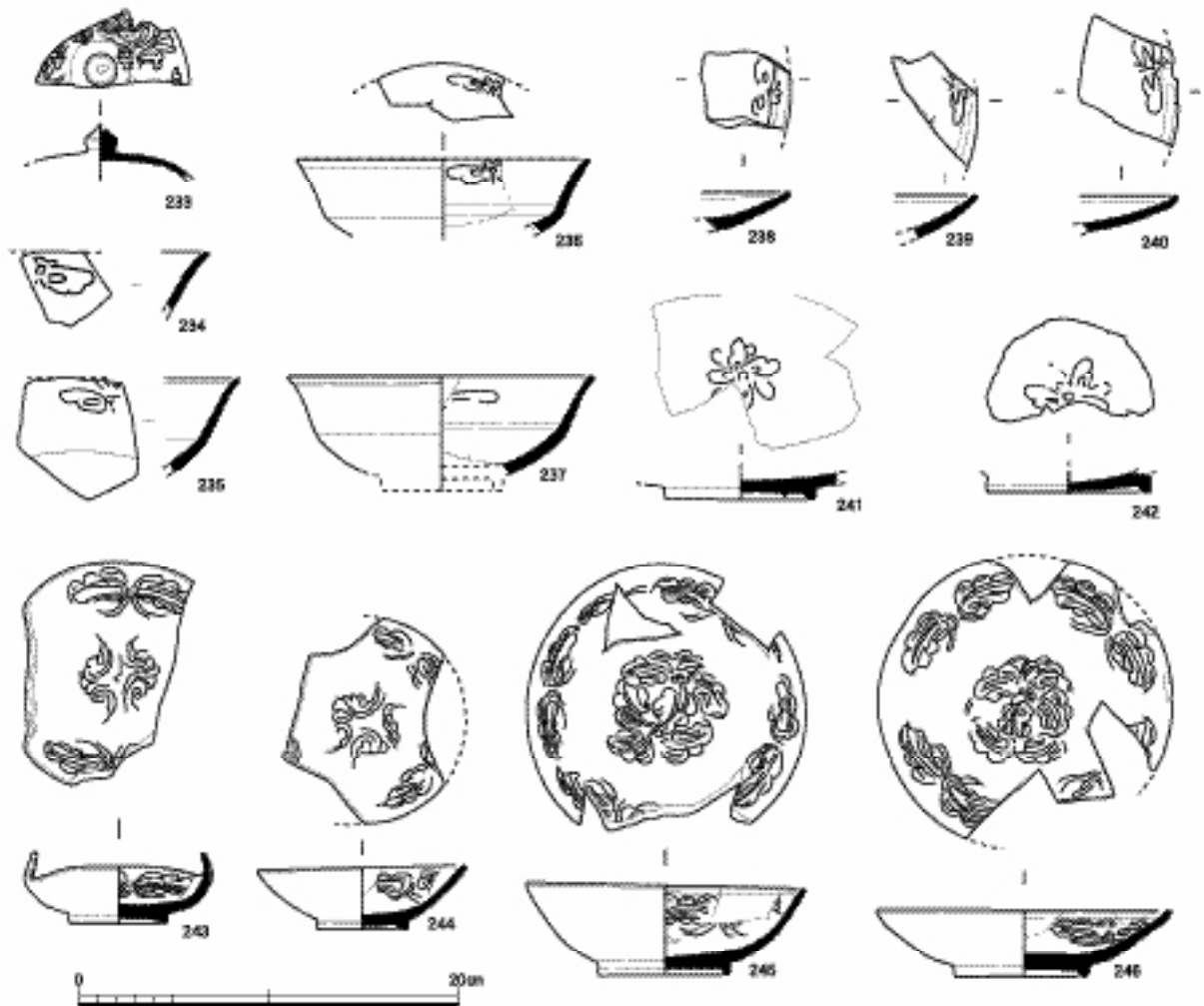


図 38 2号窯灰原出土陰刻文緑釉陶器素地実測図（1：4）

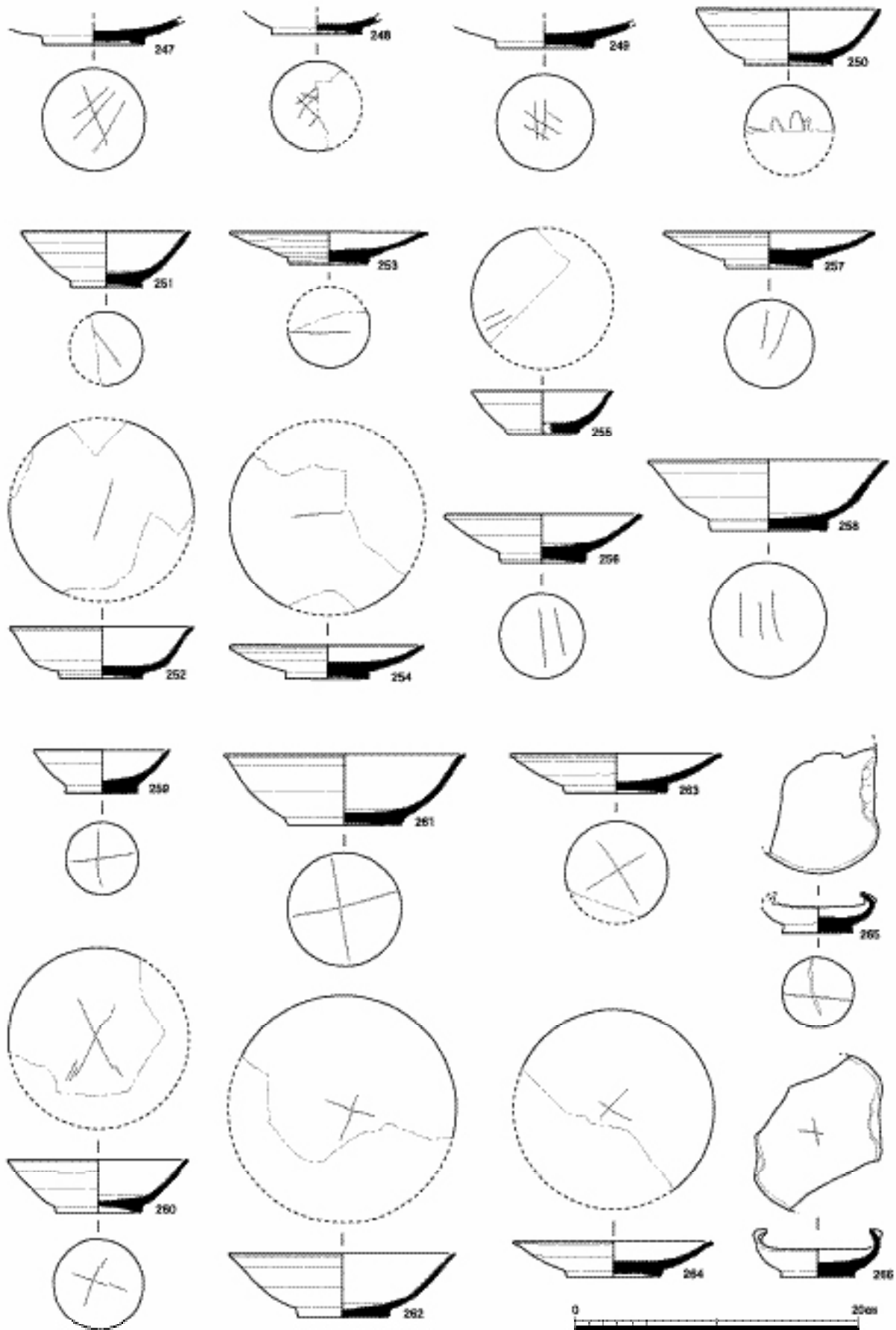


図 39 2号窯灰原出土ヘラ記号緑釉陶器素地実測図1 (1:4)

表 12 器形別ヘラ記号集計表

器形 \ ヘラ記号	×	┆			キ	キ	卍	卍	その他・不明	合計
碗	43	8	3	1	0	0	0	0	3	58
皿	127	4	22	0	1	2	0	0	16	172
不明(高台部のみ)	64	2	10	0	0	1	1	2	12	92
合計	234	14	35	1	1	3	1	2	31	322

表 13 2号窯出土ヘラ記号碗の口径・口縁形態集計表 表 14 2号窯出土ヘラ記号皿の口径・口縁形態集計表

口径 (cm) \ 口縁形態	~12.9	13.0 ~14.9	15.0 ~16.0	16.1~	不明	合計
碗Ⅰ類	9	16	4	10	0	39
碗Ⅱ類	0	2	0	0	0	2
碗Ⅲ類	0	2	0	0	0	2
不明	0	0	0	0	15	15
合計	9	20	4	10	15	58

口径 (cm) \ 口縁形態	~12.9	13.0 ~14.9	15.0 ~16.0	16.1~	不明	合計
皿Ⅰ類	0	34	6	0	11	50
皿Ⅱ類	0	83	20	0	17	120
皿Ⅲ類	0	0	2	0	0	2
不明	0	0	0	0	0	0
合計	0	117	27	0	28	172

244 は小型の碗。陰刻文の構成は 243 の耳皿と同じ。

245 は口縁形態Ⅲ類の碗。内面体部に花文A類、内面底部に花文C類を施す。

246 は口縁形態Ⅲ類の皿。内面体部に花文A類、内面底部に花文C類を施す。

文様構成や口縁部の形態から、245 の碗と 246 の皿がセットになると考えられ、稜碗とセットになるのは 238 ~ 240 の皿と思われる。

2号窯灰原出土のヘラ記号緑釉陶器素地(図版 40、図 39、表 12 ~ 14) 2号窯の灰原からは、ヘラ記号を施した緑釉陶器素地が 322 点出土している。須恵器にはヘラ記号を施したものは無い。器形では、碗・皿・耳皿などがある。ほとんどは碗・皿類(耳皿を含む)で、碗が 58 点、皿が 172 点、高台部のみが残るものに 92 点ある。高台形態別では、ほとんどが平高台で、輪高台・蛇の目高台は少ない。ヘラ記号には、格子状(247 ~ 249)、螺旋状(250)、1本線(251 ~ 254)、2本線(255 ~ 257)、3本線(258)、「×」印(259 ~ 266)などがあり、「×」印が多数を占める。施される部位は、外面底部が最も多く、内面底部、内外面底部、外面体部、内面体部などに施すものもある。内外面にヘラ記号を施すものなどは、緑釉を施釉しない事を前提に製作された可能性も考えられる。

ヘラ記号と細部の特徴が一致する土器群(図 40・41) ヘラ記号をもつ緑釉陶器素地には、ヘラ記号の種類・大きさ・施された部位などが類似するものがあり、この中には土器の器形・器壁の厚さ・口縁形態・高台形態・ヘラミガキの施し方・焼成状態・降灰が掛かる部位などの要素が合致する土器がある。この中には、重ね焼痕跡から焼成時に上下に重なっていた事がわかるものもある。これらの要素から、共通性が認められる土器群としてグルーピングできたものは、碗で 5 群、皿では 8 群が確認され、それぞれは同一工人によって製作された可能性が考えられる。

ヘラ記号については、様々な議論があり定説を見ていない。大きくは製作段階の数量管理の為とするものと、労働編成を反映しており窯詰め段階を含めた工人識別の為とする考えに分かれる。⁵⁾

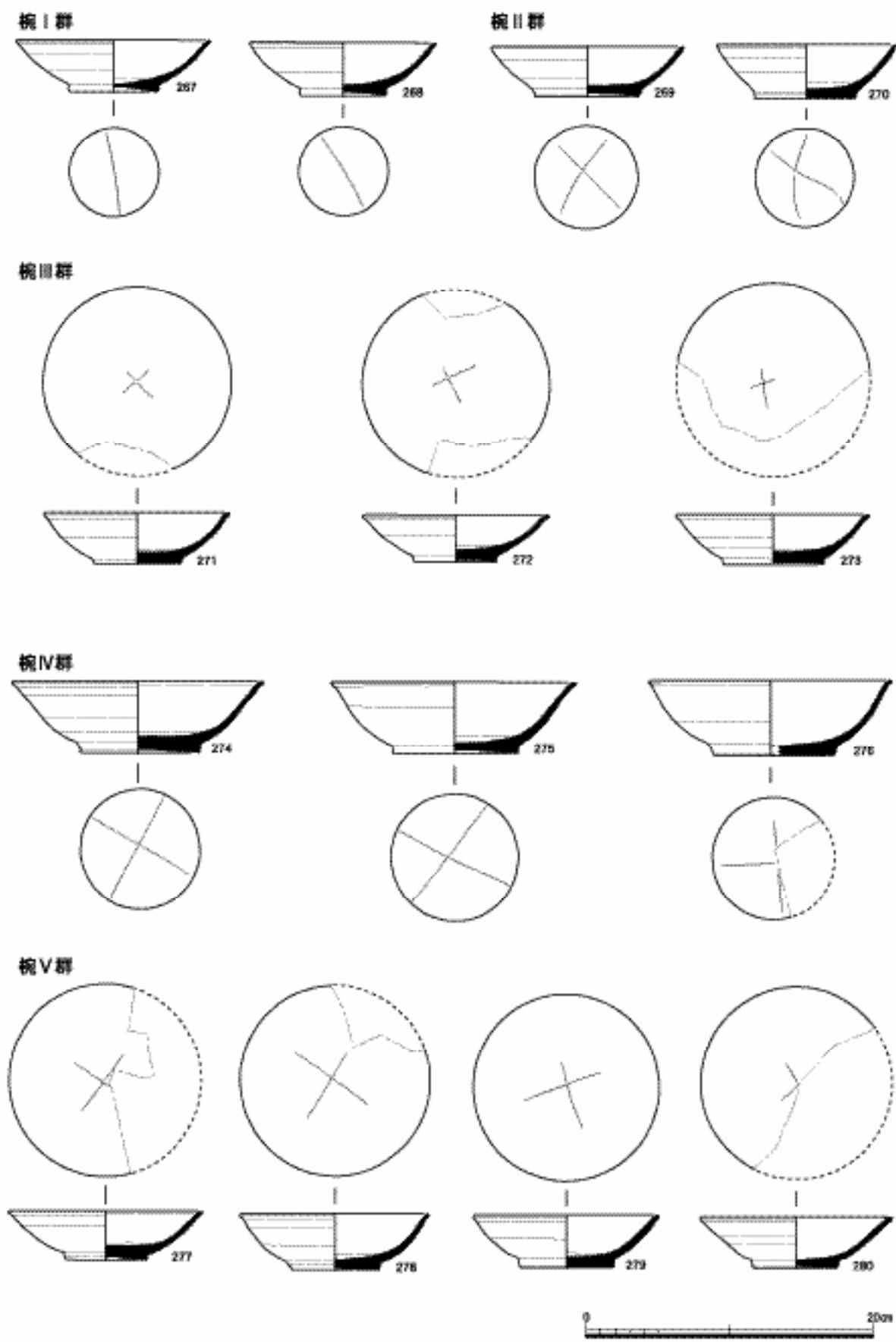


図 40 2号窯灰原出土ヘラ記号緑釉陶器素地実測図 2 (1 : 4)

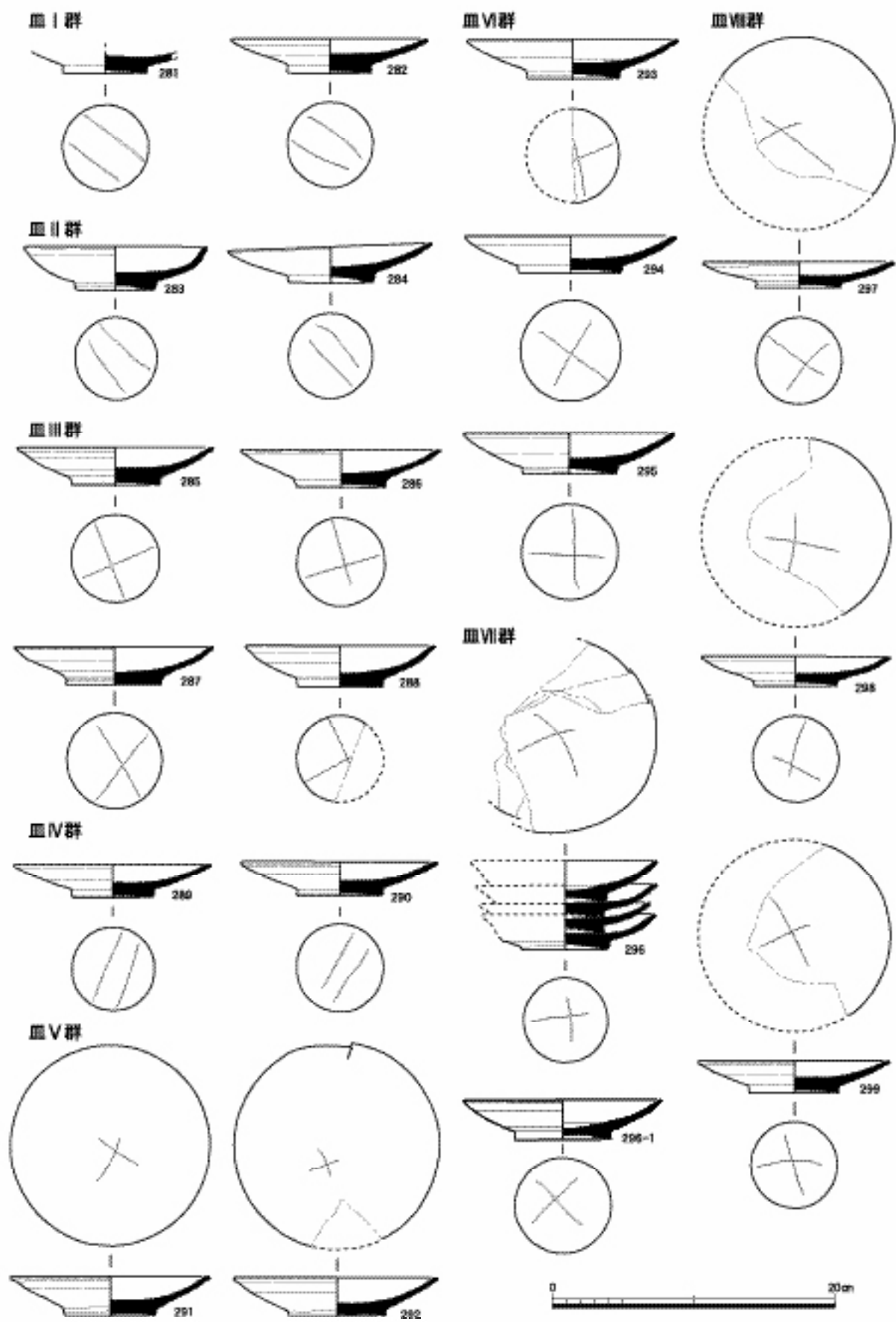


図41 2号窯灰原出土ヘラ記号緑釉陶器素地実測図3 (1:4)

今回の遺物のあり方からだけではその結論を出す事はできないが、同じヘラ記号が施され似た特徴を持つ土器が軸着して出土している点からは、窯詰め段階でも一定の意味をもっていた可能性はある。また、1・2号窯ともに須恵器にヘラ記号が施されたものがない事は、注目される。

椀Ⅰ群の267と268は、外面底部に1本線のヘラ記号を施す椀。ヘラ記号以外の共通点として、口縁形態がⅠ類である事、外面のヘラミガキがロクロ回転により、単位幅が4mmと広がる事などが挙げられる。

椀Ⅱ群の269と270は、外面底部に「×」印のヘラ記号を施す椀。ヘラ記号の「×」は一辺が直線、一辺は緩やかな曲線を描く。ヘラ記号以外の共通点として、口縁形態がⅠ類である事、外面底部に回転糸切り痕が残る事、ヘラミガキが極めて粗く、外面は回転ヘラミガキが4条巡るのみである事などが挙げられる。270は焼け歪みにより本来の口径よりもやや小さくなっている。

椀Ⅲ群の271～273は、内面底部にやや小さめな「×」印のヘラ記号を施す椀。ヘラ記号は「×」の一辺がもう一辺に対して長い。ヘラ記号以外の共通点として、口縁形態がⅡ類である事、外面のヘラミガキが密度がやや粗く、幅4mmの回転ヘラミガキの後に幅2mmの手持ちヘラミガキを施す事、外面底部の削り込みが浅い事などが挙げられる。

椀Ⅳ群の274～276は、外面底部いっばいに「×」印のヘラ記号を施す椀。ヘラ記号以外の共通点として、口縁形態がⅠ類である事、外面のヘラミガキが体部下半は回転ヘラミガキのみで粗く、体部上半は回転ヘラミガキと手持ちヘラミガキを併用しやや丁寧に施す事、外面底部の回転ヘラケズリによる削り込みが浅い事などが挙げられる。

椀Ⅴ群の277～280は、内面底部に「×」印のヘラ記号を施す椀。ヘラ記号以外の共通点として、口縁形態がⅡ類である事、外面ヘラミガキの密度がやや粗く幅3mmの手持ちヘラミガキを施す事、外面底部の削り込みが浅い事などが挙げられる。

皿Ⅰ群の281と282は、外面底部に2本線のヘラ記号を施す皿。ヘラ記号以外の共通点として、外面底部の回転ヘラケズリによる削り込みは浅く、回転ヘラケズリ後ナデを施す事、焼成が硬質である事などが挙げられる。281の外面底部と282の内面底部重ね焼き時の軸着痕から、焼成時に上下に重ねられていた事がわかる。

皿Ⅱ群の283・284は、外面底部に2本線のヘラ記号を施す皿。283は焼け歪みによる変形が著しい。ヘラ記号以外の共通点として、口縁形態がⅠ類である事、外面底部は回転ヘラケズリによる削り込みが深い事などが挙げられる。283の外面底部と284の内面底部に残る重ね焼き時の軸着痕から、焼成時に上下に重ねられていた事がわかる。

皿Ⅲ群の285～288は、外面底部にいっばいに「×」印のヘラ記号を施す皿。ヘラ記号以外の共通点として、口縁形態がⅡ類である事、外面底部に回転糸切り痕が残る事などが挙げられる。

皿Ⅳ群の289・290は、外面底部に2本線のヘラ記号を施す皿。ヘラ記号以外の共通点として、口縁形態がⅠ類である事、外面のヘラミガキが回転ヘラミガキにより粗く施した後に口縁部のみ手持ちヘラミガキを施す事などが挙げられる。

皿Ⅴ群の291・292は、内面底部に小さな「×」印のヘラ記号を施す皿。ヘラ記号以外の共通

点として、口縁形態がⅡ類である事が挙げられる。また、291・292は共に内面の降灰付着範囲が同じであり、窯内で上下に重ね焼きされていた事が窺える。

ⅢⅥ群の293～295は、外面底部に大きく「×」印のヘラ記号を施す皿。ヘラ記号以外の共通点として、口縁形態がⅠ類である事、外面体部のヘラミガキが回転ヘラミガキによって密に施す事などが挙げられる。

ⅢⅦ群の296は、4枚が釉着した状態で出土している。内外面底部にやや小さく「×」印のヘラ記号を施す皿。一番上の296-1は外すことができるため、内外面底部に「×」印が施されていることが確認できる。2枚目の内面と一番下の外面底部にも「×」印がある事から、いずれの皿も内外面に「×」印が記されていたと考えられる。ヘラ記号以外の共通点として、口縁形態がⅠ類である事、外面底部の回転ヘラケズリによる削り込みが深い事、ヘラミガキがやや粗い事などが挙げられる。

ⅢⅧ群の297～299は、内外面底部に「×」印のヘラ記号を施す皿。「×」印を構成する2辺は長短がある。ヘラ記号以外の共通点として、口縁形態がⅠ類である事、外面底部の回転ヘラケズリが浅く底部はほぼ平坦である事などが挙げられる。

3. 小結

以上に述べたように灰方町地区では、平安時代の須恵器と緑釉陶器素地を焼成した窖窯2基と近代の堰堤（砂防ダム）1基の調査を行った。特に平安時代の窖窯については、洛西地域では本格的な発掘調査は初めてのものであり、当時の緑釉陶器生産を知る上で極めて貴重な成果を得る事ができた。成果の詳細なまとめについては第6章において述べる。

註

- 1) 窯の構造、部分名称は以下の文献に従った。望月精司「須恵器構造に関する構造名称や部位名称及び機能」『須恵器窯構造資料集2』窯跡研究会 2004年
- 2) (財)大阪府文化財センター『津田遺跡』大阪府文化財センター調査報告書 第175集 2008年
- 3) 『京都府遺跡調査報告書第11冊 篠窯群Ⅱ』(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 1989年
- 4) 器形分類は基本的には以下の文献に従った。『平城宮発掘調査報告Ⅺ』奈良国立文化財研究所30周年記念学報(学報第40冊)奈良国立文化財研究所 1982年
- 5) ヘラ記号を「生産段階の数量確認とする」とした代表的なものに以下のa・bが、「労働編成を反映する」とした代表的なものに以下のc・dがある。
 - a. 田辺昭三『陶邑古窯跡群』Ⅰ 平安学園 1966年
 - b. 宇野隆夫「篋記号の変化と意義」『越中上末窯』富山大学人文学部考古学研究室 1989年
 - c. 中村 浩「須恵器生産に関する一試考 一和泉陶邑窯における陶工組織について」『考古学雑誌』
 - d. 野上丈助「高蔵寺地区・陶器山地区出土のヘラ記号とその意義」『陶邑』Ⅴ 大阪府教育委員会 1980年

第4章 南春日町片山遺跡（南春日町地区）

1. 遺構（図版13）

調査地は標高 250 m を頂点とする丘陵裾部の沖積扇状地上に位置し、地形は北西から南東に傾斜する。調査地の南側には、善峰川の支流の小河川が北東から南西に流れ、ここより約 200 m 下流で善峰川に合流する。字名は調査区のある丘陵とその裾部を「片山」、善峰川支流の小河川のある谷が「深谷」となる。調査区は地形の変化に応じて 1～4 区の 4 つに分けて設定した。さらに 2 区は用水路が間に存在する為、2-1 区と 2-2 区に分けて調査を行った。調査前の土地利用は、1 区・2-1 区は竹林、2-2 区・3 区・4 区は水田であった。1 区は東へ伸びてくる丘陵の端部、2～3 区は丘陵裾部の台地上、4 区は西側に善峰川の支流を望んでおり、台地から谷地形への変化点に位置する。1 区は標高 95 m 前後に位置している。1 区と 2・3 区の間は比高差約 4 m の崖面が存在し、2 区は標高 88 m 前後、3 区は標高 90 m 前後に位置する。2 区と 4 区の間も農道を挟んで約 3 m の比高差があり、4 区は標高 85 m 前後に位置する。

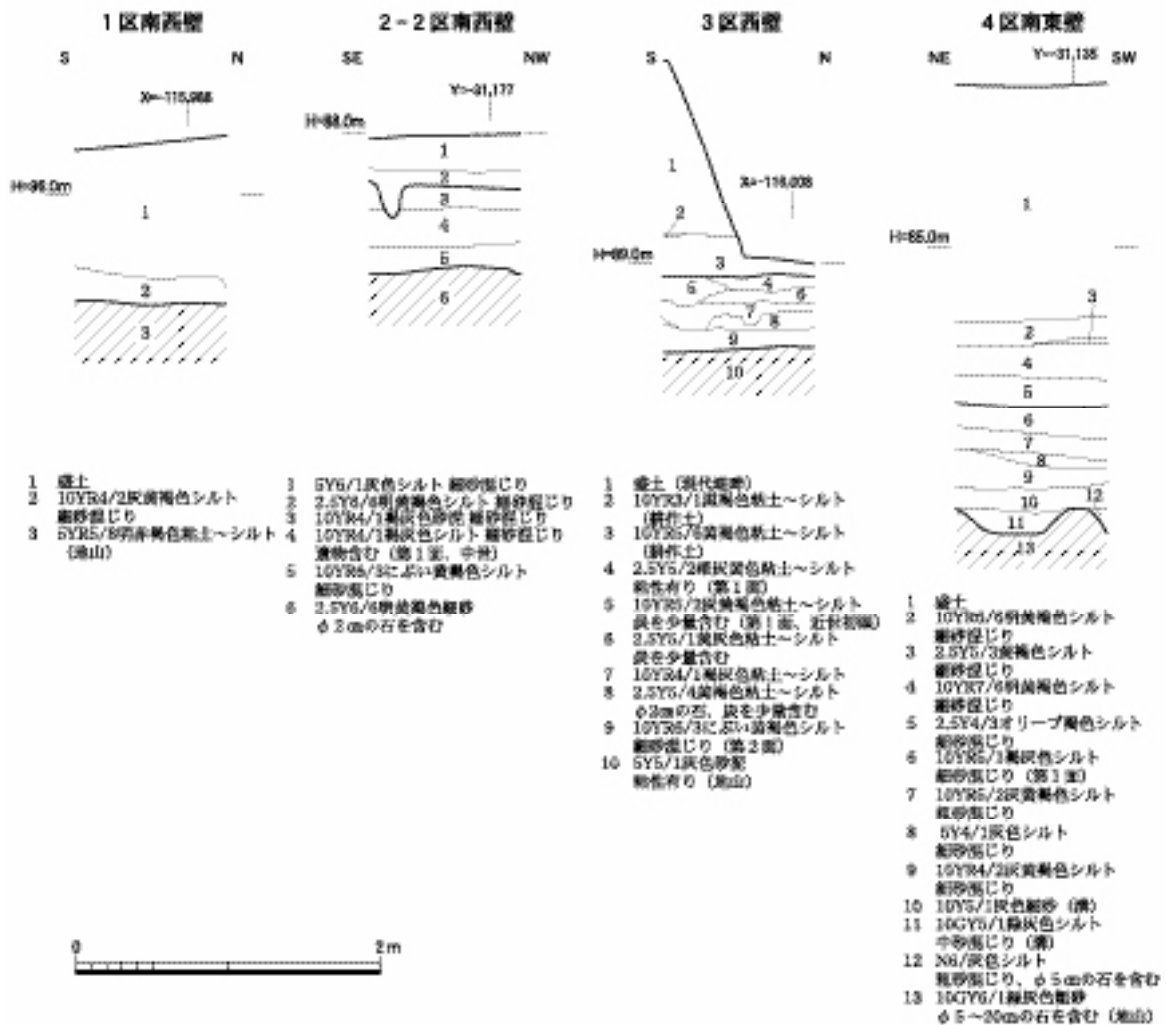


図 42 南春日町片山遺跡 断面柱状図 (1 : 50)

(1) 基本層序 (図 42・43)

1 区の基本層序は、中央部で地表下 0.8 m までが竹林に伴う盛土である。この盛土は厚さ約 1 cm 単位で砂と粘土の互層になっている。これより下には、近世の水田耕作に伴う灰黄褐色シルトを主とする土が約 0.2 m 堆積し、これ以下が明赤褐色粘土の地山となる。

2 区の基本層序は、地表下 0.2 m までが灰色シルトの現代耕作土、この下層が明黄褐色シルト、地表下 0.3 m で褐灰色砂泥層の上面で第 1 面を検出した。この層には 7・9・12～13 世紀代の遺物が含まれる。地表下 0.5～0.75 m は褐灰色シルトが、地表下 0.75～0.9 m までにはぶい黄褐色シルトが堆積する。これらの層には遺物の出土がなく時代は不明である。これより下はやや固く締まる明褐色細砂の地山層となる。

3 区の基本層序は、2 区と 3 区の間には比高差 2 m 以上の段差があり、ここには 1990 年代に行われた圃場整備時に作られた大畦畔がある。この大畦畔の盛土が地表下 1.1 m までである。地表下 1.1～1.4 m までが圃場整備以前の近代から現代の耕作土。地表下 1.4～1.55 m までは灰黄褐色粘土または暗灰黄褐色粘土などで、この上面で第 1 面を検出した。地表下 1.55～1.75 m までは黄灰色や褐灰色のシルト混じりの粘土層が堆積する。地表下 1.8～1.9 m までは褐灰色シルト層で、この上面で第 2 面を検出した。なお、2-2 区で第 1 面として調査を行ったのはこの層の上面であるが、3 区ではこの層は北方の山側に行くに従い堆積が薄くなっており、地表下 1.9 m より下の地山である灰色砂泥層上面で第 2 面を検出した。

4 区の基本層序は、地表下 1.6 m までが 1990 年代に行われた圃場整備時の盛土および耕作土。地表下 1.6～2.1 m までは明黄褐色シルトやオリーブ褐色シルトなどが堆積する。これらは、中世から近代の耕作土と考えられる。地表下 2.1～2.35 m までは褐灰色シルトで、この上面で第 1 面の 13 世紀水田面を検出した。地表下 2.35～2.8 m までは細砂混じりの灰黄褐色シルト、灰色シルトなどが堆積する。これらの層から出土する遺物はいずれも 12 世紀代の土器類であり、地表下 2.8 m 以下が礫を多量に含む緑灰色粗砂の地山となり、土石流性の堆積とみられる。

(2) 1 区 (図版 14・30、図 43)

調査区は平面十字形に設定し長辺 35 m、短辺 15 m を測る。南北に長い地区を A 区、短い地区を B 区とした。A 区と B 区の交点西側では近世遺構の水田耕作に伴う溝や水平面を確認した。また遺構面は、A 区と B 区の交点付近で検出した溝 77 より南側で急激に地形は下がり、現在 1 区と 2 区の間にある比高差 4 m の崖面は本来この付近から始まっていた事が判明した。なお地山は、A 区溝 77 の南側では掘削深度が深くなりすぎる為を確認していない。

溝 77 (図 44) 調査区中央やや南側で検出した東西方向の溝。溝の北肩は北から南へ段状に落ちており、最大幅 2 m、深さ 1.4 m を測る。北側の肩口を径約 6 cm の杭の痕跡が確認されており、護岸が施されていた事がわかる。埋土は褐灰色の砂泥層で一時期に埋められている。北から南へ下がるもとの地形の変化点に、A 区西部の水田に伴って設けられた溝と思われる。

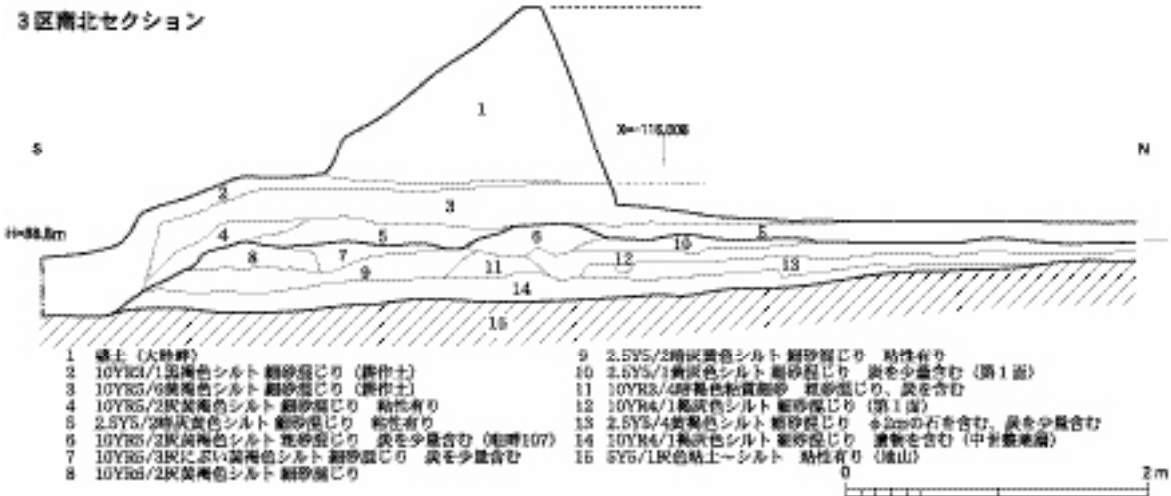
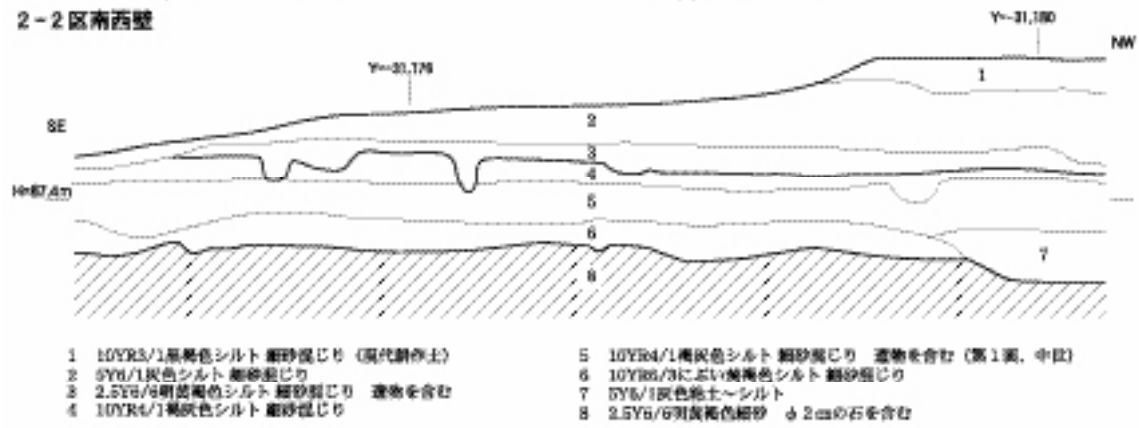
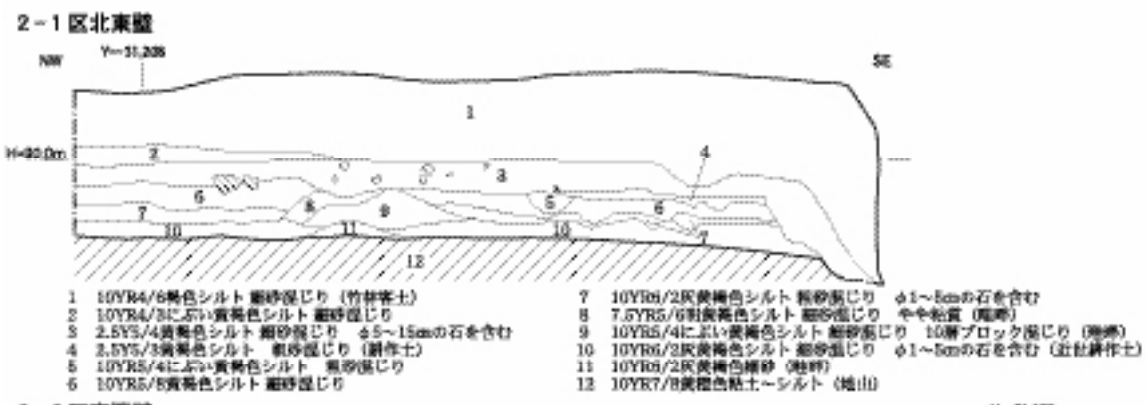
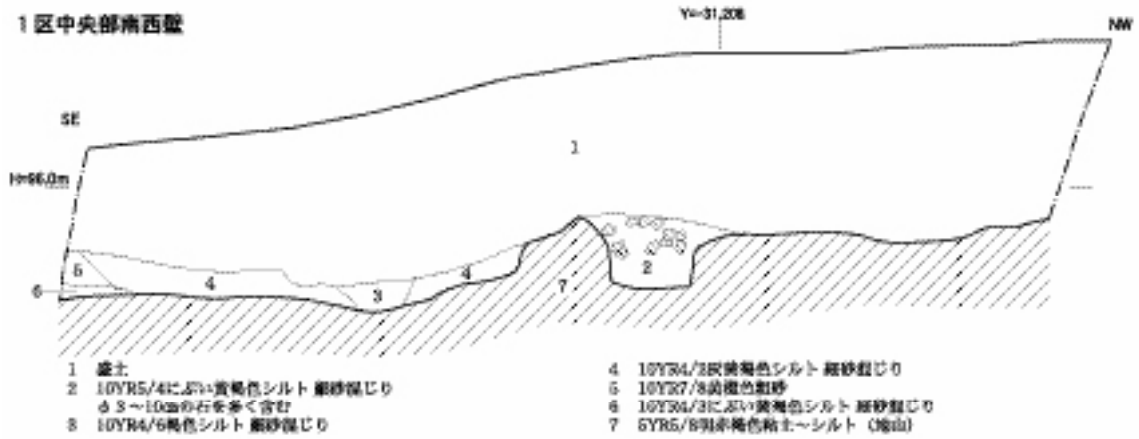


図 43 1~3区断面図 (1:50)

1 区中央部北西壁

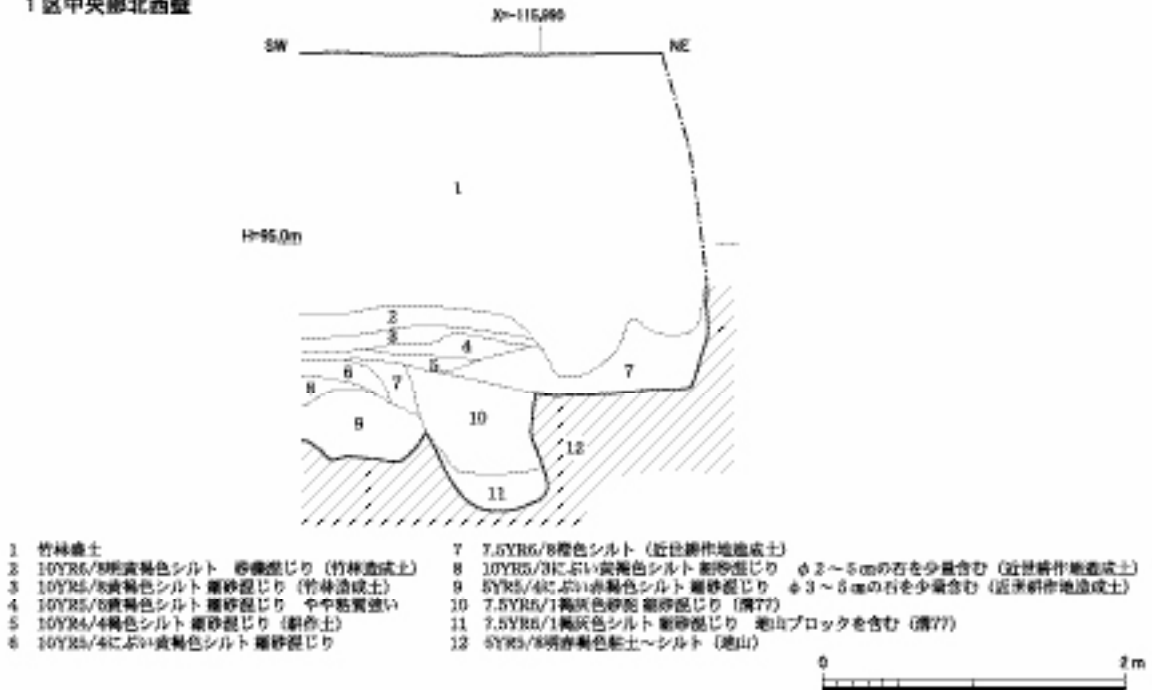


図44 1区溝77断面図(1:50)

溝93 B区の西部、遺構面が西から東へ下がる雛壇状に下がる段境付近で検出した南北方向の溝。幅0.5m、深さ0.2mを測る。溝の両側には耕作土と思われる灰黄褐色砂泥層が堆積しており、検出された位置などから水田の畦畔に伴う溝と考えられる。

(3) 2区 (図版15・16・31、図43・45)

2-1区では、近世の水田を検出した。平面では西から東へ下がる段差を検出しただけであるが、断面では耕作土とそれに伴う畦畔を確認している。丘陵際のこの場所が、近世以降水田として開墾され、近年になって竹林に変化した事が明らかとなった。

2-2区では、2面の遺構面の調査を行った。第1面で検出した主な遺構は、溝1・5などの平面形が緩やかに弧を描く東西方向の溝である。遺構面全体の地形は、北西から南東に緩やかに傾斜しているが、遺構面はこれらの溝を境として、雛壇状に平坦面を作りながら南へ下がっている。溝と溝の間には柱穴などの遺構はなく、地形を利用した水田遺構とその区画溝と考えられる。また、溝11の北西側では一段高くなっており、比高差0.7mの段差となっている。この段差を境として堆積土が変化しており、ここより南東側が水田であったと考えられる。

1) 第1面 (図版15)

溝1 (図47) 調査区中央部で検出した東西方向の溝。幅0.2~0.7m、深さ0.05~0.1mを測る。埋土は灰黄褐色砂泥層である。溝底はほぼ平坦であるが、やや西側の方が低くなる。

溝5 (図47) 調査区西側で検出した東西方向の溝。溝1とは約7m南側で平行し、西側で南へ伸びる部分がある。幅0.2~0.4m、深さ0.15mを測る。埋土は灰黄褐色砂泥層である。溝底はほぼ平坦である。

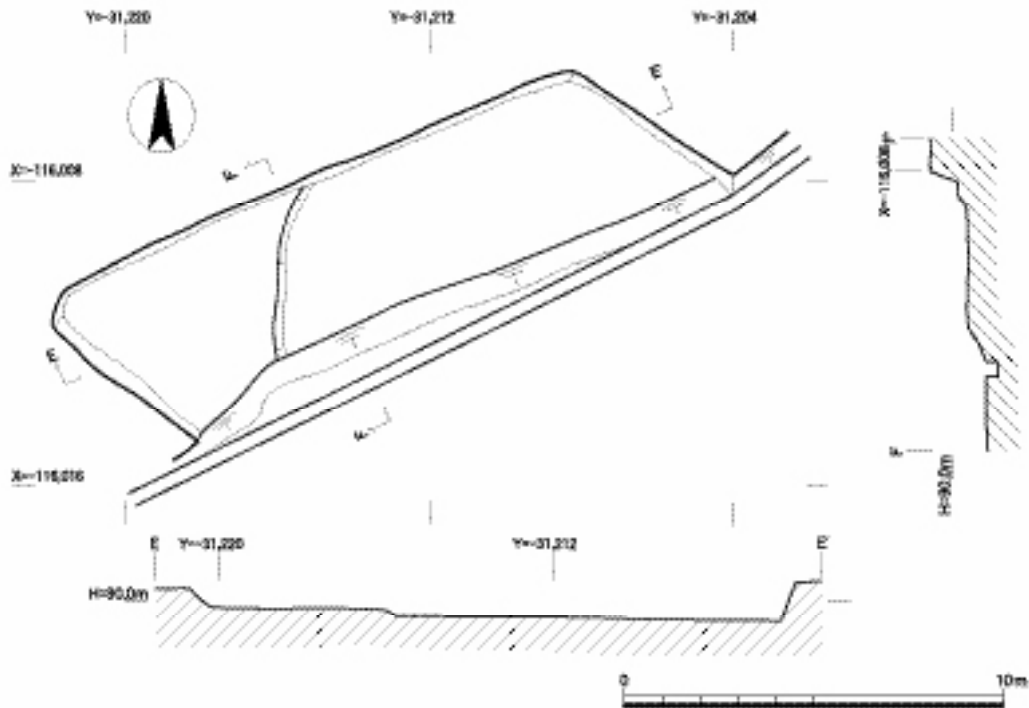


図45 2-1区実測図(1:200)

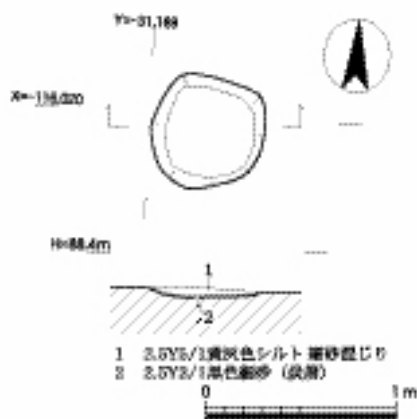


図46 2-2区土坑4実測図(1:40)

溝11(図47) 調査区北西部で検出した北東から南西方向の溝。溝1とは約5m北側で併行する。幅0.5~0.8m、深さ0.1mを測る。溝底はほぼ平坦である。

柱穴群 調査区北東部で径0.2~0.5mの小柱穴群を検出した。柵あるいは小建物の可能性が考えられるが、方向性や間隔からは一定の関係性を見いだしがたく、性格は不明である。

整地層39(図48) 調査区北西部で検出した遺物包含層。一部で第1面構成層との上下関係が確認され、下層にあたる。厚さ0.2~0.4mを測る。上面では炭化物や焼けた土器をまとめて検出している。

炭化物の¹⁴C放射性炭素年代測定を実施したところ、11世紀のものである事が判明した。

土坑4(図46) 調査区の中央部で検出した土坑。径0.6m、深さ0.2mを測る。底面に炭層が堆積する。

2) 第2面(図版16)

溝54(図48) 調査区の西部で検出した東西方向の溝。幅1.1~2.4m、深さ0.2~0.4mを測る。溝の埋土は黒褐色砂泥で一時期に埋められている。溝底は西から東へわずかに低くなる。遺構面の地形は、この溝を境にして山側となる北側で高くなっており、山側からの雨水を排水する為の機能を持っていたものと思われる。第1面で検出した水田以前にも何らかの土地利用があった事を窺わせる。

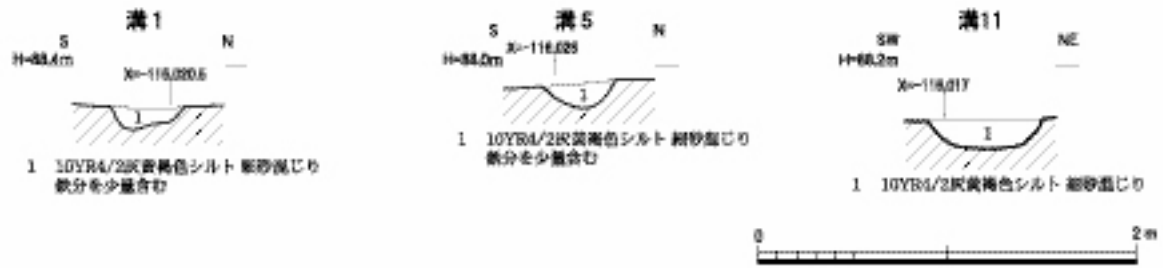


図 47 2-2区溝1・5・11断面図(1:40)

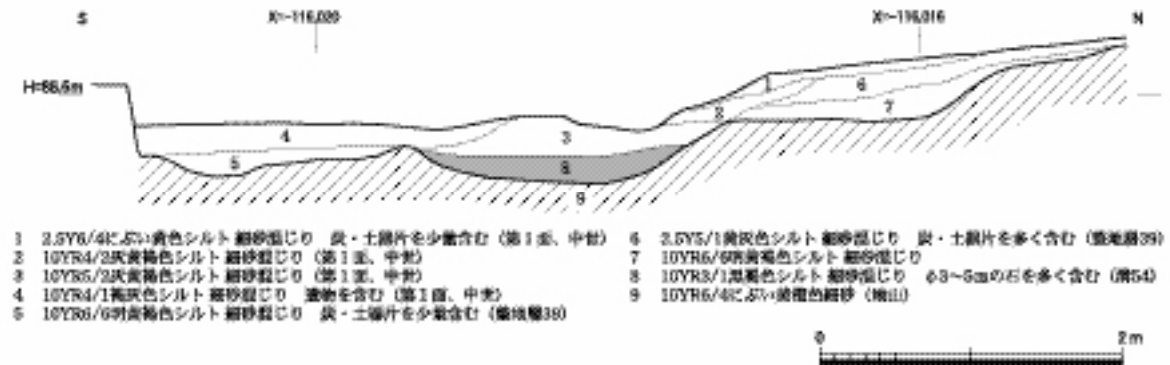


図 48 2-2区 Y=31,204 ラインセクション断面図(1:50)

(4) 3区(図版17・31、図43)

3区では2面の遺構面の調査を行った。第1面は17世紀前半の水田面である。調査区南側で南北方向に長い4つの水田区画を検出した。第2面は地山面で調査区北側で土坑81～84・90などを検出した。2区で第1面を形成していた褐色砂泥層は溝78付近まで確認されたが、堆積は薄く、この上面で溝などの遺構を検出することはできなかった。

1) 第1面

畦畔103～107(図49) 畦畔103～106は南北方向、畦畔107は東西方向の畦畔。幅約0.15mを測る。畦畔によって区画される水田の大きさは南北約15m、東西4～10mを測る。

溝79(図49) 調査区南部で検出した東西方向の溝。幅0.3～0.4m、深さ0.05mを測る。埋土は黄褐色砂泥。溝底は平坦である。

2) 第2面

溝77(図49) 調査区北東部で検出した東西方向から南北方向に屈曲し、平面形がL字形を呈する溝。幅0.3～0.5m、深さ0.1mを測る。埋土は褐色シルト。溝底は平坦である。遺物の出土はない。

溝78(図49) 調査区中央部で検出した東西方向の溝。幅0.3～0.4m、深さ0.2mを測る。埋土は褐色泥土。溝底は平坦である。この溝の北側では水田区画が検出されないことから、水田の山側の端を区画するものと考えられる。遺物の出土はない。

土坑80(図49) 調査区北部で検出した土坑。径1.5m、深さ0.2mを測る。埋土からは炭化

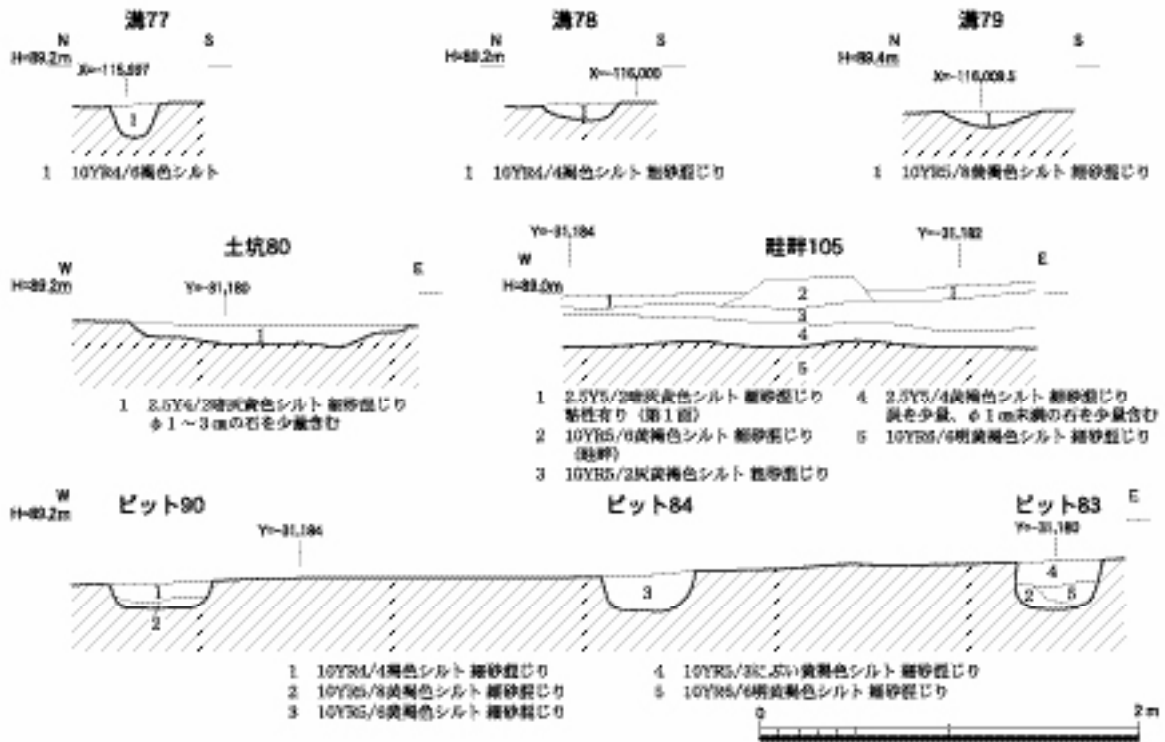


図49 3区溝77～79、土坑80、畦畔105、ピット83・84・90断面図（1：40）

物と共に9世紀代の土器が出土する。

ピット81～84・90（図49）調査区北部で検出した小土坑。径0.4～0.6m、深さ0.2mを測る。埋土からは炭化物と共に9世紀代の土器が出土する。土坑83・84・90は東西に並び柵の可能性もあるが、間隔が不揃いで柱痕跡も認められなかった。

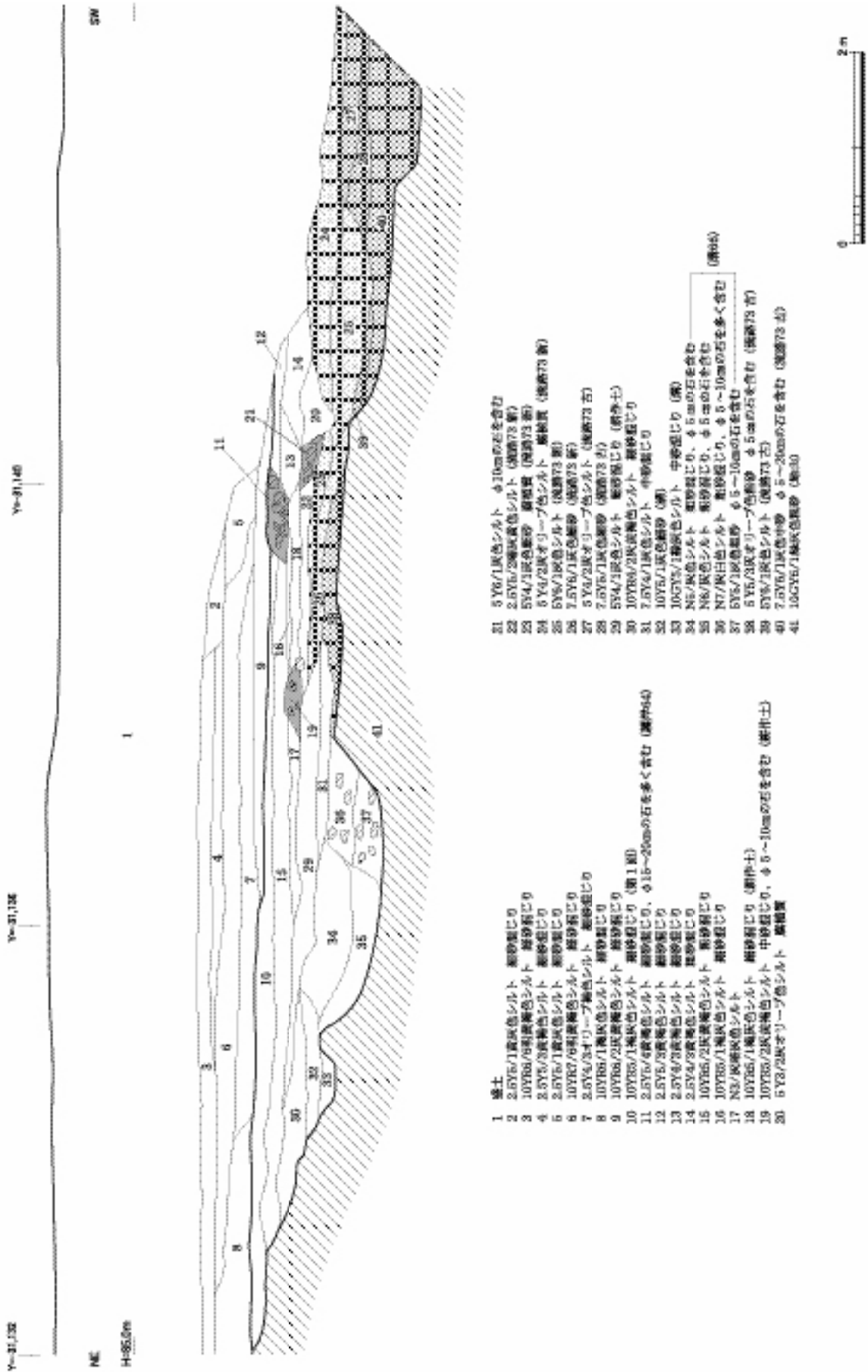
（5）4区（図版18・32、図50）

4区では2面の遺構面の調査を行った。調査区南側には善峯川の支流の小河川が流れており、調査区はこの河川によって形成された北西から南東方向の谷地形の北肩部に当たる。第1面では中世の谷地形を利用した水田区画を検出した。第2面では東から西へ下がる谷地形と南北方向の溝を地山面で検出した。

1）第1面

平坦面67～69 中世の雛壇状に北東から南西へ下がる3つの平坦面を検出した。畦畔状の高まりは検出できなかったが、調査地が台地から谷地形への傾斜面に位置するにもかかわらず、土が水平に堆積する事、平坦面69の南端では土留め機能を持つ護岸64の存在する事、自然化学分析の結果イネ科の花粉が一定量検出された事などから、これらの平坦面は東西に下がる谷地形を利用して作られた水田の区画と考えられる。平坦面の幅は平坦面67・69が2.5m、平坦面68が5mを測る。12世紀代の土師器皿・瓦器椀などが出土する。

集石63（図51）調査区の南西部で検出した径10～30cmの石を集めた遺構。明確な掘形は確認できなかったが、流路73の北肩部に接しており、護岸の一部の可能性はある。



- 21 5 Y6/1灰色シルト φ10mmの石を含む
- 22 2.5Y6/2黄灰黄色シルト (測線73 新)
- 23 5Y4/1灰黄色砂 腐植質 (測線73 新)
- 24 5 Y4/2灰オリーブ色シルト 腐植質 (測線73 新)
- 25 5Y6/3灰黄色シルト (測線73 新)
- 26 2.5Y6/1灰黄色砂 (測線73 新)
- 27 5 Y6/2灰オリーブ色シルト (測線73 古)
- 28 2.5Y6/1灰黄色砂 (測線73 古)
- 29 5Y4/4灰黄色シルト 粗砂混じり (測線73 古)
- 30 10Y76/2灰黄褐色シルト 粗砂混じり
- 31 2.5Y6/1灰黄色シルト 中砂混じり
- 32 10Y75/1灰黄色砂 (測)
- 33 10Y75/1黄灰色シルト 中砂混じり (測)
- 34 N6/灰黄色シルト 粗砂混じり, φ5mmの石を含む
- 35 N8/灰黄色シルト 粗砂混じり, φ5mmの石を含む
- 36 N7/灰白色シルト 粗砂混じり, φ5~10mmの石を含む
- 37 5Y6/1灰黄色砂 φ5~10mmの石を含む
- 38 5 Y6/3灰オリーブ色砂 φ5mmの石を含む (測線73 古)
- 39 5Y6/1灰黄色シルト (測線73 古)
- 40 2.5Y6/1灰黄色砂 φ5~20mmの石を含む (測線73 古)
- 41 10Y76/1黄灰色砂 (測30)

- 1 盛土
- 2 2.5Y6/1黄灰色シルト 粗砂混じり
- 3 10Y76/9黄褐色シルト 粗砂混じり
- 4 2.5Y6/3黄褐色シルト 粗砂混じり
- 5 2.5Y6/1黄灰色シルト 粗砂混じり
- 6 10Y76/7黄褐色シルト 粗砂混じり
- 7 2.5Y6/3オリーブ褐色シルト 粗砂混じり
- 8 10Y76/1黄灰色シルト 粗砂混じり
- 9 10Y76/2黄褐色シルト 粗砂混じり (測1 新)
- 10 10Y76/1黄灰色シルト 粗砂混じり (測1 新)
- 11 2.5Y6/4黄褐色シルト 粗砂混じり, φ15~20mmの石を多く含む (測線73 古)
- 12 2.5Y6/3黄褐色シルト 粗砂混じり
- 13 2.5Y4/3黄褐色シルト 粗砂混じり
- 14 2.5Y4/2黄褐色シルト 粗砂混じり
- 15 10Y76/2黄褐色シルト 粗砂混じり
- 16 10Y76/1黄灰色シルト 粗砂混じり
- 17 N3/灰黄色シルト
- 18 10Y76/1黄灰色シルト 粗砂混じり (測線73 古)
- 19 10Y76/2黄褐色シルト 中砂混じり, φ5~10mmの石を含む (測線73 古)
- 20 5Y3/2灰オリーブ色シルト 腐植質

図 50 4区南東壁断面図 (1 : 60)

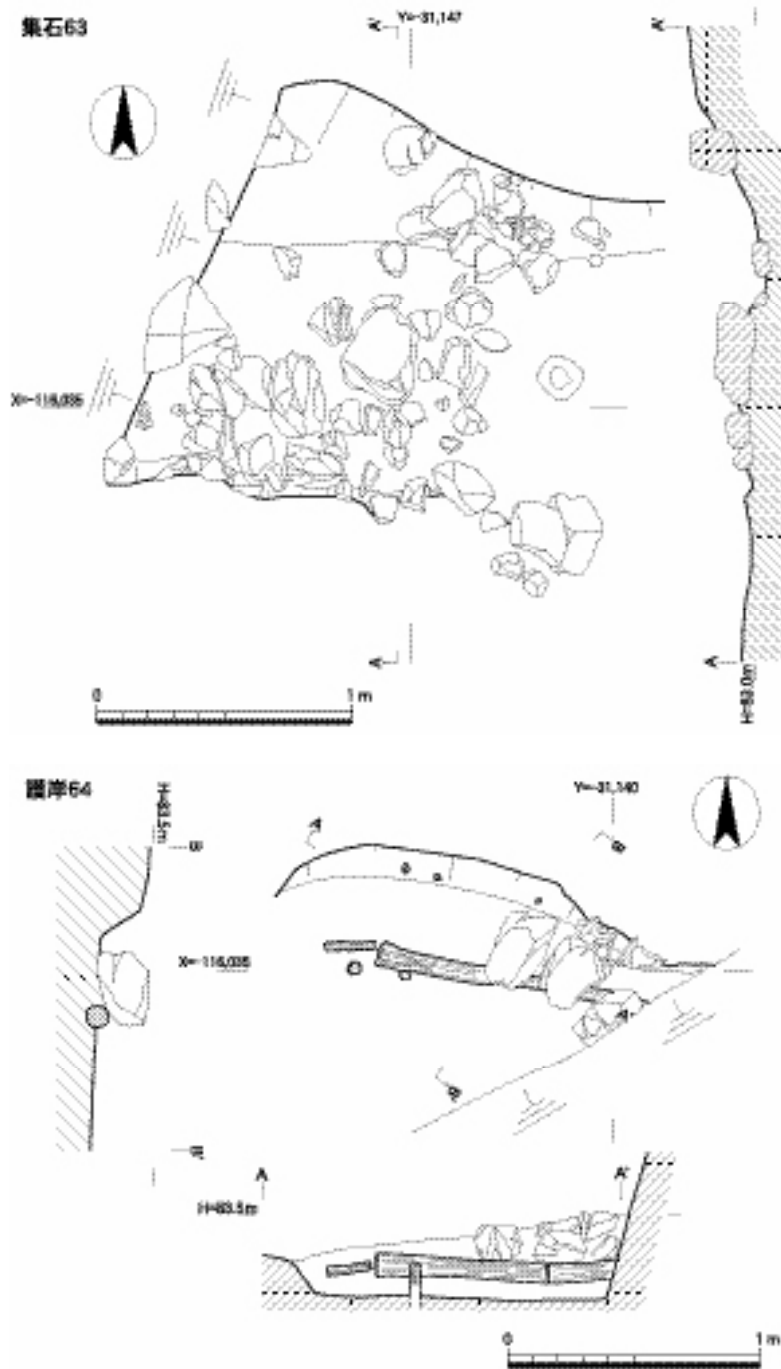


図51 4区集石63・護岸64実測図(1:30)

層は1～5層で黒褐色砂泥を主とする。中層は9～11層で地山の緑色粘土ブロックを含む黄灰色砂礫・灰オリーブシルト、下層は12層で径15～30cmの石を多量に含む灰白色シルトである。中・下層の断面観察では葉理などが確認されず、一時期に堆積したものとみられる。この溝が自然に形成されたものか、人為的に掘削されたものかは明らかではないが、調査区南壁際の溝西肩部では一辺5cmの杭の痕跡が2箇所確認されており、一定の管理が行われていた事がわかる。遺物は上層から12世紀代の瓦器などがまとまって出土している。

流路73(古) 調査区南端で検出した流路。灰色の粗砂が厚く堆積する。長さ1.8m、幅0.5m、検出面から厚さ0.1mの加工痕のあるニレの材が出土している。

護岸64(図51) 調査区南壁際で検出した石と杭による東西方向の土留遺構。直径0.15mの丸太を横方向に置き、直径6cmの杭を打って固定し、丸太の上に径20～30cmの石を置く。最も南の水田区画である平坦面69の南端にあり、北西から南東に下がる地形に沿って作られた水田端部の土留めと考えられる。

流路73(新) 調査区南端で検出した北西から南西へ流れる流路。断面観察の結果、新旧の2時期があることが判明した。新段階は第2面で検出した溝66の埋没後に流れたものである。上面には腐植土が堆積する。

2) 第2面

溝66(図版32、図52) 調査区中央部で検出した南北方向の溝。幅3～5m、深さ0.4～0.7mを測る。溝底は北から南に下がっている。埋土は大きく3層に分かれ、上

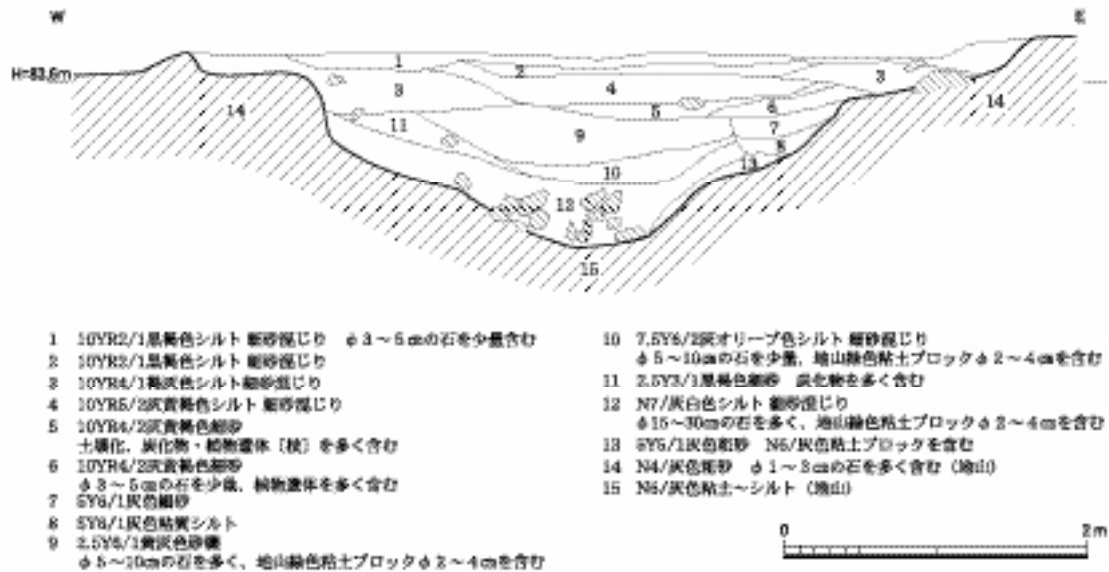


図 52 4区溝 66 断面図 (1 : 50)

2. 遺物

南春日町片山遺跡から出土する遺物には、縄文時代、古墳時代、飛鳥時代から室町時代のものがある。時代別にみると平安時代後期から鎌倉時代が最も多く、次いで平安時代前期となり、飛鳥時代、室町時代、近世初頭のもの少数出土する。調査区別では4区が最も多く、次いで2区になる。1・3区からの遺物の出土は極めて少なく、1区出土の遺物で図示できるものはない。以下に調査区別に述べる。

2区出土土器類 (図版 42、図 53) 300 ~ 331 は2区出土の土器類である。土師器、須恵器、緑釉陶器、輸入陶磁器類などがある。ほとんどの遺物は、第1面検出中あるいは第1面掘下げ時に出土した。

300 ~ 303 は土師器。300 は杯 B 蓋のつまみ部分。301 は杯 A。胎土には 1 mm 大の赤褐色粒を含む。302 は皿 A。口縁端部の肥厚は小さい。303 は甕。器面の磨滅が激しいが外面体部に縦方向のハケメが認められ、胎土には 0.5 mm 大の赤褐色粒を含む。

304 ~ 306 は須恵器。304 は杯 B 蓋。305 は杯 A。306 は杯 B。焼成は 305 がやや軟質、304・306 は硬質である。

307 は緑釉陶器の小型の壺。肩部に爪形の圧痕を2段に施す。胎土は緻密で白色を呈する。東美濃産である。

308 ~ 314 は緑釉陶器素地。308・309 は蛇の目高台、310 ~ 314 は輪高台でいずれも削り出し高台。内面底部には平滑感があり使用された事がわかる。

315 ~ 322 は土師器皿。315 ~ 317 はいわゆる「ての字状口縁」の小皿。

324 は褐色を呈する陶器の底部。手づくね成形による。

325 は黒色土器椀。調整は磨滅により不明である。

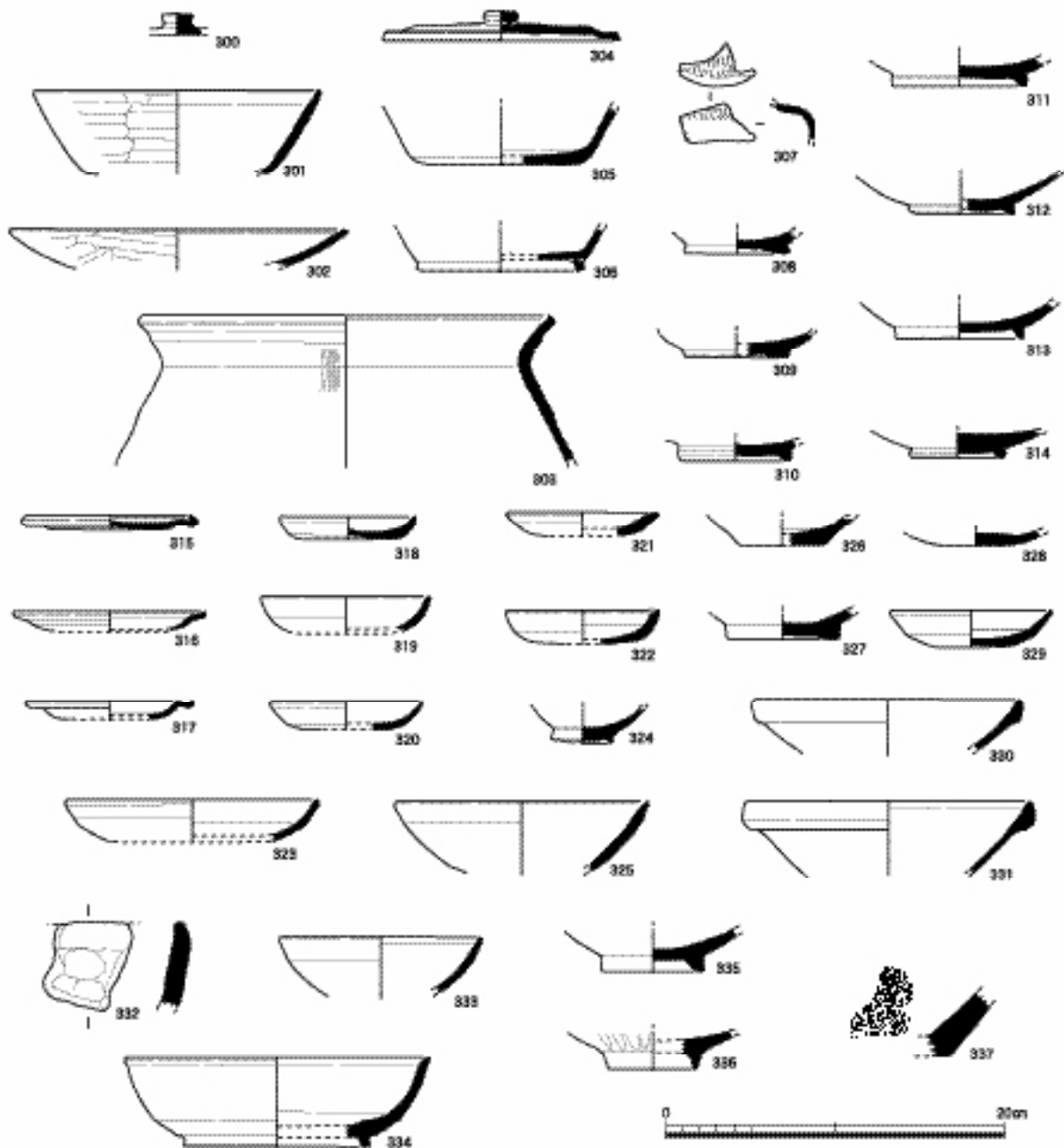


図 53 2区・3区出土土器実測図（1：4）

326～331は輸入磁器類。326は越州窯青磁杯。被熱により変色している。328は龍泉窯系青磁皿。327・330・331は白磁碗、329は白磁皿。

3区出土土器類（図版42、図53）332～337は3区出土の土器類である。

332は製塩土器の口縁部。外面口縁部下に指押さえ痕を顕著に残す。

333は土師器碗。調整は磨滅により不明である。

334は須恵器杯B。高台は貼り付け高台。胎土には0.5mm大の白色粒を多く含む。

335は白磁碗の底部。外面底部近くまで施釉する。

336は龍泉窯青磁の碗。細弁化した花卉を施す。

337は信楽焼播鉢である。

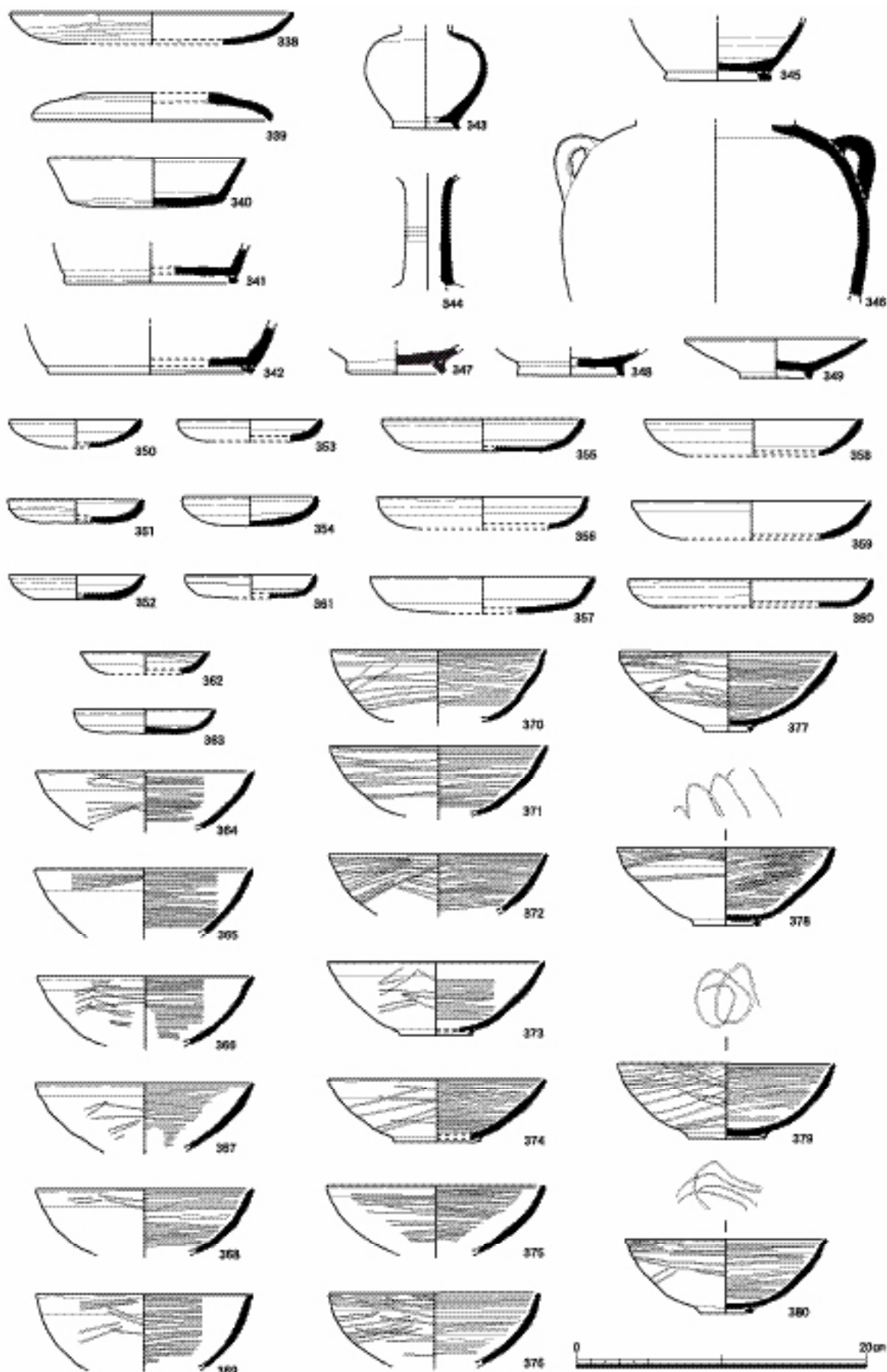


图 54 4区出土土器实测图 (1:4)

4区出土土器類（図版42、図54） 338～380は4区出土の土器類である。360が流路73から出土した他はすべて溝66からの出土である。時期的には平安時代前期から中期の338～349と平安時代後期の350～380に分かれる。いずれも器面の磨滅はほとんどない。

338は土師器皿A、外面調整はヘラケズリ、胎土は精良で砂粒をほとんど含まない。

339～346は須恵器。339は杯B蓋。340は須恵器杯A。341・342は杯B。343は壺M、胎土には1mm大の白色粒を多く含む。344は水瓶の頸部、2条の沈線を弱く施し、色調はやや白みを帯びた灰色を呈する。345は壺底部、外面底部に回転糸切り痕が残る。346は壺Nの体部である。

347は灰釉陶器の底部。外面底部にわずかに回転糸切り痕が残る。

348は緑釉陶器底部。高台は削り出しにより、外面底部を含め全面にヘラミガキを施す。349は緑釉陶器素地皿。内面の器表面に平滑感があり使用された事がわかる。

350～360は土師器皿。350～354の小皿は口径9.2～10cm、355～361の大皿は口径15cm程のものが多いが、17.0cmのものもある。

361～380は瓦器。361～363は皿。361は内面底部にジグザグ状の暗文を施す。

364～380は椀。364～369・378は口縁部がわずかに外反し、口縁端部の内側が段状になる大和型瓦器椀。371～374・376・377・379の口縁部は直立し端部は丸く収まり、口縁端部内側に沈線を施す楠葉型瓦器椀。このほかに口縁部が外反して端部が丸く収まる375などがある。

瓦類（図版42、図55）瓦類はいずれも4区からの出土である。381は複弁4葉蓮華文軒丸瓦、一本作り成形と思われるが瓦当裏面は剥離している。382は軒平瓦平瓦部の狭端部。凹凸面両面に布目が残る押圧技法成形による。凸面に縦方向のヘラケズリを施す。平安時代中期である。

陶棺（図版42、図56）陶棺は2-2区、4区の中世の遺物包含層などから出土した。いずれも小片であるが、焼成・胎土が良く似る事から同一個体の可能性が高い。脚部の大きさから小型の陶棺と考えられる。

383・384は棺身の口縁部。蓋の受部を貼り付ける。上端面から口縁部にかけて布目残り、上端面はナデにより布目の一部が消される。385は剥離した受部。386は底部の隅部で脚が残る。脚部外面に平行タタキ痕が残る。脚は基部しか遺存しないが、直径が約8cmと細く、小型

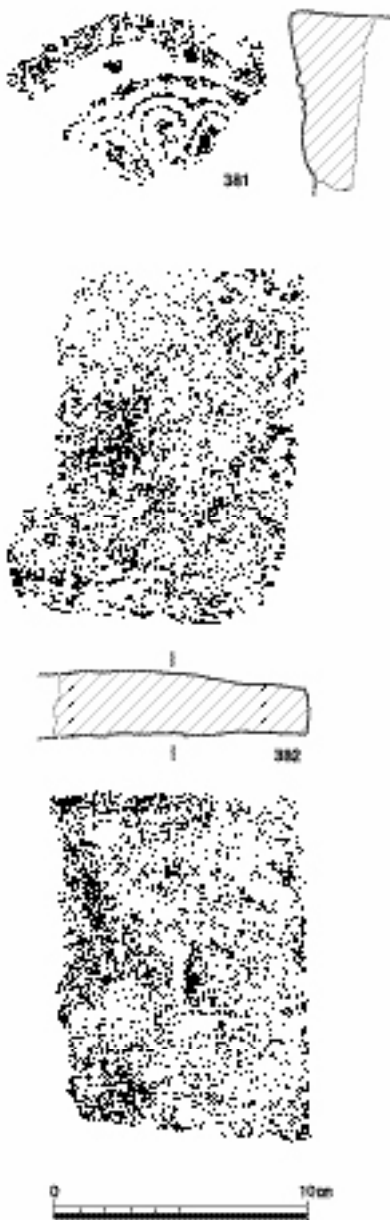


図55 4区出土瓦拓影・実測図（1：3）

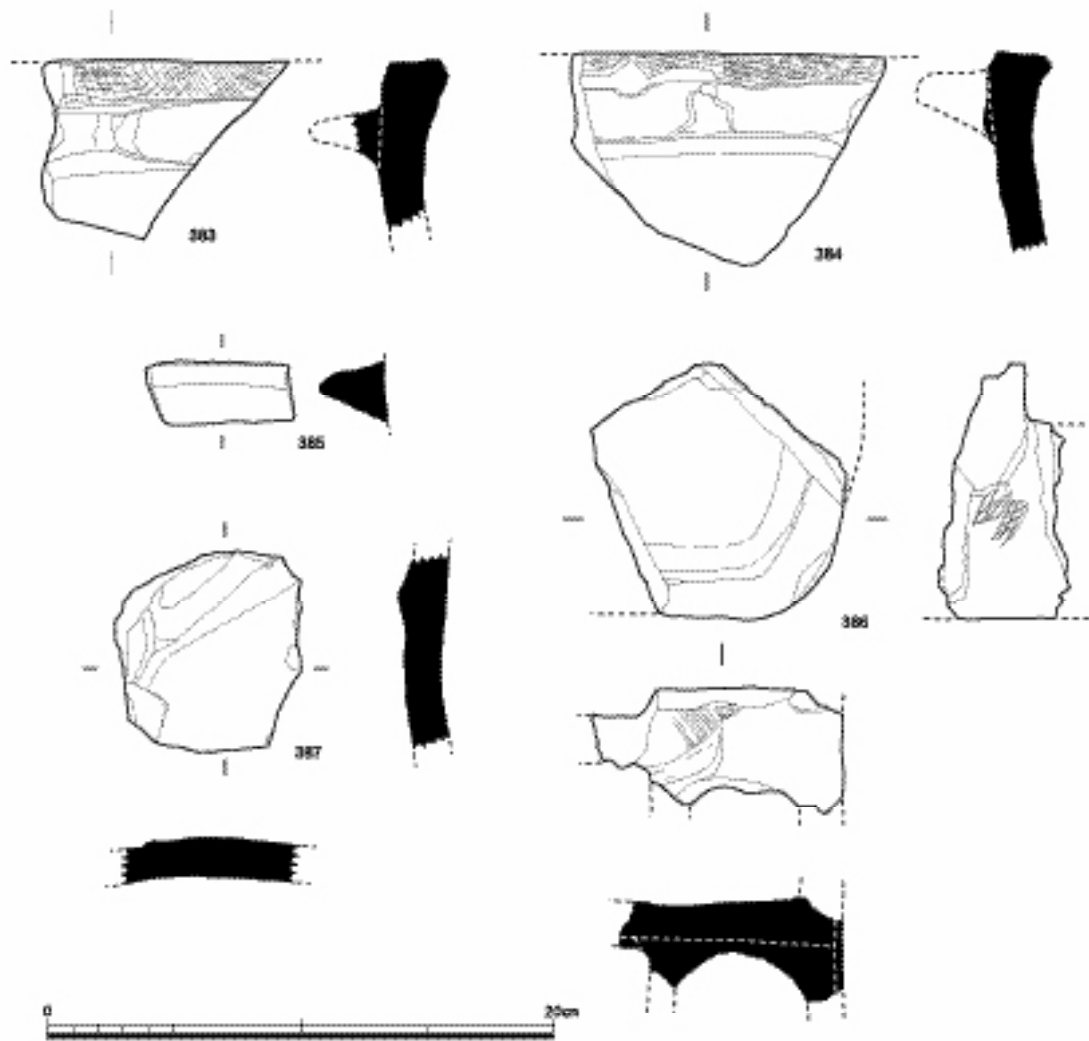


図 56 4区出土陶棺実測図（1：3）

の陶棺である可能性が考えられる。387は棺蓋の天井部と考えられる。外面に平面形がY字形を呈する低い稜線状の凸帯が削り出しにより作られる。亀甲文の一部とも思われるが不明である。布目の残る陶棺の出土例には陶邑TK 36 - I号窯、岐阜県各務原市蘇原6号窯¹⁾などがある。終末期古墳に伴うものと考えられる。

石器（図版 42、図 57） 388・389は灰色チャート製の有舌尖頭器である。388は両側縁に長い押圧剥離が規則正しく残され、先端部と茎部は使用時に折損したとみられる。長さ 8.53 cm、幅 2.14 cm、厚さ 1.44 cm、重さ 18.49 gである。389は有舌尖頭器の刃部中央付近で、両端部は欠損し、一部は風化しているがそれ以外は新しい割れである。残存長 1.73 cm、残存最大幅 2.34 cm、厚さ 0.84 cm、重さ 4.7 gである。390はサヌカイト製の石鏃で、凹基である。先端部と片側の脚部の割れ面が風化していることから、使用時に欠損したとみられる。長さ 1.72 cm、最大幅 1.46 cm、厚さ 0.34 cm、重さ 0.54 gである。391は青色チャートの石核である。背面は様々な方向からの剥離痕が確認できる。上部は平坦面を作りだす為の剥離であったとみられ、風化が著しい。長さ 4.1 cm、幅 4.1 cm、厚さ 1.74 cm、重さ 24.26 gである。388は3区の中世包含層、389～391

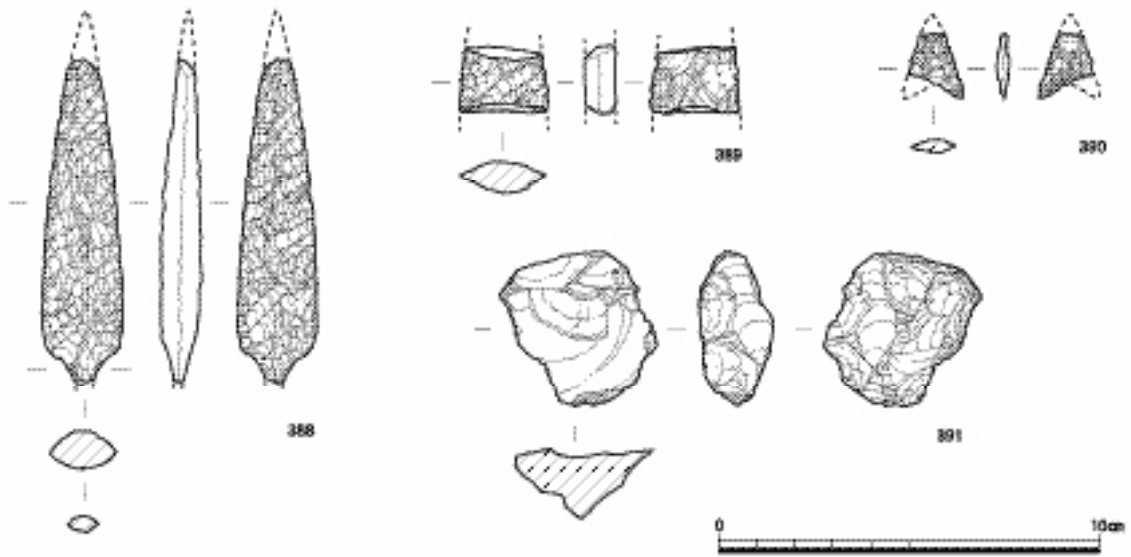


図 57 4区出土石器実測図（1：2）

は2-2区の江戸時代以降の包含層から出土した。388・389は縄文時代草創期、390は縄文時代後期から晩期、391は時期不明である。

3. 小結

南春日町地区の調査では、古代末から中世の水田を検出した。4区では谷地形を利用して12世紀に、台地上の2-2区でも13世紀には水田開発が行われている。成果の詳細なまとめについては第6章において述べる。

註

- 1) 『蘇原中屋敷1号窯窯址発掘調査報告—蘇原6号窯—』各務原市埋蔵文化財調査センター 2000年
陶棺については、木村恭彦氏（長岡京市埋蔵文化財センター）、宮岡昌宣氏（広島大学大学院博士前期課程）にご教示を得た。

第5章 勝持寺旧境内（勝持寺地区）

調査地は小塩山の東麓、勝持寺の南東約30mに位置する。地形的には、西から東へ延びる尾根と東西に流れる社家川に挟まれており、標高137～140mに位置する。調査対象地は地形から大きく3つに分かれる。北側の西から東へ下がり3つのテラスからなる雛壇状地形、南側の尾根状の高まり、その間に挟まれた谷状地形になる部分である。テラス状地形と中央の谷状地形部分の境界には、中世に遡る可能性のある石垣、石塁が地表面に残されている。調査は2箇年にわたって行う予定で、今回はその初めの調査となる。調査対象地は約3,700㎡、全体を大きく6つの調査区に分ける計画で、今回は3-2区の調査である。

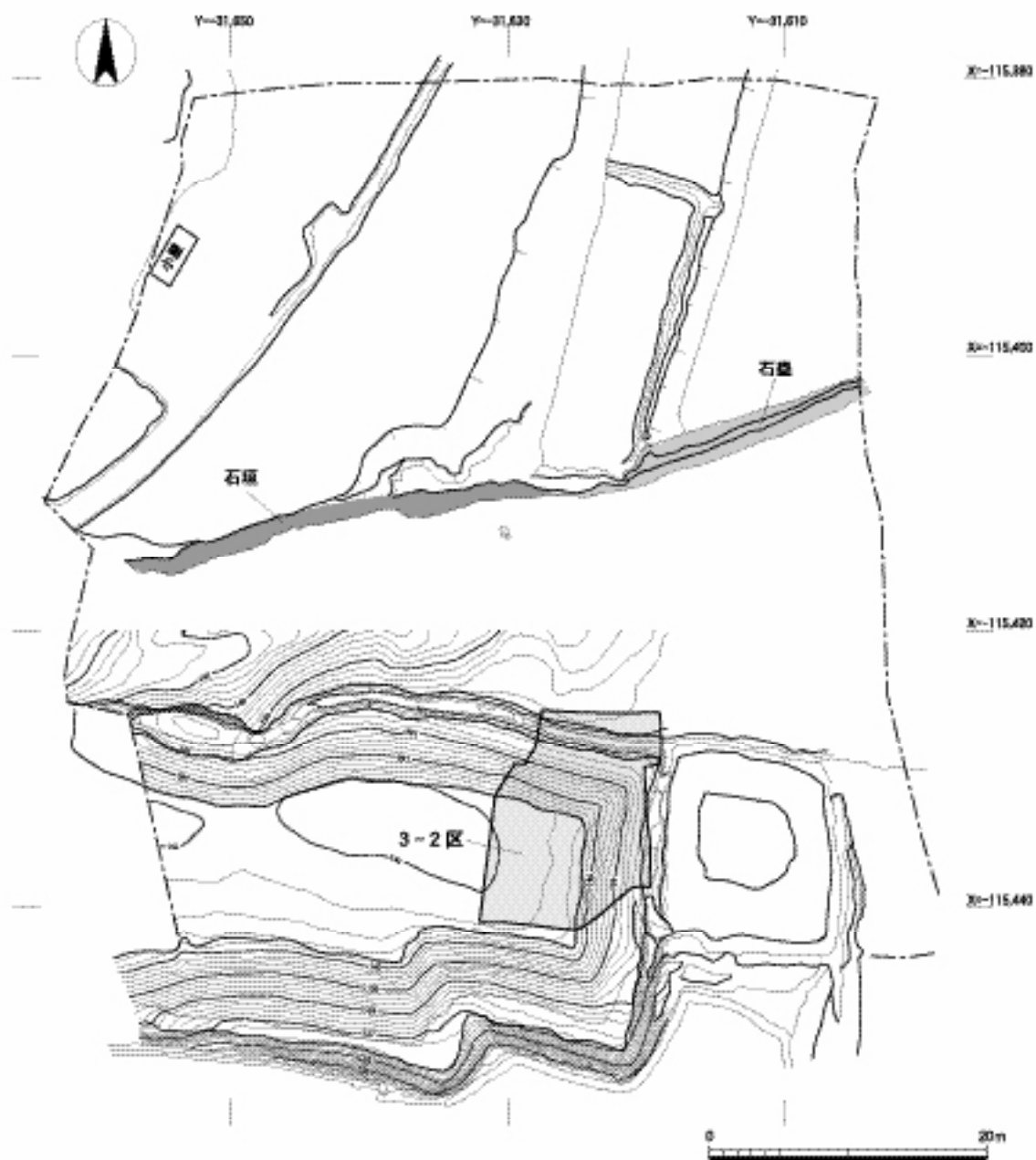


図58 勝持寺地区 地形測量図（1：500）

1. 遺構

(1) 基本層序 (図 59)

3-2区は比高差3m余りの東西方向の尾根状の高まりに位置するが、調査の結果、この高まりは近年に盛土をした結果であり、本来はほぼ平坦な地形である事が確認された。地表下2.5mまでが盛土、3.5mまでが竹林に伴う盛土、これ以下が遺構面となる。遺構はほとんどが地山の黄褐色粘質細砂で検出されたが、調査区北部のピット15以北では厚さ5~10cmの中世整地層である褐色粘質細砂上面で検出している。ただし、この整地層は調査区北端では竹林の造成による削平によって失われていた。また、遺構面はほぼ平坦であるが、南西側にやや低くなっている。

(2) 遺構 (図版 33、図 60)

検出された遺構は、ピット、土坑、溝、布掘地業などである。出土する遺物から、鎌倉・室町時代の遺構と考えられる。ピットには、掘形内に拳大の石を充填する根石と考えられるものがあり、礎石立建物が存在したと考えられる。ピット群は溝2より西側に集中しており、この溝との有機的な関係が窺え、溝により西と東で空間分割されていたことがわかる。また、土坑6・溝2を除く各遺構は、一部を掘り下げたのみで完掘は行っていない。これは調査区が狭く、根石・ピットなど建物としてのまとまりが把握できない為、次年度の隣接調査区の調査時に一連の記録を取

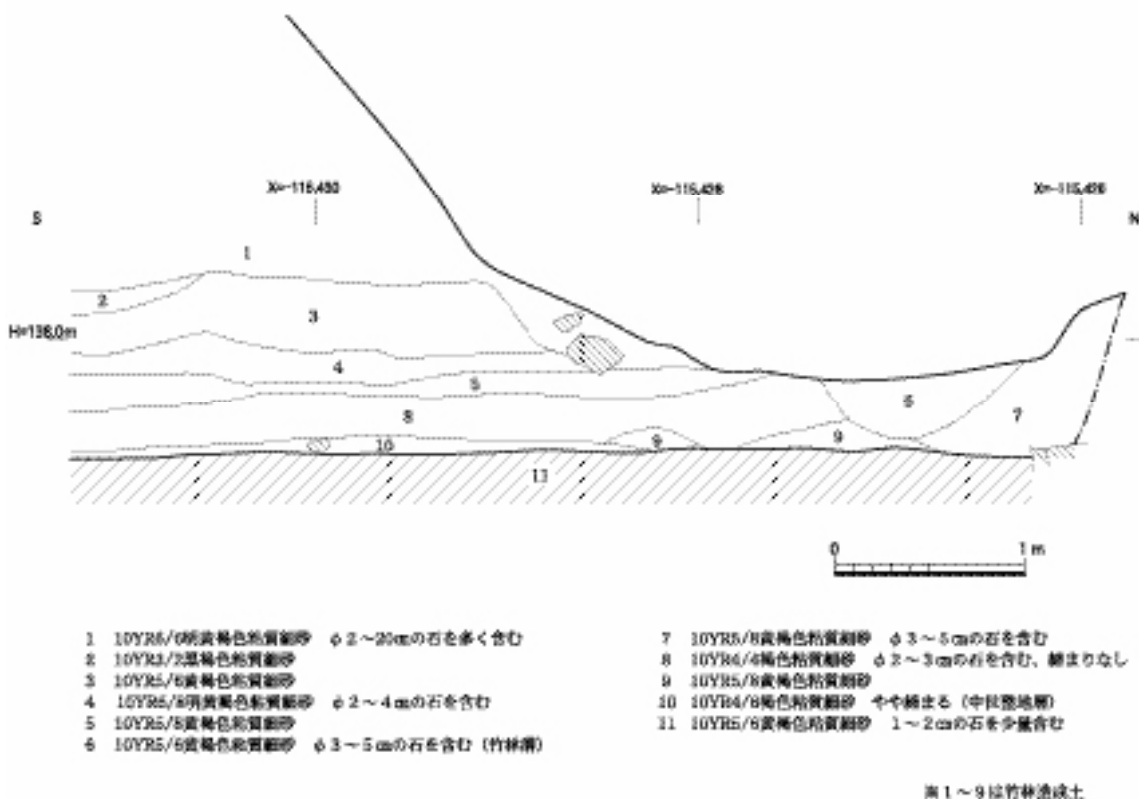


図 59 3-2区西壁断面図 (1:40)

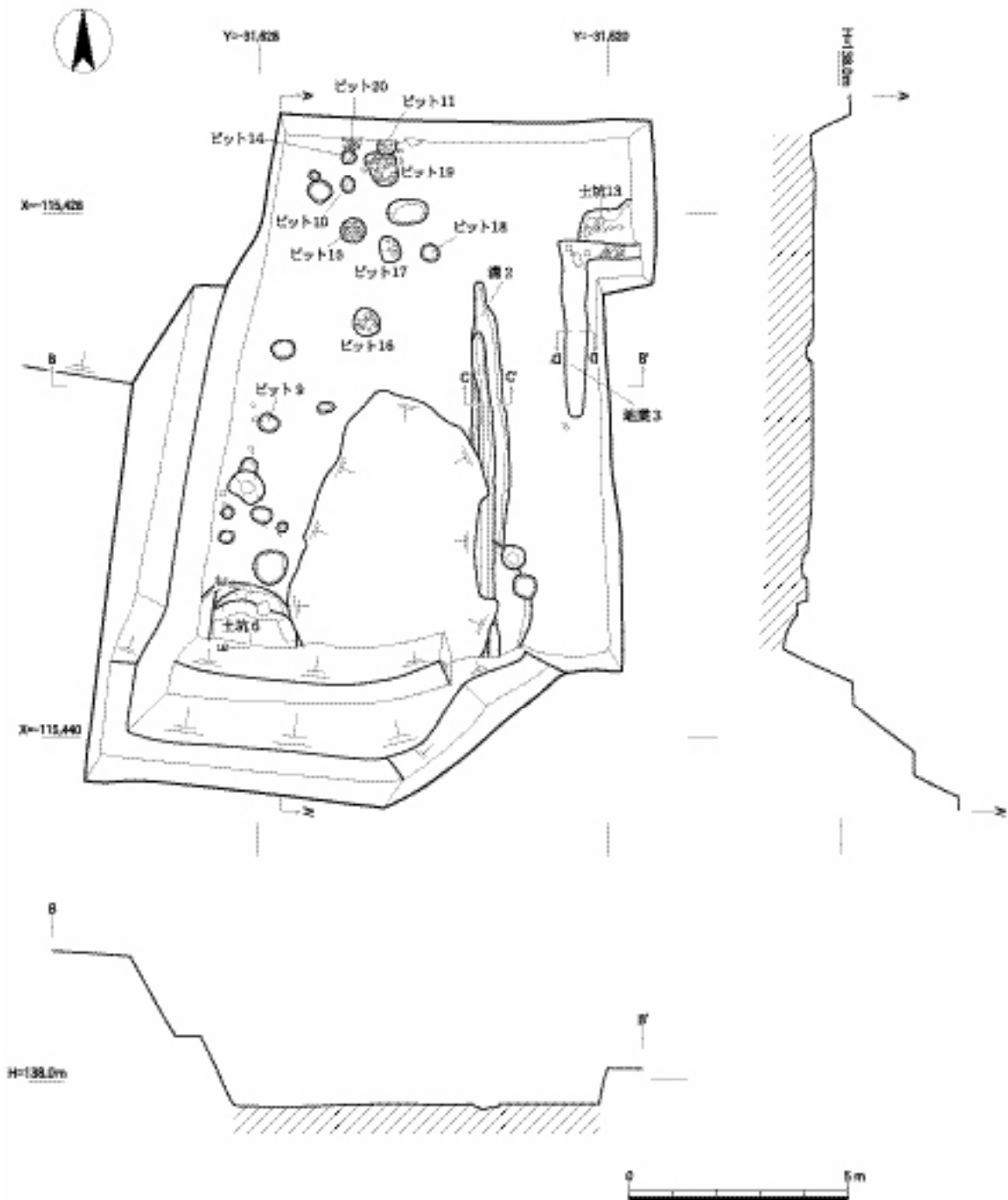


図 60 3-2区実測図 (1 : 150)

る事とした為である。

ピット 10・11・14～19 掘形内に拳大の石を充填するピット。調査区北西部に集中する。掘形は径 0.4～0.6 mを測る。掘形内には、径 5～10 cmの石を詰め、この上に径 20～30 cmのやや大きい石をいくつか置いている。これらのピットは形状から、礎石立建物の根石と考えられる。検出された位置から、建物の南東部を構成するピットと考えられるが、一棟の建物なのか複数棟の建物なのかは不明である。

土坑 6 (図 62) 調査区南西部で検出した径 0.7 m以上、深さ 0.55 mを測る平面形が不整形な

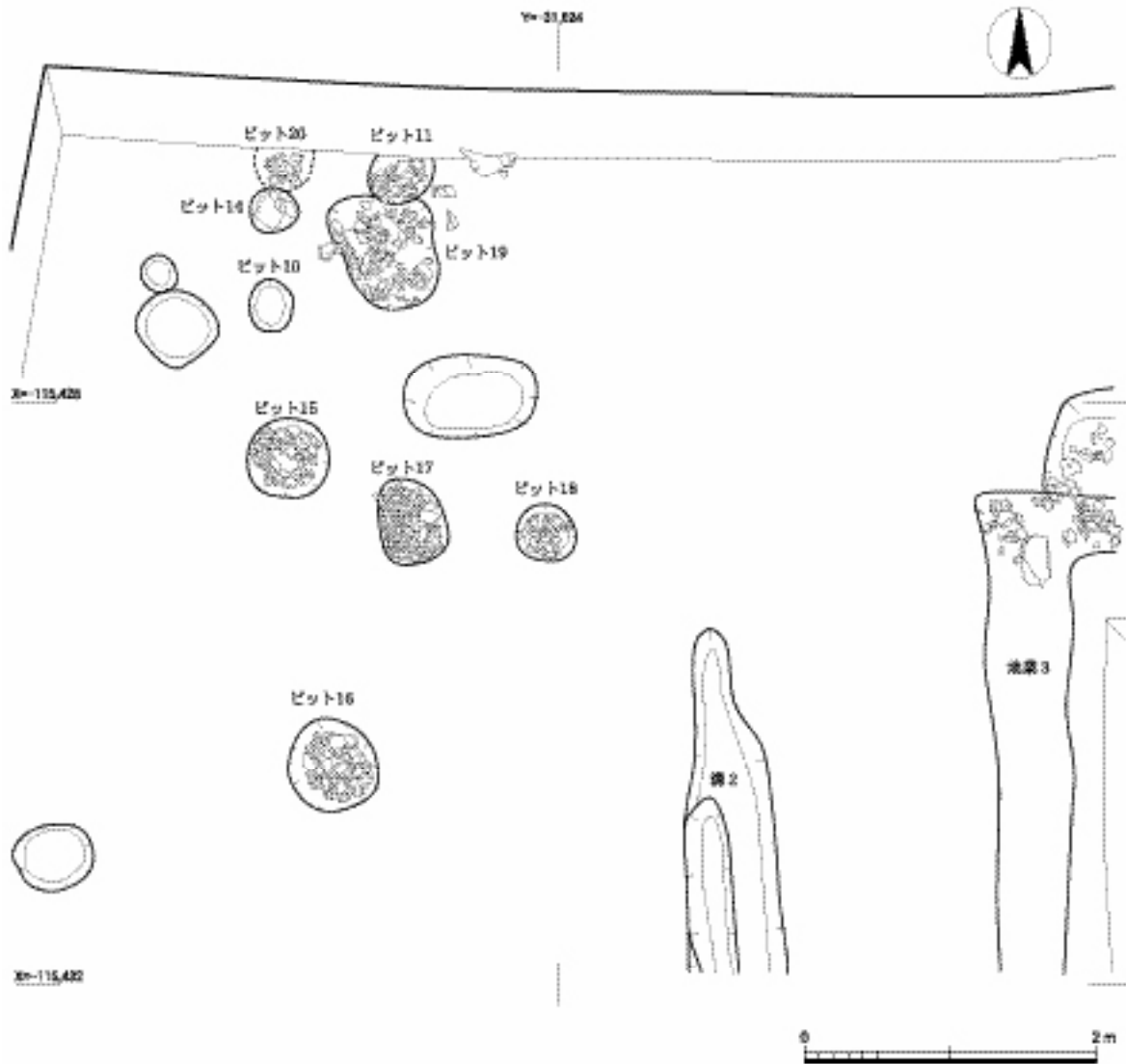


図 61 3-2区北部平面図 (1:50)

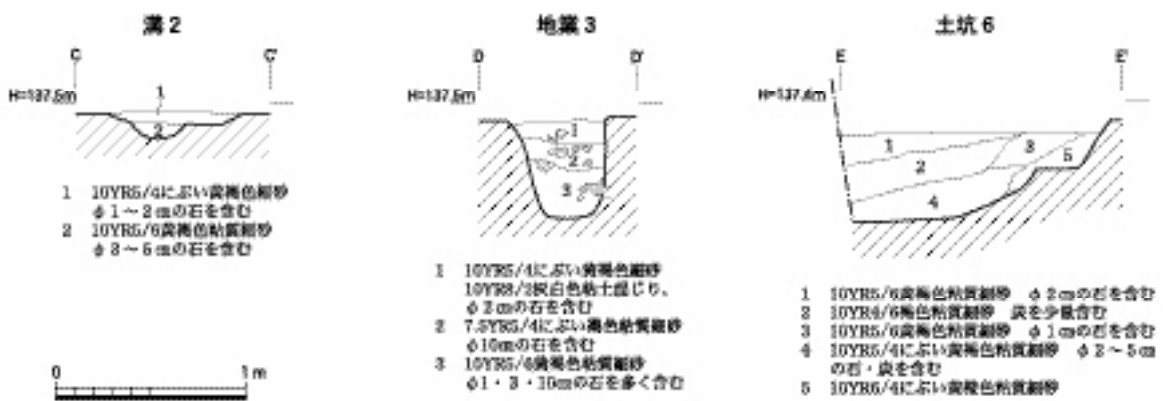


図 62 溝 2・地業 3・土坑 6 断面図 (1:40)

土坑。遺物は13～14世紀の土師器・瓦器の小片が少量出土する。

溝2（図版33、図62）調査区中央やや東側で検出した南北方向の溝。幅0.6～0.8m、深さ0.1～0.3mを測り、溝底は南に低くなる。断面形は2段落ちになっている。遺物は14～16世紀の土器類が出土し、最上層から寛永通寶が出土している。溝の北端より北西側でピット群が検出されており、何らかの関連が想定される。

地業3（図版33、図62）調査区北東部で検出した南北方向から東西方向に屈曲し平面形がL字形を呈する溝。東側は調査区外へと続く。幅0.5m、深さ0.55mを測る。面的な掘下げはしていないが、断面観察の為、一部断割りを行った。断面形は箱型を呈し、埋土は3層に分かれる。上層は黄褐色の微粒砂に灰白色の粘土を入れ、拳大の石を多く含みよく締まっている。2・3層は共に拳大の礫を多量に含むが締まりはない。L字に曲がるコーナー部には径0.3mの上面が平坦な礎石状の石を置いている。断面形や埋土などから通常の溝とは考えがたく、建物の布掘り地業と考えられる。遺物は13～16世紀の小片の土器類が多量に出土している。

2. 遺物

勝持寺旧境内から出土する遺物には、鎌倉時代から室町時代のものがある。種類では、土師器、瓦器、瓦、壁土、石製品、銭貨などがある。小片の為に図示できなかったが、瓦は丸瓦、平瓦が一定量出土しており、調査地の性格を反映しているものと考えられる。

土器類（図63）392～400は土師器。392～398は皿、このうち394は脚付き皿である。395・398は白色系で他は褐色系である。392・394・397には0.5～2mm大の乙訓地域出土の土師器によく見られる赤色粒が多く含まれる。399は羽釜、400は鍋である。392・393・397・

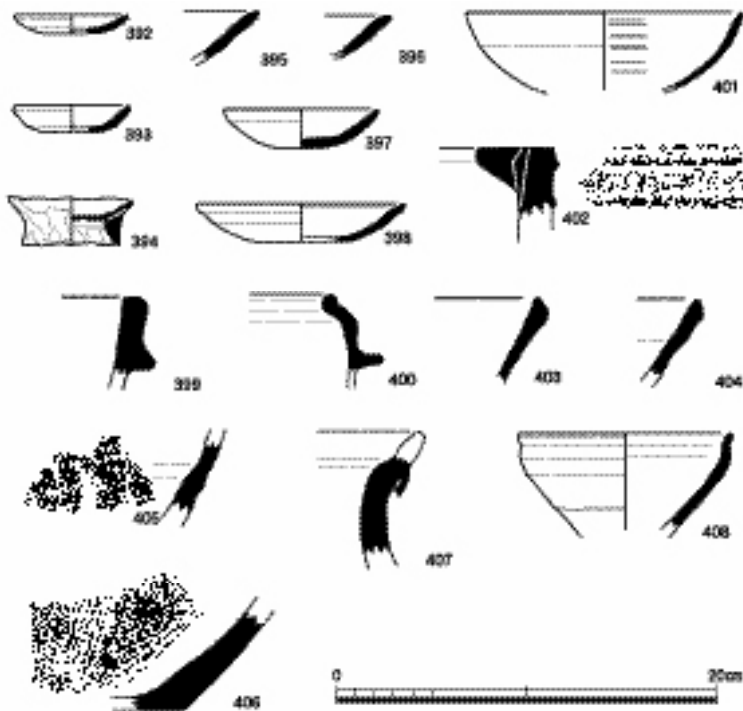


図63 出土土器実測図（1：4）

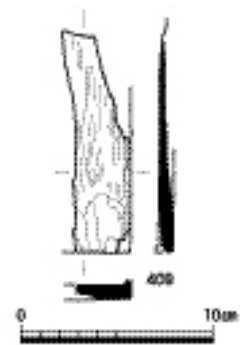


図64 出土石製品実測図（1：4）



図65 出土銭貨拓影（1：2）

399 は溝 2、394・395 は地業 3、398 はピット 9、400 は調査区北部整地層から出土した。

401・402 は瓦器。401 は椀で内面に幅 0.5 mm の細いヘラミガキを疎らに施す。402 は火鉢で外面突帯間の文様は磨滅の為に不明である。401 はピット 11、402 は調査区北部の中世整地層から出土した。

403・404 は須恵器。東播系の鉢である。403 は土坑 13、404 は地業 3 から出土した。

405～407 は焼締陶器。405 は信楽焼播鉢、播目は一本引き、色調は内外面が赤褐色で断面は灰白色、焼成は固く焼け締まる。406 は備前焼播鉢、6 条一単位の播目を施す。407 は常滑焼甕。403・407 は包含層、406 は土坑 6 から出土した。

408 は瀬戸焼の天目椀である。内面および外面上半に黒褐色の鉄釉を厚く掛ける。溝 2 から出土した。

石製品（図 64）409 は硯。頁岩あるいは粘板岩。厚さ 5 mm と薄手の作りで、側面の縁の立ち上がりも低い。表採。

銭貨（図 65）410 は寛永通寶。直径 2.5 cm を測る。「寶」の字の貝画末尾が「ハ」となるいわゆる新寛永である。遺構検出中に出土した。

3. 小結

これまで、江戸時代の絵図または地誌でしか知られていなかった中世の勝持寺子院跡が、一部ではあるが初めて確認された。中世寺院の子院跡の調査例は全国的に見ても少なく、今後の調査によって、より明らかになる事が期待される。

第6章 ま と め

以上、灰方窯跡・灰方の塚跡、南春日町片山遺跡、勝持寺旧境内の3地点、4遺跡の調査について述べてきた。ここでは、それぞれの成果と若干の問題点についてまとめておきたい。

1. 灰方1・2号窯

洛西地域での緑釉陶器生産は、9世紀の中頃から緑釉陶器の生産を開始し10世紀前半に終了する。この事はこれまで灰原からの出土資料などで確認されていた。しかし、窯の調査は施釉窯である石作1・2号窯の調査が行われていたのみで、出土遺物の大半を占める灰原は1・2号窯共通であった¹⁾。今回、2基の緑釉陶器素地窯を調査することで、窯単位の生産のあり方を知る資料を得る事ができた。須恵器と緑釉陶器素地の出土比率は、1号窯が須恵器18%に対して緑釉陶器素地は82%、2号窯が須恵器10%に対して緑釉陶器素地は90%であり、緑釉陶器素地が8割以上を占めている。施釉された緑釉陶器は2号窯灰原から小片が数点出土するのみである。この施釉された土器がどこから持ち込まれたのかは検討の余地はあるが、トチン・サヤ鉢などの窯道具の出土もないことから、窯は1・2号窯ともに緑釉陶器素地焼成窯であるといえる。これまで洛西地域の緑釉陶器窯として唯一調査が行われていた石作窯の窯は、構造が小型三角窯であり施釉された緑釉陶器とともにサヤ鉢やトチンなどが出土しており、施釉窯である事が明らかとなっていた。このことから洛西地域での緑釉陶器生産は、窖窯で素地焼成、小型三角窯で施釉焼成と考えられてきたが、今回の調査はこれを裏付ける事になった。

以下では、遺構・遺物のそれぞれの成果と問題点について述べてみたい。

窯構造について 灰方1・2号窯はともに地上式の窖窯である。いずれも床面の補修がほとんどなく、灰原の堆積からも長期間の操業は考えがたい。また、遺物の時期的な差はほとんどなく、時期は9世紀の後半とみられる。奈良時代後半から平安時代にかけて、畿内では地上式窯が土器焼成窯の主流となっており、灰方窯もその流れの中で捉える事ができる²⁾。ただし、地上式窯と半地下式窯を分ける指標の一つとなる窯体掘形外側の盛土は、窯主軸と直交して断割りを行ったが1・2号窯ともに確認されなかった。窯体内側壁沿いの地上部分の窯壁の支柱となる杭跡も、1号窯で検出されたが2号窯では確認されなかった。2号窯がどのような方法で地上部分の窯壁を築いたのかは今後の課題である。

1号窯は焚口付近が失われているが、残存長4.03 m（以下いずれも水平距離）、床面最大幅0.98 mを測り、2号窯は全長5.5 m、床面最大幅1.15 mを測る。ともに側壁の左右が平行に続き平面形は寸胴形を呈し、縦断面形は直線的である。窯の形態は、灰方窯とほぼ同時期であり地理的にも近い京都府亀岡市篠窯跡群の前山1号窯、石原畑2号窯などとよく似る。ただしこの事が、9世紀段階で篠窯とのなんらかの関係を示しているのかは今後の課題である。また、前山1号窯の全長は6.9 m、石原畑2号窯の全長は8.4 mと灰方窯よりも大きい。篠窯跡群の窖窯は、窯の全長が4～6 mの小型、6.5～7.5 mの中型、8 m以上の大型と分かれるが³⁾、灰方窯の時期である9

世紀中頃に小型のものは確認されていない。石原畑2号窯から出土する須恵器の器形は杯・鉢・壺などを主としており、灰方窯と同様に大形の甕などはない。両者の規模の違いは、須恵器と緑釉陶器素地という土器の性格の違いに起因する生産量の差を反映したものとも考えられる。

燃料材について 2号窯の灰原から出土した炭化材の内、6点の樹種同定を行った（付章2参照）。この結果、すべてマツ属複雑管束亜属であることが判明した。篠窯跡群では、9世紀前半に比べて9世紀後半には双葉松類が増加するが、広葉樹も一定の割合を占めている状況とはやや異なっている。⁴⁾篠窯跡群では8世紀からの窯業生産の結果として、2次林であるマツ林の形成が考えられている。洛西地域では明治池窯・南春日町窯跡など奈良時代の須恵器窯は存在するが、灰方窯周辺には確認されていない。周辺に灰方窯よりも古い未発見の窯が存在し、その燃料材の伐採によって2次林であるマツ林が広がっていた可能性もある。しかし、長期間にわたって須恵器生産が行われている篠窯跡群で広葉樹も用いられている事からすると、灰方窯では熱効率の高いマツを選択的に燃料材として使用した可能性が高いように思われる。乙訓地域の8～9世紀代における、花粉分析などデータの蓄積はまだ充分とは言いがたく、今後さらに周辺地域での古環境復元が進むまで結論は待ちたい。

緑釉陶器素地の胎土・焼成 灰方窯出土の緑釉陶器素地の胎土は、肉眼観察では緻密で非常に細かい白色粒を含んでいる事が確認できるが、胎土に含まれる鉱物・岩石構成まで肉眼で識別する事は困難である。この為、土器片2点のプレパラートを作成し顕微鏡による鉱物・岩石の同定を行った。また2号窯近くから採取した、大阪層群に由来すると考えられるシルト層も併せて分析を行い土器試料との組成の比較を行った（付章2参照）。その結果、シルト層には、石英・カリ長石・斜長石・白雲母など鉱物と凝灰岩・多結晶石英が含まれていた。土器サンプルではカリ長石と白雲母は窯内での被熱の為失われていたが、これ以外はほぼ共通しており、土器の生産は周辺で採取された粘土によって行われていた事が確認された。ただし、シルト層にはない丹波帯に由来すると思われるチャート・頁岩も確認されており、これが土器の材料となった粘土に自然に含まれていたのか、混和材などとして意識的に入れられたのかは今後の課題である。

また、この2点の土器片は1点が、硬質・須恵質（仮No.1）、もう1点は軟質・土師質（仮No.2）のものであった。比熱による鉱物の熔融などの変化から、仮No.1が1150～1200℃、仮No.2が800℃未満で焼成されたことが明らかとなった。1号窯窯体内から出土した土器は最終操業後に取り残された土器であるが、この多くが軟質であった事からすると、焼成温度の違いは意識的に行われたとみるよりも、窯詰め位置による焼成時の温度差によると考えられ、灰方窯の緑釉陶器素地は須恵質焼成を志向したとみられる。

また、出土土器片の蛍光X線分析も行い、9世紀代、平安京近郊の緑釉陶器の生産地である洛北産と洛西産の灰方窯の須恵器と緑釉陶器素地のそれぞれの胎土の違いを検証した（付章1）。分析した試料は、洛西地域では灰方1・2号窯、洛北地域は尼吹谷1・2号窯と栗栖野3号窯出土の須恵器と緑釉陶器素地である。⁵⁾

分析の結果、灰方1・2号窯出土の須恵器と緑釉陶器素地は、長石系因子の主成分元素である

KとCa、微量元素RbとSr、さらにFe因子にも共通性がみられ、同じ採取場所の粘土を使っていた可能性が高い事が明らかとなった。元素の分布域は、灰方窯産と尼吹谷1・2号窯産、栗栖野3号窯産の須恵器・緑釉陶器とでは異なっており、洛西産の緑釉陶器と洛北産の緑釉陶器は蛍光X線分析によって区別できる事が明らかとなった。さらに尼吹ノ谷1・2号窯出土の須恵器と緑釉陶器、栗栖野3号窯でも若干、元素の分布域に違いがある事も確認された。これは、自然界に存在する粘土の不均質性によるものと考えられるが、尼吹ノ谷1・2号窯と栗栖野3号窯は同じ洛北地域の中でも直線距離で約2km離れており、採取地の違いが起因する可能性もある。

今後、平安京内出土の緑釉陶器の分析を積み重ねていけば、生産地と消費地を結ぶ流通のあり様が明らかになるものと思われる。

出土須恵器について 1・2号窯から出土した須恵器の主要な器形には杯Aと鉢Dがある。杯Aは、底部がほぼ平坦で、口縁部への立ち上がりはやや丸みを帯びるが直線的である。口径13.5～15.2cm、器高3.0～4.1cmのものがある。1・2号窯ともに口径14.0cm前後、器高3.5cm前後のものももっとも多く、平均径口指数は2.5となる。個体数が少なく断定はしがたいが、1・2号窯出土の杯Aは、法量が一定範囲の中にまとまり、時期差はあまりないと考えられる。8～11世紀まで須恵器生産を続ける篠窯跡群では、杯Aの形態は、底部から口縁部に直線的にのびるAaタイプと、丸みを持つ底部から内湾気味に立ち上がるAbタイプに分かれ、9世紀前半の小柳1号窯では混在するが、続く石原畑1・2号窯の段階ではAbタイプに統一される。法量的にも大・小に分かれていたものが、石原畑1・2号窯では口径12～15cm、器高3～4cmにまとまり法量の齊一化がおきる。⁶⁾ 灰方窯の杯Aは、法量的には石原畑1・2号窯の範疇に入り、篠窯杯Aaから杯Abとの中間的形態を示している。

鉢Dは、1号窯の46のように口縁部が直立するものもあるが、1号窯の5・47～49、2号窯135・136のように肩部の張りが弱く、口縁部は緩やかに屈曲し端部が外側に肥厚するものが多い。

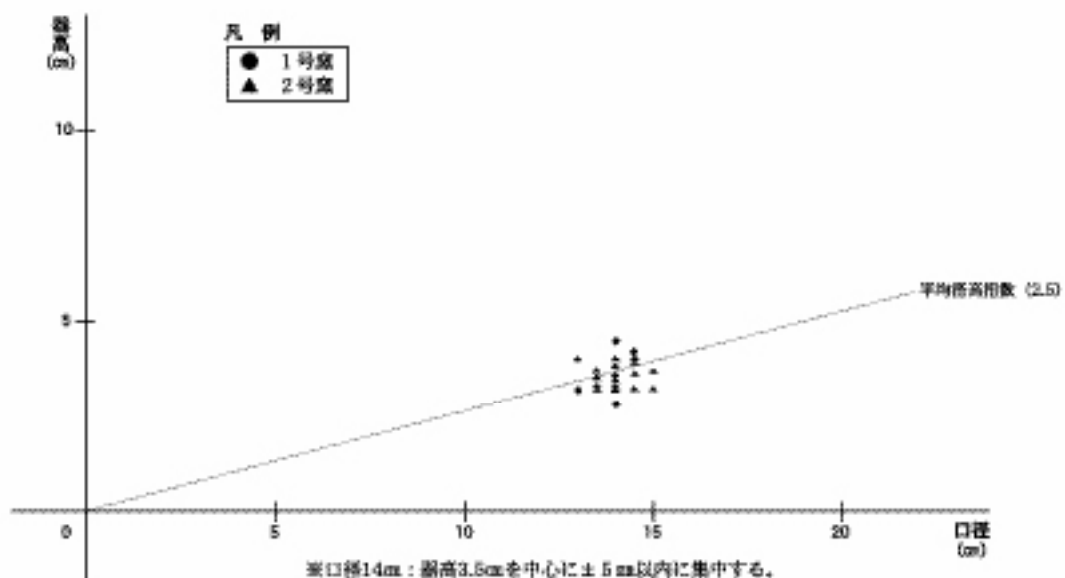


図 66 須恵器杯 A 法量分布図

1号窯出土の49のように、口径に対して器高が低くなるのは新しい特徴である。この頃の篠窯跡群出土の鉢Dと比較すると、窯ごとの形態差が大きく安易に比較しにくい点もあるが、形態的には石原畑2号窯、これとほぼ同時期とされる前山1号窯や西前山1号窯跡出土の鉢Dに近く、これらの窯の後に位置づけられる西長尾3号窯のように口縁部が「く」の字型に大きく屈曲するものはない。⁷⁾ 以上のように篠窯跡群との併行関係をみても、杯A、鉢Dともに袋谷1号窯・小柳1号窯（9世紀第2四半期）と石原畑1・2号窯・前山1号窯・西前山1号窯（9世紀第3四半期）⁸⁾ の中間的様相を示している。

一方、平安京などの消費地遺跡から出土する鉢Dをみると、平城京東三坊大路SD650 A（平安京土器編年Ⅱ期古段階）、平安京右京三条三坊三町SX07（平安京土器編年Ⅱ期中段階）出土の中にそれぞれ形態的に似たものがある。以上のことから灰方窯出土の鉢Dは、消費地編年では平安京土器編年Ⅱ期古段階からⅡ期中段階に位置づけられる。⁹⁾

椀・皿類の法量からみた1・2号窯出土の緑釉陶器素地（図67～69） 出土した緑釉陶器素地の中で、量的に主となる器形は椀類と皿類である。口縁残存率が1/4以上の1号窯出土の緑釉陶器素地の内、椀類は46点（28%）、皿類は117点（70%）、その他が4点（2%）、2号窯出土の緑釉陶器素地の内、椀類は200点（31%）、皿類は417点（66%）、その他が19点（3%）であり、1号窯と2号窯出土の椀・皿の出土比率にはそれほど大きな差はない。皿類が椀類よりも多いのは、形態的に椀よりも皿の方が小片になりやすく、接合作業の際にも口縁部を復元しやすいという事が影響している可能性がある。椀・皿類を口径別に出土比率をみると1・2号窯間に差はなく、いずれも口径13.0～13.9 cmが最も多く、他は口径10.0～11.9 cmと口径18.0 cm以上が少ないのを除けば、ほぼ同等に出土している点は共通している。皿類は、口径13～22 cmのものがある。14 cm代が最も多く、次いで13 cm代、15 cm代となり、これ以外のものは極端に少なくなるのは1・2号窯に共通している。口径20 cmを超える皿類は1号窯出土の段皿が1点あるのみである。このような口径別の出土比率は消費地である平安京の傾向と同調している。椀と皿の口径のピークが若干ずれているのが特徴的で、消費地での使用時の組み合わせを示している可能性もある。

椀の経高指数からは4群に分かれるが、これをみても1・2号窯の間に差はない。口径13.5 cm前後の椀（径口指数2群）と口径16 cm前後の椀（径口指数3群）はいずれも平均径口指数が2.8と共通する。9 cm前後の小椀（径口指数1群）と16 cm以上の椀（径口指数4群）は数値がやや高くなる。1群の底部は、すべて回転糸切り未調整で回転ヘラケズリ工程の省略により結果的に器高が高くなった可能性があるが、4群は意識的に器高を高くしていると思われる。

以上のように法量からみると1・2号窯の間に差はなく、ほぼ同時期と見てよいと考えられる。また、椀・皿類の口縁形態別の比率を見ても1号窯と2号窯の間に大きな違いはない。ただし、稜椀が2号窯灰原から出土しているが、これは2号窯にみられるやや新しい要素といえる。

緑釉陶器の時期（図70） 先に述べたように1号窯と2号窯から出土する土器類に大きな違いはなく、時期的な差はほとんどないと考えられる。緑釉陶器素地の中でその大半を占める椀・皿類には、椀口縁形態Ⅰ～Ⅳ類と皿Ⅰ～Ⅴ類と稜椀、段皿がある。椀で主流となるのはⅡ類、皿では

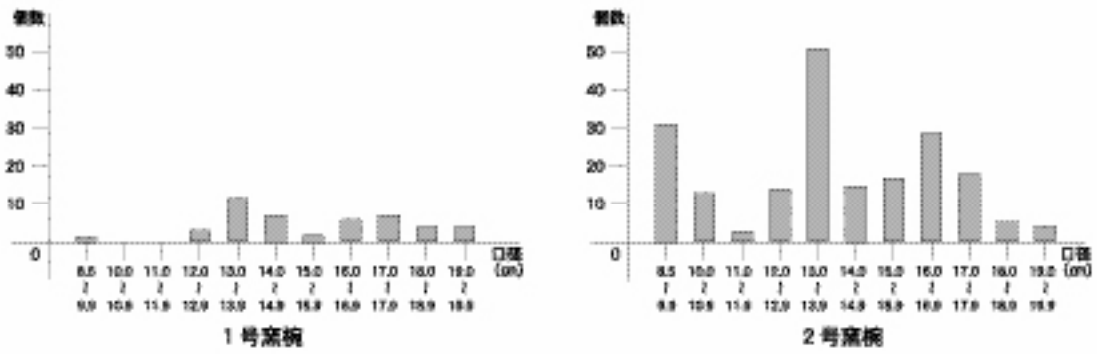


图 67 绿釉陶器素地碗口径分布图

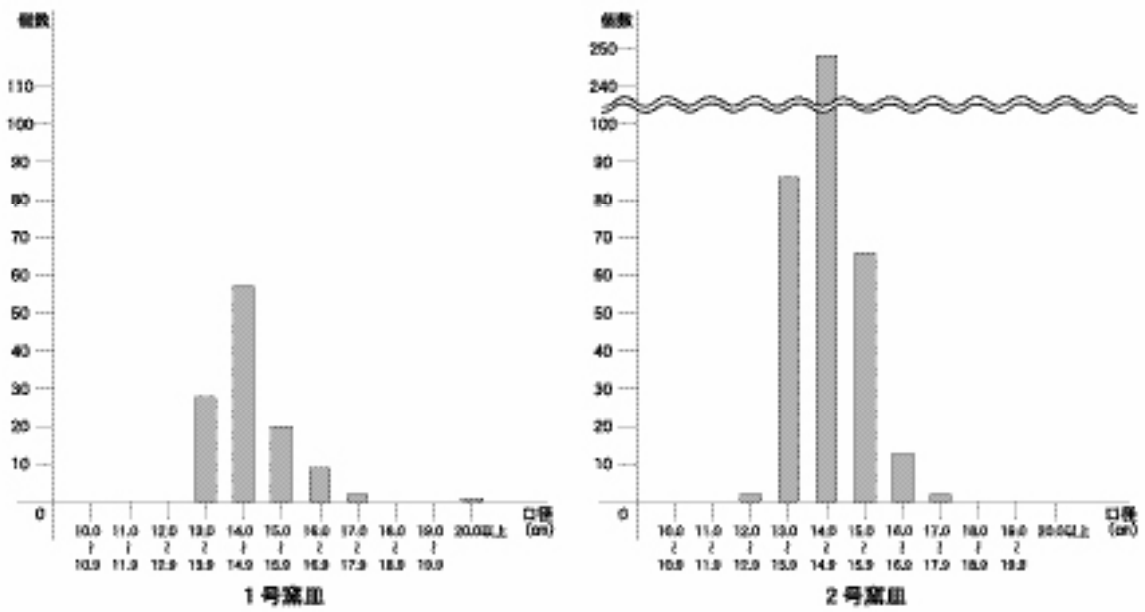


图 68 绿釉陶器素地皿口径分布图

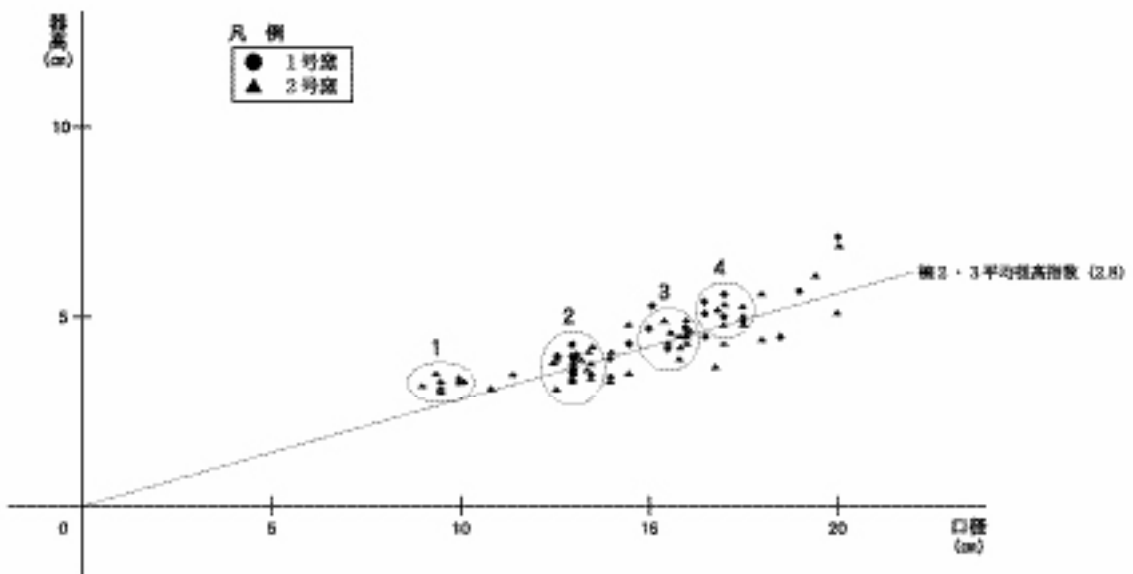


图 69 绿釉陶器素地碗法量分布图

I類が最も多く、これにII類が続き、IV・V類はごく少数となっている。京都産緑釉陶器の分類・編年には高橋照彦氏の研究がある。¹⁰⁾高橋氏の緑釉陶器椀・皿類の分類とは今回のそれは基準が異なっているが、一応の目安としては、口縁形態II類が高橋分類のA2類、口縁形態III類が高橋分類のD類、稜椀が高橋分類のE類にあたる。高橋氏の京都産緑釉陶器編年は、器形の構成や土器細部の変化などからI～V期に分けられている。高橋分類のA2類（口縁形態II類）・D類（口縁形態III類）の出現はII期（9世紀後葉）から、稜椀の出現はIII期からとされている。高橋編年II期はさらに古段階と新段階に分けられており、生産跡として、古段階は本山官山窯（洛北）と石作1・2号窯（洛西）が、新段階として尼吹の谷窯（洛北）と大向2号窯・小塩5号窯（洛西）が挙げられている。古段階と新段階の違いとして、椀・皿A2類（口縁形態II類）とD類（口縁形態III類）の増加、平高台の減少と輪高台・蛇の目高台の増加などが挙げられている。灰方窯では、椀・皿類のA2類（口縁形態II類）とD類（口縁形態III類）が存在し、数点ではあるが稜椀の存在はより新しい要素といえる。また、石作窯のように陰刻文のバリエーションが豊富ではなく、¹¹⁾統一化されているのも新しい傾向を示していると評価する事もできる。以上のような点から、灰方1・2号窯は高橋編年II期の新段階に比定できると考えられる。洛西地域の緑釉窯の時期的な順序をいえば、石作窯1・2号窯－灰方1・2号窯－大向1号窯・小塩5号窯－天仏講池窯－小塩1号窯となる。洛西地域の緑釉陶器窯の中では石作窯に次ぐ古い段階のものであるが、石作窯にみられるような陰刻文の多様性が減少するなどの変化が見られる。

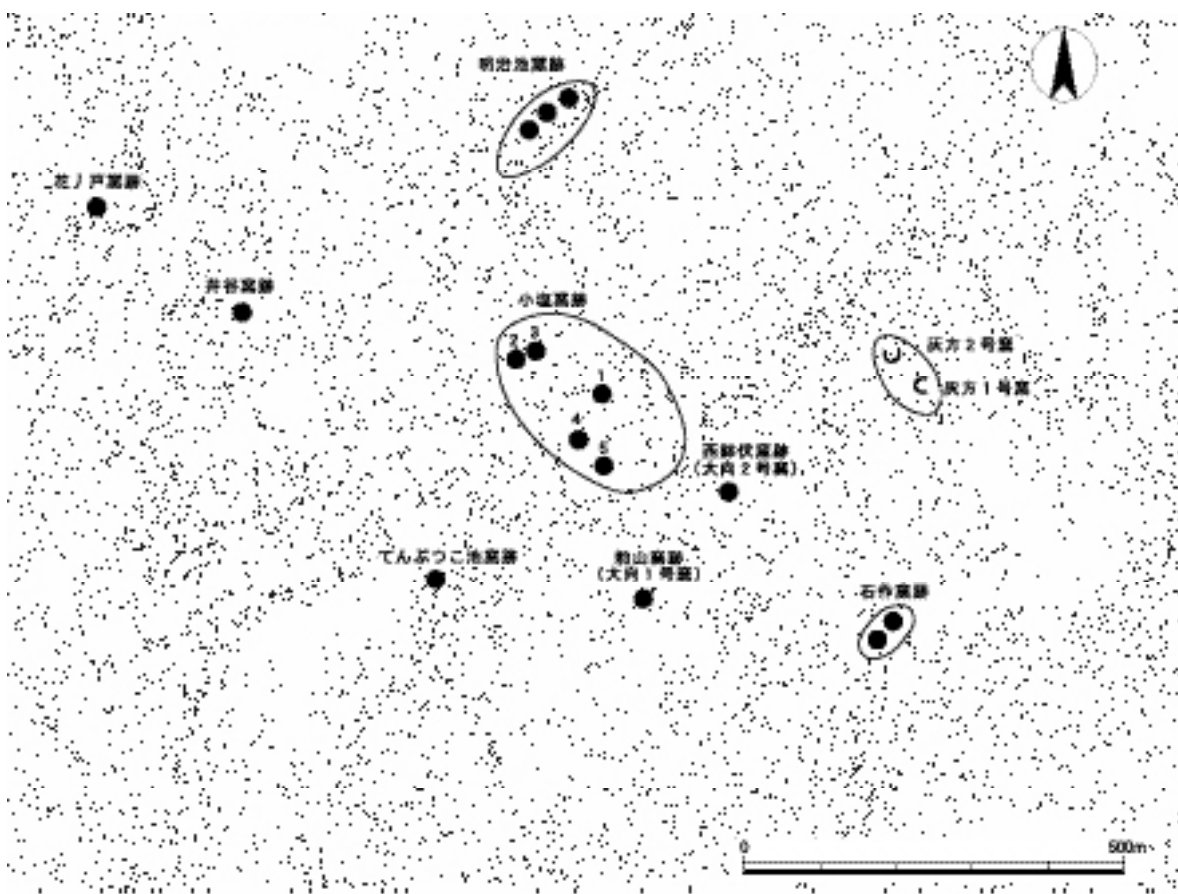


図70 窯跡分布図（1：10,000）

消費地でのあり方は、すでに高橋照彦氏が指摘しているように、平安京土器編年Ⅱ期古段階で椀・皿類の口縁形態Ⅲ類（D類）・Ⅱ類（A2類）が、平安京土器編年Ⅱ期中段階で稜椀・皿（E類）、輪花椀・皿（F類）が出現する¹²⁾。灰方窯ではすでに述べたように椀・皿類の口縁形態Ⅲ・Ⅳ類と極めて少数ではあるが稜椀がある。ただし、輪花椀・皿がないことから、平安京土器編年Ⅱ期古段階から中段階の様相を示しているといえる。

高台形態と口縁形態・陰刻文（表15）高台形態が判明したのは、高台部のみのもを含めて1号窯が657点、2号窯が2,062点である。平高台は1号窯が約53%、2号窯が約70%、輪高台は1号窯が約29%、2号窯が約7%、蛇の目高台は1号窯が約17%、2号窯が約24%で、1・2号窯共に平高台が過半を占め、次に1号窯は輪高台が、2号窯は蛇の目高台が多くなる。

この中で特徴的なのは輪高台のものである。椀・皿の口縁形態Ⅲ類・Ⅳ類と稜椀は、緑釉陶器の形態の中では9世紀中頃に現れる新しいものであるが、これらの新しい形態の椀・皿類の多くが輪高台である。陰刻文を施す椀・皿類もすべてが輪高台である。これらに施されるヘラミガキは、椀・皿という器形や細部の形態の違いに関係なくすべて丁寧に施されており、外面底部にヘラミガキが施されるのも輪高台のものに限られる。輪高台は椀・皿類の各種ある形態の中から意識的に組み合わせが行われているようである。

洛西の緑釉陶器窯では時期が下がるに従って、平高台の減少と輪高台の増加という傾向が確認できる¹³⁾。しかし、灰方窯よりも古い段階にある洛北の妙満寺窯や栗栖野3号窯では、平高台がないか、またはほとんど出土しない。灰方窯では、輪高台のものは、平高台・蛇の目高台などのものと比べてヘラミガキが丁寧に施されるという特徴をもつ。これがこの時期の平安京近郊の緑釉陶器窯に、普遍的に当てはまるのかは現段階では確認できていない。それぞれの窯での高台形態の比率の違いは、時期ごと・窯ごとに持つ意味が異なっている事も考えられ、必ずしも細かな時期差を反映していない可能性もある。今後、それぞれの窯出土資料での高台とその他の要素を組み合わせた検討が必要と思われる。

他地域産の緑釉陶器との関連・共通性 先にも述べたように、1・2号窯から出土した緑釉陶器素地の多数は椀・皿であるが、このほかにも稜椀・段皿・耳皿・三足盤・唾壺・取手付瓶・合子・鉢などが出土している。このような器形の構成は、灰方窯とほぼ同時期とみられる東海地方の猿投山西南麓古窯跡群の亀ヶ洞1号窯などとほぼ共通する¹⁴⁾。9世紀後半の平安京近郊・東海・防長地方で椀・皿類の新たな器形がそれぞれの産地で採用される事などから、9世紀前半に引き続いて一定の生産規範の存在が指摘されている¹⁵⁾。今回、椀・皿類だけでなく三足盤・唾壺・取手付瓶など特殊品を含めた器形構成にも平安京近郊窯と東海地方の窯との共通性が確認された。

表15 緑釉陶器底部比率表

	本山官山窯		妙満寺窯		栗栖野3号窯		石作1-2号窯		灰方1号窯		灰方2号窯		小塩4-5号窯		小塩1号窯	
平	67	80.7%	0	0%	1	3.2%	296	71.1%	946	53.4%	1437	69.7%	40	30.1%	4	1.0%
輪	7	8.4%	8	23.5%	17	54.8%	74	22.3%	190	29.3%	137	6.6%	37	27.8%	370	95.4%
蛇の目	9	10.8%	26	76.5%	13	41.9%	22	6.6%	112	17.3%	488	23.7%	56	42.1%	14	3.6%
合計	83	100.0%	34	100.0%	31	100.0%	332	100.0%	648	100.0%	2062	100.0%	133	100.0%	388	100.0%

陰刻文が施される緑釉陶器は、9世紀前半の洛北産の緑釉陶器では少量で、量的には東海産の方が多¹⁶⁾い。平安京近郊産の緑釉陶器の中で陰刻文が一定量を占めるのは、9世紀中頃以降に洛西地域で緑釉陶器の生産が始まってからである。また、その陰刻文様は、東海産の陰刻文とよく似た精緻なものもあるが、多くは独自の簡便化された文様である。

灰方窯の輪高台のものは、先にも述べたように平高台のものなどと比べて極めて丁寧にヘラミガキが施されている。また、陰刻文を施す椀・皿類の高台は全て輪高台であった。輪高台の緑釉陶器は、9世紀前半の平安京近郊産でもあるが比率的には少ない。一方、東海産の高台は、時期を通して基本的に輪高台を採用している。また、平安京内では、平安京近郊産の緑釉陶器と比較すると、東海産の緑釉陶器は優品の占める割合が高い。こうした状況をみると、灰方窯で輪高台と9世紀の後半に登場する新しい口縁形態Ⅲ・Ⅳ類や稜椀、それに陰刻文などを組み合わせて、東海産の緑釉陶器を意識した上級品が生産されていた可能性が考えられる。言い方を変えれば、当時、上級品は東海産という意識が存在した可能性がある。

弘仁年間以降に量産が開始される平安時代の緑釉陶器生産は、9世紀の中頃からその生産量が増加し、それに伴い生産地も拡大する。9世紀後半に洛西地域で開始する緑釉陶器生産は、洛北からの技術指導によって成立したとされる。この時期の灰方窯と東海産の緑釉陶器に、器形の構成または法量などの共通性が存在するのは、中央官衙からの規範が存在したことによるものと想定できる。一方、灰方窯での輪高台と陰刻文の組み合わせにみられる様な東海産の緑釉陶器を意識した緑釉陶器生産は、中央官衙の生産規範によるものとは考え難く、各生産地での志向の結果である可能性がある。このような現象が灰方窯だけに起きているのか、平安京近郊の他の緑釉陶器窯でも起きているのかは今後さらにの検証を進める必要がある。

2. 灰方の塚跡

近代以降に作られた砂防ダム、堰堤1の調査を行った。構築時期は、掘形内より出土した瀬戸産の磁器によって明治以降のものであることが明らかである。1区では、竹林の造成に伴って埋められた谷地形が検出されており、堰堤1はこの谷地形の谷頭よりやや下に構築されている。洛西地域の竹林は明治の末以降に造成が活発化していることが知られている。調査時においても、堰堤1から下の山の西斜面には竹林が広がっており、その構築には竹林の保護との関係があることが推測される。

堰堤遺構の調査例は全国的にみても少なく貴重な事例である。近代の堰堤としては明治のオランダ人技師デ・レーケの業績が著名であるが、明治時代以前にも治山行為として堰堤の築造は行われている。調査事例で中世に遡るものとして、大阪府枚方市津田遺跡で検出された13世紀の「255 堤防」がある。これは生駒山地から山裾の台地への地形の変化点に、谷を堰きとめるように築かれたものである。断面形は台形を呈し、高さ約1m、基底部幅6m以上を測り、礫を含む細砂、シルト、粘土を交互につき固めて構築している。この付近では、中世段階から山地がはげ山化していることが花粉分析の結果などから判明しており、これによって引き起こされる土砂流出から

耕作地などを守る為のものと考えられている¹⁷⁾。

江戸時代になると、近畿各地で堰堤が築かれていた事が史料から知られる。この時代、近畿の山々は草・柴などの農業肥料の確保の為に、柴山・はげ山化となる場所が多く、この結果、各地で土砂流出が起き、河床の上昇による河川交通への障害や河川の氾濫などの災害が起きた。これに対応する為、幕府は畿内近国に対して土砂留制度を立ち上げ、植林など様々な対策を実施している¹⁸⁾。その中には、堰堤の構築も含まれており、様々な工法が存在した事が知られる¹⁹⁾。堰堤1は、構造的には江戸時代の「石垣留」工法に近いと思われるが、明治以降の外来技術との比較検討の中で、その技術系譜の検証を行う事も今後の課題である。

3. 南春日町片山遺跡（図71）

南春日町片山町遺跡では、平安時代後期の水田を検出した。この水田の造成土の中には7世紀から13世紀の多数の遺物が含まれており、この中には7世紀の陶棺がある。今回の調査地から北南東に東に約300mの地点では、6世紀の小円墳である下西代1・2号墳が発掘調査によって確認されているが、調査段階では墳丘と石室の上半分は失われていた。今回確認された中世段階の耕地の開墾に伴う土地造成、削平によるものと考えられる。9世紀代の遺物には、土師器・須恵器の食器類と共に須恵器の水瓶や軒丸瓦など、やや特殊な遺物も出土している。調査地のある大原野は、桓武天皇の長岡遷都以来天皇の遊猟の地であり、²⁰⁾『源氏物語』に大原野行幸の様子が描かれるなど、天皇や貴族にとって特別な土地として位置づけられていた。現在の勝持寺とみられる「大原寺」の記事も『日本紀略』延暦十三年十二月十一日条にあり、仏教施設も平安初期には存在した事が史料からわかる。今回出土した水瓶や瓦は、まだ存在が明らかにされていない付近に存在した別業や寺院のものである可能性も考えられる。

今回検出された水田は4区の谷部では12世紀、台地上の2-2区では12～13世紀に耕作が始まっていることが出土した遺物などにより確認された。4区の水田は扇状地から開析谷への変化点に立地している。雛壇状に下がる水田区画の一つが幅2.5～5.5mと小さい。一見、棚田状を呈するあり方は、台地から谷への変化点という勾配のある地形に規制されたものであろう。谷地形の中の水田は、用水を引きやすい一方、雨水などの影響も受けやすい場所にある。南春日町片山遺跡が所在する乙訓地域では、12世紀に河川の水位の低下・湿地の離水現象が知られており、²¹⁾こうした自然条件が4区の谷地形の中における水田耕作を可能にしたものと思われる。ただし、降雨時の土砂流れ込みによる堆積作用はやはり大きく、共に12世紀代の遺物が出土する第1面と第2面との間に堆積する土が約60cmもあるのはこれの影響と見られる。花粉分析の結果、12世紀にはイネの他にもコムギ、オオムギ、ソバ、ナス近似種などが産出されており、近隣で耕作地が広がっていた事が推測される。また、伐採地の2次林として形成されるマツ属が多数産出されており、調査地周辺の一定範囲に人間活動が及んでいた事を窺わせる。同時期のマツ属の花粉の増加は、乙訓地域や平安京城の平野部でも確認されており、今回の山地裾部での分析結果と併せて、この時期に山城地域の中で広範囲に起きた植生変化であることが考えられる。

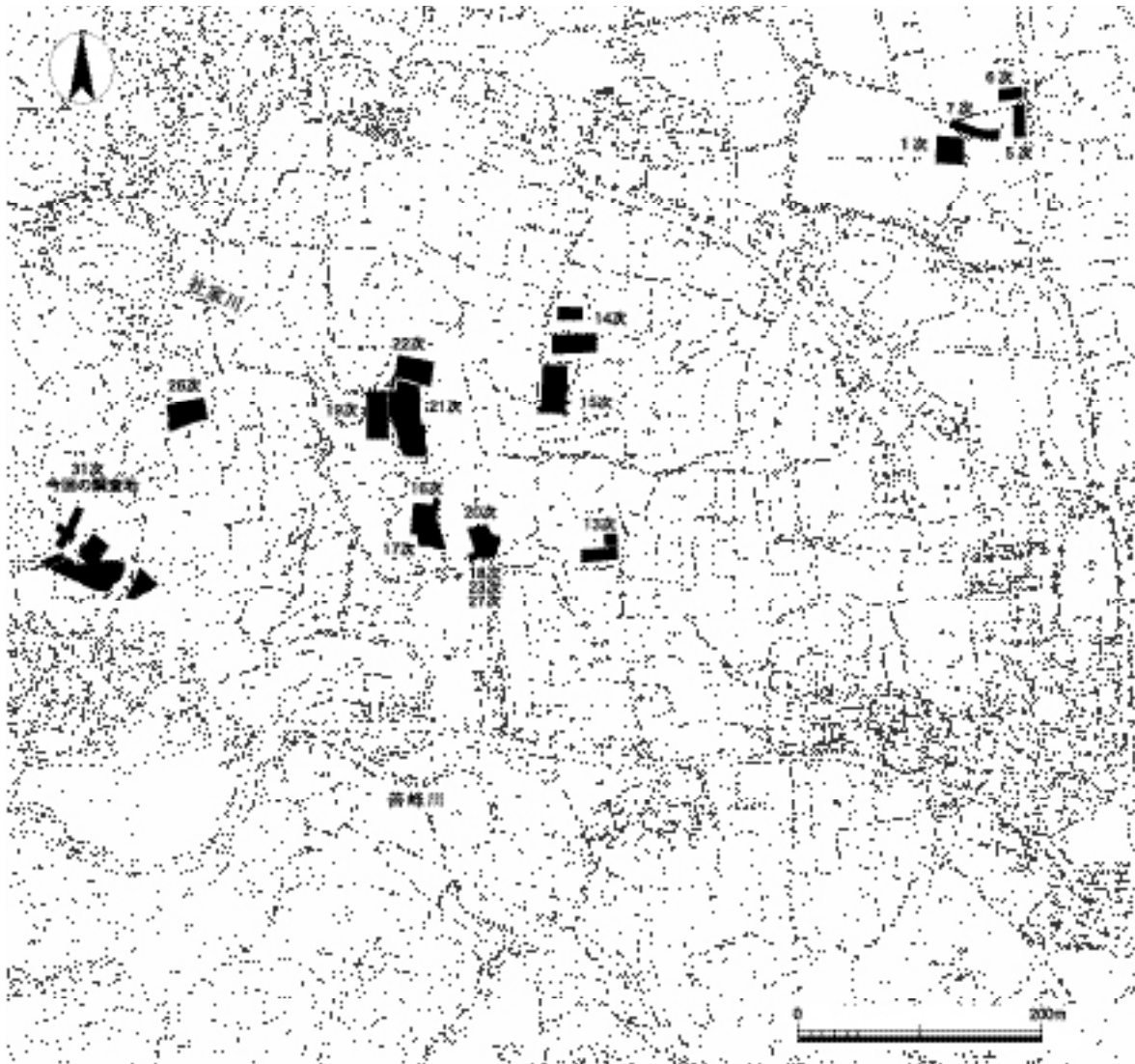


図 71 周辺調査位置図（圃場整備前、1 : 6,000）

近畿一円の平地では、11 世紀の後半から 12・13 世紀にかけて条里区画の面的な拡張という形で耕地の整備が行われた事が知られている²²⁾。今回 2-2 区で検出された 13 世紀の水田遺構の検出面は標高 85 ~ 87 m であり、地形的には高位段丘面にある。水田区画に伴う溝 1・5 の方向も自然地形に沿ったもので、圃場整備前の地形図からも条里区画は確認できない。大原野地域では、地形的な制約から条里区画を施工しない耕地の整備が中世に行われていた事が判明した。このような高所に水を引く水源として周辺には社家川が存在するが、調査地から約 200 m 東を南北に流れている。用水の引き込みには、上流域からの計画的な用水網の整備が行われたものと考えられ、局地的なものではなく広範囲な耕地の開発に伴うものと見られる。

調査地の北東側約 300 ~ 400 m の地点、社家川を挟んだ左岸域では、1990 年代の前半に圃場整備に伴って集落遺跡（下西代遺跡）の発掘調査が行われている（大原野 14・15・19・21・22 次調査）。この集落は、平安時代中期に成立、平安時代後期に面的に拡大した後、室町時代まで継続する。2-2 区と 4 区で確認された水田の成立と集落の画期が同時期であり耕地開拓者の集落と考えられる。ただし、4 区の 12 世紀代の溝 66 や耕作土から出土した瓦器などの土器類はほとん

ど磨滅がなく、社家川の右岸側にも一部居住域が存在した可能性が高い。

山地裾部の高位段丘面では、低地と比べて地形の変化が激しく条里区画の水田は造り難いが、今回の調査と既往の調査によって調査地周辺では居住地と耕作地の在り方が明らかとなった。また、下西代遺跡周辺は、地元では大原野神社の社家跡と伝えられている。その正否については今後さらなる検討が必要であるが、一般的には耕作地の開発主体の性格は不明であることが多く注目すべき事例と言える。

4. 勝持寺旧境内 (図 72・73)

調査では、鎌倉時代から室町時代の根石や溝が検出された。根石は掘形の径 0.4 m 程度のものが多く、建物規模としては大きくないものと思われる。調査地は勝持寺の山門の西隣に位置する。寛永元年 (1624) に描かれた『勝持寺境内図』では、「正行坊跡」と記された付箋が貼られており、この絵図から寛永期以前に勝持寺の子院が存在した事を窺わせていた。勝持寺は江戸時代の地誌

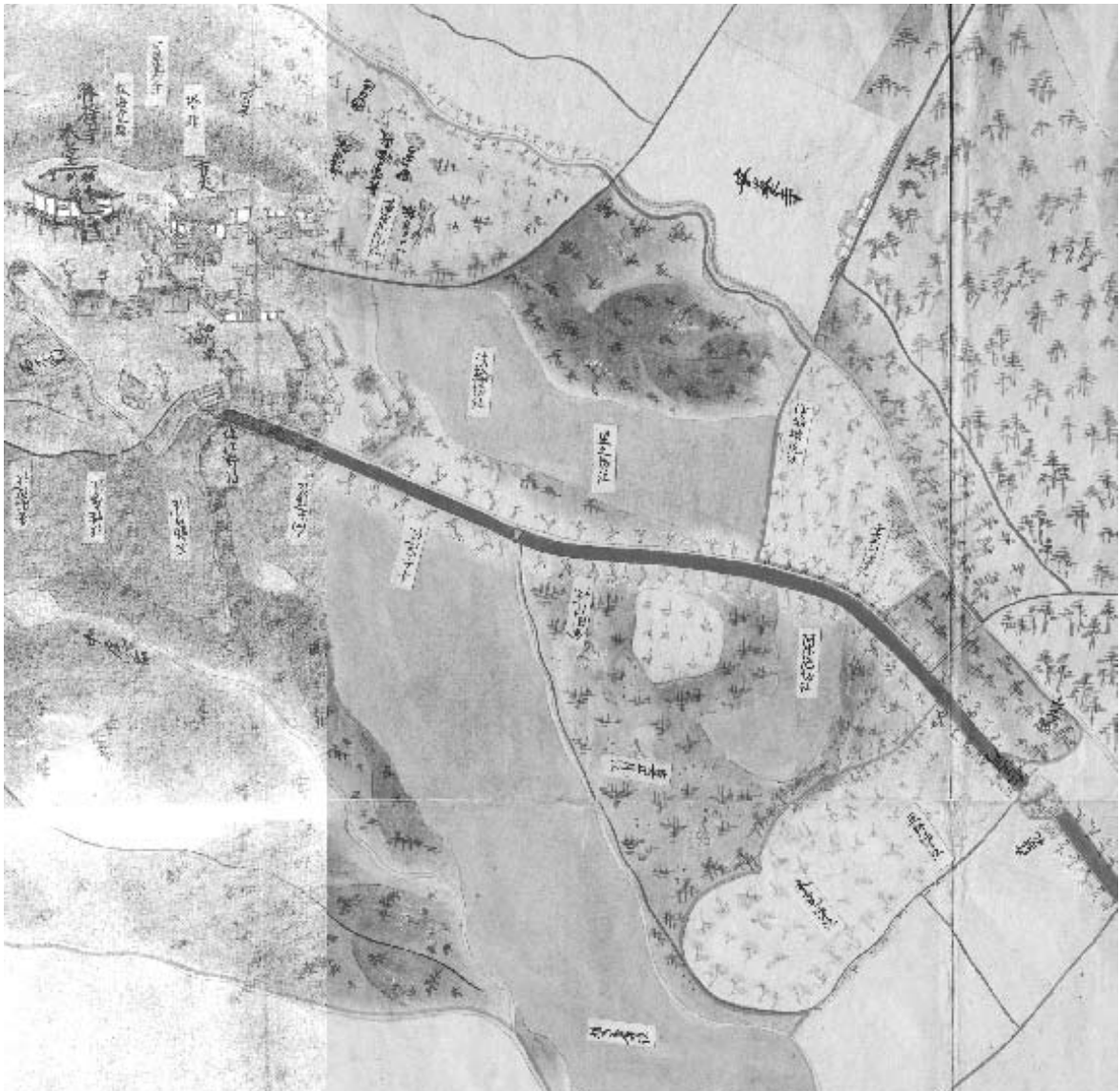


図 72 「勝持寺境内図」(寛永元年) 勝持寺所蔵

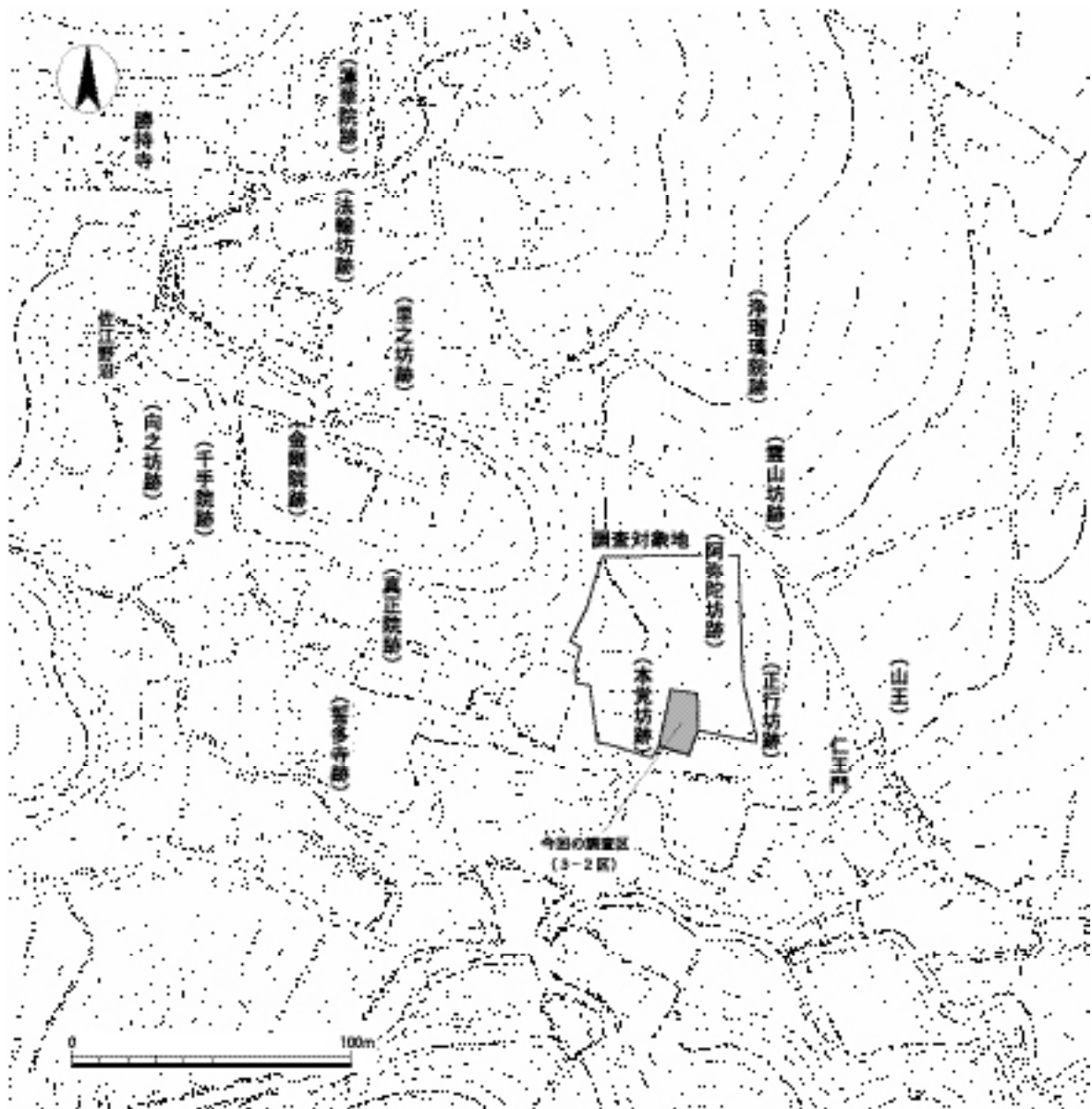


図 73 勝持寺子院推定位置図 (1 : 2,500)

などには、鎌倉時代から室町時代に「勝持寺四十九坊」といわれるほど多くの子院を抱えていたと記されているが、同時代資料にはこれについて記されたものはなく、先にあげた絵図によって子院の存在を推測するに過ぎなかったが、今回の調査によって、初めてその存在を証明する事ができた。今後の調査対象地内には、石塁や高さ約3mの石垣が残されており、これらは隣接する子院どうしを区画する施設である可能性が高い。中世寺院の子院の調査としては、福井県の白山平泉寺や和歌山県の根来寺などがあるが、全国的にみてもその数は少ない。平成22年度に本格的に実施される調査において、勝持寺子院の構造、存続時期などが解明されるものと思われる。

以上、述べたように今回実施された3地点の発掘調査では、それぞれに異なる性格の遺跡の調査が行われた。山資源に依存した窯業生産、山への治山行為、山裾部での水田開発、山岳寺院の子院造営などの結果、遺構・遺物として残されたもので、大原野地域の歴史性・地理性を反映し

た特色を表すものといえる。これらは、これまでに明らかになっていたとはいえないものばかりであり、地域の歴史を考える上で貴重な成果を得る事ができた。

註

- 1) 寺島孝一「石作窯跡の発掘調査」『古代文化』第31巻11号 1979年。寺島孝一「京都府石作窯」『日本考古学年報』32 1982年
- 2) 『須恵器窯構造資料集2』窯跡研究会 2004年
- 3) 山中信人「丹波(篠窯跡群)」『須恵器窯構造資料集2－8世紀中頃から12世紀を中心として』窯跡研究会 2004年
- 4) 山口慶一・千野裕道「マツ林の形成および窯業へのマツ材導入について」『東京都埋蔵文化財センター研究論集』Ⅷ(財)東京都埋蔵文化財センター 1990年
- 5) 蛍光X線分析は、胎土分析研究会の三辻利一氏からの全面的なご協力のもとに実施する事ができた。尼吹谷1・2号窯、栗栖野3号窯の分析試料となる土器片は京都市文化財保護課より提供を受けた。
- 6) 石井清司「篠窯須恵器」『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会 1995年
- 7) 『京都府遺跡調査報告書 第11冊 篠古窯群Ⅱ』(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 1989年
- 8) a. 石井清司「篠窯須恵器」『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会 1995年
b. 伊野近富「篠窯原型と陶邑窯原型の須恵器について」『京都府埋蔵文化財情報』第37号(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 1990年
- 9) 平安京土器編年については以下の文献による。
a. 平尾政幸「考察」『平安京右京三条三坊』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第10冊(財)京都市埋蔵文化財研究所 1990年
b. 小森俊寛・上村憲章「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」『研究紀要』第3号(財)京都市埋蔵文化財研究所 1996年
- 10) 高橋照彦「平安京緑釉陶器生産の展開と終焉」『国立歴史民俗博物館研究報告』第60集 1995年
- 11) 註8に同じ。石作窯については大阪文化財研究所の市川創氏のご教示を得た。
- 12) 高橋照彦「平安京近郊の緑釉陶器生産」『古代の土器研究 平安時代の緑釉陶器生産－平安時代の緑釉陶器・生産地の様相を中心に－』古代の土器研究会 2003年
- 13) 上村和直「平安京周辺の施釉陶器生産」『古代の土器研究－律令的土器様式の西・東3 施釉陶器－』古代の土器研究会 1994年
- 14) a. 坂野和信「日本古代施釉陶器の再検討〔I〕－初期の鉛釉陶・灰釉陶器－」『考古学雑誌』65－2 1979年
b. 尾野善裕「古代の尾張・美濃における緑釉陶器生産」『古代の土器研究 平安時代の緑釉陶器生産－平安時代の緑釉陶器・生産地の様相を中心に－』古代の土器研究会 2003年
東海産の緑釉陶器については、京都国立博物館の尾野善裕氏からご教示を得た。
- 15) 註10に同じ。
- 16) 高橋照彦編『須恵器生産における古代から中世への変質過程の研究』2003～2006年度科学研究費補助金基礎研究(B)研究成果報告書 大阪大学 2007年
- 17) 『津田遺跡』大阪府文化財センター調査報告書 第175集(財)大阪府文化財センター 2008年
- 18) 水元邦彦『近世の村社会と国家』東京大学出版会 1987年
- 19) 全国治水砂防協会編『日本砂防史』石崎書店 1981年
- 20) 『類聚国史』卷三十二 延暦十一年二月十八日条
- 21) 「長岡宮跡第422次(7ANFYS-2地区)～朝堂院南方官衙～発掘調査報告」『向日市埋蔵文化財』第66集(財)向日市埋蔵文化財調査センター 2005年
- 22) 山川 均「奈良盆地における条里制の展開とその特質」『条里制研究』9 1994年

付章 1 蛍光 X 線分析による洛北、洛西の窯跡出土緑釉陶器の相互識別

胎土分析研究会 三辻利一

(1) はじめに

Mo を 2 次ターゲットとするエネルギー分散型の蛍光 X 線分析装置をつかって、全国各地の窯跡出土須恵器の蛍光 X 線スペクトルを比較した結果、Rb と Sr は地域によって、ピークの高さが逆転する場合があります、また、Ti を 2 次ターゲットにして K と Ca を測定した結果、K と Ca はピークの高さは逆転することはなかったが、ピークの比は地域によって大きく変動した。こうして、Rb、Sr、および、K、Ca は地域差を表す元素であることが発見された。この発見が動機となって、須恵器産地推定法の開発研究が推進されることになった。地域差は通常、K-Ca、Rb-Sr の両分布図上で表示される。

その後、全国各地の花崗岩類を 3000 点ほど分析した結果、花崗岩類も両分布図上で地域差を示すことが実証された。日本列島の地質の基盤を構成する岩石が花崗岩類である。花崗岩類を構成する主要造岩鉱物は長石類、石英と、黒雲母、角閃石などの Fe 化合物である。とりわけ、長石類は重要で主要造岩鉱物の 6 割以上を占めるといわれる。長石類には Ca を多く含む斜長石と K を多く含むカリ長石がある。花崗岩類でも、須恵器でも主成分元素 K と微量元素 Rb の間に正の相関性が、同様に、Ca と Sr の間にも正の相関性があることも実証された。さらに、主成分元素 K と Ca、微量元素 Rb と Sr の間には逆相関の関係があることも発見されている。この結果、微量元素 Rb と Sr は花崗岩類中では、それぞれ、主成分元素 K、Ca と共存していたことが推察された。このことは花崗岩類の地域差は長石類が支配していることを示す。他方、須恵器の窯跡は山中にある場合が多い。須恵器の素地粘土は窯跡周辺にあるとすれば、その粘土は漂積粘土ではなく、残留粘土と考えられる。須恵器の窯跡の後背地には花崗岩類などの酸性岩が分布している場合が多い。当然、その粘土の化学特性は母岩の花崗岩類に支配されていると推察される。須恵器の地域差も母岩の長石類が支配していた訳である。

こうして、長石系因子を中心にして、須恵器産地推定法の開発研究が進められることになった。ただ、粘土にみられる地域差はそれほど大きいものではないので、窯跡出土須恵器の化学特性は両分布図上にプロットして、目で見える形で地域差を確認したのち、二つの生産地（窯跡または窯跡群）を選択し、2 群間判別分析法で相互識別を行った。

本報告でも、この方法を使って、京都洛西の灰方 1・2 号窯跡、洛北の尼吹ノ谷 1・2 号窯跡、栗栖野 3 号窯跡から出土した須恵器、緑釉陶器片を完全自動式の蛍光 X 線分析装置（波長分散型）をつかって分析した結果を報告する。

(2) 分析法

土器片試料は表面を研磨して表面付着物を除去したのち、タングステンカーバイド製乳鉢の中

で100メッシュ以下に粉碎された。粉末試料は塩化ビニル製リングを枠にして、高圧をかけてプレスし、内径20mm、厚さ5mmの錠剤試料を作成し、蛍光X線分析用試料とした。

使用した分析装置は理学電機製 RIX2100（波長分散型）である。この装置には TAP、Ge、LiF の3枚の分光結晶とガスフロー比例計数管、シンチレーションカウンターの二つの検出器が附属しており、Na、K、Ca、Fe、Rb、Sr の6元素を測定した。分光結晶と検出器の交換はコンピューターの制御で完全自動化されており、また、50試料が同時に搭載できる自動試料交換器も連結されている。試料交換とデータの打ち出しも自動化されている訳である。しかし、自動分析とは分光結晶と検出器を自動的に交換できることが完全自動分析の本来の意味である。大量の試料を分析するには、分光結晶と検出器をいちいち手動で交換する訳にはいかないからである。その結果、各試料について上記6元素を1試料について、6～7分間で測定が可能である。短時間の測定で6元素の分析データが得られるところから、大量の土器試料の分析が可能となる。土器の生産と供給の関係を再現するための土器胎土分析にはこのタイプの蛍光X線分析装置がきわめて有効である。RbとSrを観測するため、使用X線管球はRh管球（出力3.0kW）であり、使用条件は50kV、50mAである。この条件下で土器中に含まれる微量元素、RbとSrは十分定量分析できることが実証されている。全元素は真空下で測定された。

（3）分析結果

分析値は表16にまとめられている。全分析値は同じ日に測定された岩石標準試料JG-1で標準化された値で表示されている。大量の土器試料の分析データを処理、解読するにはJG-1による標準化法はきわめて有効である。とくに、主成分元素と微量元素の分析値を同等に処理できる点で有効であった。この表示法をとったため、KとRb、CaとSrの正の相関性が容易に見つけられたし、花崗岩類と須恵器（粘土）の分析値を比較する上でも有効であった。表16の分析値をつかって、図面は作成された。

図74には灰方1、2号窯跡出土須恵器の両分布図を示す。1号窯と2号窯の須恵器の分布は重なって分布したので、1枚の図にまとめた。図74に示すようにまとまって分布するので、これらを包含するようにして、灰方領域とした。この領域は定性的にしか領域を示さないが、他の領域と比較するには有効である。この結果、1号窯の須恵器と2号窯の須恵器は同じ粘土で作られていたことが判明した。1号窯と2号窯は同時操作していたかどうかは不明であるが、粘土の採集場所は同じであったと推定される。

図75には灰方1号窯跡出土緑釉陶器素地の両分布図を示す。比較のために、図74で描いた灰方領域を描いてあるが、1号窯跡出土緑釉陶器素地のほとんどは両分布図において、灰方領域内に分布することがわかる。このことは須恵器胎土と緑釉陶器素地は同じであることを示している。また、表16から、Fe因子にもほとんど差がないところから、同じ素材粘土を使って須恵器と緑釉陶器を焼成したことが考えられた。因みに、猿投窯群の中に、灰釉陶器と須恵器を同一窯で焼成していた窯があり、この場合には灰釉陶器には須恵器に比べてFe量が少なく、Feの少ない

表 16 胎土分析成分一覽表

出土遺跡	試料番号	器種	器形	K	Ca	Fe	Rb	Sr	Na
灰方1号窯	1	須惠器	杯A	0.623	0.048	2.19	0.603	0.368	0.192
*	2	*	*	0.550	0.014	3.03	0.526	0.189	0.084
*	3	*	*	0.673	0.024	2.16	0.693	0.234	0.227
*	4	*	*	0.645	0.048	2.11	0.610	0.354	0.202
*	5	*	*	0.711	0.039	2.36	0.643	0.335	0.230
*	6	*	*	0.704	0.031	1.92	0.578	0.307	0.192
*	7	*	*	0.593	0.015	2.37	0.613	0.216	0.128
*	8	*	*	0.639	0.018	2.39	0.598	0.212	0.142
*	9	*	*	0.622	0.046	2.14	0.531	0.331	0.170
*	10	*	*	0.630	0.051	1.96	0.718	0.331	0.255
*	11	*	鉢	0.614	0.068	2.01	0.686	0.345	0.245
*	12	*	*	0.667	0.058	2.32	0.641	0.373	0.206
*	13	*	*	0.671	0.052	1.69	0.684	0.351	0.294
*	14	*	壺M	0.654	0.049	1.96	0.718	0.317	0.272
*	15	*	壺	0.694	0.070	2.08	0.714	0.334	0.323
*	16	緑釉素地	椀	0.648	0.046	1.78	0.733	0.354	0.304
*	17	*	*	0.661	0.025	2.39	0.493	0.316	0.175
*	18	*	*	0.533	0.033	1.97	0.516	0.302	0.154
*	19	*	*	0.646	0.074	2.14	0.633	0.370	0.261
*	20	*	*	0.676	0.076	1.75	0.775	0.388	0.322
*	21	*	皿	0.654	0.061	1.87	0.699	0.387	0.224
*	22	*	*	0.675	0.019	2.33	0.720	0.245	0.245
*	23	*	*	0.635	0.027	2.12	0.711	0.268	0.268
*	24	*	*	0.602	0.033	2.40	0.576	0.325	0.159
*	25	*	*	0.617	0.025	2.09	0.696	0.265	0.251
*	26	*	*	0.555	0.039	1.98	0.525	0.304	0.160
*	27	*	*	0.672	0.036	2.02	0.736	0.290	0.311
*	28	*	*	0.617	0.032	2.39	0.584	0.320	0.163
*	29	*	*	0.597	0.033	2.31	0.609	0.304	0.177
*	30	*	*	0.492	0.030	1.65	0.511	0.233	0.118
*	31	*	*	0.580	0.025	2.38	0.582	0.279	0.176
*	32	*	*	0.564	0.016	2.74	0.585	0.185	0.138
*	33	*	*	0.609	0.031	2.38	0.643	0.295	0.165
*	34	*	*	0.589	0.020	2.38	0.593	0.290	0.138
灰方2号窯	35	須惠器	杯A	0.598	0.012	1.98	0.658	0.180	0.149
*	36	*	*	0.704	0.026	2.01	0.755	0.227	0.224
*	37	*	*	0.592	0.012	2.00	0.690	0.197	0.138
*	38	*	*	0.666	0.026	1.79	0.640	0.286	0.188
*	39	*	*	0.629	0.030	1.63	0.772	0.319	0.321
*	40	*	*	0.660	0.020	2.04	0.745	0.237	0.219
*	41	*	*	0.659	0.029	1.76	0.618	0.297	0.214
*	42	*	*	0.572	0.014	2.18	0.545	0.200	0.088
*	43	*	*	0.596	0.012	2.11	0.600	0.194	0.091
*	44	*	鉢	0.659	0.047	1.65	0.772	0.326	0.302
*	45	*	*	0.522	0.027	1.75	0.745	0.289	0.214
*	46	*	*	0.572	0.020	2.41	0.618	0.262	0.209
*	47	*	壺	0.632	0.028	2.09	0.640	0.276	0.282
*	48	*	壺M	0.702	0.019	2.13	0.758	0.243	0.251
*	49	須惠器	壺	0.632	0.026	1.86	0.697	0.288	0.309
*	50	緑釉素地	椀	0.686	0.032	1.61	0.834	0.319	0.314
*	51	*	*	0.711	0.034	2.43	0.561	0.321	0.191
*	52	*	後椀	0.659	0.043	2.37	0.513	0.323	0.165
*	53	*	椀	0.561	0.058	1.53	0.702	0.344	0.241
*	54	*	*	0.696	0.028	1.67	0.812	0.313	0.316
*	55	*	*	0.633	0.027	1.65	0.743	0.343	0.307
*	56	*	皿	0.712	0.021	2.10	0.791	0.252	0.283
*	57	*	*	0.630	0.025	1.88	0.734	0.300	0.219
*	58	*	*	0.642	0.025	2.08	0.545	0.291	0.183

出土遺跡	試料番号	器種	器形	K	Ca	Fe	Rb	Sr	Na
*	59	*	*	0.636	0.019	1.90	0.636	0.285	0.148
*	60	*	*	0.672	0.027	1.60	0.803	0.251	0.244
*	61	*	*	0.593	0.026	1.90	0.682	0.299	0.206
*	62	*	*	0.682	0.036	2.07	0.768	0.312	0.313
*	63	*	*	0.622	0.012	2.35	0.704	0.206	0.128
*	64	*	*	0.692	0.022	1.51	0.841	0.292	0.316
*	65	*	*	0.587	0.027	1.87	0.673	0.273	0.264
*	66	*	椀	0.678	0.017	1.70	0.828	0.220	0.222
*	67	*	皿	0.635	0.060	1.58	0.782	0.347	0.240
*	68	*	*	0.642	0.028	1.83	0.764	0.300	0.278
灰方2号窯	69	*	*	0.605	0.062	1.45	0.743	0.363	0.280
灰方1号窯	70	*	碗	0.636	0.049	2.03	0.675	0.378	0.346
尼吹谷1号窯	71	*	*	0.564	0.125	0.896	0.777	0.485	0.181
*	72	*	*	0.556	0.108	0.795	0.878	0.404	0.153
*	73	*	*	0.575	0.134	1.02	0.831	0.513	0.159
*	74	*	*	0.520	0.141	0.888	0.810	0.439	0.132
*	75	*	*	0.625	0.063	1.90	0.856	0.340	0.163
*	76	須恵器	壺	0.659	0.046	1.97	0.792	0.343	0.241
*	77	*	*	0.495	0.044	1.80	0.700	0.292	0.154
*	78	*	甕	0.635	0.114	1.75	0.691	0.328	0.186
*	79	*	不明	0.559	0.065	1.73	0.756	0.387	0.150
*	80	*	*	0.597	0.185	0.721	0.983	0.517	0.200
尼吹谷2号窯	81	*	サヤ鉢	0.596	0.076	1.77	0.721	0.393	0.082
*	82	不明	不明	0.607	0.118	1.17	0.767	0.436	0.060
*	83	須恵器	壺	0.533	0.084	1.08	0.659	0.362	0.113
*	84	*	*	0.550	0.074	1.34	0.681	0.386	0.146
尼吹谷	85	緑釉素地	壺	0.534	0.125	0.794	0.871	0.428	0.154
尼吹谷2号窯	86	不明	不明	0.532	0.189	0.759	0.756	0.513	0.160
*	87	緑釉素地	碗	0.510	0.143	0.783	0.745	0.472	0.149
*	88	須恵器	杯	0.563	0.035	2.21	0.686	0.281	0.119
*	89	緑釉素地	碗	0.550	0.146	0.902	0.831	0.473	0.108
*	90	須恵器	杯	0.609	0.040	2.57	0.722	0.294	0.218
*	91	緑釉素地	碗	0.610	0.138	1.17	0.833	0.472	0.088
*	92	須恵器	*	0.530	0.156	0.666	0.777	0.485	0.140
*	93	緑釉素地	*	0.526	0.167	0.837	0.716	0.494	0.145
栗駒野3号窯	94	*	碗	0.579	0.074	1.73	0.820	0.424	0.240
*	95	*	*	0.630	0.121	1.42	0.818	0.514	0.234
*	96	*	*	0.623	0.095	1.40	0.874	0.453	0.257
*	97	緑釉素地	皿	0.702	0.016	1.07	0.916	0.316	0.200

粘土を選択的に使用した例がある。

図76には灰方2号窯跡出土緑釉陶器素地の両分布図を示してある。この図にも比較のために、図74で描かれた灰方領域を描いてある。灰方2号窯の緑釉陶器素地もほとんどが灰方領域に分布しており、2号窯の緑釉陶器素地も1号窯の緑釉陶器素地と同じであることがわかる。

以上のことから、洛西の灰方1号窯・2号窯の須恵器胎土と緑釉陶器素地は同じであり、同じ地点で素材粘土を採取し、須恵器と緑釉陶器を焼成していたことが明らかになった。

つぎに、洛北の尼吹ノ谷1・2号窯跡出土須恵器の両分布図を図77に示す。比較のために、図74で描かれた灰方領域を描いてある。図77から、K-Ca分布図では尼吹ノ谷1・2号窯の須恵器は灰方領域の右側に偏って分布することがわかる。さらに、Rb-Sr分布図では灰方領域の右上部分に偏って分布する。このことは尼吹ノ谷窯の須恵器の胎土は灰方窯の須恵器の胎土に類似するが、別胎土であることを示す。

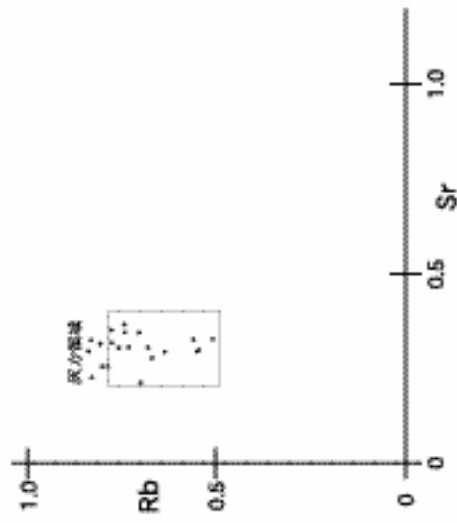
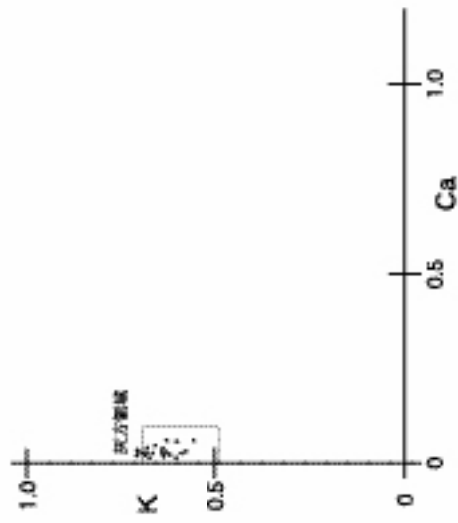


図76 灰方2号窯跡出土緑釉素地の面分布図

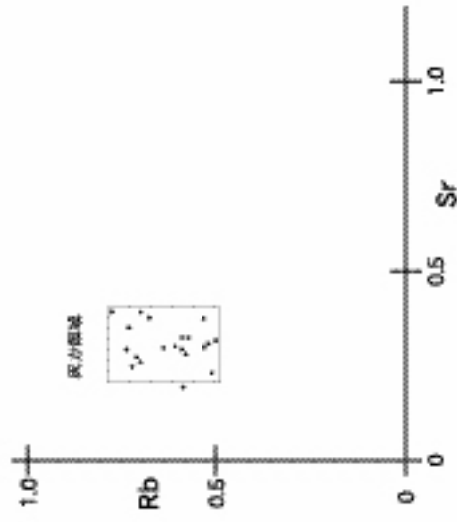
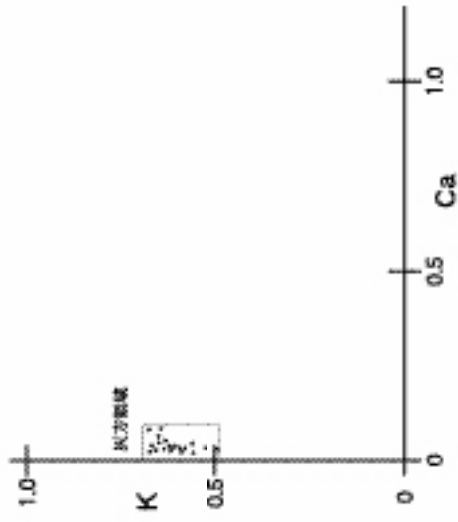


図75 灰方1号窯跡出土緑釉素地の面分布図

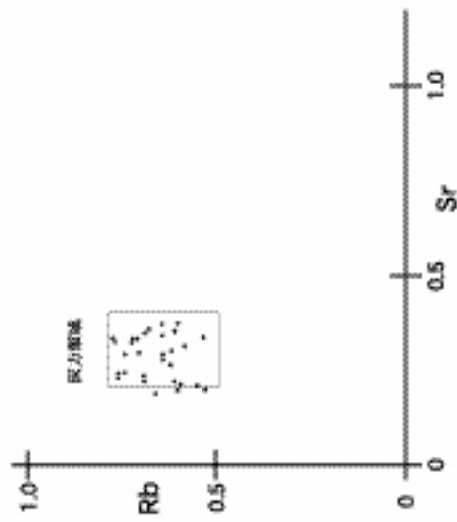
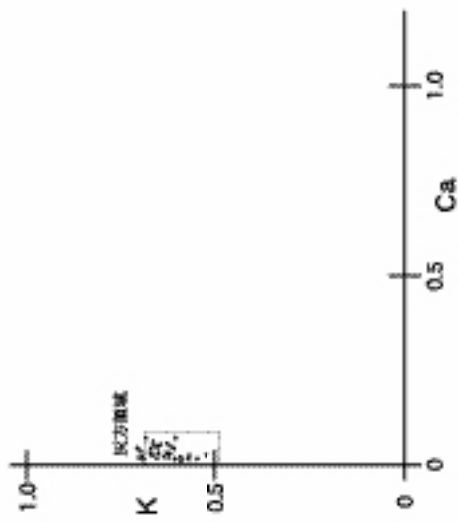


図74 灰方1・2号窯跡出土須恵器の面分布図

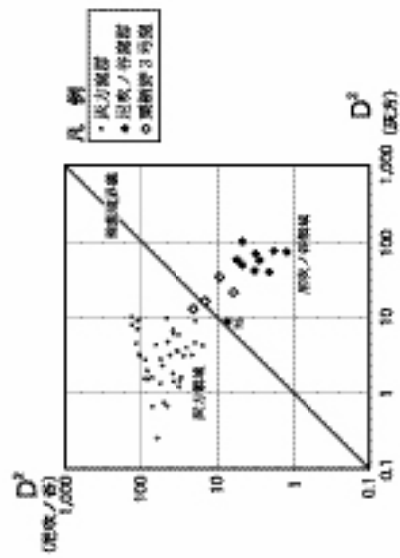
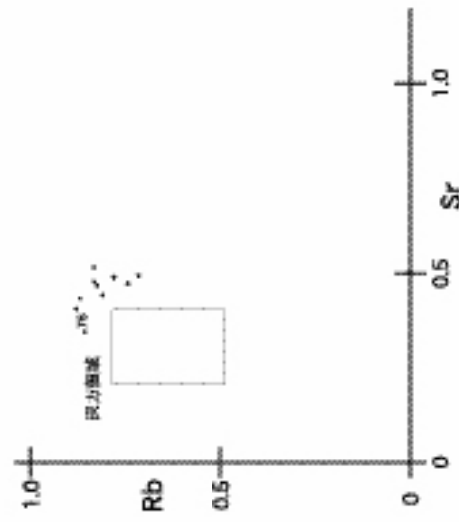
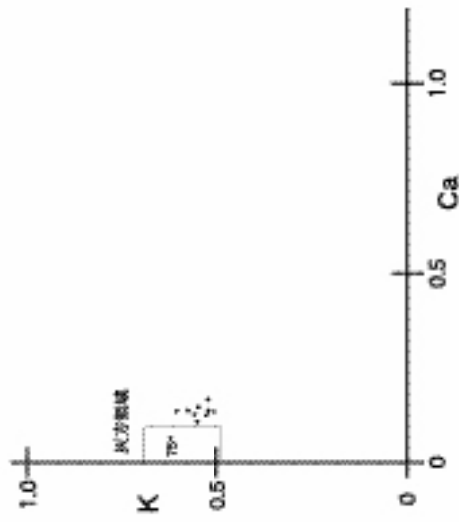
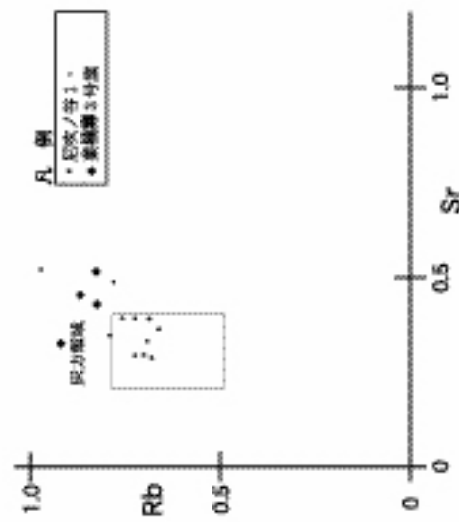
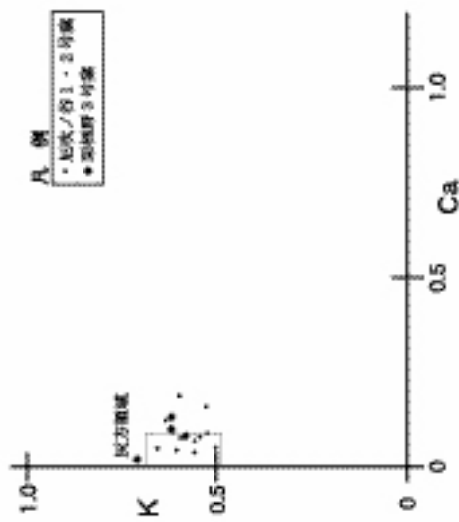


図79 灰方群と尾吹ノ谷群の相互識別 (K, Ca, Rb, Sr)

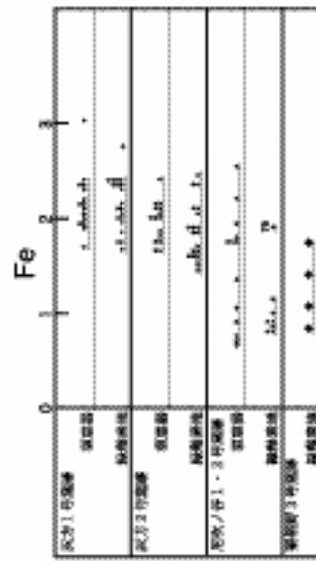


図80 Fe因子の比較

図77 尾吹ノ谷1・2号集出土須恵器の真分布図 図78 尾吹ノ谷1・2号集出土緑釉素地の真分布図

図 78 には尼吹ノ谷 1・2 号窯の緑釉陶器素地の両分布図を示す。比較のために、図 74 で描かれた灰方領域を描いてある。この図では両分布図で尼吹ノ谷 1・2 号窯の緑釉陶器素地は明らかに灰方領域をずれることがわかる。したがって、洛西と洛北の緑釉陶器の素材粘土は別粘土であることがわかる。両者の相互識別が可能であることは、図 79 の判別分析の結果からも明らかである。尼吹ノ谷窯の No.75 のみは他の尼吹ノ谷群の試料集団からずれる。この理由は不明である。また、図 77 と図 78 の比較から、尼吹ノ谷窯の須恵器胎土と緑釉陶器素地の両分布図における分布には若干の違いがみられる。このことは素材粘土の採取場所が須恵器と緑釉陶器で同じ地域内の別場所であったことを示唆する。

また、同じ洛北の栗栖野 3 号窯の緑釉陶器素地の両分布図は図 77 に示す。試料数が少ないので、図 79 の灰方群と尼吹ノ谷群間の判別図に栗栖野 3 号窯の緑釉陶器素地も同時にプロットしてある。この判別図では栗栖野 3 号窯の緑釉陶器は灰方群からも、尼吹ノ谷群からも離れて分布しており、同じ洛北でも、尼吹ノ谷群の緑釉陶器の胎土と栗栖野窯の緑釉陶器の胎土とは異なることがわかる。このことは粘土の採取場所が別場所であったことを示している。このデータから、今後、栗栖野窯の緑釉陶器の分析試料を増やせば、同じ洛北でも尼吹ノ谷群と栗栖野群の相互識別が可能であることが明らかにされるであろう。

最後に、Fe 因子を比較してみた。Fe 因子の比較は図 80 に示してある。洛西の灰方 1・2 号窯の須恵器と緑釉陶器素地は Fe 因子でも同じである。長石系因子のみならず、Fe 因子も同じであることは素材粘土が同じであったことを裏づける上の証拠となる。他方、洛北の尼吹ノ谷窯と栗栖野窯の須恵器、緑釉陶器の胎土の Fe 量は洛西の灰方群の須恵器、緑釉陶器の胎土に比べて少ない傾向があることがわかる。

以上のように、洛西、洛北の窯跡出土須恵器、緑釉陶器の胎土は長石系因子のみならず、Fe 因子でも違いがあることが認められた。この違いは母岩の違いによると考えられる。洛西には母岩としてチャート（珪岩）が分布しており、Ca、Sr が少ない傾向があることが、かつて、物集車塚古墳の埴輪を大量に分析したとき確認されている。これに対して、洛北は比良山系を構成する花崗岩類が母岩と推定される。この岩石には Ca、Sr、Fe が比較的少ない。この岩石に由来する粘土がやきものの素材となったことが推察される。こうして、洛西と洛北の窯跡出土緑釉陶器の胎土が相互識別できる理由も理解できる。また、尼吹ノ谷群と栗栖野群の緑釉陶器の胎土の違いは同じ母岩に由来する粘土が素材となったと推察されるが、粘土自体の自然界における不均質性による差違が粘土の採取場所の違いによって表れたと考えられた。

今後、消費地遺跡出土の緑釉陶器を分析することによって、洛西、洛北の窯で生産された須恵器、緑釉陶器の生産と供給問題の研究へと発展できる。土器類の産地問題は単に、消費地遺跡から出土する土器の産地推定することに止まらず、生産と供給の問題を明らかにし、その背後にある社会体制を考察することによって、はじめて、歴史研究の舞台へ登場することができる。考古学の本来の目的はそこにあるものと思われる。

付章2 南春日町片山遺跡・灰方窯跡の自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

I 南春日町片山遺跡の古環境解析

はじめに

南春日町片山遺跡は、善峰川の支流である社家川流域の西山丘陵地帯からの土砂流出で発達した沖積扇状地から開析谷にかけて位置する（植村,1999・2004、経済企画庁,1972、西山団研グループ,1967）。今回の調査区のうち、沖積扇状地斜面に位置する2-2区では、中世の可能性のある耕作土の形成年代を推定することを目的として、放射性炭素年代測定を実施する。また、沖積扇状地から開析谷にかけて位置する4区では、12世紀頃の古環境に関する情報を得ることを目的として、調査区の堆積物を対象とする、花粉分析・植物珪酸体分析・大型植物化石分析・樹種同定を実施する。以下に調査結果について報告するが、紙面の都合で各分析手法および結果表の一部については割愛してある。これらについては京都市埋蔵文化財研究所に保管されているので参照されたい。

1 2-2区の堆積層の形成年代

沖積扇状地斜面に位置する2-2区南西壁断面の堆積層の累重状況を図81に示す。断面下部で確認された6・5層は、側方への粒径変化が著しい、部分的に葉理構造が確認される、細礫・小礫が混じる泥質砂から泥混じり砂礫からなる。これらの層相から、6・5層は扇状地を構成する土石流堆積物と判断される。この上位に累重する4・3層は、人為的に攪拌されている堆積物からなる。4層は上位層準から溶脱した酸化鉄が沈着する、小礫・大礫が混じる、やや腐植に富む泥質砂～砂質泥の偽礫・集合体、3層は著しく攪拌された腐植に富む泥質砂～泥質砂の偽礫・集合体からなる。3層では偽礫・集合体の大きさが小さくなり、間隙密度が発達する。このような層相から、4・3層は人為的に攪拌ないし客土された堆積物で、3層が耕作土に相当する。これらの耕作土の上位には、現在の土壌生成が進行する、人為的客土とみられる2・1層が累重する。

表17 南春日町片山遺跡2-2区 放射性炭素年代測定および暦年較正結果

調査区	層名	試料状態	測定年代 (BP)	$\delta^{13}C$ (‰)	校正年代 (BP)	暦年較正年代 (cal)				Code No.		
						測定		較正			相対比	
2-2区 南西壁	4層	炭化材 アザミの根茎	970±20	-24.80±0.36	970±20 (970±20)	σ	cal AD 1,032	- cal AD 1,045	cal BP 928	- 905	0.488	IAAA- 93278
							cal AD 1,094	- cal AD 1,120	cal BP 856	- 830	0.412	
2σ	cal AD 1,120	- cal AD 1,147	cal BP 830	- 803	0.099							
	cal AD 1,017	- cal AD 1,055	cal BP 933	- 895	0.416							
						cal AD 1,077	- cal AD 1,154	cal BP 878	- 796	0.684		

1) 年代値の算出には、Libbyの半減期5568年を使用。

2) BP年代値は、1950年を基点として何年前であることを示す。

3) 付記した誤差は、測定誤差σ（測定値の68%が入る範囲）を年代値に換算した値。

4) 暦年較正には、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV6.0（Copyright 1988-2010 M Stuiver and P J Reimer）を使用。

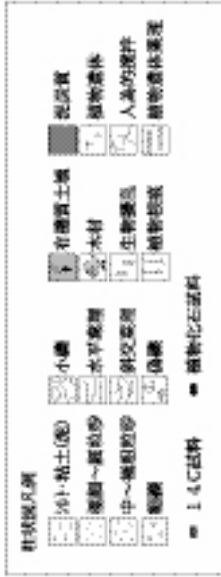
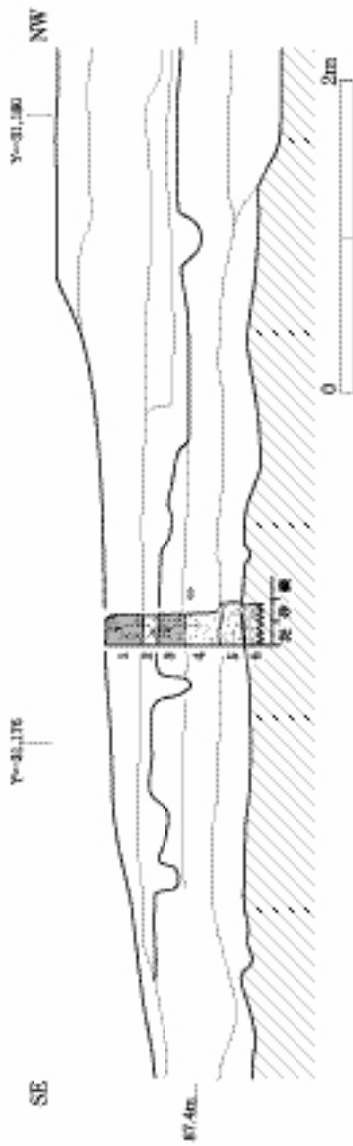
5) 暦年較正には補正年代の括弧内に示した丸める前の値を使用している。

6) 暦年は1桁目を丸めるのが慣例だが、暦年較正曲線や暦年較正プログラムが較正された場合の再計算や比較が行いやすいように、1桁目を丸めていない。

7) 統計的に真の値が入る確率はσは68%、2σは95%である。

8) 相対比は、σ、2σのそれぞれを1とした場合、測定値に真の値が存在する法則を相対的に示したものである。

1) 2-2区 南西壁断面



2) 4区 南壁断面

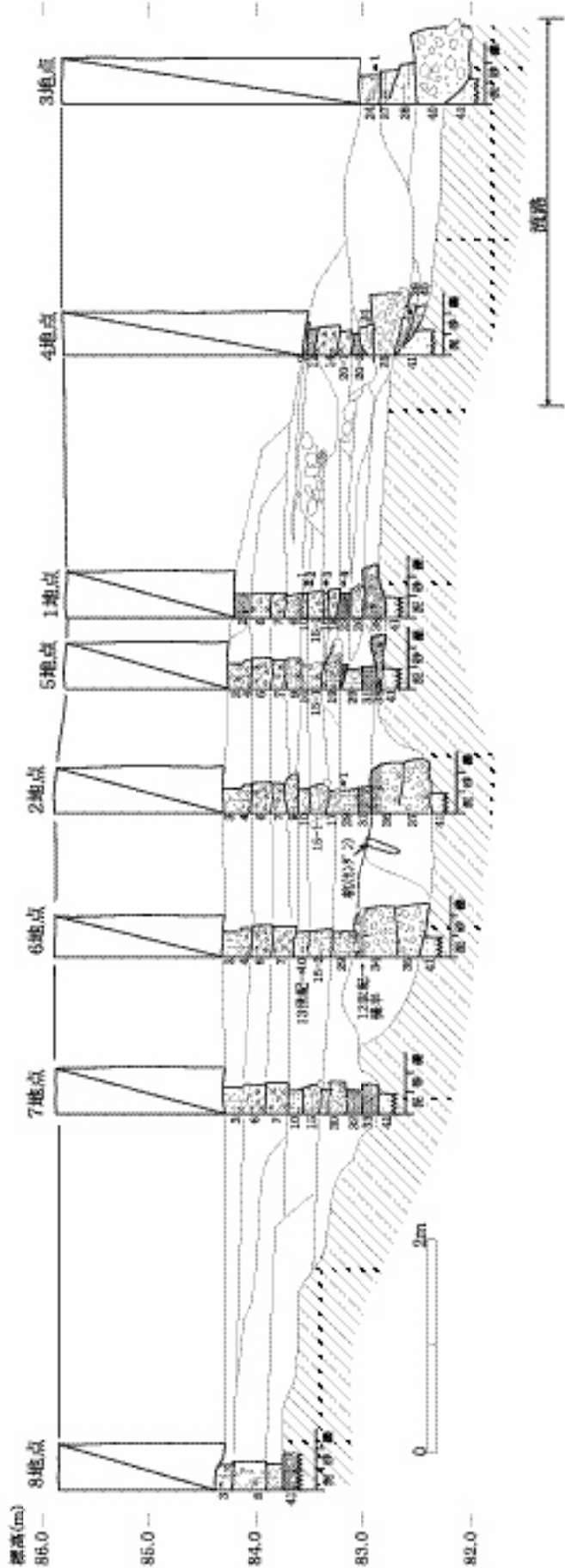


図 81 南春日町片山遺跡 調査地点の模式柱状図および試料採取位置

4・3層の耕作土の形成年代は、4層から出土した炭化材（アカガシ亜属）の放射性炭素年代測定結果から、暦年で11世紀～12世紀頃と推定される（表17）。この年代は、下記する沖積扇状地～谷底低地にかけて位置する4区において、耕作地の造成が始まる時期に近似している。

2 4区における古環境復元

2-1 4区堆積層の累重状況

4区南壁断面では、現在の土地改良に伴う厚く堆積する人為的客土直下において、沖積扇状地から開析谷にかけての堆積層の累重状況が観察される（図81）。断面西側が開析谷斜面、東側が沖積扇状地にあたる。

断面東側の扇状地を構成する堆積物（38層～34層）は、礫支持あるいは砂質泥をマトリクスとする砂礫からなる。最上部は土壌化しており、人為的攪拌の影響が及んでいる。これらの層相から、38層～34層は土石流堆積物と判断され、堆積後に離水し、土壌生成が進行したことが推定される。この扇状地性堆積物の形成年代は不明であるが、土壌生成層準から12世紀後半の遺物が出土していることから、それ以前に離水していたことがうかがえる。

調査区西側の開析谷を充填する流路充填堆積物は、堆積層の切り合い関係から、上・下位の堆積ユニットに区分される。下位の堆積ユニットは40層～27層、上位の堆積ユニットは25・24層が相当する。各堆積ユニットでは、流路底に土石流堆積物とみられる礫支持、あるいは砂質泥をマトリクスとする砂礫が堆積し、その上位に上方細粒化する葉理構造の発達する中～細粒砂～泥質細粒砂からなる掃流堆積物が累重する。掃流堆積物は流路縁で植物遺体葉理を挟在する。これらの堆積層の累重状況から、開析谷は、侵食と土石流堆積物・掃流堆積物による堆積を繰り返しながら充填されていったことがうかがえる。これらの堆積層の形成年代については不明であるが、上位の堆積ユニット最上部は、河岸である沖積扇状地末端部を覆っていることから、最上部の堆積は12世紀頃と推定される。

離水した扇状地堆積物の上位には、12世紀以降に人為的に客土された、垂角状の砂質泥～泥質砂の偽礫ないし集合体が不規則に配置する人為的堆積物が積層している（1～20・29・31層）。人為的堆積物の層相は、10層と9層を境として多少変化する。

10層より下位の人為的堆積層は、層厚が15cm前後、小礫サイズを主体とする偽礫・集合体からなる。各層下部は客土時の初生の構造を残すが、上部は著しく攪拌されており、腐植を僅かに含む、塊状をなす細粒化した偽礫が混じる砂質泥からなる。この人為的に攪拌された層準では、偽礫と大礫からなる畔状の高まりや溝状の凹地などの遺構が確認されている。溝状の凹地は、偽礫混じりの腐植質泥質砂、水平葉理をなす植物遺体が混じる砂質泥などで充填されており、22層では人為的に投棄された木材などの植物遺体が多く混じる。なお、10層から13世紀の遺物が出土することから、10層より下位の人為的堆積物の形成期は12世紀～13世紀頃の可能性がある。

一方、9層より上位の人為的堆積層は、偽礫・集合体の大きさが大礫～小礫サイズと大きくなり、層厚も20cm前後と厚くなる。各層上部は10層より下位層準と同様に人為的に攪拌されているが、

泥状ではなく、また畦畔状の高まりや溝状の凹地は確認されない。

以上のことから、扇状地を覆う12世紀以降の人為的営力により形成された客土層は、耕作地の造成を目的としたものであったことが推定される。また、人為的堆積物の層相が9層より上位で多少変化することから、耕作地の造成のあり方や土地利用が13世紀以降に変化していることが推定される。

2-2 植物化石の産状

植物化石分析は、調査目的と上記の堆積層の累重状況を踏まえ、12世紀以前の流路縁堆積物(3・4地点)、12世紀以降の人為的堆積層上部の人為的攪拌層準(1・2地点)について調査を実施した。

(1) 花粉化石の産状

花粉化石の層位的産状を図82に示す。調査区西側の上・下位の流路の流路縁堆積物(3・4地点)の花粉化石群集は、流路沿いの植生を反映していると考えられる。下位の流路縁堆積物では

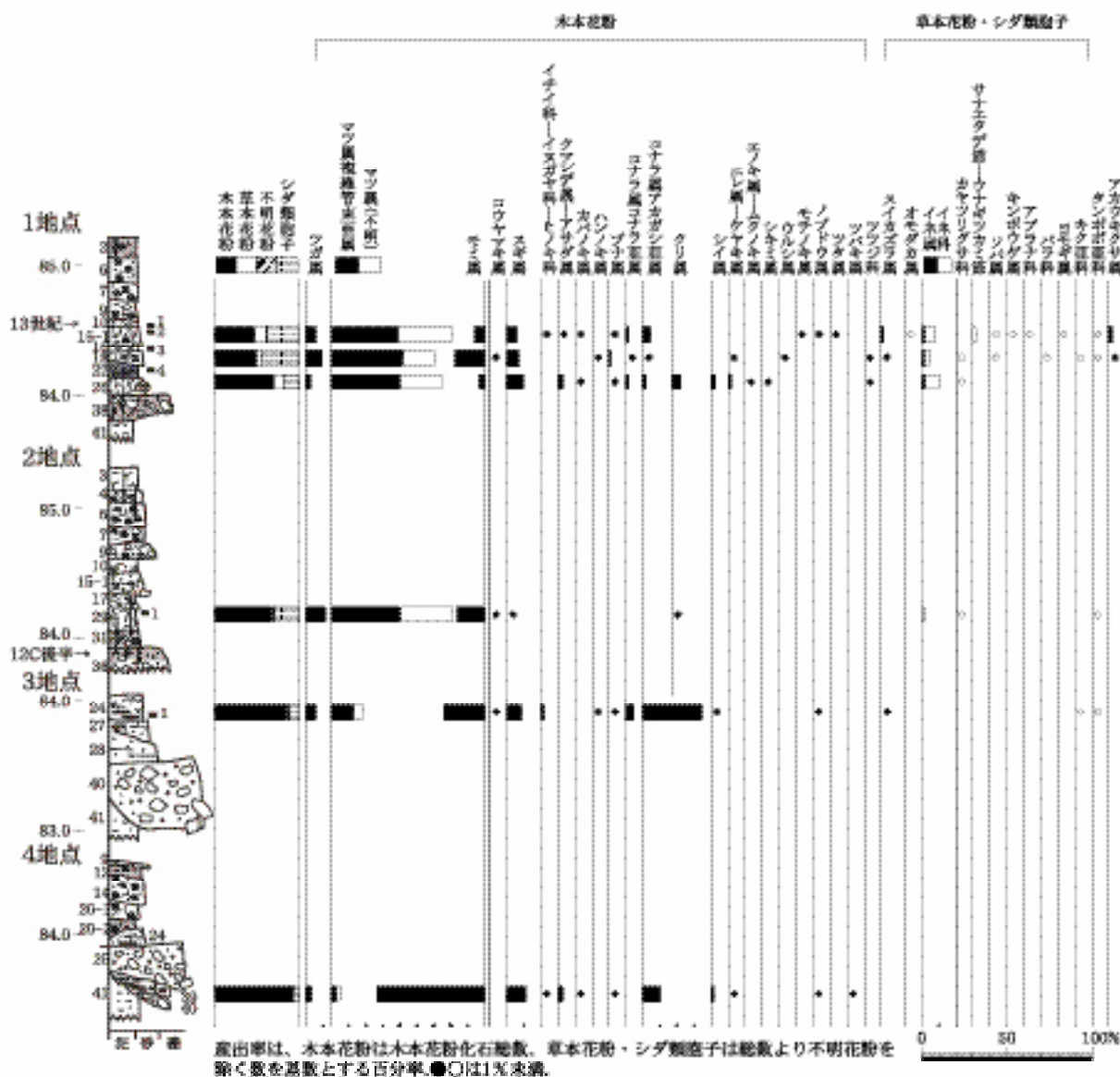


図82 南春日町片山遺跡4区 花粉化石群集の層位分布

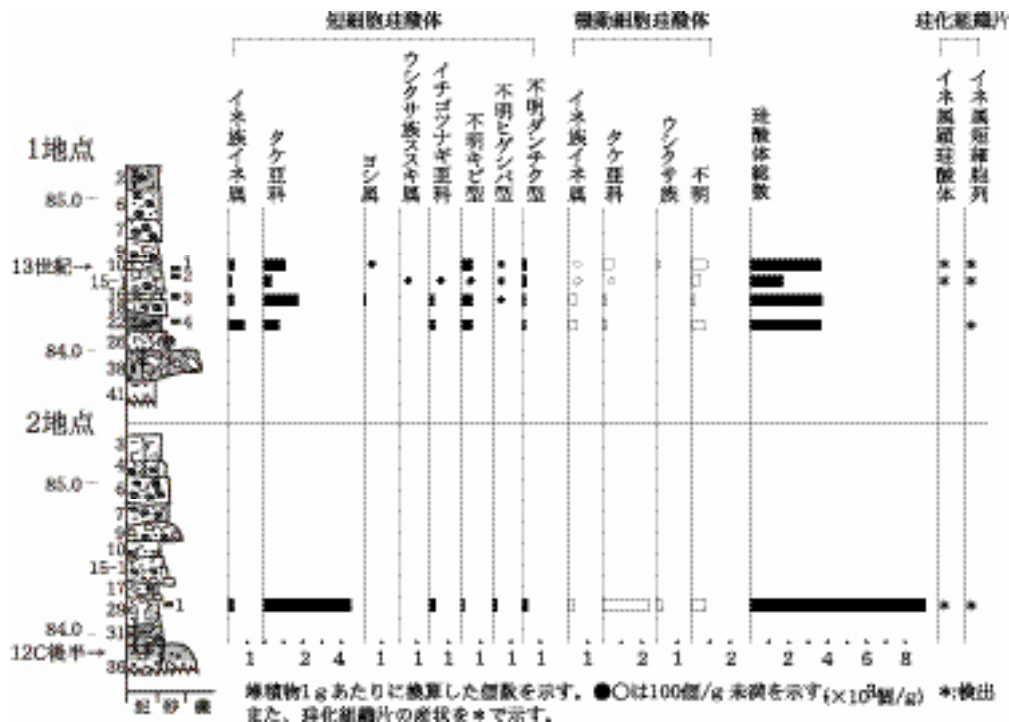


図 83 南春日町片山遺跡 植物珪酸体含量の層位分布

温帯針葉樹のモミ属が優占し、常緑広葉樹のアカガシ亜属などを伴う組成を示す。上位の流路縁堆積物ではモミ属が減少し常緑広葉樹のアカガシ亜属が増加する。また、二次林要素であるマツ属が漸増している。

一方、扇状地堆積物の上位に累重する人為的堆積層の花粉化石群集は、二次林要素であるマツ属複維管束亜属が卓越することが特徴である。全般に花粉化石の保存状態が悪く、堆積時・後の風化の影響を受けている。また、草本花粉がやや増加し、その中ではイネ科がやや多くみられる。水生植物のアカウキクサ属とオモダカ属、栽培種のイネ属・ソバ属が低率ではあるが産出する。

(2) 植物珪酸体の産状

12世紀以降の人為的堆積物の植物珪酸体の層位分布を図83に示す。人為的堆積物から産出した植物珪酸体は、全般に保存状態が悪く、表面に多数の小孔（溶食痕）が確認される。

植物珪酸体含量密度は、29層で約1.1万個/g、22～10層で2,200個/g～5,000個/g前後と上位で低くなる。各種類では、29層でタケ亜科の含量密度が高いが22～10層で低くなる。栽培植物のイネ属由来の短・機動細胞珪酸体とその組織片、籾殻に形成される穎珪酸体が調査全層準から産出した。イネ属の含量密度は、人為的攪拌層準で短細胞由来が100～200個/g、機動細胞由来が100未満～400個/gである。溝状の凹地堆積物である22層では短細胞由来が800個/g、機動細胞由来が400個/gと人為的攪拌層準よりやや高い値を示している。この違いは植物珪酸体の堆積物中への取り込まれ方の違いを反映しているものと判断される。

(3) 大型植物化石の産状

大型植物化石分析は、下位の流路縁充填堆積物（4地点試料1）と、人為的擾乱層準の溝状の凹地堆積物（1地点試料4）について実施した。各層準の産状および解剖学的特徴を表18・19

表 18 南春日町片山遺跡 大型植物化石分析結果

分類群	部位	状態	地点・試料番号		備考
			4区 1地点	4区 4地点	
			4	1	
木本					
モミ属	葉	完形		42	
		破片		108	
		破片		72	
		破片		92	
アカマツ	葉	破片	先端部		
マツ属複葉葉東豆属	葉	破片	基部		
ヒノキ	枝条	完形	炭化	1	
イチイガシ	幼果	完形		28	
アラカシ-シラカシ	幼果	完形			1
アカガシ亜属	幼果	完形			2
	果実	破片			1
コナラ属	果実	破片			1
サカキ	種子	破片			2
ヒサカキ属	種子	完形			13
		破片			6
キイチゴ属	核	完形		1	3
		破片			2
サンショウ属	種子	破片		1	
イイギリ	種子	破片			1
タラノキ	核	破片			1
広葉樹	葉	破片	基部		16
		破片			+
					イチイガシ近似種含む
草本					
イネ	穎	破片	基部	炭化	13
		破片	基部	炭化	4
		破片		炭化	6
		破片		炭化	7
	胚乳	破片		炭化	1
ヒエ-キビ	胚乳	完形		炭化	1
オオムギ	胚乳	完形		炭化	1
コムギ	胚乳	完形		炭化	2
		破片		炭化	1
ムギ類	稃軸	破片		炭化	1
イネ科	果実	完形			1
ホタルイ属	果実	完形			2
カヤツリグサ科	果実	完形			3
		完形	炭化		1
ミズ属	果実	完形			2
		破片			1
タデ属	果実	完形			4
		破片			2
ナデシコ科	種子	完形			1
キンボウゲ属	果実	完形			1
アブラナ科	種子	完形			5
		破片			1
ネコノメソウ類	種子	完形			3
カタバミ属	種子	完形			2
スミレ属	種子	完形			2
		破片			3
チドメグサ属	果実	完形			3
サクラソウ科	種子	完形			1
タツナミソウ属	果実	完形			2
イヌコウジュ属	果実	完形			13
		破片			7
トウバナ属	果実	完形			2
ナス近似種	種子	破片			1
ナス科	種子	完形			1
不明種実		完形			12
樹皮					2(3cm)
木材					15cc(2.6cm)
炭化材					8(3mm)
木の芽					6
花序					+
植物のトゲ					6
菌苔類					1
菌核					+
昆虫					3
土器					38
					24
					1
分析量					200cc
					273.41g
					200cc
					326.94g

表 20 南春日町片山遺跡 樹種同定結果

地点名	試料名	形状	樹種	備考
1 地点	4	芯持丸木(直径1.4cm)	ヒノキ科	
		芯持丸木(直径1.4cm)	サクラ属	
		板状(板目)	広葉樹	
4 地点	1	板状(板目)	コナラ属アカガシ亜属	頰部に加工痕有
		破片	コナラ属アカガシ亜属	
36層上面	焼材		センダン	

表 21 木材化石の解剖的特徴

<p>・ヒノキ科 (Cupressaceae)</p> <p>軸方向組織は放射管と樹脂細胞で構成される。放射管の早材部から晩材部への移行は緩やか～やや急で、晩材部の幅は狭い。樹脂細胞は晩材部付近に集められる。放射組織は放射線のみで構成される。分形管孔は保存が悪く観察できない。放射組織は単列、1～10 細胞高。</p> <p>・コナラ属アカガシ亜属 (Quercus subgen. Cyclobalanopsis) ブナ科</p> <p>放射材で、管壁厚は中層～厚く、晩材部では薄肉形。単柱で放射方向に配列する。道管は早穿孔を有し、環孔は交互状に配列する。放射組織は同径、単列、1～16 細胞高のものも複合放射組織とがある。</p> <p>・サクラ属 (Prunus) バナ科</p> <p>環孔材で、管壁厚は中層、晩材部では角張った棒状形。単列または2～6 個が主として放射方向に整合して存在し、年輪界に向かって管壁を漸減させる。道管は早穿孔を有し、環孔は交互状に配列、内環にはらせん肥厚が認められる。放射組織は同径、1～2 細胞高、1～30 細胞高。道管配列の特徴から、苦楡属木のリンゴタの可能性があるが、小径木のため同定には至らず、サクラ属とした。</p> <p>・センダン (Melaleuca indica L. var. subtrigona Miquel) センダン科センダン属</p> <p>環孔材で、孔壁厚は中層、孔壁外でやや急激に管壁を減じたもの。単列または2～6 個が整合して配列し、年輪界に向かって壁を漸減させる。道管は早穿孔を有し、環孔は交互状に配列、小道管内環にはらせん肥厚が認められる。放射組織は同径、1～4 細胞高、1～30 細胞高。放射組織は同径状、ターミナル状および管状。</p>

に示す

下位の流路縁堆積物の大型植物化石群集は、木本類が主体である。針葉樹のモミ属の葉が最も多く産出し、他に常緑広葉樹のアカガシ亜属の種実（イチイガシ、アラカシーシラカシを含む）、サカキ、ヒサカキ属、キイチゴ属の種子、広葉樹の葉などが産出する。草本類の産出数は少ないが、種類構成は多様で、ミズ属・タデ属・キンボウゲ属・ネコノメソウ類・チドメグサ属・サクラソウ科・タツナミソウ科・イヌコウジュ属・トウバナ属などの種実・果実が産出する。栽培植物のイネ属の穎が1点であるが産出する。

人為的擾乱層準の溝状の凹地堆積物の大型植物化石群集は、草本主体である。イネの穎と胚乳、ヒエーキビ・オオムギ・コムギの胚乳、ナス近似種の種子などの栽培植物の種実が特徴的に産出する。これらの多くは炭化している。それ以外の草本はホタルイ属を含むカヤツリグサ科、カタバミ属、スミレ属、イヌコウジュ属だけで種類構成は単調である。木本類は、ヒノキの枝条が比較的多く産出し、アカマツを含むマツ属複雑管束亜属の葉、キイチゴ属の核、サンショウ属の種子破片が僅かに産出する。

(4) 樹種同定結果

樹種同定結果を表 20、各分類群の解剖学的特徴を表 21 に示す。

下位の流路縁充填堆積物（4 地点試料 1）中の木材は、いずれも常緑広葉樹のアカガシ亜属に同定された。加工痕があることから人為的に投棄されたものである可能性がある。アカガシ亜属の木材は、重硬で強度が高い材質を有しており、農具などに多く利用されていたことが知られている。

人為的擾乱層準の溝状の凹地堆積物（1 地点試料 4）から出土した木材は、針葉樹のヒノキ科、落葉広葉樹のサクラ属、広葉樹に同定された。また、扇状地堆積物の 36 層上面から打ち込まれて

いた杭材は落葉高木となるセンダンに同定された。

3 古植生変遷

4区西部の開析谷を充填する12世紀以前に形成された下位流路の流路縁堆積物からは、温帯針葉樹のモミに由来するとみられるモミ属の花粉や葉が多産した。堆積物の成因を踏まえると、植物化石群集は流路沿いの植生を強く反映しているものと思われる。多産する温帯針葉樹のモミは、扇状地、谷頭、斜面地など土砂流失が起きやすい等、土地条件の悪い攪乱地が更新適地とされている（中静,2004）。流路縁堆積物直下には、土石流堆積物が認められることから、ここでのモミ属は、土石流などの地表攪乱が要因で分布を上げた可能性が高い。また、開析谷には、ミズ属・タデ属・タツナミソウ属・イヌコウジュ属・トウバナ属などの草本類が生育する、やや湿った開けた場所も存在したものと思われる。このように開析谷の流路沿いは、地表攪乱や河川攪乱といった植生に対する攪乱の強度・頻度に応じた植生が存在したが、後背の丘陵斜面や山地斜面などの比較的安定した場所には常緑広葉樹が分布していたことが推定される。

上位流路の流路縁堆積物形成期になると、花粉化石群集ではモミ属が減少し、常緑広葉樹のアカガシ亜属が増加することから、流路沿いに分布していたモミ属などの領域において、常緑広葉樹のアカガシ亜属が分布を上げたことが推定される。下位の流路縁堆積物形成期以降、河岸が安定した土地条件に変化し、植生が進行遷移したことを示している。ただし、本層準では、痩せ地に育ち、成長が早いことから、伐採地などに二次林を形成する樹種であるマツ属複維管束亜属花粉も増加する。当期の植生遷移のトレンドが進行遷移であったと考えられることから、退行遷移を示すマツ属の増加要因は人為的植生攪乱が推定される。ただし、本時期には植生の退行は顕著でなく、基本的には常緑広葉樹であったと考えられる。

12世紀～13世紀頃の人為的堆積層の形成期には、花粉化石群集においてマツ属が急増し優占するようになることから、周辺植生が急激に著しく変化したことが推定される。すなわち、12世紀頃に存在したアカガシ亜属などの常緑広葉樹林は12世紀以降、13世紀にかけて急速に衰退し、マツ属を主体とする二次林に変化したことが推定される。下記する12世紀以降の耕作地造成状況や、栽培植物に由来する植物化石の多産、大型植物化石における木本類および栽培種以外の草本類の減少、植物珪酸体におけるタケ亜科の含量密度の急激な低下といった変化を複合的に捉えると、12世紀以降になり、扇状地から丘陵斜面の広範囲にわたって、人為的植生攪乱が急激に及び、植生が一変したことが推定される。

今回のような12世紀頃のマツ属の急増については、これまでも長岡京域や平安京域でも確認・指摘されてきた（パリノ・サーヴェイ株式会社,2007・2008aなど）。ただし、これらの調査成果は沖積低地や集水域の広い沖積扇状地で捉えられた変化であったため、植生変化が起こった場所やその様相を把握するには至っていなかった。今回の調査では、丘陵地に隣接する扇状地領域における植生変化が捉えられたことは、中世における山林開発・利用のあり方を考える上で重要な成果といえる。

4 12 世紀以降の沖積扇状地における土地利用状況

沖積扇状地から開析谷にかけて位置する 4 区では、調査区西側の谷の充填が進行し、扇状地面との比高差が小さくなった 12 世紀以降になると、土壌生成が進行する扇状地性堆積物の上位に客土が行われ、耕作地として土地利用されるようになったことが堆積層の累重状況から推定される。人為的堆積層上部の耕作土と推定される層準では、植物珪酸体分析の結果、いずれの層準からも栽培種のイネ属の葉部や穎に形成される珪酸体が産出した。花粉分析結果では、草本花粉がやや増加し、低率であるが栽培種のイネ属やソバ属が産出した。また、当期の耕作土層準に構築されている溝状の凹地堆積物の大型植物化石群集は、草本を主体とし、人里植物のほか、イネ、コムギおよびオオムギの胚乳とナス近似種の種子など栽培種が特徴的に産出した。これらのことから、4 区の開析谷斜面では、12 世紀以降に人為的な土地改変が及び、植生の破壊が著しく進行し、造成された耕作地にはカタバミ属などの雑草群落が形成されたことが推定される。また、本時期にはイネ、コムギ、オオムギ、ソバ、ナス近似種の栽培が行われ、植物質食糧として利用されていたことも推定される。このように 12 世紀以降に開析谷斜面における土地利用が変化するが、扇状地斜面に位置する 2-2 区の耕作土の形成年代が 12 ~ 13 世紀であったことから、土地利用の変化は広域にわたっていた可能性がある。

ところで、過去の水田耕作土の植物珪酸体分析結果では、機動細胞珪酸体の含量密度が 5000 個 /g を超えるという基準が示されている（古環境研究所,1999）。この基準値と比較して、今回の 4 区の耕作土層準の栽培種のイネ属植物珪酸体の含量密度は、100 ~ 400 個 /g と低く、稲作が行われていた可能性は低いということになる。ただし、生駒山地北部の天の川水系に位置する津田遺跡で検出されている 13 世紀の谷水田の調査事例では、水田耕作土の植物珪酸体含量密度が 300 ~ 700 個 /g と低い値を示している（パリノ・サーヴェイ,2008b）。この含量密度の低さについては、水田を覆う洪水砂礫を母材として、上方へ水田が再構築されるとい水田の構築過程が関係しており、イネの植物珪酸体の蓄積が進行しなかったことに起因すると考えられている。本遺跡でも、原因は不明であるが、堆積層の累重状況から、上方への耕作地の再構築が行われている状況が確認される。耕作土層準における腐植の集積が顕著でないことや、出土遺物から推定される堆積層の形成年代を考慮すると、耕作地の上方への再構築は比較的短期間に行われていたことが推定される。また、耕作土層準から水生植物に由来する化石が産出し、層相から水の影響を受けていることが推定されるが、好氣的条件で風化する花粉化石や乾湿を繰り返すような堆積環境で風化が進行する植物珪酸体（江口,1994・1996）の保存状態が全体的に悪かったことを踏まえると、耕作土層準は定常的に水が存在していたのではなく、乾湿を繰り返すような状況におかれていたことが推定される。

以上の植物珪酸体の調査事例との比較、風化作用の影響、さらに発掘調査による耕作土層準における、畔状の高まりや溝状の凹地の検出を総合的に捉えると、10 層以下の人為的に造成された耕作地では稲作が行われていた可能性が考えられる。ただし、敷き藁やすき込みなどの農業資材

として圃場に持ち込まれた稲藁に由来する可能性も考慮しておく必要がある。いずれにしても、12世紀後半以降になると、人間による谷沿いの開発が始まり、耕作地として土地利用が継続して行われるようになったことが推定される。

II 灰方窯跡の自然科学分析

1 焼土坑3の構築年代について

焼土坑3は、9世紀後半の窯跡に隣接する場所に構築されているが、遺物が出土しないため窯跡との関連性については不明であったため、土坑埋土中の炭化材を対象として、放射性炭素年代測定を実施した。

焼土坑から出土した炭化材の年代値は、補正年代で 1230 ± 20 yBP、暦年較正年代（測定誤差を σ として計算させた結果、確率1位の値）は cal AD 787-823 を示した。（表 22）

以上の年代測定値に基づくと、焼土坑3の構築時期は8世紀～9世紀と推定される。隣接する灰原2号窯の年代が、出土土器から9世紀後半と推定されることから、やや古い時期もしくは同時期の遺構の可能性がある。なお、炭化材の樹種は、窯跡の燃料材と同じマツ属複維管束亜属に同定された（表 23）。

2 灰方2号窯の燃料材の樹種

9世紀後半の灰方2号窯で利用されていた燃料材の樹種を特定することを目的として、灰原から出土した炭化材の樹種同定を実施した。

灰原から出土した炭化材は、全てマツ属複維管束亜属に同定された（表 23）。マツ属複維管束亜属の木材は、柔らかく松脂を多く含むために燃焼性が高く、比較的高温を得ることが可能であることから、須恵器の焼成に適している木材といえる。京都府内では、丹波周山窯址の須恵器窯から出土した炭化材にコナラ亜属を主体として、ケヤキやクリが混じる結果が得られている（西

表 22 焼土坑3出土炭化材の放射性炭素年代測定および暦年較正結果

遺構名	試料状態	測定年代 (BP)	$\delta^{13}C$ (‰)	補正年代 (BP)	暦年較正年代 (cal)			Code No.		
					測定	cal BC	cal BP		相対比	
SK3	炭化材 マツ属 複維管束亜属	1250 ± 20	-26.52 ± 0.28	1230 ± 20 (1229 ± 20)	σ	cal AD 717 - cal AD 743	cal BP* 1,233 - 1,207	0.269	IAAA-83277	
						cal AD 766 - cal AD 783	cal BP* 1,182 - 1,157	0.189		
						cal AD 787 - cal AD 823	cal BP* 1,163 - 1,127	0.378		
						cal AD 841 - cal AD 861	cal BP* 1,109 - 1,089	0.164		
						2σ	cal AD 683 - cal AD 748	cal BP* 1,257 - 1,202		0.291
						cal AD 765 - cal AD 878	cal BP* 1,185 - 1,072	0.708		

1) 年代換算の算出には、1.0mbの半減期5568年を使用。
 2) BP年代値は、1950年を基点として何年前であることを示す。
 3) 付記した測定は、測定誤差σ（測定値の68%が入る範囲）を年代値に換算した値。
 4) 暦年計算には、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV6.0 (Copyright 1998-2010 M Stuiver and P Reimer) を使用。
 5) 暦年計算には補正年代の括弧内に示した丸める前の値を使用している。
 6) 暦年は1桁目を丸めるのが慣例だが、暦年較正曲線や暦年較正プログラムが改正された場合の再計算や比較が正しいように、1桁目を丸めていない。
 7) 統計的に真の値が入る確率はσは68%、2σは95%である。
 8) 相対比は、σ、2σのそれぞれを1とした場合、確率的に真の値が存在する比率を相対的に示したものである。

表 23 灰方窯跡出土炭化材同定結果

遺構	試料名	位置・層位	樹種
焼土坑3	—	埋土	マツ属複雑管束亜属
灰方2号窯	炭1-3	セクション右上	マツ属複雑管束亜属
灰方2号窯	炭1-5	灰原11号地区(竈直下)	マツ属複雑管束亜属
灰方2号窯	炭1-8	灰原11号地区	マツ属複雑管束亜属
灰方2号窯	炭-23	灰原掘り下げ	マツ属複雑管束亜属
灰方2号窯	炭-24	灰原EFK地区	マツ属複雑管束亜属
灰方2号窯	炭-26	灰原西側掘り下げ	マツ属複雑管束亜属

田,1982)。今回の結果では、マツ属複雑管束亜属が選択的に燃料材として利用していたことが推定される。

マツ属複雑管束亜属は、二次林の代表的な樹種である。9世紀後半頃の窯跡周辺の植生につ

いては現時点では不明である。長岡京域の古植生調査成果（パリノ・サーヴェイ,2007）をみると、古墳時代以降もカシ類などの常緑広葉樹が主体をなすが、温帯針葉樹が増加し、場所によってマツ属が増加していることが確認されている。この成果を踏まえると、灰方2号窯の周辺域では、9世紀後半の窯業に伴う燃料材獲得などによって、二次林としてのマツ林が形成されていた可能性がある。

3 灰方2号窯跡出土土器の胎土分析

灰方2号窯跡で焼成されていた須恵器の胎土の特徴を把握することを目的として、胎土分析を実施する。

3-1 試料

試料は、灰方2号窯跡の土坑2床土から採取された土塊1点と2号窯跡から出土した土器片2点の合計3点である。

土塊試料は、「83-1 09MK-DS 1 灰方 2号窯 土坑2床土 土サンプル」と表記されている。ここでは便宜的に試料名を「土坑2床土」とする。全体的に灰色を呈し、酸化鉄により斑状の黄灰色部分を有する極細砂混じりのシルト塊である。粘土分はほとんど感じられない。

土器片はいずれも厚さ約4mm、3cm四方程度の小片である。それぞれ「26 09MK-DS 1 灰方 2号窯 灰原 仮No.1」、「26 09MK-DS 1 灰方 2号窯 灰原 仮No.2」と表記されている。ここでは便宜的に試料名をそれぞれ「仮No.1」、「仮No.2」とする。仮No.1は表裏面ともに暗灰色を呈し、肉眼では砂粒の認められないきめの細かな胎土を呈する。仮No.2は表裏面ともににぶい橙色を呈し、仮No.1と同様にきめ細かな胎土である。

3-2 分析方法

ここでは土器片の薄片を作製し、その観察から胎土の特徴を把握する。薄片観察は、胎土中における砂粒の量はもちろんのこと、その粒径組成や砂を構成する鉱物、岩石片および微化石の種類なども捉えることが可能であり、得られる情報は多い。また、鉱物に被熱による変質が認められた場合には、その鉱物の種類と変化の程度から焼成温度の推定も可能である。以下に手順を述べる。

薄片は、試料の一部をダイヤモンドカッターで切断、正確に0.03mmの厚さに研磨して作製した。薄片は偏光顕微鏡による岩石学的な手法を用いて観察し、胎土中に含まれる鉱物片、岩石片およ

び微化石の種類構成を明らかにした。

データの呈示は、松田ほか（1999）が示した仕様に従う。砂粒の計数は、メカニカルステージを用いて0.5 mm間隔で移動させ、細礫～中粒シルトまでの粒子をポイント法により200個あるいはプレパレート全面で行った。また、同時に孔隙と基質のポイントも計数した。これらの結果から、各粒度階における鉱物・岩石別出現頻度の3次元棒グラフ、砂粒の粒径組成ヒストグラム、孔隙・砂粒・基質の割合を示す棒グラフを呈示する。

3-3 結果

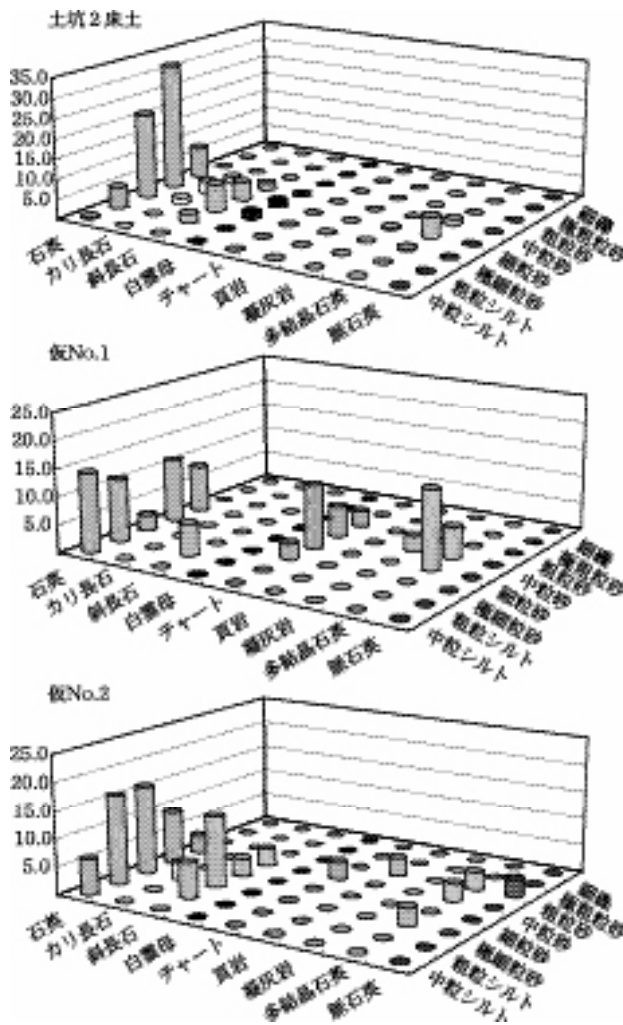


図 84 灰方窯跡 各粒度階における鉱物・岩石出現頻度

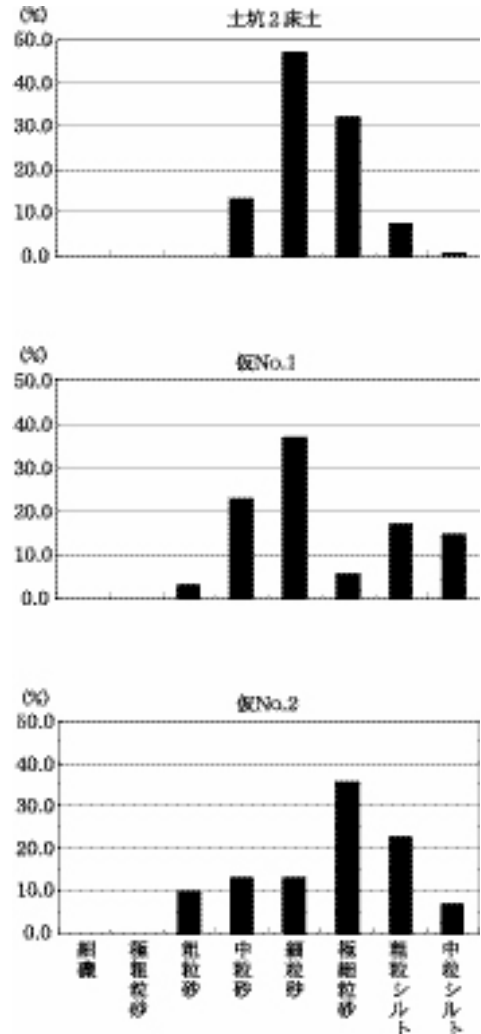


図 85 灰方窯跡 胎土中の砂の粒径組成

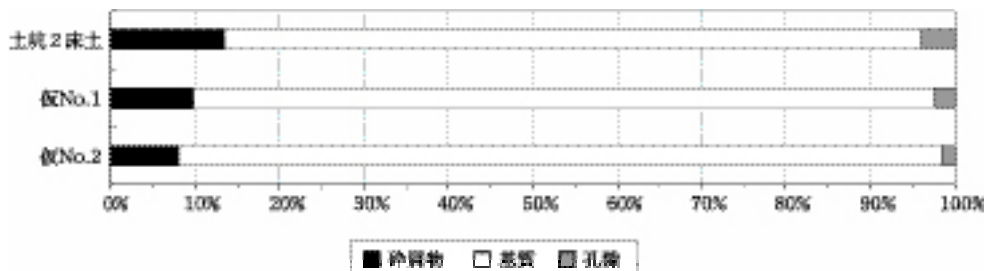


図 86 灰方窯跡 碎屑物・基質・孔隙の割合

表 24 灰方窯跡 2 号窯出土土器胎土薄片観察結果

試料名	砂粒区分	砂粒の種類構成								合計	
		鉱物片				岩石片					
		石英	カリ長石	斜長石	白雲母	チャート	頁岩	凝灰岩	多結晶石英		珪石類
土坑 2 床土	総観										0
	粗粒砂										0
	粒砂										0
	中粒砂	15	3	3	1				3		25
	細粒砂	61	6	9	3			1	10		90
	極細粒砂	41	3	13	3					1	61
	粗粒シルト	10		4							14
	中粒シルト	1									1
	基質										1174
	孔隙										55
仮 No. 1	総観										0
	粗粒砂										0
	粒砂					1					1
	中粒砂	3				2		1	2		8
	細粒砂	4				4			5		13
	極細粒砂	1				1					2
	粗粒シルト	4		2							6
	中粒シルト	5									5
	基質										514
	孔隙										8
仮 No. 2	総観										0
	粗粒砂										0
	粒砂						1		1	1	3
	中粒砂	1		1		1			1		4
	細粒砂	3		1							4
	極細粒砂	5	1	4							11
	粗粒シルト	5		2					1		7
	中粒シルト	2									2
	基質										348
	孔隙										6

結果を表 24、図 84～86 に示す。SK 床土に含まれる砂粒の主体は石英であり、これに少量の斜長石、カリ長石、白雲母の各鉱物粒を伴い、少量の多結晶石英と極めて微量の凝灰岩の岩石片が含まれる。基質はセリサイト質である。

仮 No. 1 の砂粒の主体は、石英の鉱物片とチャートおよび多結晶石英の岩石片である。他に極めて微量の斜長石の鉱物片と凝灰岩の岩石片が含まれる。なお、長石類の溶解は著しく、粗粒の斜長石のみが残存している。カリ長石は完全に溶解し、斜長石の溶解ガラス中に微細なムライトが晶出していることから、1150～1200℃程度で焼成されたものと推定される。

仮 No. 2 の砂粒の主体は、石英と斜長石の鉱物片であり、他に微量

のカリ長石の鉱物片やチャート、頁岩、多結晶石英、脈石英の各岩石片が含まれる。基質は雲母粘土鉱物質である。黒雲母には、酸化鉄化したものが散見されることから、黒雲母中の Fe²⁺ が Fe³⁺ に変化する 400℃程度 (Vedder and Wilkins, 1969) 以上の焼成を受けた可能性が考えられる。また、碎屑片として含まれる角閃石には酸化角閃石化したものは認められないことから、酸化角閃石化が生じる 800℃程度 (五十嵐, 2007) の温度には達していないものと推定される。

3-4 考察

灰方窯跡の位置する京都盆地南西部の丘陵は第四紀前・中期更新統の大阪層群により構成されており、その背後の北摂山地は中生代の堆積岩類からなる丹波帯と呼ばれる地質により構成されている。河田ほか (1986) 等の地質記載では丹波帯を構成する岩石は、主にチャートや頁岩、砂岩とされている。土坑 2 床土のシルトは、おそらく大阪層群に由来するものであろう。山地の地質に由来するチャートや頁岩などの岩石片はほとんど含まれていない。一方、2 点の土器片については、仮 No. 1 にはチャートの岩石片が含まれ、仮 No. 2 にはチャートおよび頁岩の岩石片が含まれることから、背後の山地に由来する碎屑物を含む粘土あるいは砂が、土器の材料として使用されていると考えられる。

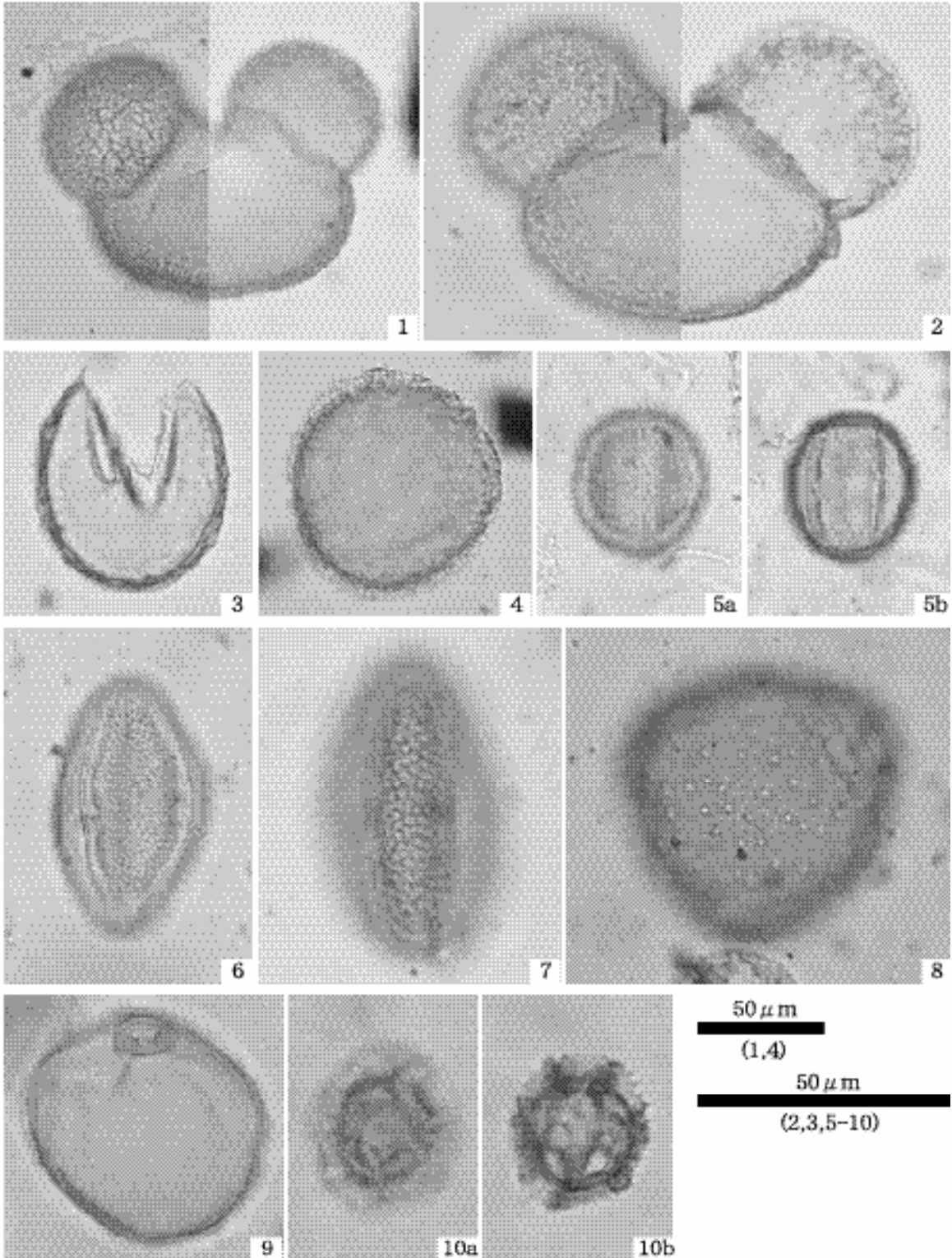
なお、仮 No. 1 の胎土における砂粒組成については、観察記載でも述べたように、1200℃に近い

高温焼成による鉱物の変化が生じているために、焼成前の素地土における砂粒組成とは異なっている。チャートの岩石片の割合が高いことも、高温に強い性質のために残存率が高かったことによると考えられる。したがって、今回の結果では、仮No.1と仮No.2との間で胎土の異なる特徴が示されているが、焼成前の素地土の段階では、それほど大きな違いはない可能性がある。今後も南春日町片山遺跡において様々な窯跡出土試料の分析事例を確認し、比較する必要があると考えられる。

また、前述したように仮No.2の土器片については、その焼成温度が800℃にも達していないことから、おそらく窯での焼成品としては失敗品であった可能性がある。

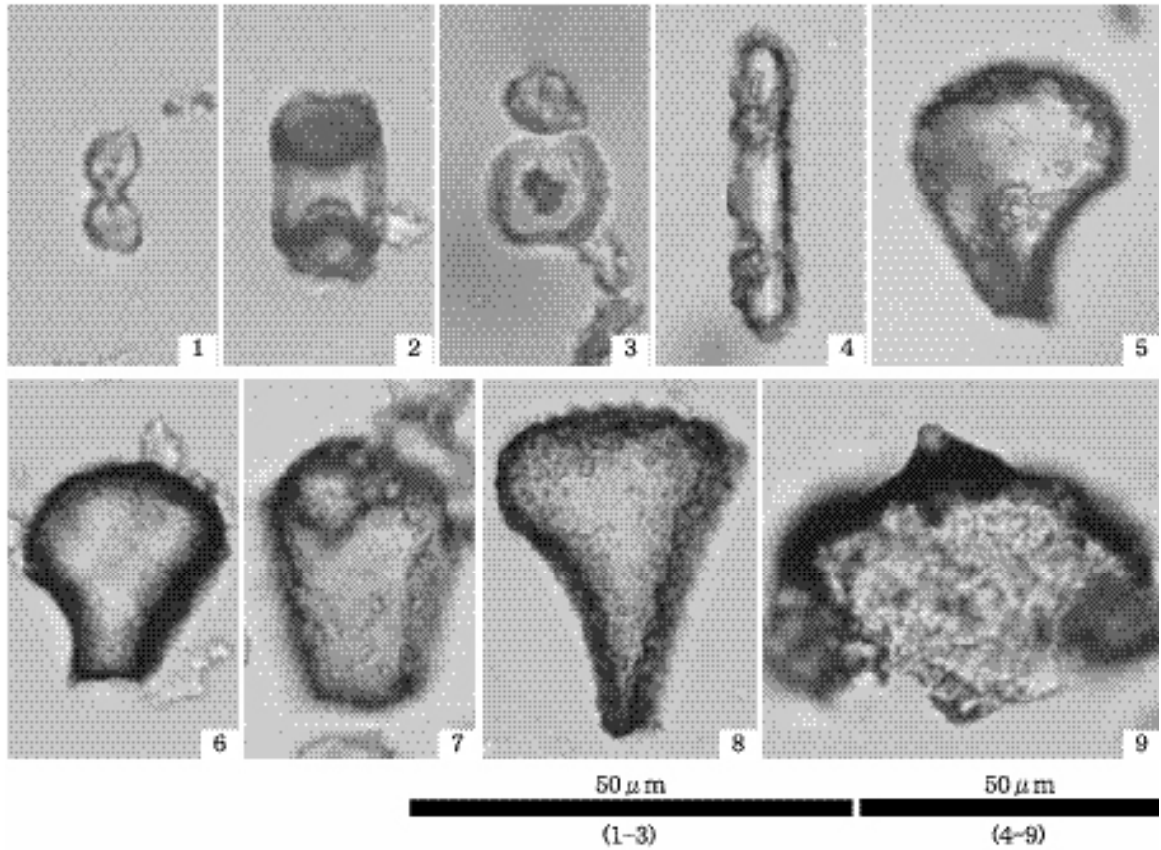
引用文献

- 江口誠一,1994,沿岸域における植物珪酸体の分布 千葉県小櫃川河口域を例にして. 植生誌研究,2,19-27.
- 江口誠一,1996,沿岸域における植物珪酸体の風化と堆積物のpH値. ペトロジスト,40,81-84.
- 五十嵐俊雄,2007,土師器・須恵器等に関する焼成温度推定手法の開発. 徳永重元博士献呈論集,281-297.
- 河田清雄・宮村 学・吉田史郎,1986,20万分の1地質図幅 京都及大阪. 地質調査所.
- 経済企画庁,1972,「土地分類基本調査,地形・表層地質・土壌 — 京都西南部 5万分の1簿冊」,61p. 表層地質図.
- 古環境研究所,1999,プラント・オパール分析から見た静清バイパス関連諸遺跡. 静岡・清水平野の埋没古環境情報「考古学的調査と自然科学分析資料・建設省地質調査資料から見た古環境の様相」—一般国道1号線バイパス埋蔵文化財発掘調査1984～1993—,(財)静岡県埋蔵文化財調査研究所,83-86.
- 松田 順一郎・三輪 若葉・別所 秀高,1999,瓜生堂遺跡より出土した弥生時代中期の土器薄片の観察—岩石学的・堆積学的による—. 日本文化財科学会第16回大会発表要旨集,120-121.
- 中静 透,2004,日本の森林/多様性の生物学シリーズ① 森のスケッチ. 東海大学出版会,236p.
- 西田 正規,1982,木炭の樹種同定. 「丹波周山窯址」,京都大学文学部考古学研究室,33-34.
- 西山団研グループ,1967,京都盆地南西 西山山麓の大阪層群. 「地球科学」,21,1-10.
- パリノ・サーヴェイ株式会社,2007,自然科学分析の成果. 向日市埋蔵文化財調査報告書 長岡宮「翔鸞楼」修理式遺跡,(財)向日市埋蔵文化財センター,183-215.
- パリノ・サーヴェイ株式会社,2008a,自然科学分析. 平安京右京六条一坊三町跡,(財)京都市埋蔵文化財研究所,39-62.
- パリノ・サーヴェイ(株),2008b,付章第1節 44 土坑・1区開析谷埋土の自然科学分析概要..(財)大阪府文化財センター調査報告書 第175集 枚方市 津田遺跡 一般国道1号バイパス(大阪北道路)・第二京阪道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書,(財)大阪府文化財センター,91-98.
- 植村善博,1999,京都の地震環境. ナカニシヤ出版,pp.54-71.
- 植村善博,2004,変異地形と地下構造からみた京都盆地の活断層. 「京都歴史災害研究」,2,7-28.
- Vedder, W. and Wilkins, R. W. T., 1969, Dehydroxylation and rehydroxylation, oxidation and reduction of micas, American Mineralogist, 54, 482-509.

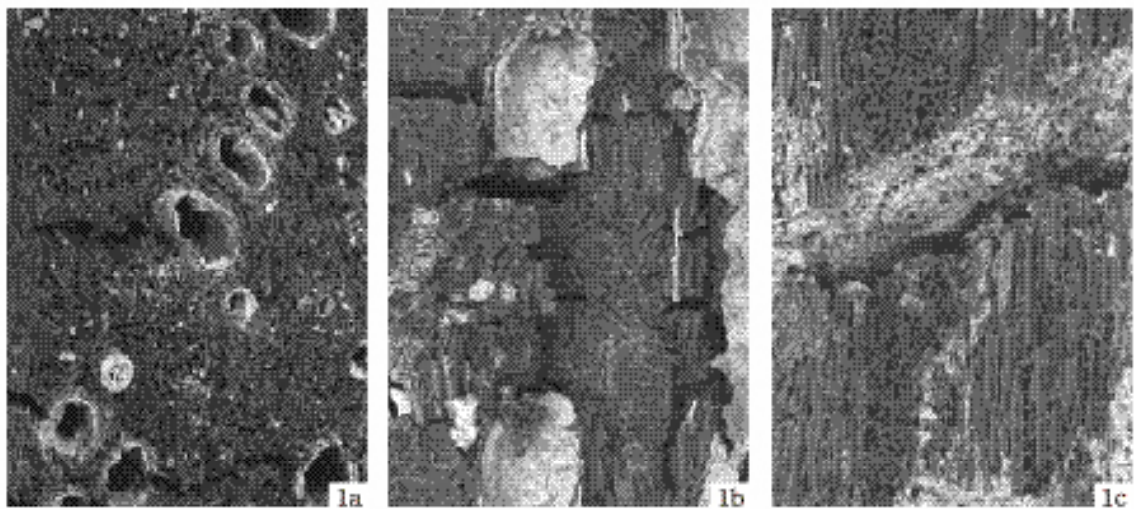


- | | |
|------------------|---------------------|
| 1. モミ属(1地点;3) | 2. マツ属複雑管束型属(1地点;3) |
| 3. スギ属(1地点;3) | 4. ツガ属(1地点;3) |
| 5. アカガシ亜属(3地点;1) | 6. ツタ属(1地点;2) |
| 7. ソバ属(1地点;3) | 8. スイカズラ属(1地点;2) |
| 9. イネ科(1地点;3) | 10. タンポポ科(1地点;3) |

図 87 南春日町片山遺跡の花粉化石

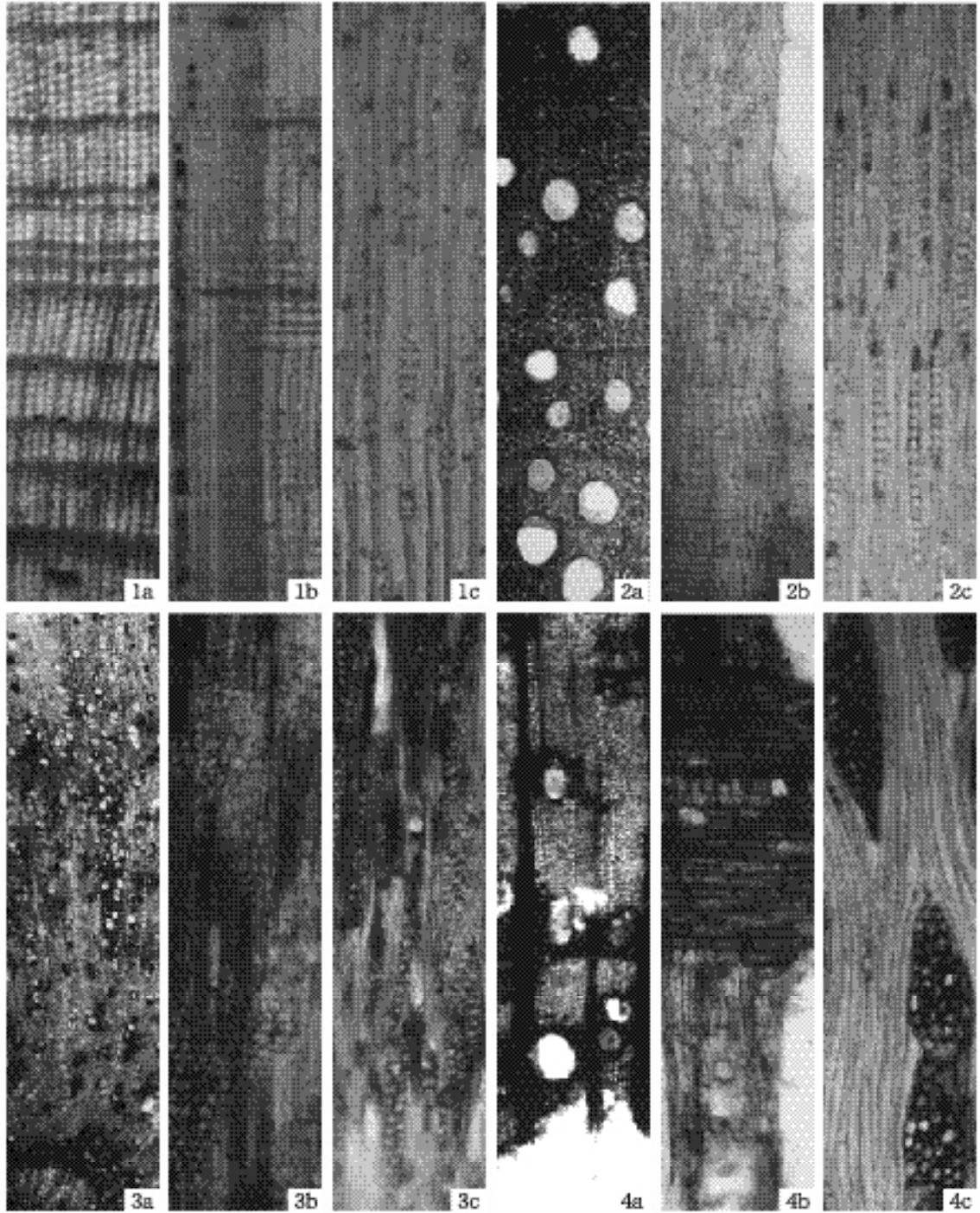


- | | |
|-----------------------|--------------------------|
| 1. イネ属短細胞珪酸体(1地点;4) | 2. タケ亜科短細胞珪酸体(1地点;3) |
| 3. ヨシ属短細胞珪酸体(1地点;3) | 4. イチゴツナギ亜科短細胞珪酸体(1地点;4) |
| 5. イネ属機動細胞珪酸体(1地点;4) | 6. イネ属機動細胞珪酸体(2地点;1) |
| 7. タケ亜科機動細胞珪酸体(1地点;3) | 8. ウシクサ族機動細胞珪酸体(1地点;1) |
| 9. イネ属額珪酸体(1地点;1) | |



1. コナラ属アカガシ亜属(F13DX;2-2区4番)
a: 木口, b: 柀目, c: 板目

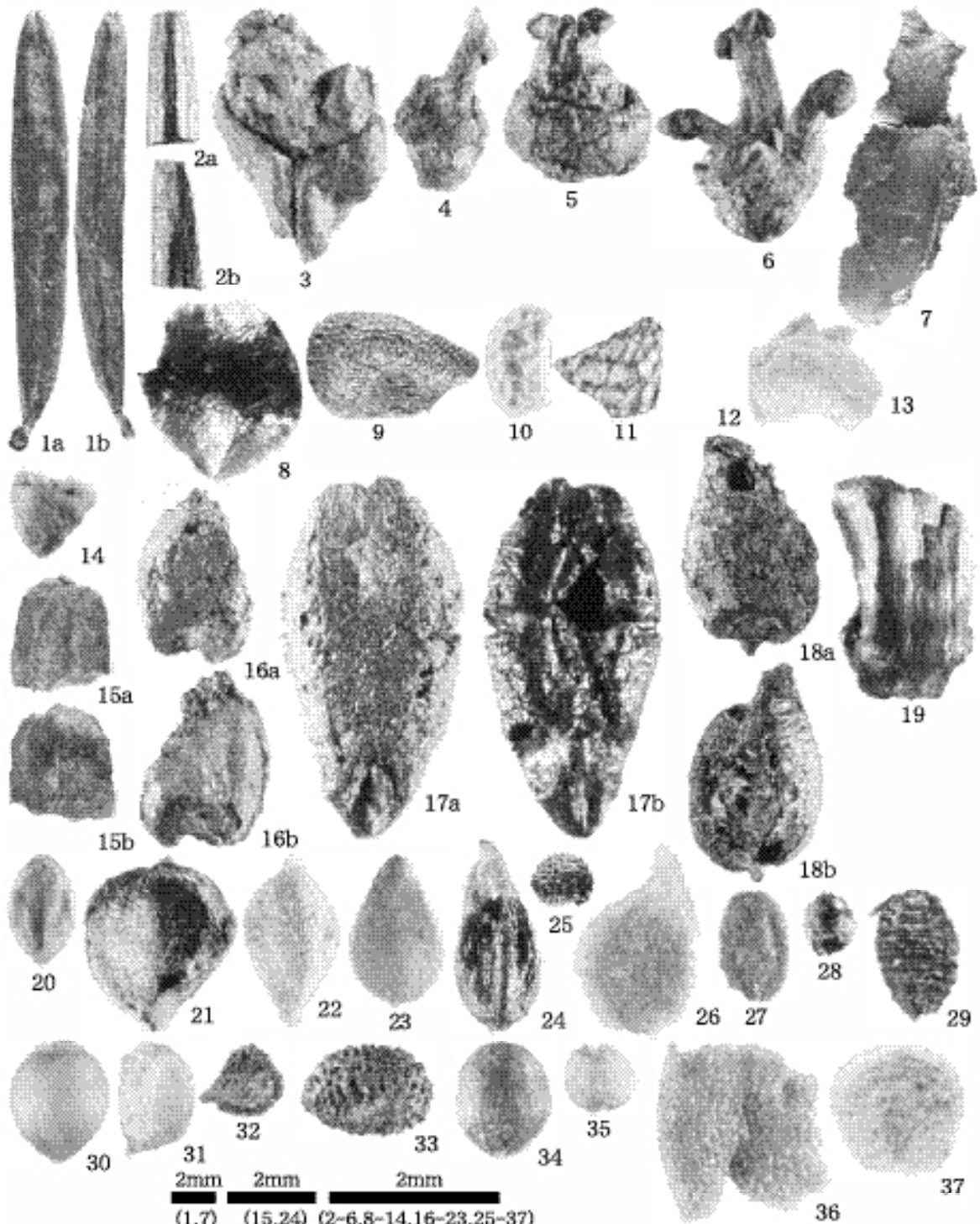
図 88 南春日町片山遺跡の植物珪酸体・炭化材



1. ヒノキ科(1地点;4)
 2. コナラ属アカガシ亜属(4地点;1)
 3. サクラ属(1地点;4)
 4. センダン(溝層部;杭材)
- a: 木口, b: 柾目, c: 板目

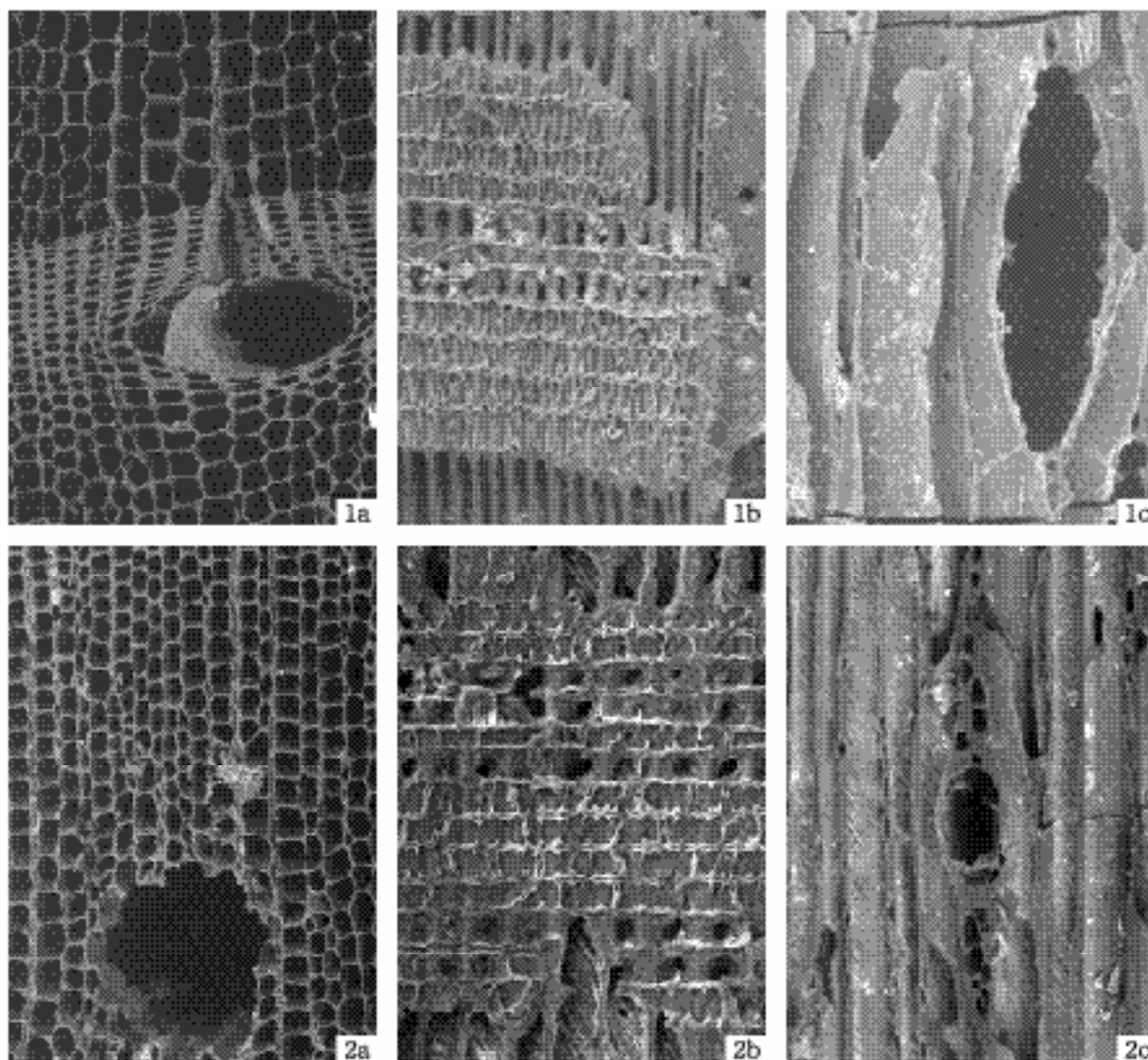
300 μ m: 2-4a
 200 μ m: 1a, 2-4b, c
 100 μ m: 1b, c

図 89 南春日町片山遺跡の木材



- (1,7) (15,24) (2-6,8-14,16-23,25-37)
- | | | | |
|------------------------|-----------------------|----------------------|-----------------------|
| 1. モミ属 葉(4地点:1) | 2. アカマツ 葉(1地点:4) | 3. ヒノキ 枝葉(1地点:4) | 4. イチイガシ 幼果(4地点:1) |
| 5. アウカシーシウカシ 幼果(4地点:1) | 6. アカガシ亜属 幼果(4地点:1) | 7. アカガシ亜属 果実(4地点:1) | 8. サカキ 種子(4地点:1) |
| 9. ヒサカキ属 種子(4地点:1) | 10. ケイチゴ属 核(4地点:1) | 11. サンショウ属 種子(1地点:4) | 12. イイギリ 種子(4地点:1) |
| 13. タウノキ 枝(4地点:1) | 14. イネ 節(基部)(1地点:4) | 15. イネ 胚乳破片(1地点:4) | 16. ヒエーキビ 胚乳(1地点:4) |
| 17. オオムギ 胚乳(1地点:4) | 18. コムギ 胚乳(1地点:4) | 19. ムギ類 穂軸(1地点:4) | 20. イネ科 果実(4地点:1) |
| 21. ホタルイ属 果実(4地点:4) | 22. カヤツリグサ科 果実(4地点:1) | 23. ミズ属 果実(4地点:1) | 24. タデ属 果実(4地点:1) |
| 25. ナデシコ科 種子(4地点:1) | 26. キンボウゲ属 果実(4地点:1) | 27. アブラナ科 種子(4地点:1) | 28. ネコノメソウ類 種子(4地点:1) |
| 29. カタバミ属 種子(1地点:4) | 30. スミレ属 種子(4地点:1) | 31. チドメグサ属 果実(4地点:1) | 32. サクラソウ科 種子(4地点:1) |
| 33. タツナヨソウ属 果実(4地点:1) | 34. イヌコウジュ属 果実(4地点:1) | 35. トウバナ属 果実(4地点:1) | 36. ナス近縁種 種子(1地点:4) |
| 37. ナス科 種子(4地点:1) | | | |

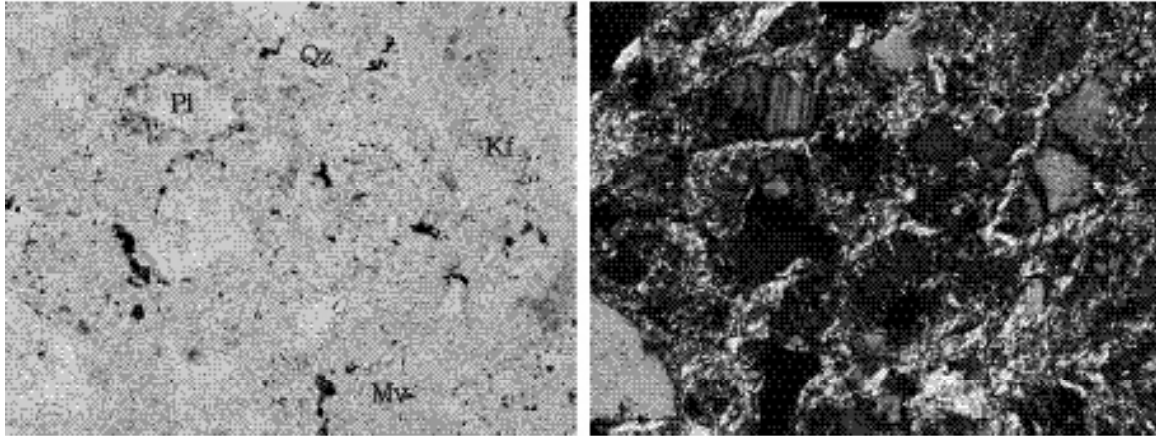
図90 南春日町片山遺跡の大型植物遺体



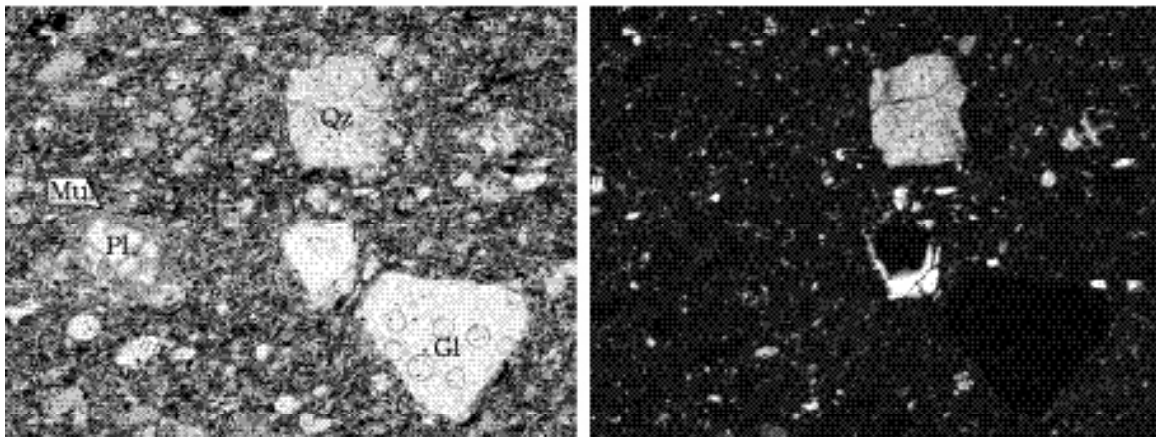
1. マツ属複維管束重属(2号窯;炭1-3)
 2. マツ属複維管束重属(2号窯;炭-24)
 a: 木口, b: 柁目, c: 板目

200 μ m: 1a, 2a
 100 μ m: 1b + c, 2b + c

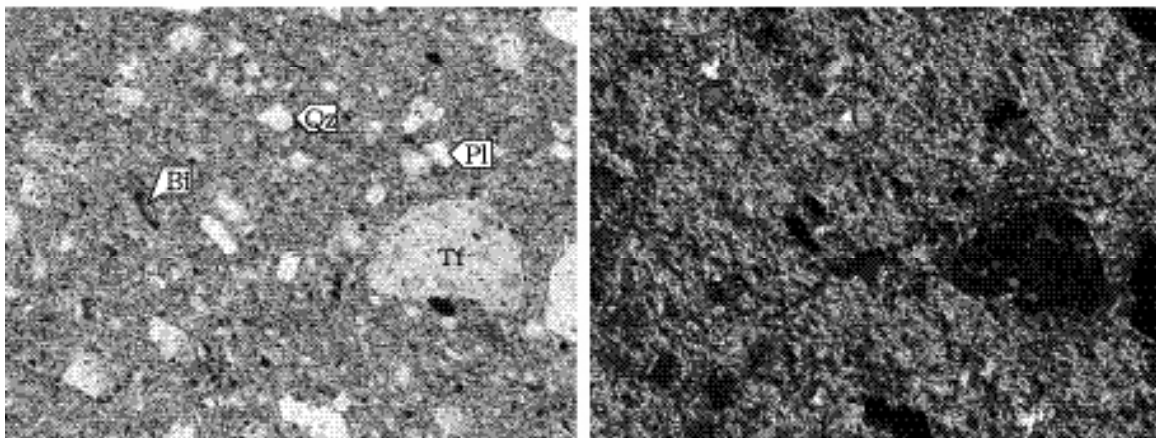
図 91 灰方窯跡の炭化材



1.83-1 09MK-DS1 灰方 2号窯 SK2床土 土サンプル



2.26 09MK-DS1 灰方 2号窯 灰原2R1地区 掘り下げ仮No.1



3.26 09MK-DS1 灰方 2号窯 灰原2R1地区 掘り下げ仮No.2

0.5mm

Qz:石英, Kf:カリ長石, Pl:斜長石, Bi:酸化した黒雲母, Mv:白雲母, Tf:凝灰岩,
Mul:ムライト, Gl:ガラス.

写真左列は下方ポーラー、写真右列は直交ポーラー下。

図92 灰方窯跡の胎土薄片

付表1 灰方窯出土遺物観察表

遺物 地	器種	器形	口径	器高	色調	焼成	手法の特徴	脚輪高 口径形跡	高台 形跡	備考	出土地
1	須恵器	杯A	14.0	3.4	5YR7/6橙色	軟質	外底底部はヘラ起こし後に粗いナデ。高部内面ナデ、他は回転ナデ。	-	-	-	1号窯窯体内
2	須恵器	杯A	14.0	3.6	7.5YR7/4に ぶい橙色	軟質		-	-	-	1号窯窯体内
3	須恵器	杯A	14.0	3.8	5YR7/6橙色	軟質		-	-	-	1号窯窯体内
4	須恵器	杯A	14.0	4.0	2.5Y7/1灰白 色	軟質		-	-	-	1号窯窯体内
5	須恵器	鉢	24.6	14.2	7.5Y8/3暗灰 黄色	やや 軟質	外底底部は糸切り未調整。他は内外底回転ナデ。	-	-	-	1号窯窯体内
6	緑釉素地	碗	13.0	4.3	10YR8/4浅 黄橙色	やや 軟質	外底底部・体部下半は回転ヘラケズリ。外底のヘラミガキは底部以外に回転ヘラミガキを粗く施す。内底ヘラミガキは全面に粗く施す。	Ⅱ	平b	-	1号窯窯体内
7	緑釉素地	碗	14.5	4.3	10YR8/3浅 黄橙色	やや 軟質		Ⅱ	平b	-	1号窯窯体内
8	緑釉素地	碗	14.5	4.7	2.5Y7/2灰黄 色	やや 軟質	外底底部・体部下半は回転ヘラケズリ。外底のヘラミガキは底部と体部下半を除いて回転ヘラミガキを粗く施す。内底ヘラミガキは全面にやや粗く施す。	Ⅱ	輪a	-	1号窯窯体内
9	緑釉素地	碗	19.0	5.7	2.5Y6/1黄灰 色	やや 軟質		Ⅱ	平b	-	1号窯窯体内
10	緑釉素地	碗	16.0	5.4	2.5Y7/3浅黄 色	やや 軟質		Ⅱ	平a	-	1号窯窯体内
11	緑釉素地	碗	16.5	5.1	5Y5/2灰オリ ープ色	やや 軟質	外底底部は回転ヘラケズリ。外底のヘラミガキは底部を除く全面に回転ヘラミガキを粗く施す。内底のヘラミガキはやや粗く施す。	Ⅱ	平b	-	1号窯窯体内
12	緑釉素地	碗	16.2	5.0	2.5Y8/3浅黄 色	やや 軟質	外底底部はヘラケズリ。外底のヘラミガキは外底底部を除く全面に回転ヘラミガキとヘラミガキを併用して密に施す。内底ヘラミガキは全面に密に施す。	Ⅱ	平b	-	1号窯窯体内
13	緑釉素地	碗	20.0	7.0	2.5Y8/3暗灰 黄色	やや 軟質		Ⅱ	輪a	-	1号窯窯体内
14	緑釉素地	碗	15.5	5.5	2.5Y5/1黄灰 色	やや 軟質	磨滅のため調査不詳。	Ⅱ	輪a	内面底部に陰刻 花文E。	1号窯窯体内
15	緑釉素地	皿	13.5	2.7	7.5Y5/2灰オリ ープ色	やや 軟質	外底底部は回転ヘラケズリ。外底のヘラミガキは底部以外を回転により粗く施す。内底ヘラミガキは全面にやや粗く施す。	Ⅱ	平b	-	1号窯窯体内
16	緑釉素地	皿	14.5	3.0	7.5Y5/2灰オリ ープ色	やや 軟質		Ⅱ	平b	-	1号窯窯体内
17	緑釉素地	皿	14.5	3.1	7.5Y7/3浅黄 色	やや 軟質	外底底部・体部下半は回転ヘラケズリ。ヘラミガキは、外底は口縁部にのみ回転により粗く、内面は回転と手持ちを併用して全面にやや粗く施す。	Ⅱ	平b	-	1号窯窯体内
18	緑釉素地	皿	15.1	3.1	5Y6/2灰オリ ープ色	やや 軟質		Ⅱ	平b	-	1号窯窯体内
19	緑釉素地	皿	13.5	2.9	10YR7/4に ぶい黄橙色	硬質	外底底部は回転ヘラケズリ。ヘラミガキは、外底は底部以外を回転によりやや粗く、内面は全面をやや粗く施す。	Ⅱ	平a	陰刻花文。	1号窯窯体内
20	緑釉素地	皿	14.5	3.0	7.5Y5/2灰オリ ープ色	やや 軟質		Ⅱ	平b	陰刻花文。	1号窯窯体内
21	緑釉素地	皿	15.0	3.3	2.5Y8/2暗灰 黄色	やや 軟質	外底底部は回転ヘラケズリ。ヘラミガキは、外底は底部以外を回転により密に、内面は全面を密に施す。	Ⅱ	平b	-	1号窯窯体内
22	緑釉素地	皿	15.5	3.3	2.5Y7/3浅黄 色	やや 軟質		Ⅱ	平b	-	1号窯窯体内
23	緑釉素地	皿	14.5	3.0	5Y7/1灰白 色	硬質		Ⅱ	平b	-	1号窯窯体内

遺物名	器種	器形	口径	器高	色調	焼成	手法の特徴	輪郭・底地・口縁形態	高台形態	備考	出土地
24	緑釉素地	且	14.5	2.75	2.5Y5/2暗灰黄色	やや軟質	外面底部は回転ヘラケズリ。口縁部外面は回転ナデ。ヘラミガキは、外面は体部に、内面は全面に粗く施す。	Ⅱ	平b	—	1号窯窯体内
25	緑釉素地	且	15.5	3.2	2.5Y7/2暗灰黄色	やや軟質	外面底部は回転ヘラケズリ。ヘラミガキは、外面は底部以外を回転により密に、内面は全面を密に施す。	Ⅱ	平b	外面底部に「X」印ヘラ記号。	1号窯窯体内
26	緑釉素地	且	17.0	3.5	2.5Y7/3浅黄褐色	やや軟質	外面底部は回転ヘラケズリ。ヘラミガキは、外面底部と内面口縁部以外の全面を密に施す。	Ⅲ	輪a	—	1号窯窯体内
27	緑釉素地	且	17.0	3.3	2.5Y6/1黄灰色	やや軟質	口縁部内面を除いて、外面底部を含む全面に、ヘラミガキを密に施す。	Ⅲ	輪a	内面に陰刻花文F。	1号窯窯体内
28	緑釉素地	且	15.0	2.9	7.5YR8/3浅黄褐色	やや軟質	口縁部内面を除いて、外面底部を含む全面に、ヘラミガキを密に施す。	Ⅳ	輪a	—	1号窯窯体内
29	緑釉素地	且	16.0	3.5	7.5YR8/3浅黄褐色	軟質	口縁部内外面を除き全面に、ヘラミガキを密に施す。	Ⅳ	輪a	—	1号窯窯体内
30	緑釉素地	段皿	16.5	3.6	7.5YR8/3浅黄褐色	軟質	口縁部内外面を除き全面に、ヘラミガキを密に施す。	—	輪a	—	1号窯窯体内
31	緑釉素地	段皿	23.0	4.4	2.5Y7/1灰白色	やや軟質	磨滅のため調査不明。	—	輪a	—	1号窯窯体内
32	緑釉素地	耳皿	不明	3.9	2.5Y5/1黄灰色	やや軟質	内外面は回転ナデ。外面底部は糸切り未調整。他は磨滅のため調査不明。	—	糸切	—	1号窯窯体内
33	緑釉素地	三足盤	18.0	4.4	2.5Y7/1灰白色	やや軟質	口縁部内外面は回転ロクロナデ。口縁部内外面を除く全面にヘラミガキを密に施す。脚部の取付けはヘラミガキ後に行う。	—	—	—	1号窯窯体内
34	須恵器	杯A	13.5	3.0	N6/0灰色	硬質	外面底部はヘラ起こし後に粗いナデ。底部内面ナデ。他は回転ナデ。	—	—	—	1号窯灰原G・H・L・M地区
35	須恵器	杯A	13.0	3.1	6B5/1青灰色	硬質		—	—	—	1号窯灰原I地区
36	須恵器	杯A	13.6	3.5	5Y7/1灰白色	やや軟質		—	—	—	1号窯灰原
37	須恵器	杯A	14.5	3.8	5Y7/1灰白色	やや軟質		—	—	—	1号窯灰原
38	須恵器	杯A	15.2	3.5	N4/暗灰色	硬質	外面底部はヘラ起こし後に粗いナデ。底部内面ナデ。他は回転ナデ。	—	—	—	1号窯灰原
39	須恵器	杯A	15.0	3.7	7.5Y7/1灰白色	硬質		—	—	—	1号窯灰原C～E・H～J・M～S地区
40	須恵器	杯A	15.2	3.8	6Y7/1灰白色	やや軟質		—	—	—	1号窯灰原
41	須恵器	杯A	15.0	4.1	5YR8/4黄褐色	軟質		—	—	—	1号窯灰原I地区
42	須恵器	壺M	4.4×5.0	9.9	N4/暗灰色	硬質	外面底部は回転糸切り未調整。他は内外面回転ナデ。	—	—	—	1号窯灰原E地区
43	須恵器	壺L	12.0	—	5YR7/6褐色	やや軟質	磨滅のため調査不明。	—	—	—	1号窯灰原N地区
44	須恵器	水瓶	7.2	—	5YR7/6褐色	やや軟質	頸部回転ナデ。	—	—	—	1号窯灰原C・H・M地区
45	須恵器	不明	9.4	—	N6/灰色	硬質	内外面回転ナデ。	—	—	—	1号窯灰原L地区
46	須恵器	鉢D	20.5	—	7.5YR7/6褐色	軟質	磨滅のため調査不明。	—	—	—	1号窯灰原I地区

遺物 №	器種	器形	口径	器高	色調	焼成	手法の特徴	緑釉素地 口縁形態	高台 形態	備考	出土地
47	須恵器	鉢D	23.3	—	7.5YR7/6橙 色	軟質	磨滅のため調整不明。	—	—	—	1号窯灰原 L地区
48	須恵器	鉢D	26.0	—	5Y7/1灰白色	やや 軟質	体部、口縁部内外面は 回転ナデ。	—	—	—	1号窯灰原
49	須恵器	鉢D	26.8	12.7	N5/灰色	硬質	外面直部は糸切り木調整、 他は内外面回転ナデ。	—	—	—	1号窯灰原 I地区
50	須恵器	高字碗	—	—	2.5Y7/1灰白 色	やや 軟質	粘土板の端を折り曲げて 足部と成す。全面ナデ。	—	—	—	1号窯灰原 R地区
51	須恵器	円面碗	15.3	6.9	N6/0灰色	硬質	脚部及び脚部の外面は 回転ナデ、内面はナデ。 堤部は貼り付け。脚部 には6割の方形透かし を穿ち、透かしの隅割 にヘラにより沈線を入 れる。	—	—	—	1号窯灰原 M・Q地区
52	須恵器	円面碗	17.4	8.6	N7/灰白色	硬質		—	—	—	1号窯灰原南 北セクションB・C・ G・H・L・N地区
53	緑釉素地	碗	9.0	3.2	N5/灰色	硬質	外面直部は回転糸切り、 内外面回転ナデ。	検I	糸切	—	1号窯灰原 G・H・L・M地区
54	緑釉素地	碗	12.0	4.3	5Y6/2灰オリ ープ色	やや 軟質	外面直部は回転ヘラケ ズリ。外面ヘラミガキ は、直部以外を回転と 一部を手持ちでやや粗 く、内面ヘラミガキは 全面にやや粗く施す。	検I	平a	—	1号窯主軸セク ション右方灰原 第1層C～E・H ～J・M～S地区
55	緑釉素地	碗	13.5	3.8	2.5Y8/1灰白 色	やや 軟質		検I	平a	—	1号窯灰原 I地区
56	緑釉素地	碗	13.0	3.4	N5/灰色	硬質		検I	平b	—	1号窯灰原 G・H・L・M地区
57	緑釉素地	碗	14.5	3.6	N5/灰色	硬質		検II	平a	—	1号窯灰原 G・H・L・M地区
58	緑釉素地	碗	13.5	3.6	N5/灰色	硬質	外面直部と体部下半は 回転ヘラケズリ。外面 ヘラミガキは、直部以 外を回転と一部を手持 ちでやや粗く、内面も 全面にやや粗く施す。	検II	平a	—	1号窯灰原 G・H・L・M地区
59	緑釉素地	碗	13.5	3.9	5Y7/2浅黄色	硬質		検II	平a	糸切り痕残る。	1号窯灰原B・C ・G・H・L・M地区
60	緑釉素地	碗	13.0	3.9	2.5Y8/4浅黄 色	やや 軟質		検II	平b	—	1号窯灰原 B地区
61	緑釉素地	碗	12.5	4.1	N6/灰色	硬質	外面直部は回転ヘラケ ズリ。外面ヘラミガキ は、体部は回転、口縁 部は手持ちによりやや 粗く、内面ヘラミガキ は全面にやや粗く施す。	検II	平b	—	1号窯灰原 G・H・L・M地区
62	緑釉素地	碗柄	13.8	4.6	N6/灰色	硬質	外面直部は回転ヘラケ ズリ。内外面ヘラミガ キは、密に施すが、降 灰付着のため不明瞭。	—	輪a	内外面に降灰付 着。	1号窯灰原 L地区
63	緑釉素地	碗	14.5	3.9	N6/灰色	硬質	外面直部は回転ヘラケ ズリ。内外面のヘラミ ガキは、全面に比較的 密に施す。	検II	平a	—	1号窯灰原
64	緑釉素地	碗	18.0	4.2	N6/灰色	硬質	外面直部は回転ヘラケ ズリ。外面のヘラミガ キは、直部を除きやや 粗く、内面は粗く施す。	検II	輪u	—	1号窯灰原 M地区
65	緑釉素地	碗	13.5	4.1	N6/灰色	硬質	外面直部・体部下半は 回転ヘラケズリ。口縁 部外面は回転ナデ。ヘ ラミガキは外面直部・ 体部下半を除きやや粗 く施す。	検III	輪a	—	1号窯灰原
66	緑釉素地	碗	18.0	6.6	5Y4/1灰色	やや 軟質	外面直部は回転ヘラケ ズリ。内外面磨滅のた め調整不明。	検I	輪a	—	1号窯灰原 B・C・G・H・L・ M地区

遺物 No.	器種	器形	口径	器高	色調	焼成	手法の特徴	緑釉素地 口縁形態	高台 形態	備考	出土地
67	緑釉素地	柄	20.0	6.9	2.5Y8/3淡黄色	軟質	外面底部は回転ヘラケズリ。内面底部は密なヘラミガキ。他は磨滅のため調整不明。	輪Ⅰ	蛇目	—	1号窯灰原 L地区
68	緑釉素地	柄	17.0	5.7	2.5Y8/2灰白色	やや軟質	外面底部は回転ヘラケズリ。外面のヘラミガキは、体部は回転により密に、内面も密なヘラミガキ。	輪Ⅱ	平a	—	1号窯灰原 E地区
69	緑釉素地	柄	17.5	5.1	2.5Y8/2灰白色	やや軟質	外面底部は回転ヘラケズリ。外面のヘラミガキは底部を除いて回転により、内面は回転と手持ちを併用してともにやや粗く施す。	輪Ⅱ	蛇目	—	1号窯灰原 G・H・L・M地区
70	緑釉素地	柄	20.0	7.0	N5/灰色	硬質	外面底部は回転ヘラケズリ。外面のヘラミガキは底部を除いて回転により密に、内面は密に施す。	輪Ⅱ	蛇目	—	1号窯灰原
71	緑釉素地	柄	18.0	5.2	5B4/1暗青灰色	硬質	外面底部は回転ヘラケズリ。外面のヘラミガキは底部を除いて回転により密に、内面は密に施す。	輪Ⅲ	蛇目	—	1号窯灰原 L地区
72	緑釉素地	柄	17.5	5.8	5Y5/2灰オリーブ色	やや軟質	外面底部は回転ヘラケズリ。外面のヘラミガキは底部を除いて回転により密に、内面は密に施す。	輪Ⅲ	蛇目	—	1号窯灰原 I地区
73	緑釉素地	柄	20.0	7.1	2.5Y8/2灰白色	やや軟質	磨滅のため内外面調整不明。	輪Ⅲ	輪a	—	1号窯灰原 I地区
74	緑釉素地	皿	14.0	2.3	5Y6/1灰色	やや軟質	外面底部はヘラケズリ。ヘラミガキは外面底部を除く全体に粗く施す。	皿Ⅰ	平b	—	1号窯灰原 A地区
75	緑釉素地	皿	14.0	2.5	5Y5/2灰オリーブ色	軟質	外面底部はヘラケズリ。外面のヘラミガキは底部以外に回転を用いてやや粗く、内面のヘラミガキは全体にやや粗く施す。	皿Ⅰ	平b	—	1号窯灰原 B地区
76	緑釉素地	皿	14.0	2.5	5Y6/2灰色	硬質	外面底部はヘラケズリ。外面のヘラミガキは底部以外に回転を用いてやや粗く、内面のヘラミガキは全体にやや粗く施す。	皿Ⅰ	平b	—	1号窯灰原 A地区
77	緑釉素地	皿	14.5	2.8	N4/灰色	硬質		皿Ⅰ	平b	—	1号窯灰原 G・H・L・M地区
78	緑釉素地	皿	14.5	2.4	10YR7/3浅黄褐色	やや軟質		皿Ⅰ	平b	—	1号窯灰原 H地区
79	緑釉素地	皿	14.0	2.3	N4/灰色	硬質		皿Ⅰ	平a	—	1号窯灰原 G・H・L・M地区
80	緑釉素地	皿	13.5	2.5	N6/灰色	硬質		皿Ⅰ	平b	—	1号窯灰原 G・H・L・M地区
81	緑釉素地	皿	13.5	2.5	7.5Y8/4灰色	硬質		皿Ⅰ	平b	—	1号窯灰原 主軸セクション
82	緑釉素地	皿	13.5	2.5	N5/灰色	やや軟質		皿Ⅰ	平b	—	1号窯灰原 G・H・L・M地区
83	緑釉素地	皿	13.5	2.7	N4/灰色	硬質		皿Ⅰ	平a	糸切り痕残る。	1号窯灰原
84	緑釉素地	皿	14.0	2.6	N5/灰色	やや軟質		皿Ⅰ	平b	糸切り痕残る。	1号窯灰原 主軸セクション C・H・M地区
85	緑釉素地	皿	14.5	2.6	2.5Y6/1灰黄色	やや軟質		皿Ⅰ	平b	糸切り痕残る。	1号窯灰原 G・H・L・M地区
86	緑釉素地	皿	13.5	2.6	5GY6/1灰色	やや軟質	外面底部はヘラケズリ。外面のヘラミガキは底部以外の全体を回転と手持ちを併用して粗く、内面も粗く施す。	皿Ⅰ	平a	—	1号窯灰原 A地区
87	緑釉素地	皿	14.0	3.0	2.5Y7/3灰黄色	やや軟質	外面底部はヘラケズリ。外面のヘラミガキは底部以外の全体を回転と手持ちを併用してやや粗く、内面も粗く施す。	皿Ⅰ	平b	—	1号窯灰原
88	緑釉素地	皿	14.0	2.7	2.5Y7/2灰黄色	やや軟質	87の外面底部には回転糸切り痕がわずかに残る。81のヘラミガキは比較的丁寧で、95～97は極めて粗い。	皿Ⅰ	平b	—	1号窯灰原 M地区
89	緑釉素地	皿	14.0	2.6	2.5Y6/3灰黄色	やや軟質		皿Ⅰ	平b	—	1号窯灰原
90	緑釉素地	皿	14.0	2.6	2.5Y6/1灰黄色	やや軟質		皿Ⅱ	平b	—	1号窯灰原 A地区

遺物 No.	器種	器形	口径	器高	色調	焼成	手法の特徴	線輪素地 口縁形態	高台 形態	備考	出土地
91	線輪素地	皿	14.0	2.3	2.5Y7/3淡黄色	やや軟質	外面底部はヘラケズリ。外面のヘラミガキは底部以外の全体を回転と手押しを併用してやや粗く、内面も粗く施す。87の外面底部には回転糸切り痕がわずかに残る。91のヘラミガキは比較的丁寧で、95~97は極めて粗い。	ⅡⅡ	平a	—	1号窯灰原 I地区
92	線輪素地	皿	14.0	2.5	10YR6/2黄灰色	やや軟質		ⅡⅡ	平b	—	1号窯灰原 B地区
93	線輪素地	皿	14.5	2.5	7.5Y6/1灰色	やや軟質		ⅡⅡ	平b	—	1号窯灰原 A・B ・F・G・K・L地区
94	線輪素地	皿	14.5	2.6	7.5YR5/2灰褐色	やや軟質		ⅡⅡ	平b	—	1号窯灰原 B地区
95	線輪素地	皿	15.0	2.4	10YR5/1黄灰色	やや軟質		ⅡⅡ	平b	—	1号窯灰原 C・H・M地区
96	線輪素地	皿	14.5	2.5	5Y6/2オリーブ灰色	やや軟質		ⅡⅡ	平b	—	1号窯灰原 J地区
97	線輪素地	皿	14.5	2.8	5Y5/1灰色	やや軟質		ⅡⅡ	平b	—	1号窯灰原 F地区
98	線輪素地	段皿	15.0	2.4	N6/灰色	硬質	外面底部は回転ヘラケズリ。ヘラミガキは外面を密に、内面はやや粗く施す。	—	輪a	—	1号窯灰原 G・H・L・M地区
99	線輪素地	皿	15.5	2.5	7.5Y5/1灰色	硬質	外面底部は回転ヘラケズリ。ヘラミガキは、外面は底部を除く全体に回転によって密に、内面も密に施す。	ⅢⅢ	輪a	—	1号窯灰原 G地区
100	線輪素地	皿	15.5	3.8	5Y6/1灰色	やや軟質		ⅢⅢ	輪a	—	1号窯灰原 G地区
101	線輪素地	皿	16.5	3.4	2.5Y6/6橙褐色	やや軟質		ⅢⅢ	輪a	—	1号窯灰原 G地区
102	線輪素地	皿	17.0	3.1	10YR8/4淡黄褐色	やや軟質		ⅢⅢ	輪a	—	1号窯灰原 B・C ・G・H・L・M地区
103	線輪素地	皿	17.0	3.0	10YR7/2に ぶい黄褐色	軟質		ⅢⅢ	輪a	花文D+横文を 彫刻。	—
104	線輪素地	耳皿	—	3.6	7.5Y6/1灰色	硬質	外面底部は回転糸切り。他は回転ナデ。折り上げ口縁の縁部には棒状工具の圧痕が3箇所に残る。ヘラミガキは外面のみ。	—	糸切	—	1号窯灰原 A地区
105	線輪素地	皿	14.5	2.8	5Y6/1黄灰色	やや軟質	外面底部は回転ヘラケズリ。ヘラミガキは、外面は底部を除く全体を回転によって粗く、内面も粗く施す。	ⅡⅠ	平a	外面底部に「X」 印ヘラ記号。	1号窯灰原 G・H・L・M地区
106	線輪素地	皿	14.0	3.1	7.5YR8/4淡黄褐色	軟質		ⅡⅠ	平b	外面底部に1本 線のヘラ記号。	1号窯灰原 E地区
107	線輪素地	皿	13.5	2.8	5Y6/2灰色	やや軟質		ⅡⅠ	平b	内面底部に格子 状のヘラ記号。	1号窯灰原 A地区
108	線輪素地	皿	13.5	2.6	7.5Y6/2灰オリーブ色	やや軟質		ⅡⅠ	平b	内面底部に格子 状のヘラ記号。	1号窯灰原 A地区
109	線輪素地	柄	9.5	3.0	N5/灰色	硬質	外面底部は糸切り未調整。他は回転ナデ。ヘラミガキは行わない。	輪Ⅰ	糸切	完形、焼歪割れ。	2号窯灰原 体内
110	線輪素地	柄	9.5	3.1	N4/灰色	硬質		輪Ⅰ	糸切	完形、焼歪割れ。	2号窯灰原 体内
111	線輪素地	柄	10.0	3.3	5Y8/1灰白色	やや軟質		輪Ⅰ	糸切	—	2号窯灰原 体内
112	線輪素地	柄	10.0	3.4	2.5Y8/1灰白色	やや軟質		輪Ⅰ	糸切	ほぼ完形、焼歪 割れ。	2号窯灰原 体内
113	線輪素地	柄	9.5	3.3	7.5Y8/1灰色	やや軟質		輪Ⅰ	糸切	—	2号窯灰原 体内
114	線輪素地	柄	10.0	3.3	N4/灰色	硬質	外面底部は糸切り未調整。他は回転ナデ。ヘラミガキは行わない。	輪Ⅲ	糸切	中型。	2号窯灰原 体内
115	線輪素地	柄	14.5	4.8	10YR8/4淡黄褐色	軟質		外面底部・体部下半は回転ヘラケズリ。体部上半は回転ナデ。ヘラミガキは外面底部・体部下半を除く全体に比較的密に施す。	輪Ⅲ	鉞目	—

遺物 種	器種	器形	口径	器高	色調	焼成	手法の特徴	線輪素地 口縁形態	高台 形態	備考	出土地
116	緑釉素地	皿	13.0	2.6	N4/灰色	硬質	外面底部はヘラケズリ。外面のヘラミガキは底部以外に回転と手持ちを併用して粗く、内面のヘラミガキも粗く施す。	ⅡⅡ	平b	—	2号窯全体内
117	緑釉素地	皿	13.4	2.5	N4/灰色	硬質		ⅡⅡ	平a	—	2号窯全体内
118	緑釉素地	皿	13.4	3.1	N5/灰色	硬質		ⅡⅠ	平a	—	2号窯全体内
119	緑釉素地	皿	13.4	2.9	N5/灰色	硬質	外面底部はヘラケズリ。外面のヘラミガキは底部以外に回転と手持ちを併用して粗く、内面のヘラミガキも粗く施す。	ⅡⅠ	平b	—	2号窯全体内
120	緑釉素地	皿	13.3	2.9	2.5Y7/1灰白色	硬質		ⅡⅠ	平b	—	2号窯全体内
121	緑釉素地	皿	13.7	3.1	7.5Y5/1灰色	硬質		ⅡⅠ	平b	—	2号窯全体内
122	緑釉素地	皿	16.0	3.7	7.5YR7/4に ぶい橙色	軟質	外面底部は回転ヘラケズリ。ヘラミガキは外面底部を除く全体に密に施すが、内面は磨滅のため不明。	ⅡⅡ	輪a	—	2号窯全体内
123	緑釉素地	皿	17.0	3.5	7.5YR7/4に ぶい橙色	軟質		ⅡⅡ	輪a	—	2号窯全体内
124	緑釉素地	皿	16.4	3.3	10YR8/2灰白色	軟質	磨滅のため調整不明。	ⅡⅣ	輪a	—	2号窯全体内
125	須恵器	杯A	13.7	3.3	N5/0灰色	硬質	外面底部はヘラ戻し後に粗いナデ。他は回転ナデ。	—	—	—	2号窯灰原 J・K・O・P地区
126	須恵器	杯A	14.6	2.9	7.5Y5/1灰色	硬質		—	—	—	2号窯灰原 K地区
127	須恵器	杯A	14.8	3.4	2.5Y7/3浅黄色	やや軟質		—	—	—	2号窯灰原 J・K・O・P地区
128	須恵器	杯A	13.6	3.7	5Y6/1灰白色	やや軟質		—	—	—	2号窯灰原 北杖瀬区
129	須恵器	杯A	14.2	3.8	2.5Y6/2灰黄色	やや軟質		—	—	—	2号窯灰原 J・K・O・P地区
130	須恵器	杯A	14.5	3.5	10YR7/3浅黄 橙色	やや軟質		—	—	—	2号窯灰原 G・H・I地区
131	須恵器	杯A	14.0	4.0	2.5Y7/2灰黄色	やや軟質		—	—	—	2号窯灰原 H地区
132	須恵器	杯A	14.8	3.7	5Y7/1灰色	やや軟質		—	—	—	2号窯灰原 北杖瀬区
133	須恵器	杯B	—	10.7	N5/灰色	硬質	外面底部は回転ヘラケズリ。他は回転ナデ。	—	—	—	2号窯灰原 J・K・O・P地区
134	須恵器	蓋	24.4	—	N5/灰色	硬質	内外面は回転ナデ。	—	—	緑釉素地か。	2号窯灰原 北杖瀬区
135	須恵器	鉢D	17.0	10.0	5Y7/2灰白色	軟質	外面底部は回転糸切り未調整。他は回転ナデ。	—	—	—	2号窯灰原 G・H・L・M地区
136	須恵器	鉢D	19.5	14.2	N5/灰色	硬質		—	—	外面底部・体部に自然釉が厚く付着。	2号窯灰原 H地区
137	須恵器	壺M	—	—	N5/灰色	硬質		—	—	—	2号窯灰原
138	須恵器	壺M	4.0	—	N5/灰色	硬質	回転ナデ。	—	—	—	2号窯灰原 北杖瀬区
139	須恵器	壺M	—	—	N5/灰色	硬質	外面底部は回転糸切り未調整。他は回転ナデ。	—	—	—	2号窯灰原 A地区
140	須恵器	壺L	9.5	—	N5/灰色	硬質		—	—	—	2号窯灰原 北杖瀬区
141	須恵器	壺L	9.5	—	2.5Y7/4浅黄色	やや軟質		—	—	—	2号窯灰原 北杖瀬区
142	須恵器	壺N	—	—	N7/灰白色	硬質		—	—	—	2号窯灰原 北杖瀬区
143	須恵器	壺N	12.0	—	N3/暗灰色	硬質	回転ナデ。	—	—	—	2号窯灰原 北杖瀬区
144	須恵器	壺N	11.8	—	N4/灰色	硬質		—	—	—	2号窯灰原 北杖瀬区

遺物 No.	器種	器形	口径	器高	色調	焼成	手法の特徴	線輪素地 口縁形態	高台 形態	備考	出土地
145	須恵器	土器	2.4 (全長)	1.3 (最大径)	N7/灰白色	硬質	146以外は未調整。 146は幅約4mmの縦方 向のヘラケズリ。	—	—	—	2号窯灰原
146	須恵器	土器	2.6 (全長)	1.2 (最大径)	N4/灰色	硬質		—	—	—	2号窯灰原 J・K・O・P地区
147	須恵器	土器	3.0 (全長)	1.4 (最大径)	N4/灰色	硬質		—	—	—	2号窯灰原
148	須恵器	土器	3.0 (全長)	1.4 (最大径)	N4/灰色	硬質		—	—	—	2号窯灰原
149	線輪素地	柄	9.0	2.9	5Y4/1灰色	硬質	外面底面は回転糸切り 未調整。他は回転ナデ。 ヘラミガキは施さない。	輪Ⅰ	糸切	—	2号窯灰原 北北強区
150	線輪素地	柄	9.0	3.3	N4/灰色	硬質		輪Ⅰ	糸切	上段内面底部に 自然釉が厚く付 着。	2号窯灰原 北北強区
151	線輪素地	柄	11.4	3.0	N5/灰色	硬質		輪Ⅰ	糸切	—	2号窯灰原 R地区
152	線輪素地	柄	11.0	3.1	N5/灰色	硬質	外面底面はヘラケズリ。 外面のヘラミガキは底 面を含め回転と手持ち を併用して密に、内面 のヘラミガキも密に施 す。	輪Ⅱ	輪a	—	2号窯灰原 H地区
153	線輪素地	柄	12.5	3.9	SPB5/1青灰 色	硬質	外面底面はヘラケズリ。 外面のヘラミガキは底 面を除いて回転と手持 ちを併用して粗く、内 面も粗く施す。	輪Ⅱ	平b	—	2号窯灰原 北東強区
154	線輪素地	柄	12.5	4.0	N5/灰色	やや 軟質		輪Ⅱ	平b	—	2号窯灰原 E・F・K地区
155	線輪素地	柄	13.0	3.9	SPB5/1青灰 色	硬質		輪Ⅱ	平a	—	2号窯灰原 北北強区
156	線輪素地	柄	13.0	3.8	N4/灰色	硬質	外面底面はヘラケズリ。 外面のヘラミガキは底 面を除いて回転と手持 ちを併用して粗く、内 面も粗く施す。	輪Ⅱ	平a	—	2号窯灰原 北東強区
157	線輪素地	柄	12.6	3.9	10YR8/2灰 白色	軟質		輪Ⅳ	平b	—	2号窯灰原 K地区
158	線輪素地	柄	13.5	4.1	N4/灰色	硬質		輪Ⅱ	平b	—	2号窯灰原 北・西北強区
159	線輪素地	柄	13.5	3.6	N4/灰色	硬質		輪Ⅱ	平b	—	2号窯灰原 北北強区
160	線輪素地	柄	13.0	4.2	N5/灰色	硬質		輪Ⅱ	平b	—	2号窯灰原 J・K・O・P地区
161	線輪素地	柄	14.0	4.1	N5/灰色	硬質	外面底面はヘラケズリ。 ヘラミガキは、外面は 底面を除いて回転によ りやや粗く、内面もや やく施す。	輪Ⅱ	蛇目	—	2号窯灰原 E・F・K地区
162	線輪素地	柄	13.0	4.5	N5/灰色	硬質		輪Ⅱ	蛇目	—	2号窯灰原 北北強区
163	線輪素地	柄	14.0	4.3	5Y7/1灰白 色	やや 軟質		輪Ⅲ	蛇目	—	2号窯灰原 I・N地区
164	線輪素地	柄	14.0	4.4	N5/灰色	硬質		輪Ⅱ	輪a	—	2号窯灰原 P地区
165	線輪素地	柄	16.5	4.2	N5/灰色	硬質	外面底面はヘラケズリ。 外面のヘラミガキは底 面を除いて回転によ りやや粗く、内面もや やく施す。	輪Ⅰ	平b	—	2号窯灰原 北北強区
166	線輪素地	柄	16.0	4.5	N5/灰色	硬質		輪Ⅰ	平b	—	2号窯灰原 北北強区
167	線輪素地	柄	16.0	4.6	7.5Y4/1灰 白色	硬質	外面底面はヘラケズリ。 ヘラミガキは、外面は 底面を除いて回転と手 持ちを併用して粗く、 内面も粗く施す。	輪Ⅰ	平b	—	2号窯灰原 北北強区
168	線輪素地	柄	15.5	4.5	N5/灰色	硬質	外面底面はヘラケズリ。 ヘラミガキは、外面は 底面を除いて回転によ り、内面は手持ちによ りやや粗く施す。	輪Ⅰ	平a	—	2号窯灰原 A・B・C地区

遺物 No.	器種	器形	口径	器高	色調	焼成	手法の特徴	輪軸系地 口縁形態	高台 形態	備考	出土地
169	緑釉素地	碗	16.0	4.9	5PB4/1暗青 灰色	硬質	外面底部はヘラケズリ、ヘラミガキは、外面は底部を除いて回転と手持ちを併用してやや粗く、内面もやや粗く施す。	輪Ⅰ	平b	—	2号窯灰原 西試強区
170	緑釉素地	碗	16.5	4.7	N6/灰色	硬質	外面底部はヘラケズリ、ヘラミガキは、外面は底部を除いて回転によりやや粗く、内面もやや粗く施す。	輪Ⅱ	平b	—	2号窯灰原 R地区
171	緑釉素地	碗	16.0	4.6	2.5Y7/1灰白 色	やや 軟質	外面底部はヘラケズリ、ヘラミガキは、外面は底部を除いて回転と手持ちを併用してやや粗く、内面もやや粗く施す。	輪Ⅱ	平a	外面底部に糸切り痕残る。	2号窯灰原 北試強区
172	緑釉素地	碗	14.5	4.3	N5/灰色	やや 軟質	外面底部はヘラケズリ、ヘラミガキは、外面は底部を除いて回転と手持ちを併用してやや粗く、内面もやや粗く施す。	輪Ⅱ	蛇目	内面底部に「×」印ヘラ記号。	2号窯灰原 北試強区
173	緑釉素地	碗	16.0	4.3	2.5Y黄灰色	やや 軟質	外面底部はヘラケズリ、ヘラミガキは、外面は底部を含めて回転と手持ちを併用してやや粗く、内面もやや粗く施す。	輪Ⅱ	輪a	—	2号窯灰原 J・K・O・P地区
174	緑釉素地	碗	17.0	5.2	5Y6/1灰色	硬質	外面底部はヘラケズリ、ヘラミガキは、外面は底部を除いて回転と手持ちを併用してやや粗く、内面もやや粗く施す。	輪Ⅱ	輪a	—	2号窯灰原 G・H・I地区
175	緑釉素地	碗	16.0	4.7	N6/灰色、 7.5Y8/1灰白 色	硬質	外面底部はヘラケズリ、ヘラミガキは、外面は底部を除いて回転と手持ちを併用してやや粗く、内面もやや粗く施す。	輪Ⅲ	輪a	—	2号窯灰原 I・N地区
176	緑釉素地	碗	14.0	3.9	N5/灰色	硬質	外面底部はヘラケズリ、ヘラミガキは、外面は底部を除いて回転と手持ちを併用してやや粗く、内面もやや粗く施す。	輪Ⅲ	輪a	外面底部に1本線ヘラ記号。	2号窯灰原 I地区
177	緑釉素地	碗	18.0	5.6	5Y8/2灰白色	硬質	外面底部はヘラケズリ、外面のヘラミガキは底部を除いてやや粗く、内面もやや粗く施す。	輪Ⅰ	平b	—	2号窯灰原 R地区
178	緑釉素地	碗	17.0	4.3	7.5Y6/1灰色	硬質	外面底部はヘラケズリ、ヘラミガキは、外面は底部を除いて回転と手持ちを併用してやや粗く、内面もやや粗く施す。	輪Ⅰ	平b	内面底部に「×」印ヘラ記号。	2号窯灰原 北試強区
179	緑釉素地	碗	17.0	4.8	N4/灰色	硬質	外面底部はヘラケズリ、ヘラミガキは、外面は底部を除いて回転と手持ちを併用してやや粗く、内面もやや粗く施す。	輪Ⅳ	平b	—	2号窯灰原 北試強区
180	緑釉素地	碗	16.5	5.3	5Y8/1灰白色	やや 軟質	外面底部はヘラケズリ、口縁部は回転ナデ。外面のヘラミガキは底部を除く体部に回転を利用して密に、内面はやや粗く施す。	輪Ⅰ	平b	外面底部に「×」印ヘラ記号。	2号窯灰原 北試強区
181	緑釉素地	碗	19.8	5.1	2.5Y7/1灰黄 色	やや 軟質	外面底部はヘラケズリ、外面のヘラミガキは底部を含めて密に、内面はやや粗く施す。	輪Ⅰ	輪a	—	2号窯灰原 J・K・O・P地区
182	緑釉素地	碗	20.0	6.9	10YR7/4に Jの黄褐色	やや 軟質	外面底部はヘラケズリ、外面のヘラミガキは底部を含めて密に、内面はやや粗く施す。	輪Ⅰ	輪a	—	2号窯灰原 E・F・K地区
183	緑釉素地	碗	21.0	7.6	2.5Y8/2灰白 色	やや 軟質	外面底部はヘラケズリ、外面体部のヘラミガキは回転を利用してやや粗く施す。外面底部と内面は磨滅のため不明。	輪Ⅰ	蛇目	—	2号窯灰原 北試強区
184	緑釉素地	矮輪	19.0	6.1	N6/灰色	硬質	外面底部はヘラケズリ、口縁部は回転ナデ。ヘラミガキは、外面体部下半を密に、外面底部・体部上半と内面にやや粗く施す。	—	輪a	外面体部下半に「×」印ヘラ記号。	2号窯灰原 B地区
185	緑釉素地	皿	13.5	2.5	2.5GY6/1オ リーブ灰色	硬質	外面底部は回転ヘラケズリ。ヘラミガキは外面底部を除く全面に粗く施す。外面ヘラミガキは回転を利用して施す。	皿Ⅱ	平b	—	2号窯灰原 北試強区
186	緑釉素地	皿	14.0	2.6	N5/灰色	硬質	外面底部はヘラケズリ、ヘラミガキは、外面は底部を除いて回転と手持ちを併用してやや粗く、内面もやや粗く施す。	皿Ⅱ	平b	—	2号窯灰原 E・F・K地区
187	緑釉素地	皿	13.5	2.5	N5/灰色	硬質	外面底部はヘラケズリ、ヘラミガキは、外面は底部を除いて回転と手持ちを併用してやや粗く、内面もやや粗く施す。	皿Ⅱ	平a	—	2号窯灰原 E・F・K地区
188	緑釉素地	皿	14.0	2.6	6Y8/2灰白色	やや 軟質	外面底部はヘラケズリ、ヘラミガキは、外面は底部を除いて回転と手持ちを併用してやや粗く、内面もやや粗く施す。	皿Ⅱ	平b	—	2号窯灰原 E・F・K地区
189	緑釉素地	皿	14.0	2.6	N5/灰色	硬質	外面底部はヘラケズリ、ヘラミガキは、外面は底部を除いて回転と手持ちを併用してやや粗く、内面もやや粗く施す。	皿Ⅱ	平b	—	2号窯灰原 K地区
190	緑釉素地	皿	14.0	2.5	N5/灰色	硬質	外面底部はヘラケズリ、ヘラミガキは、外面は底部を除いて回転と手持ちを併用してやや粗く、内面もやや粗く施す。	皿Ⅱ	平a	—	2号窯灰原 K地区

通物 №	器種	器形	口径	器高	色調	焼成	手法の特徴	竪軸器地 口縁形態	高台 形態	備考	出土地	
191	緑釉素地	Ⅱ	14.0	2.6	N5/灰色	硬質	外面底部は回転ヘラケズリ。ヘラミガキは外面底部を除く全面に施す。外面ヘラミガキは回転を利用して施す。	ⅡⅡ	平b	—	2号窯灰原 E・F・K地区	
192	緑釉素地	Ⅱ	14.0	2.7	10YR5/1褐 灰色	硬質		ⅡⅡ	平b	—	2号窯灰原 D・ G・H・L・M地区	
193	緑釉素地	Ⅱ	14.0	2.6	N5/灰色	硬質		ⅡⅡ	平b	—	2号窯灰原 I・N地区	
194	緑釉素地	Ⅱ	14.5	2.3	6Y5/1灰色	硬質		ⅡⅡ	平b	—	2号窯灰原 J・K・O・P地区	
195	緑釉素地	Ⅱ	14.5	2.4	N5/灰色	硬質		ⅡⅡ	平a	—	2号窯灰原 R地区	
196	緑釉素地	Ⅱ	14.5	2.7	2.5Y8/2灰白 色	やや 軟質		ⅡⅡ	平b	—	2号窯灰原 北松瀬区	
197	緑釉素地	Ⅱ	13.5	2.2	2.5GY6/1オ リーブ灰色	硬質	外面底部は回転ヘラケズリ。ヘラミガキは外面底部を除く全面に施す。外面ヘラミガキは回転を利用して施す。ヘラミガキの密度は粗いが、185～196の口縁形態Ⅱ類と比較するとやや密である。	ⅡⅠ	平b	—	2号窯灰原 J・K・O・P地区	
198	緑釉素地	Ⅱ	13.5	2.7	N5/灰色	硬質		ⅡⅠ	平b	—	2号窯灰原 E・F・K地区	
199	緑釉素地	Ⅱ	14.0	2.3	N5/灰色	硬質		ⅡⅠ	平b	—	2号窯灰原 S地区	
200	緑釉素地	Ⅱ	14.5	2.4	N4/灰色	硬質		ⅡⅠ	平b	—	2号窯灰原 E・F・K地区	
201	緑釉素地	Ⅱ	13.5	2.4	N5/灰色	硬質		ⅡⅠ	平b	—	2号窯灰原 北松瀬区	
202	緑釉素地	Ⅱ	13.5	2.5	N5/灰色	硬質		ⅡⅠ	平b	—	2号窯灰原 北松瀬区	
203	緑釉素地	Ⅱ	13.5	2.6	6Y5/1灰色	硬質		ⅡⅠ	平b	—	2号窯灰原 J・K・O・P地区	
204	緑釉素地	Ⅱ	14.0	2.9	7.5Y6/1灰色	硬質		ⅡⅠ	平b	—	2号窯灰原 E・F・K地区	
205	緑釉素地	Ⅱ	14.0	2.9	7.5Y6/1灰色	硬質		ⅡⅠ	平b	—	2号窯灰原 B地区	
206	緑釉素地	Ⅱ	14.0	3.0	5Y5/1灰色	硬質		ⅡⅠ	平b	—	2号窯灰原 K地区	
207	緑釉素地	Ⅱ	14.5	3.0	10YR5/1褐 灰色	軟質		ⅡⅠ	平b	—	2号窯灰原 E・F・K地区	
208	緑釉素地	Ⅱ	14.5	3.0	N5/灰色	硬質		ⅡⅠ	平a	—	2号窯灰原 K地区	
209	緑釉素地	Ⅱ	14.5	3.3	2.5Y5/1黄灰 色	硬質		ⅡⅠ	平b	—	2号窯灰原 K地区	
210	緑釉素地	Ⅱ	14.5	3.3	5Y5/2灰オ リーブ色	硬質		ⅡⅠ	平b	—	2号窯灰原 北松瀬区	
211	緑釉素地	Ⅱ	14.5	3.4	2.5Y8/1灰白 色	やや 軟質		ⅡⅠ	平b	—	2号窯灰原 P地区	
212	緑釉素地	Ⅱ	14.5	3.3	5Y6/2灰オ リーブ色	硬質		ⅡⅠ	平a	—	2号窯灰原 K地区	
213	緑釉素地	Ⅱ	14.5	2.6	5B5/1青灰色	硬質		外面底部・体部下半2/3は回転ヘラケズリ。ヘラミガキは外面上半および内面に施す。	ⅡⅡ	平	—	2号窯灰原 北松瀬区
214	緑釉素地	Ⅱ	15.0	2.7	2.5Y8/2灰白 色	やや 軟質			ⅡⅡ	鈍円	—	2号窯灰原 北松瀬区
215	緑釉素地	Ⅱ	15.0	2.5	7.5Y5/1灰色	硬質	外面底部は回転ヘラケズリ。ヘラミガキは外面底部を含めて全面にやや粗く施す。	ⅡⅡ	輪a	—	2号窯灰原 R地区	
216	緑釉素地	Ⅱ	15.5	2.9	5Y6/2灰オ リーブ色	硬質		ⅡⅡ	輪a	—	2号窯灰原 北松瀬区	
217	緑釉素地	Ⅱ	16.0	3.1	6Y7/1灰白色	やや 軟質		ⅡⅡ	輪a	—	2号窯灰原 北松瀬区	
218	緑釉素地	Ⅱ	16.0	3.1	2.5Y8/3淡黄 色	やや 軟質		ⅡⅡ	輪a	—	2号窯灰原 E・F・K地区	

遺物 地	器種	器形	口径	器高	色質	焼成	手法の特徴	縁部 口縁形類	高台 形類	備考	出土地
219	緑釉素地	皿	15.5	2.0	7.5Y8/2灰オリーブ色	硬質	外面底部は回転ヘラケズリ。ヘラミガキは外面底部は密に、内面は粗く施す。	ⅡV	輪a	—	2号窯灰原 北杖瀬区
220	緑釉素地	狭縁 段皿	16.0	2.0	10Y5/1灰色	硬質	外面底部は回転ヘラケズリ、口縁部は回転ナデ。ヘラミガキは、外面底部は粗く、体部は密に施す。内面は底部に粗く施す。	—	輪a	—	2号窯灰原 北杖瀬区
221	緑釉素地	段皿	15.0	2.8	10YR3/1黒褐色	硬質	外面底部は回転ヘラケズリ。高台はヘラ状工具でナデを施す。ヘラミガキは、外面底部は粗く、他の外面は密に、内面は底部にやや粗く施す。	—	輪a	—	2号窯灰原 北杖瀬区
222	緑釉素地	段皿	15.0	3.3	10Y4/1灰色	硬質	外面底部は密に、内面は底部にやや粗く施す。	—	輪a	—	2号窯灰原 E・F・K地区
223	緑釉素地	香炉蓋	12.0	4.15	N4/灰色	硬質	内面全面を回転ナデ。ヘラミガキは外面を非常に密に、内面は非常に粗く施す。	—	—	—	2号窯灰原 北杖瀬区
224	緑釉素地	香炉	11.5	5.0	N4/灰色	硬質	外面底部および内面は回転ナデ、高台は貼り付け。ヘラミガキは体部外面に密に施す。	—	—	外面底部・体部に降灰付着。	2号窯灰原 E地区
225	緑釉素地	香炉	15.0	—	10Y4/1灰色	硬質	—	—	—	—	2号窯灰原 北杖瀬区
226	緑釉素地	三足盤	17.5	5.9	N3/暗灰色	硬質	外面底部は回転ヘラケズリ、他は回転ナデ。ヘラミガキは口縁部内外面を除く全面に密に施す。	—	—	外面底部・体部に降灰付着。	2号窯灰原 北杖瀬区
227	緑釉素地	耳皿	10.5 ×6.7	3.0	N4/灰色	硬質	外面底部は回転糸切り未調整。他は回転ナデ。屈曲する口縁部部の3箇所を棒状工具によって押さえる。ヘラミガキは施さない。	—	糸切	外面底部・体部に降灰付着。	2号窯灰原 E・F・K地区
228	緑釉素地	耳皿	12.0 ×7.0	3.4	7.5Y8/1灰白色	やや軟質	外面底部は回転糸切り未調整。他は回転ナデ。ヘラミガキは施さない。	—	糸切	—	2号窯灰原 R地区
229	緑釉素地	鉢A	—	4.5	5Y4/1灰色	硬質	内外面は回転ナデ。ヘラミガキは、外面は全面に、内面は口縁部以下に密に施す。	—	—	内面体部に降灰付着。	2号窯灰原 J・K・O・P地区
230	緑釉素地	鉢A	13.0	5.1	N4/灰色	硬質	内外面は回転ナデ。ヘラミガキは、外面は底部を除く全面に、内面は口縁部以下に密に施す。	—	—	内面底部・体部に降灰付着。	2号窯灰原 北杖瀬区
231	緑釉素地	珠子 付瓶	4.4	12.4	N5/灰色	硬質	外面底部は回転糸切り未調整。他は回転ナデ。ヘラミガキは外面体部に密に施す。	—	糸切	—	2号窯灰原 G・H・L・M地区
232	緑釉素地	唾壺	20.4	10.5	N4/灰色	硬質	高台は貼り付け。ヘラミガキは外面底部と内面体部を除く全面に密に施す。	—	—	—	2号窯灰原 北杖瀬区
233	緑釉素地	香炉蓋	—	—	7.5YR4/1黄灰色	やや軟質	外面は中心部は回転ナデ、内面はナデ。ヘラミガキは外面中心部以外に密に施す。外面天井部に陰刻を施す。	—	—	縷文+花文Bを陰刻。	2号窯灰原 J・K・O・P地区
234	緑釉素地	椀	—	—	2.5Y8/2灰白色	やや軟質	磨滅のため調整不明。内面口縁部に陰刻を施す。	—	—	縷文を陰刻。	2号窯灰原 J・K・O・P地区
235	緑釉素地	椀	—	—	2.5Y8/1灰白色	やや軟質	—	—	—	縷文を陰刻。	2号窯灰原 北杖瀬区
236	緑釉素地	椀	15.5	—	2.5Y8/2灰白色	やや軟質	—	—	—	縷文を陰刻。	2号窯灰原 J・K・O・P地区

遺物 No.	器種	器形	口径	器高	色調	焼成	手法の特徴	縁部 口縁形態	高台 形態	備考	出土地
237	緑釉素地	碗鉢	16.2	—	5Y8/1灰白色	やや軟質	ヘラミガキは内外面に密に施す。内面口縁部に陰刻を施す。	—	—	蝶文を陰刻。	2号窯灰原 D・G・H・L・M地区
238	緑釉素地	皿	—	—	2.5Y7/2灰黄色	やや軟質		且Ⅲ	—	蝶文を陰刻。	2号窯灰原 R地区
239	緑釉素地	皿	—	—	7.5Y8/1灰色	やや軟質		且Ⅲ	—	蝶文を陰刻。	2号窯灰原 北鉢強区
240	緑釉素地	皿	—	—	5Y6/1灰色	やや軟質		且Ⅲ	—	蝶文を陰刻。	2号窯灰原 J・K・O・P地区
241	緑釉素地	皿	—	—	N6/灰色	硬質	外面底面は回転ヘラケズリ。ヘラミガキは内面に密に施す。241の外面底面は降灰付着のため不明。内面底面に花文を陰刻。	—	輪a	花文Dを陰刻。外面底面・体部に降灰付着。焼け歪み激しい。	2号窯灰原 G・H・L・M地区
242	緑釉素地	皿	—	—	10YR7/3にぶい黄褐色	軟質		—	輪a	花文Dを陰刻。	2号窯検出中
243	緑釉素地	耳皿	—	—	N6/灰色	硬質	外面底面は回転ヘラケズリ。ヘラミガキは、外面底面を除く全面にやや粗く施す。陰刻文は内面口縁部と底面に施す。	—	輪a	花文A+花文Bを陰刻。	2号窯灰原 J・K・O・P地区
244	緑釉素地	碗	11.0	3.1 ~3.4	N5/灰色	硬質	外面底面は回転ヘラケズリ。ヘラミガキは、外面底面の中心部と、他は全面に密に施す。陰刻文は内面口縁部と底面に施す。	輪Ⅰ	輪a	花文A+花文Bを陰刻。	2号窯灰原 北鉢強区
245	緑釉素地	碗	15.0	4.6 ~4.9	2.5Y8/1灰白色	硬質	外面底面は回転ヘラケズリ。ヘラミガキは、外面底面の一部を、他は全面に密に施す。陰刻文は内面口縁部と底面に施す。	輪Ⅲ	輪a	花文A+花文Cを陰刻。	2号窯灰原 J・K・O・P地区
246	緑釉素地	皿	16.0	3.55	N7/灰白色	硬質		且Ⅲ	輪a	花文A+花文Cを陰刻。	2号窯灰原 北鉢強区
247	緑釉素地	不明	—	—	5Y5/1灰色	硬質	外面底面は回転ヘラケズリ。ヘラミガキは、外面は密に、内面は粗く施す。	—	輪b	外面底面に格子状のヘラ記号。	2号窯灰原 1地区
248	緑釉素地	不明	—	—	5Y6/1灰色	硬質		—	蛇目	外面底面に格子状のヘラ記号。	2号窯灰原 北鉢強区
249	緑釉素地	不明	—	—	2.5Y8/3淡黄色	やや軟質	外面底面は回転ヘラケズリ。ヘラミガキは磨滅のため不明。	—	蛇目	外面底面に格子状のヘラ記号。	2号窯灰原 北東鉢強区
250	緑釉素地	碗	15.0	3.9	N5/灰色	硬質	外面底面・体部下半は回転ヘラケズリ。ヘラミガキは、外面底面を除きやや粗く施す。	輪Ⅰ	平b	外面底面に螺旋状のヘラ記号。	2号窯灰原 北鉢強区
251	緑釉素地	碗	12.0	4.0	N5/灰色	硬質	外面底面は回転ヘラケズリ。ヘラミガキは、外面は底面を除き回転を利用して粗く、内面は密に施す。	輪Ⅰ	平b	外面底面に1本線のヘラ記号。	2号窯灰原 北鉢強区
252	緑釉素地	碗	13.0	3.7	N5/灰色	硬質	外面底面は回転ヘラケズリ。ヘラミガキは、外面底面を除きやや粗く施す。	輪Ⅱ	平b	内面底面に1本線のヘラ記号。	2号窯灰原 北鉢強区
253	緑釉素地	皿	14.0	2.3	10Y6/1灰色	硬質	外面底面・体部下半は回転ヘラケズリ。ヘラミガキは、外面底面を除き粗く施す。	且Ⅰ	平b	外面底面に1本線のヘラ記号。	2号窯灰原 北鉢強区
254	緑釉素地	皿	14.0	2.4	N5/灰色	硬質		且Ⅰ	平a	内面底面に1本線のヘラ記号。	2号窯灰原 北鉢強区
255	緑釉素地	碗	10.0	3.1	5YR5/1黄灰色	硬質	外面底面は回転糸切り未調整。他は回転ナデ。ヘラミガキは施さない。	輪Ⅰ	平b	内面体部に2本線のヘラ記号。	2号窯灰原 北鉢強区
256	緑釉素地	皿	14.5	3.4	N5/灰色	硬質	外面底面は回転ヘラケズリ後にナデ。ヘラミガキは、外面底面を除き粗く全面に施す。	且Ⅰ	平b	外面底面に2本線のヘラ記号。糸切り痕残る。	2号窯灰原 北鉢強区

遺物 編	器種	器形	口径	器高	色調	焼成	手法の特徴	線刻遺地 口縁形態	高台 形態	備考	出土地
257	緑釉素地	皿	14.5	2.6	7.5Y7/2灰白色	やや軟質	外面底部は回転ヘラケズリ。ヘラミガキは、外面底部を除く全面に粗く施す。	楕Ⅱ	平b	外面底部に2本線のヘラ記号。	2号窯灰原 J・K・O・P地区
258	緑釉素地	鉢	17.0	4.9	N5/灰色	硬質	外面底部・体部下半は回転ヘラケズリ。ヘラミガキは、外面底部と体部下半を除く全面に粗く施す。	楕Ⅰ	平a	外面底部に3本線のヘラ記号。	2号窯灰原 J・K・O・P地区
259	緑釉素地	鉢	10.0	3.2	2.5Y6/1灰黄色	硬質	外面底部は回転糸切り未調整。他は回転ナデ。ヘラミガキは施さない。	楕Ⅰ	平b	外面底部に「X」印ヘラ記号。	2号窯灰原 J・K・O・P地区
260	緑釉素地	鉢	13.0	3.8	N5/灰色	硬質	外面底部は回転ヘラケズリ。ヘラミガキは、外面底部を除く全面に粗く施す。	楕Ⅱ	平b	内外面底部に「X」印ヘラ記号。	2号窯灰原 C地区
261	緑釉素地	鉢	1	5.0	2.5Y8/2灰白色	やや軟質	外面底部は回転糸切り後、浅い回転ヘラケズリ。他は回転ナデ。ヘラミガキ外面底部を除き全面に粗く施す。	楕Ⅰ	平a	外面底部に「X」印ヘラ記号。	2号窯灰原 北杖瀬区
262	緑釉素地	鉢	16.0	4.5	N5/灰色	硬質	外面底部は回転ヘラケズリ。ヘラミガキは、外面底部を除く全面に粗く施す。外面ヘラミガキは回転を利用。	楕Ⅰ	平b	内面底部に「X」印ヘラ記号。	2号窯灰原 北杖瀬区
263	緑釉素地	皿	15.0	2.9	10YR8/2灰白色	軟質	外面底部・体部下半は回転ヘラケズリ。他は回転ナデ。ヘラミガキは、外面は底部以外に粗く施し、内面は磨滅のため不明。	楕Ⅱ	平b	外面底部に「X」印ヘラ記号。	2号窯灰原 I地区
264	緑釉素地	皿	14.0	2.5	N5/灰色	硬質	外面底部は回転ヘラケズリ。ヘラミガキは外面底部以外に粗く施す。	楕Ⅱ	平b	内面底部に「X」印ヘラ記号。	2号窯灰原 I地区
265	緑釉素地	耳皿	-	-	5Y7/1灰白色	やや軟質	外面底部は回転糸切り未調整。他は回転ナデ。扇状の口縁端部の3箇所を棒状工具によって押さえる。ヘラミガキは施さない。	-	糸切	外面底部に「X」印ヘラ記号。	2号窯灰原 I地区
266	緑釉素地	耳皿	-	-	N5/灰色	硬質		-	糸切	内面底部に「X」印ヘラ記号。	2号窯灰原 北杖瀬区
267	緑釉素地	鉢	13.5	3.8	N5/灰色	やや軟質	外面底部は回転ヘラケズリ。ヘラミガキは外面底部以外にやや粗く施す。	楕Ⅰ	平	ヘラ記号楕Ⅰ群。外面底部に大きく1本線のヘラ記号。	2号窯灰原 北杖瀬区
268	緑釉素地	鉢	13.0	4.0	N5/灰色	やや軟質		楕Ⅰ	平		2号窯灰原 北杖瀬区
269	緑釉素地	鉢	13.5	3.5	N5/灰色	硬質	外面底部は回転糸切り後、回転ヘラケズリ。ヘラミガキは外面底部以外に粗く施す。	楕Ⅰ	平a	ヘラ記号楕Ⅱ群。外面底部に「X」印ヘラ記号。糸切り痕残る。	2号窯灰原 E・F・K地区
270	緑釉素地	鉢	13.5	3.8	N5/灰色	硬質		楕Ⅰ	平a		2号窯灰原 E・F・K地区
271	緑釉素地	鉢	13.0	3.6	N5/灰色	硬質	外面底部は回転ヘラケズリ。ヘラミガキは外面底部以外に粗く施す。	楕Ⅱ	平a	ヘラ記号楕Ⅲ群。内面底部に小さく「X」印ヘラ記号。	2号窯灰原 北杖瀬区
272	緑釉素地	鉢	13.0	3.3	N5/灰色	硬質		楕Ⅱ	平a		2号窯灰原 北杖瀬区
273	緑釉素地	鉢	13.0	3.5	N5/灰色	硬質		楕Ⅱ	平a		2号窯灰原 北杖瀬区
274	緑釉素地	鉢	17.0	5.0	2.5Y8/2灰白色	軟質	外面底部・体部下半は回転ヘラケズリ。ヘラミガキは、外面底部を除く全面に粗く施す。	楕Ⅱ	平a	ヘラ記号楕Ⅳ群。外面底部に大きく「X」印ヘラ記号。	2号窯灰原 B地区
275	緑釉素地	鉢	17.0	4.8	2.5Y8/3淡黄色	軟質		楕Ⅱ	平a		2号窯灰原 R地区
276	緑釉素地	鉢	17.0	5.3	2.5Y8/2灰白色	軟質		楕Ⅱ	平a		2号窯灰原 北杖瀬区

通物 No.	器種	器形	口径	器高	色調	焼成	手法の特徴	線輪素地 口縁形態	高台 形態	備考	出土地	
277	緑釉素地	碗	13.5	3.4	N6/灰色	硬質	外面底部は回転ヘラケズリ。ヘラミガキは、外面底部を除く全面に粗く施す。	楕Ⅰ	平a	ヘラ記号Ⅴ群。内面底部にやや小さく「X」印ヘラ記号。	2号窯灰原 J・K・O・P地区	
278	緑釉素地	碗	13.5	3.9	7.5Y6/1灰色	硬質		楕Ⅰ	平a		2号窯灰原 北杖製区	
279	緑釉素地	碗	13.0	3.7	N5/灰色	硬質		楕Ⅰ	平a		2号窯灰原 北杖製区	
280	緑釉素地	碗	13.5	3.6	6Y5/1灰色	硬質		楕Ⅰ	平a		2号窯灰原 P地区	
281	緑釉素地	皿	-	-	N5/灰色	硬質	外面底部は回転ヘラケズリ後にナズ。ヘラミガキは、外面底部を除く全面に粗く施す。	-	平b	ヘラ記号ⅥⅠ群。外面底部に2本線のヘラ記号。281は内面底部まで黒灰付着。281と282はそれぞれの内外面底部重ね焼き痕が合致する。	2号窯灰原 北杖製区	
282	緑釉素地	皿	13.8	2.4	N5/灰色	硬質		楕Ⅰ	平b		2号窯灰原 北杖製区	
283	緑釉素地	皿	12.8	3.1	N6/灰色	硬質		外面底部は回転ヘラケズリ。ヘラミガキは、外面底部を除く全面に粗く施す。	楕Ⅰ	平b	ヘラ記号ⅥⅡ群。外面底部に2本線のヘラ記号。283は内面底部まで黒灰付着。283と284はそれぞれの内外面底部重ね焼き痕が合致する。283は焼け歪みが激しい。	2号窯灰原 北杖製区
284	緑釉素地	皿	14.5	2.2 ~2.8	N5/灰色	硬質			楕Ⅰ	平b		2号窯灰原 北杖製区
285	緑釉素地	皿	14.5	2.7	7.5Y6/1灰色	やや軟質	外面底部は回転糸切り機、回転ヘラケズリ。ヘラミガキは、外面底部を除く全面にやや粗く施す。	楕Ⅱ	平a	ヘラ記号ⅥⅢ群。外面底部に大きく「X」印ヘラ記号。外面底部は回転糸切り痕が残る。	2号窯灰原 北杖製区	
286	緑釉素地	皿	14.5	2.6	2.5Y8/2灰白色	やや軟質		楕Ⅱ	平a		2号窯灰原 J・K・O・P地区	
287	緑釉素地	皿	14	2.6	5Y8/2灰白色	やや軟質		楕Ⅱ	平a		2号窯灰原 J・K・O・P地区	
288	緑釉素地	皿	14.0	2.9	7.5Y8/1灰白色	やや軟質		楕Ⅱ	平a		2号窯灰原 I地区	
289	緑釉素地	皿	14.0	2.4	N5/灰色	硬質	外面底部は回転ヘラケズリ。ヘラミガキは、外面底部を除く全面にやや粗く施す。外面ヘラミガキは回転を利用。	楕Ⅰ	平a	ヘラ記号ⅥⅣ群。外面底部に小さく2本線のヘラ記号。	2号窯灰原 E・F・K地区	
290	緑釉素地	皿	14.0	2.5	N5/灰色	硬質		楕Ⅰ	平a		2号窯灰原 北杖製区	
291	緑釉素地	皿	14.0	2.7	N5/灰色	硬質	外面底部は回転ヘラケズリ。ヘラミガキは、外面底部を除く全面にやや粗く施す。外面ヘラミガキは回転を利用。	楕Ⅱ	平a	ヘラ記号ⅥⅤ群。内面底部に小さく「X」印ヘラ記号。	2号窯灰原 P地区	
292	緑釉素地	皿	14.0	2.7	N4/灰色	硬質		楕Ⅱ	平a		2号窯灰原 C地区	
293	緑釉素地	皿	15.0	2.3	5Y7/灰白色	やや軟質	外面底部は回転ヘラケズリ。ヘラミガキは外面底部を除く全面に密に施す。	楕Ⅰ	平a	ヘラ記号ⅥⅥ群。外面底部に大きく「X」印ヘラ記号。	2号窯灰原 I地区	
294	緑釉素地	皿	15.0	2.6	5Y7/灰白色	やや軟質		楕Ⅰ	平a		2号窯灰原 北杖製区	
295	緑釉素地	皿	15.0	2.9	5Y7/灰白色	やや軟質		楕Ⅰ	平a		2号窯灰原 I地区	
296	緑釉素地	皿	14.0	2.8	N5/灰色	硬質	外面底部は回転ヘラケズリ。ヘラミガキは外面底部を除いて外面は密に、内面は粗く施す。	楕Ⅰ	平b	ヘラ記号ⅥⅦ群。内外面底部に「X」印ヘラ記号。	2号窯灰原	
297	緑釉素地	皿	13.5	1.9	10Y5/1灰色	硬質	外面底部は回転ヘラケズリ。ヘラミガキは外面底部を除いて内外面ともに粗く施す。	楕Ⅰ	平b	ヘラ記号ⅥⅧ群。内外面底部に「X」印ヘラ記号。	2号窯灰原 K地区	
298	緑釉素地	皿	13.5	2.1	10YR5/1灰色	硬質		楕Ⅰ	平b		2号窯灰原 J・K・O・P地区	
299	緑釉素地	皿	13.5	2.2	10YR5/1灰色	硬質		楕Ⅰ	平b		2号窯灰原 E・F・K地区	

付表2 南春日町片山遺跡出土遺物観察表

遺物 No.	器種	器形	口径	器高 ()は残存	色調	焼成	手法の特徴	備考	出土地
300	土師器	壺	—	1.3	7.5YR7/6褐色	軟質	全体に磨滅、調整不明。	—	2-2区 図43第4層
301	土師器	杯A	—	(5.0)	7.5YR7/4にぶい 褐色	軟質	外面横方向ヘラケズリ後、横方向ヘ ラミガキ。内面横方向ナデ。	—	2-2区 第1面検出中
302	土師器	皿A	—	(2.2)	7.5YR6/4にぶい 褐色	軟質	外面横方向ヘラケズリ。内面横方向 ナデ。	—	2-2区
303	土師器	甕	—	(8.5)	10YR8/3浅黄橙 色	軟質	外面縦方向ハケメ。全体に磨滅が著 しい。	—	2-2区 図43第4層
304	須恵器	杯B壺	—	1.8	5PB6/1青灰色	硬質	内外面回転ナデ。	—	2-2区 第1面検出中
305	須恵器	杯A	—	(3.1)	5Y8/2灰白色	やや 軟質	底部外面へう起こし後、粗いナデ。 他は回転ナデ。	—	2-2区 図43第4層
306	須恵器	杯B	—	(2.4)	5PB6/1青灰色	硬質	底部外面へう起こし。他は回転ナデ。 高台は貼り付け。	—	2-2区 第1面検出中
307	緑釉陶器	壺	—	(2.2)	施釉部 7.5Y6/3オ リーブ黄色。断面 5Y8/2灰白色	硬質	内外面回転ナデ。	—	2-2区 第1面検出中
308	緑釉素地	不明	—	(1.0)	5Y7/2灰白色	硬質	外面底部は回転ヘラケズリ。内面底 部ナデ。高台は削り出し。	—	2-2区 第1面検出中
309	緑釉素地	不明	—	(1.4)	2.5Y8/4浅黄色	軟質	磨滅のため調整不明。高台は削り出 し。	—	2-2区 図43第4層
310	緑釉素地	不明	—	(9.0)	5Y6/1灰色	硬質	外面底部は回転ヘラケズリ。内面底 部は粗いヘラミガキ。高台は削り出 し。	—	2-2区 図43第4層
311	緑釉素地	不明	—	(1.3)	2.5Y8/3浅黄色	軟質	内外面底部ヘラミガキ。高台は削り 出し。	—	2-2区 図43第4層
312	緑釉素地	不明	—	(2.3)	7.5Y5/1灰色	硬質	外面底部は回転ヘラケズリ。内外面 底部は粗いヘラミガキ。高台は削り 出し。	内面底部に重 ね脱皮跡あり。	2-2区 図43第4層
313	緑釉素地	不明	—	(1.9)	5PB6/1青灰色	硬質	外面底部は回転ヘラケズリ。内外面 底部・内面底部はやや粗いヘラミガ キ。高台は削り出し。	—	2-2区 図43第4層
314	緑釉素地	不明	—	(1.4)	N7/0灰白色	硬質	外面底部は回転ヘラケズリ。内外面 底部・内面底部は粗いヘラミガキ。 高台は削り出し。	—	2-2区 図43第4層
315	土師器	皿	10.4	0.9	2.5Y8/2灰白色	軟質	磨滅のため調整不明。	—	2-2区 整地層39
316	土師器	皿	11.2	(1.1)	2.5Y8/3浅黄色	軟質	内外面横方向ナデ。	—	2-2区 図43第4層
317	土師器	皿	10.0	1.1	7.5YR8/4浅黄橙 色	軟質	磨滅のため調整不明。	—	2-2区 図43第4層
318	土師器	皿	8.0	(1.4)	7.5YR7/6褐色	軟質	磨滅のため調整不明。	—	2-2区 ピット群
319	土師器	皿	10.0	(2.0)	5YR7/6褐色	軟質	磨滅のため調整不明。	—	2-2区 図43第4層
320	土師器	皿	9.0	1.8	7.5Y7/6褐色	軟質	磨滅のため調整不明。	—	2-2区 図43第4層
321	土師器	皿	9.0	1.4	5YR8/4浅褐色	軟質	磨滅のため調整不明。	—	2-2区 図43第4層
322	土師器	皿	9.0	2.0	5YR6/6褐色	軟質	磨滅のため調整不明。	—	2-2区 図43第4層
323	土師器	皿	15.0	(2.5)	7.5YR7/4にぶい 褐色	軟質	磨滅のため調整不明。	—	2-2区 図43第5層
324	陶器	碗	—	(2.0)	5Y6/1灰色	硬質	内外面底部はナデ。高台は貼り付け。 内面底部に高台貼り付け時に施した ヘラ状工具によるナデ付け痕が残る。	—	2-2区 第1面検出中
325	黒色土器	碗	15.0	(4.2)	5Y3/1オリーブ黒 色	軟質	磨滅のため調整不明。	—	2-2区 整地層39

遺物 No	器種	器形	口径	器高 ()は残存	色調	焼成	手法の特徴	備考	出土地
326	青磁	杯	—	(1.6)	施釉部 5Y6/1灰色	硬質	内外面ナデ。外面底部に断面土目度残る。内面及び外面体部上半に施釉。	2次焼成を受ける。	2-2区 溝54
327	白磁	碗	—	(1.4)	施釉部 2.5Y8/2灰白色	硬質	外面回転ヘラケズリ。内面回転ナデ。内面施釉。	—	2-2区 第1面検出中
328	青磁	杯	—	(6.5)	施釉部 10YR4/2 オリーブ灰色	硬質	内外面施釉。内面底部に磨刻。	—	2-2区 第1面検出中
329	白磁	皿	9.6	2.2	施釉部 7.5Y7/1灰白色	硬質	内面及び外面体部上半に施釉。	—	2-2区 第1面検出中
330	白磁	碗	16.0	(3.0)	施釉部 7.5Y7/1灰白色。断面 5Y8/1灰白色	硬質	内外面施釉。	—	2-2区 第1面検出中
331	白磁	碗	17.0	(4.2)	施釉部 7.5Y7/1灰白色	硬質	内面及び外面体部上半施釉。	—	2-2区 第1面検出中
332	製強土器	—	—	(5.1)	10YR8/4浅黄褐色	軟質	磨滅のため調整不明。	—	3区 土坑80
333	土師器	碗	12.0	(3.3)	7.5Y7/4にぶい褐色	軟質	磨滅のため調整不明。	—	3区 土坑80
334	須恵器	杯B	16.8	(5.2)	5PB6/1青灰色	硬質	内外面回転ナデ。高台は貼り付け。	—	3区 土坑80
335	白磁	碗	—	(2.1)	施釉部 5Y8/2灰白色。断面 2.5Y8/2灰白色	硬質	外面回転ヘラケズリ。外面体部上半と内面施釉。	—	3区 第1面検出中
336	青磁	碗	—	(2.0)	施釉部 7.5GY7/1明緑灰色	硬質	外面裏面と高台底部を除き、内外面施釉。	—	3区 第1面検出中
337	焼粘陶器	箸鉢	—	(3.0)	5YR7/6褐色	硬質	内面。一本引きの磨り目が施される。	保業説。	3区 第1面検出中
338	土師器	皿	19.6	(2.2)	7.5Y6/3にぶい褐色	軟質	外面底部は未調整。体部から口縁部はヘラケズリ。内面体部から口縁部は横方向ナデ。底部はナデ。	—	4区 溝66中層
339	須恵器	蓋	16.6	(1.9)	5Y7/1灰白色	硬質	天井部から口縁部は内外面回転ナデ調整。	—	4区 溝66下層
340	須恵器	杯A	13.5	(3.4)	N7/0灰白色	硬質	外面底部ヘラ起こし後、粗いナデ。他は内外面回転ナデ。	—	4区 溝66下層
341	須恵器	杯B	—	(2.4)	N7/0灰白色	硬質	底部外面ヘラ起こし後、粗いナデ。他は回転ナデ。高台は貼り付け。	—	4区 溝66中層
342	須恵器	杯B	—	(3.1)	5PB6/1青灰色	硬質	底部外面ヘラ起こし後、粗いナデ。他は回転ナデ。高台は貼り付け。	—	4区 溝66中層
343	須恵器	壺M	—	(6.8)	5PB6/1青灰色	硬質	内外面回転ナデ。高台は貼り付け。	—	4区 溝66下層
344	須恵器	水瓶	—	(7.2)	N8/0灰白色	硬質	内外面回転ナデ。頸部に2条の沈線。	—	4区 溝66下層
345	須恵器	壺	—	(3.9)	5PB6/1青灰色	硬質	底部は回転承り。他は回転ナデ。高台は貼り付け。	—	4区 溝66中層
346	須恵器	壺N	—	(11.9)	N7/0灰白色	硬質	体部から胴部内外面回転ナデ。	—	4区 溝66下層
347	灰粘陶器	不明	—	(1.5)	N8/0灰白色	硬質	内外面底部は粗いナデ。高台は貼り付け。	—	4区 溝66中層
348	緑粘陶器	不明	—	(1.6)	N4/0灰色	硬質	外面底部を含め全面に密なヘラミガキ。磨滅は前面に薄く施される。高台は貼り付け。	—	4区 溝66中層
349	緑粘陶器	皿	12.6	2.7	N6/0灰色	硬質	外面底部を除き全面に密なヘラミガキ。磨滅は前面に薄く施される。高台は削り出し。	—	4区 溝66中層
350	土師器	皿	9.2	1.9	2.5Y7/2灰黄色	軟質	外面底部は未調整。内外面口縁部は横方向ナデ。内面底部はナデ。	—	4区 溝66中層
351	土師器	皿	9.4	1.7	10YR7/2にぶい黄褐色	軟質		—	4区 溝66上層
352	土師器	皿	9.4	1.7	10YR7/2にぶい黄褐色	軟質		—	4区 溝66上層

遺物 No.	器種	器形	口径	器高 (%)は残存	色調	焼成	手法の特徴	備考	出土地
353	土師器	皿	10.0	(1.5)	2.5Y7/3浅黄色	軟質	外周底部は未調整。内外面口縁部は横方向ナデ。内周底部はナデ。	外周口縁部と内面に煤付着。	4区 溝66上層
354	土師器	皿	9.4	2.1	10YR7/2にぶい黄橙色	軟質		—	4区 溝66上層
355	土師器	皿	14.0	2.3	10YR7/3にぶい黄橙色	軟質		—	4区 溝66
356	土師器	皿	14.8	(2.2)	7.5Y7/1明褐色	軟質		—	4区 溝66
357	土師器	皿	15.6	(2.5)	7.5Y7/2明褐色	軟質		—	4区 溝66下層
358	土師器	皿	15.0	(2.5)	10YR8/1灰白色	軟質		—	4区 溝66上層
359	土師器	皿	16.6	(2.6)	10YR8/1灰白色	軟質		—	4区 溝66
360	土師器	皿	17.0	2.0	10YR7/2にぶい黄橙色	軟質		—	4区 道路73新
361	瓦器	皿	9.0	1.6	10YR2/1黒色	やや軟質	内外面口縁部にヘラミガキ。内周底部にジグザグ状増文。	—	4区 第1番検出中
362	瓦器	皿	9.0	(1.5)	5PB3/1明青灰色	やや軟質	内外面口縁部にヘラミガキ。内周底部に増文。	—	4区 溝66上層
363	瓦器	皿	10.0	1.6	N3/0暗灰色	やや軟質	内外面口縁部にヘラミガキ。内周底部にジグザグ状増文。	—	4区 溝66中層
364	瓦器	鉢	15.0	(4.0)	N3/0暗灰色	やや軟質	外周体部から口縁部にヘラミガキ。内面の蓋線ヘラミガキは、やや密に口縁に併行して施される。ヘラミガキの幅は0.5～1mm。内面口縁端部の沈線は、口縁内端に角をつけるように施される。	大和型	4区 溝66中層
365	瓦器	鉢	15.0	(4.5)	N3/0暗灰色	やや軟質	外周体部から口縁部にヘラミガキ。内面の蓋線ヘラミガキは、やや密に口縁に併行して施される。ヘラミガキの幅は0.5～1mm。内面口縁端部の沈線は、口縁内端に角をつけるように施される。	大和型	4区 溝66上層
366	瓦器	鉢	15.0	(4.7)	N3/0暗灰色	やや軟質	外周体部から口縁部にヘラミガキ。内面の蓋線ヘラミガキは、やや密に口縁に併行して施される。ヘラミガキの幅は0.5～1mm。内面口縁端部の沈線は、口縁内端に角をつけるように施される。	大和型	4区 溝66中層
367	瓦器	鉢	15.0	(4.6)	N3/0暗灰色	やや軟質	外周体部から口縁部にヘラミガキ。内面の蓋線ヘラミガキは、やや密に口縁に併行して施される。ヘラミガキの幅は0.5～1mm。内面口縁端部の沈線は、口縁内端に角をつけるように施される。	大和型	4区 溝66
368	瓦器	鉢	15.0	(4.5)	N4/0灰色	やや軟質	外周体部から口縁部にヘラミガキ。内面の蓋線ヘラミガキは、やや密に口縁に併行して施される。ヘラミガキの幅は1～2mm。	大和型	4区 溝66
369	瓦器	鉢	15.0	(5.1)	N3/0暗灰色	やや軟質	外周体部から口縁部にヘラミガキ。内面の蓋線ヘラミガキは、やや密に口縁に併行して施される。ヘラミガキの幅は1～2mm。	大和型	4区 溝66上層
370	瓦器	鉢	15.0	(4.0)	N4/0灰色	やや軟質	外周体部から口縁部にヘラミガキ。内面の蓋線ヘラミガキは、やや密に口縁に併行して施される。ヘラミガキの幅は1～2mm。	—	4区 溝66
371	瓦器	鉢	15.0	(4.8)	N3/0暗灰色	やや軟質	外周体部から口縁部にヘラミガキ。内面の蓋線ヘラミガキは、やや密に口縁に併行して施される。ヘラミガキの幅は1～2mm。内面口縁端部の沈線は、口縁内端の少し下に施される。	桃葉型	4区 道路73
372	瓦器	鉢	15.0	(4.9)	N3/0暗灰色	やや軟質	外周体部から口縁部にヘラミガキ。内面の蓋線ヘラミガキは、やや密に口縁に併行して施される。ヘラミガキの幅は1～2mm。内面口縁端部の沈線は、口縁内端の少し下に施される。	桃葉型	4区 溝66
373	瓦器	鉢	15.0	5.1	N3/0暗灰色	やや軟質	外周体部から口縁部にヘラミガキ。内面の蓋線ヘラミガキは、やや密に口縁に併行して施される。ヘラミガキの幅は1～2mm。内面口縁端部の沈線は、口縁内端の少し下に施される。	桃葉型	4区 溝66
374	瓦器	鉢	15.0	4.4	N3/0暗灰色	やや軟質	外周体部から口縁部にヘラミガキ。内面の蓋線ヘラミガキは、やや密に口縁に併行して施される。ヘラミガキの幅は1～2mm。内面口縁端部の沈線は、口縁内端の少し下に施される。	桃葉型	4区 溝66
375	瓦器	鉢	15.0	(5.7)	7.5Y4/1灰色	やや軟質	外周体部から口縁部にヘラミガキ。内面の蓋線ヘラミガキは、やや密に口縁に併行して施される。ヘラミガキの幅は1mm。	桃葉型か	4区 溝66上層
376	瓦器	鉢	15.0	(5.0)	7.5Y4/1灰色	やや軟質	外周体部から口縁部にヘラミガキ。内面の蓋線ヘラミガキは、やや密に口縁に併行して施される。ヘラミガキの幅は1mm。	桃葉型	4区 溝66上層
377	瓦器	鉢	15.0	5.5	N3/0暗灰色	やや軟質	外周体部から口縁部にヘラミガキ。内面の蓋線ヘラミガキは、やや密に口縁に併行して施される。ヘラミガキの幅は1mm。	桃葉型	4区 溝66
378	瓦器	鉢	15.0	5.2	N4/0灰色	やや軟質	外周体部から口縁部にヘラミガキ。内面の蓋線ヘラミガキは、やや密に口縁に併行して施される。ヘラミガキの幅は1mm。	大和型	4区 溝66
379	瓦器	鉢	15.0	5.4	7.5Y4/1灰色	やや軟質	外周体部から口縁部にヘラミガキ。内面の蓋線ヘラミガキは、やや密に口縁に併行して施される。ヘラミガキの幅は1mm。	桃葉型	4区 溝66中層
380	瓦器	鉢	14.0	5.1	7.5Y4/1灰色	やや軟質	外周体部から口縁部にヘラミガキ。内面の蓋線ヘラミガキは、やや密に口縁に併行して施される。ヘラミガキの幅は1mm。	—	4区 溝66

遺物 地	器種	器形	口径	器高 ()は残存	色調	焼成	手法の特徴	備考	出土地
381	瓦	蓮華文 軒丸瓦	—	—	N2/0黒色	やや 軟質	瓦当側面は、縦方向ヘラケズリ後に 粗いナデを施す部分と横方向ヘラケ ズリを施す部分に分かれる。瓦当裏 面は剥離により失われており調査不 明。	栗栖野宮庭。	4区 溝55下層
382	瓦	軒平瓦	—	—	N2/0黒色	やや 軟質	軒平瓦の平瓦部端部。凹凸共に布 目。袷端部側面および側面は横方向 ヘラケズリ。凹圧技法。	—	4区 溝55下層
383	海棺	棺身	—	—	N7/0灰白色	硬質	外蓋口縁部は布目、口縁部上蓋は布 目後ナデ、内蓋口縁部は上半が布目 後横方向ヘラケズリ、下半が布目後 横方向ナデ。他はナデ。	383～386は色 調新富士など から同一器体 と見られる。	2-2区 豊地層39
384	海棺	棺身	—	—	N6/0灰色	硬質			4区 溝57
385	海棺	棺身 受部	—	—	N5/0灰色	硬質	全蓋ナデ。		2-2区 第1百検出中
386	海棺	棺身 脚部	—	—	N6/0灰色	硬質	内蓋ナデ。外蓋の3箇所平行印を 残す。		4区 第1百検出中
387	海棺	棺蓋	—	—	N6/0灰色	硬質	内外蓋ナデ。外蓋は削り出しによる 低い凸帯がY字形に施される。	—	2-2区 溝54
388	石罫	尖頭罫	—	—	—	—	両側面からの長い押圧剥離痕が規則 正しく残る。	灰色チャート。	3区 第1百検出中
389	石罫	尖頭罫	—	—	—	—		灰色チャート。	2-2区 第1百検出中
390	石罫	石罫	—	—	—	—	押圧剥離による。	—	2-2区 第1百検出中
391	石罫	石罫	—	—	—	—	他方向からの剥離痕が残る。	—	2-2区 第1百検出中

付表3 勝持寺旧境内出土遺物観察表

遺物 No.	器種	器形	口径	器高 ()は残存	色調	焼成	手法の特徴	備考	出土地
392	土師器	皿	6.0	1.0	7.5YR8/4浅黄褐色	軟質	口縁部横方向ナデ。	—	3-2区 溝2
393	土師器	皿	6.2	1.4	7.5YR8/2灰白色	軟質	外面体部未調整。口縁部横方向ナデ。	—	3-2区 溝2
394	土師器	脚付皿	6.7	2.6	5YR7/3にぶい 褐色	軟質	貼り付けによる脚部には指評さえ痕跡が顕著に残る。	—	3-2区 地蔵3
395	土師器	皿	—	—	7.5YR8/2灰白色	軟質	外面体部未調整。口縁部横方向ナデ。	—	3-2区 地蔵3
396	土師器	皿	—	—	7.5YR8/6浅黄褐色	軟質		—	3-2区 調査区 北部検出中
397	土師器	皿	8.2	2.1	10YR7/4にぶい 黄褐色	軟質	外面体部未調整。口縁部横方向ナデ。	—	3-2区 溝2
398	土師器	皿 (白系)	11.0	2.0	10YR8/2灰白色	軟質		—	3-2区 ピット9
399	土師器	羽釜	—	—	5Y7/2灰白色	軟質	磨滅のため調整不明。	—	3-2区 溝2
400	土師器	鉢	—	—	10YR7/3にぶい 黄褐色	軟質		—	3-2区 調査区 北部検出中
401	瓦器	筒	14.6	(4.0)	N4/灰色	やや 軟質	内面体部に薄らな磨粒ヘラミガキが施される。	—	3-2区 ピット11
402	瓦器	火鉢	—	—	2.5Y7/4浅黄色	やや 軟質	磨滅のため調整不明。	—	3-2区 調査区 北部検出中
403	須恵器	鉢	—	—	5Y7/1灰白色	硬質	内外面回転ナデ調整。	東播系。	3-2区 土坑13
404	須恵器	鉢	—	—	5Y7/1灰白色	硬質		東播系。	3-2区 地蔵3
405	埴輪陶器	撞鉢	—	—	5YR6/6褐色	硬質	内面体部に一本引きの磨り目を施す。	信濃焼。	3-2区 遺構面検出中
406	埴輪陶器	撞鉢	—	—	5Y8/1灰白色	硬質	内面体部に6条一単位の磨り目を施す。	信濃焼。	3-2区 土坑6
407	埴輪陶器	甕	—	—	2.5YR4/3にぶい 赤黄色	硬質	内外面回転ナデ調整。	常磐焼。	3-2区 整地層
408	埴輪陶器	天目鍋	11.3	(5.1)	雑染 10YR2/1黒色。 断面土 7.5Y 4/2灰褐色	やや 軟質	内面及び体部上半は施釉。	瀬戸焼。	3-2区 溝2
409	石製品	硯	—	—	N5/0灰色	—	—	頁岩～粘板岩。	3-2区 表層
410	銭貨	—	2.5	—	—	—	—	寛永通寶。	3-2区 遺構面検出中

版 图

報 告 書 抄 録

ふりがな	はいがたかまあと・はいがたのつかあと・みなみかすがちょうかたやまいせき・しょうじきゅうけいだい							
書名	灰方窯跡・灰方の塚跡・南春日町片山遺跡・勝持寺旧境内							
シリーズ名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告							
シリーズ番号	2010-8							
編著者名	南 孝雄・津々池惣一							
編集機関	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
所在地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1							
発行所	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
発行年月日	西暦2010年10月15日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
はいがたかまあと 灰方窯跡	きょうとにしききょうく 京都市西京区	26100	-	34度	135度	2009年12月 14日～2010 年9月3日	3076㎡	道路建設
はいがたのつかあと 灰方の塚跡	おおいほらのはいがたちやう 大原野灰方町		-	56分	39分			
みなみかすがちやうのかたやまいせき 南春日町片山遺跡	ちだいに、おおいほらの 地内、大原野		1029	41秒	52秒			
しょうじききゅうけいだい 勝持寺旧境内	みなみかすがちやうちだいに 南春日町地内		-	(1号窯)	(1号窯)			
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
灰方窯跡	窯跡	平安時代	竈窯、灰原	緑釉陶器素地、須恵器		洛西地域で初めて 緑釉陶器素地窯の 調査となる。		
灰方の塚跡	塚跡	近代	堰堤			近代の砂防施設と しては稀少な調査 例となる。		
南春日町片山遺跡	集落跡	鎌倉時代	水田、溝、流路	土師器、瓦器、青磁、 白磁、瓦、石器		標高80～90mの扇 状地で中世の水田 を確認する。		
		室町時代	建物、溝	土師器、瓦器、陶器、 銭貨				
勝持寺旧境内	寺院跡					勝持寺子院の遺構 を初めて確認する。		

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2010-8
灰方窯跡・灰方の塚跡・
南春日町片山遺跡・勝持寺旧境内

発行日 2010年10月15日

編集 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所
発行

住所 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町 265 番地の 1
〒 602-8435 TEL 075-415-0521
<http://www.kyoto-arc.or.jp/>

印刷 三星商事印刷株式会社
住所 京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町 298 番地
〒 604-0093 TEL 075-256-0961